一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３

沖　手　遺　跡

－１区の調査－

２００６年３月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３

沖　手　遺　跡

－１区の調査－

２００６年３月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

沖手遺跡とその周辺（南から）

沖手遺跡とその周辺（北から）

序

一般国道９号は、京都府京都市を起点として山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道９号の慢性的な交通渋滞を緩和し、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成１３年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成16年度に実施した沖手遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成18年３月

国土交通省中国地方整備局
浜田河川国道事務所
所　長　宮　原　　慎

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成１６年度に実施した益田道路建設予定地内の沖手遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

今回の調査では、１２世紀から１５世紀を中心とした時期の遺構や遺物が大量に確認され、益田川下流域に規模の大きな集落が存在したことが明らかとなってきました。

益田市には中世の遺跡が数多く存在しており、これまでにもさまざまな角度から研究が進められてきていますが、今回得られた資料は今後の調査研究を進める上でも重要な資料になるものと考えられます。

本報告書が、この地域における人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みを解明し、それを後世に伝える基礎的資料として、学校教育や生涯学習の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の発刊にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめ、地元の方々ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

島根県教育委員会

教育長　広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は、島根県教育委員会が平成16年度に実施した、一般国道９号（益田道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書で報告する遺跡は下記のとおりである。

　沖手遺跡　　島根県益田市久城町

3．調査組織は下記のとおりである。

　調査主体　　島根県教育委員会

　平成16年度　　現地調査

　［事務局］　山根正巳（埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）、
　　永島静司（同総務グループ課長）、宮澤明久（同調査第２グループ課長）

　［調査員］　田原淳史（同文化財保護主事）、鳥屋孝太郎（同講師兼主事）
　　渡辺　聡（同臨時職員）

　平成17年度　　報告書作成

　［事務局］　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）
　　宮澤明久（同調査第２グループ課長）

　［調査員］　田原淳史（同文化財保護主事）、谷　徹（同教諭兼主事）

4．発掘調査（発掘作業員・重機借り上げ・発掘用具調達・測量発注）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

　社団法人中国建設弘済会島根支部

　［現場担当］　松下　芳久

　［事務担当］　池野真由美

5．現地調査及び報告書の作成に際しては、以下の機関、方々から有益な助言をいただいた。
飯村　均（福島県文化振興事業団事業班長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター）、大庭康時（福岡市教育委員会主査）、大山喬平（立命館大学教授）、岡野雅則（鳥取県教育文化財団）、小野正敏（国立歴史民俗博物館教授）、古賀信幸（山口市市史編さん室長）、榊原博英（浜田市教育委員会）、中村唯史（三瓶自然館）、乗岡　実（岡山市デジタルミュージアム博物館副専門監）、服部英雄（九州大学教授）、林　正久（島根大学教授）、村上　勇（広島県立美術館次長兼学芸課長）、益田市立歴史民俗資料館、山口県埋蔵文化財センター、静岡県埋蔵文化財センター、静岡大学、菊川市教育委員会、益田市教育委員会、益田公民館

6．挿図方位は第Ⅲ系座標により、レベルは海抜を示す。

7．第１・４・５図は国土地理院発行の１／25000（益田・石見横田）、１／50000（益田・日原）を使用した。

8．本書の執筆・編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力・助言を得て、田原・谷が行った。
第５章については林　正久氏、松下孝幸氏より玉稿を賜った。

9．本書に掲載した写真撮影は調査員が行った。

10．本書掲載の実測図、出土遺物、写真等は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　　例

1　本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
　（1）遺構図　　1／10，1／20，1／30，1／60
　（2）遺物実測図　　1／3，1／6
　（3）出土銭貨拓影　1／1
2　遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、石器、金属器、木製品には断面に斜線を入れた。
3　本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。
4　本報告書における遺構名の内、いくつかのものについては現地調査の段階での名称から変更している。報告書においては、新遺構名―（旧遺構名）の順に表示した。
5　遺物観察表の色調は「標準土色帖」を参考にした。
6　本報告書で用いた土器の分類および編年観は下記の各論文、報告書を参考にした。

（須恵器）
島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』1992
（土師器）
広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』8　松江考古談話会　1992
山口県教育委員会『大内氏館跡Ⅷ―大内氏関連町並遺跡Ⅰ―大内氏遺跡発掘調査報告ⅩⅡ』1991
八峠　興「山陰における中世土器の変遷について―供膳具・煮炊具を中心として―」
『中近世土器の基礎的研究ⅩⅢ』日本中世土器研究会　1998
榊原博英「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』9　2001
小南裕一「長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』
山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター　豊北町教育委員会　2004
（瓦質土器）
岩崎仁志「足鍋再考」『陶塤　12』山口県埋蔵文化財センター　1999
岩崎仁志「防長型擂鉢について」『山口考古』19　山口考古学会　1990
（陶器・磁器）
大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』大宰府市の文化財　第49集　2000
上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』2　1982
小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2　1982
乗岡　実「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000

なお、陶器・磁器については小野正敏、大庭康時、村上　勇、乗岡　実の各氏よりご教示いただいた。また、整理段階では守岡正司氏の協力を得た。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 ……（田原）… 1

第２章　遺跡の位置と環境 ……（田原）… 3
　第１節　遺跡の位置 …… 3
　第２節　地理的環境 …… 3
　第３節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の概要と経過 ……（田原・谷）… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　現地調査の概要 …… 11
　第３節　調査の経過 …… 15
　第４節　整理作業の概要 …… 16

第４章　調査の結果 ……（田原）… 17
　第１節　基本土層 …… 17
　第２節　検出遺構の概要 …… 19
　第３節　出土遺物の概要 …… 20
　第４節　検出した遺構とそれに伴う遺物 …… 27
　第５節　出土遺物 …… 68

第５章　自然科学分析 …… 107
　第１節　益田平野の成り立ちと沖手遺跡 ……（林）… 107
　第２節　益田市沖手遺跡出土の中世人骨 ……（松下）… 117

第６章　まとめ ……（田原）… 123

挿図目次

第１図　益田道路建設予定地内の遺跡　(S=1/50,000)　2
第２図　沖手遺跡の位置　3
第３図　周辺関連地位置図　3
第４図　周辺の遺跡（中世）（１）　(S=1/100,000)　6
第５図　周辺の遺跡（２）　(S=1/30,000)　7
第６図　沖手遺跡調査区配置図　(S=1/3,000)　12
第７図　グリッド図　(S=1/1,000)　13
第８図　土層概念図　17
第９図　調査区西壁（Ｔ１）土層実測図　(S=1/40)　18
第10図　遺構配置図（１）　(S=1/200)　21
第11図　遺構配置図（２）　遺物出土状況 (S=1/200)　23
第12図　平成16年度・平成17年度　調査区遺構配置図（遺跡西側）　(S=1/500)　25
第13図　溝状遺構１　土層図　(S=1/20)　27
第14図　溝状遺構２　土層図　(S=1/20)　27
第15図　溝状遺構２　出土遺物実測図　(S=1/3)　28
第16図　溝状遺構４　出土遺物実測図　(S=1/3)　29
第17図　井戸１（ＳＫ１）　実測図（１）(S=1/30)　30
第18図　井戸１（ＳＫ１）　実測図（２）(S=1/30)　31
第19図　井戸１（ＳＫ１）　出土遺物実測図 (S=1/3)　32
第20図　井戸１（ＳＫ１）　出土銭貨拓影　33
第21図　井戸３（ＳＫ18）　実測図　(S=1/30)　33
第22図　井戸３（ＳＫ18）　出土遺物実測図（１）(S=1/3)　33
第23図　井戸３（ＳＫ18）　出土遺物実測図（２）(S=1/3)　34
第24図　井戸４（ＳＫ21）　実測図　(S=1/30)　35
第25図　井戸４（ＳＫ21）　出土遺物実測図 (S=1/3)　36
第26図　井戸５（ＳＫ70）　実測図　(S=1/30)　38
第27図　井戸５（ＳＫ70）　出土遺物実測図（１）(S=1/3)　39
第28図　井戸５（ＳＫ70）　出土遺物実測図（２）(S=1/3)　39
第29図　井戸５（ＳＫ70）　出土遺物実測図・桶 (S=1/6)　40
第30図　建物跡１・２　周辺遺構実測図　(S=1/60)　41
第31図　建物跡１(P925)　出土遺物実測図　(S=1/3)　42
第32図　建物跡１・２　実測図　(S=1/60)　42
第33図　建物跡３　周辺実測図　(S=1/60)　43
第34図　建物跡３(3-1・3-2)　実測図　(S=1/60)　44
第35図　建物跡３　関連遺構実測図　(S=1/20)　45
第36図　建物跡３　関連遺構　出土遺物実測図 (S=1/3)　46
第37図　建物跡４　周辺図（１）　(S=1/60)　47
第38図　建物跡４　周辺図（２）　(S=1/60)　48
第39図　建物跡４　断面図　(S=1/60)　49
第40図　建物跡４　関連遺構実測図（１）　(S=1/30)　50
第41図　建物跡４　関連遺構実測図（２）　(S=1/30)　51
第42図　建物跡４　関連遺構　出土遺物実測図 (S=1/3)　52
第43図　ＳＫ８１　出土銭貨拓影　53
第44図　建物跡５　実測図　(S=1/60)　53
第45図　建物跡６　実測図　(S=1/60)　54
第46図　石列１　実測図　(S=1/60)　55
第47図　石列・溝状遺構５　出土遺物実測図 (S=1/3)　56
第48図　墓１（ＳＫ38）　実測図　(S=1/20)　57
第49図　墓１（ＳＫ38）　出土遺物実測図　(S=1/3)　57
第50図　墓２（ＳＫ39）　実測図　(S=1/20)　58
第51図　墓２（ＳＫ39）　出土遺物実測図　(S=1/3)　58
第52図　墓３（ＳＫ71）　実測図　(S=1/20)　59
第53図　墓３（ＳＫ71）　出土遺物実測図　(S=1/3)　59
第54図　墓４（ＳＫ77）　実測図　(S=1/20)　60
第55図　墓４（ＳＫ77）　出土遺物実測図　(S=1/3)　60
第56図　墓５（ＳＫ74）　実測図　(S=1/20)　61
第57図　墓５（ＳＫ74）　出土遺物実測図　(S=1/3)　61
第58図　墓６（ＳＫ75）　実測図　(S=1/20)　62
第59図　墓６（ＳＫ75）　出土遺物実測図　(S=1/3)　62
第60図　ＳＫ26　出土遺物実測図　(S=1/3)　63
第61図　ＳＫ12～16　実測図　(S=1/30)　64
第62図　ＳＫ20・ＳＫ26・ＳＫ37・ＳＫ40　実測図 (S=1/30)　65
第63図　ＳＫ91・ＳＫ92　実測図　(S=1/30)　67
第64図　ＳＫ91・ＳＫ92　出土遺物実測図　(S=1/3)　67

第65図　ピット　出土遺物実測図（S=1/3）　69
第66図　P1005　出土銭貨拓影　70
第67図　ピット　遺物出土状況図（S=1/15）　71
第68図　出土遺物（1）　須恵器・土師器（S=1/3）　73
第69図　出土遺物（2）　瓦質土器（S=1/3）　74
第70図　出土遺物（3）　陶器（S=1/3）　75
第71図　出土遺物（4）　土錘（S=1/3）　76
第72図　出土遺物（5）　銭貨拓影　76
第73図　出土遺物（6）　鉄器（S=1/3）　77
第74図　井戸1　井側組桶材　実測図（1）（S=1/6）　79
第75図　井戸1　井側組桶材　実測図（2）（S=1/6）　80
第76図　井戸1　井側組桶材　実測図（3）（S=1/6）　81
第77図　井戸1　井側組桶材　実測図（4）（S=1/6）　82
第78図　井戸1　井側組桶材　実測図（5）（S=1/6）　83
第79図　井戸1　井側組桶材　実測図（6）（S=1/6）　84
第80図　井戸1　井側組桶材　実測図（7）（S=1/6）　85
第81図　井戸4　井側組桶材　実測図（1）（S=1/6）　86
第82図　井戸4　井側組桶材　実測図（2）（S=1/6）　87
第83図　井戸4　井側組桶材　実測図（3）（S=1/6）　88
第84図　井戸4　井側組桶材　実測図（4）（S=1/6）　89
第85図　井戸4　井側組桶材　実測図（5）（S=1/6）　90
第86図　井戸4　井側組桶材　実測図（6）（S=1/6）　91
第87図　井戸5　井側組桶材　実測図（1）（S=1/6）　92
第88図　井戸5　井側組桶材　実測図（2）（S=1/6）　93
第89図　井戸5　井側組桶材　実測図（3）（S=1/6）　94
第90図　井戸5　井側組桶材　実測図（4）（S=1/6）　95
第91図　井戸5　井側組桶材　実測図（5）（S=1/6）　96
第92図　井戸5　井側組桶材　実測図（6）（S=1/6）　97
第93図　井戸5　井側組桶材　実測図（7）（S=1/6）　98
第94図　井戸5　井側組桶材　実測図（8）（S=1/6）　99
第95図　墓2（ＳＫ39）　棺底板実測図（S=1/8）　100
第96図　墓6（ＳＫ75）　棺材実測図（S=1/8）　100
第97図　墓出土 土師器実測図（S=1/3）　126
第98図　中世前半・後半の集落概略図（S=1/400）　131
第99図　中世前半・後半の集落概略図（S=1/400）　133
第100図　土地利用図　135

表　目　次

第1表　益田道路建設予定地内の遺跡一覧表　1
第2表　沖手遺跡周辺の遺跡　8
第3表　墓一覧表　57
第4表　溝状遺構（ＳＤ2・ＳＤ4）　出土遺物観察表　101
第5表　井戸1（ＳＫ1）・井戸3（ＳＫ18）・井戸4（ＳＫ21）・井戸5（ＳＫ70）　出土遺物観察表　101
第6表　建物跡1・建物跡3関連遺構・建物跡4関連遺構　出土遺物観察表　102
第7表　石列・溝状遺構5　出土遺物観察表　102
第8表　墓1（ＳＫ38）・墓2（ＳＫ39）・墓3（ＳＫ71）・墓5（ＳＫ74）・墓6（ＳＫ75）墓4（ＳＫ77）・ＳＫ26　出土遺物観察表　103
第9表　ＳＫ91・ＳＫ92　出土遺物観察表　103
第10表　ピット　出土遺物観察表　103
第11表　遺構に伴わない遺物（須恵器・土師器）観察表　104
第12表　遺構に伴わない遺物（瓦質土器）観察表　104
第13表　遺構に伴わない遺物（陶器）観察表　105
第14表　遺構に伴わない遺物（土錘）観察表　105
第15表　遺構に伴わない遺物（鉄器）観察表　105
第16表　ＳＫ1・ＳＫ21・ＳＫ70・ＳＫ39・ＳＫ75　出土木製品観察表　106

図版目次

図版１　昭和22年米極東空軍撮影空中写真(益田川下流域)
図版２　調査前の状況（東から）
土層の状況（Ｔ１）
溝状遺構２　埋土堆積状況
図版３　溝状遺構２（東から）
調査区西側の状況（東から）
図版４　調査区東側
建物跡３・４周辺ピット検出状況（１）
調査区東側
建物跡３・４周辺ピット検出状況（２）
図版５　井戸１　礫検出状況
井戸１　井側検出状況（１）
井戸１　遺物出土状況
図版６　井戸１　井側検出状況（２）
井戸１　井側（組桶）
井戸１　調査後
図版７　井戸４　検出状況
井戸４　井側（組桶）
井戸４　調査後
図版８　井戸５　検出状況
井戸５　井側（上部石組み）（１）
図版９　井戸５　井側（上部石組み）（２）
井戸５　井側（組桶）
図版10　墓２（１）遺物出土状況
墓２（２）桶棺
図版11　墓３
墓４
図版12　墓６（１）木棺・遺物出土状況
墓６（２）人骨出土状況（西から）
図版13　墓６（３）人骨出土状況（北から）
墓５
図版14　Ｐ197
Ｐ450
Ｐ693
図版15　Ｐ1318
Ｐ1286
ＳＫ83
図版16　沖手遺跡　平成16年度
調査区及びその周辺（南から）
沖手遺跡　平成16年度
調査区及びその周辺（北から）
図版17　溝状遺構２　出土遺物（外面）
溝状遺構２　出土遺物（内面）
図版18　溝状遺構３　出土遺物（外面）
溝状遺構３　出土遺物（内面）
図版19　井戸１（１）　出土遺物（外面）
井戸１（１）　出土遺物（内面）
図版20　井戸１（２）　出土遺物（外面）
井戸１（２）　出土遺物（内面）
図版21　井戸３・井戸４　出土遺物
図版22　建物跡３　関連遺構出土遺物（外面）
建物跡３　関連遺構出土遺物（内面）
図版23　建物跡４　関連遺構出土遺物（外面）
建物跡４　関連遺構出土遺物（内面）
図版24　建物跡関連ピット・ＳＫ26出土遺物（磁器・陶器）
図版25　墓　出土遺物
図版26　出土遺物（１）磁器（外面）
出土遺物（１）磁器（内面）
図版27　出土遺物（２）磁器
出土遺物（３）磁器
図版28　出土遺物（４）朝鮮王朝陶磁
出土遺物（５）陶器
出土遺物（６）銭貨
図版29　出土遺物（７）土師器
図版30　出土遺物（８）土錘
井戸１　井側組桶材
図版31　井戸４　井側組桶材
井戸５　井側組桶材
図版32　木製品・墓２・墓６棺材

第１章　調査に至る経緯

一般国道９号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長690kmの主要幹線道路である。この道路はまた、山陰諸都市間を結ぶ唯一の幹線道路でもあり、経済的活動・文化的活動に重要な役割を果たしている。

しかし、近年の交通量の増加と沿線の市街化の影響により、主に都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生している。このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となっており、その様相は益田市においても例外ではない。さらに益田市は、一般国道９号及び191号が市内中心部で交差するという地理的要因もあって交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に支障をきたし始めていた。

こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成8年度に建設省（現　国土交通省）により益田道路（延長7.8km、益田市遠田町～須子町）の建設が計画・事業化されることとなった。

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の存否についての照会があり、これを受けて益田市教育委員会の協力のもと、平成10年度に予定地内における遺跡の分布調査が実施されることとなった。分布調査は平成11年３月に実施され、その結果、27ヶ所の遺跡及び遺跡推定地（最終的にはルート上から外れるものを含んでいたため24ヶ所の遺跡及び遺跡推定地）を確認し、建設省に回答した（第１表）。

建設省と島根県教育委員会では、この結果をもとに複数回にわたって予定地内遺跡の埋蔵文化財についての協議を行い、道路建設上回避することのできない遺跡についての取り扱いを検討した。

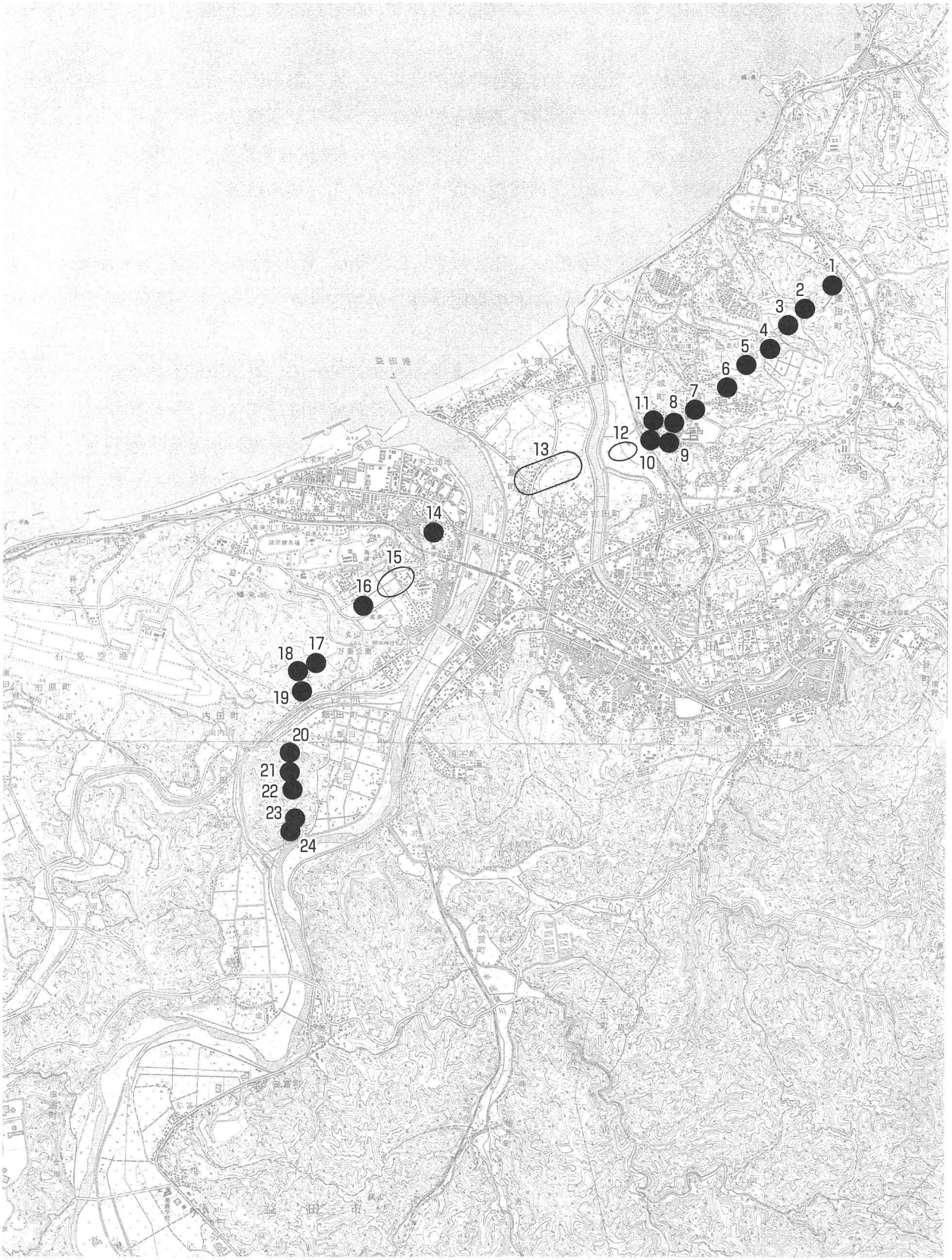
第１表　益田道路建設予定地内の遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時　代	遺跡総面積（㎡）	施行範囲内（㎡）	現　状	調査年度	備　考
1	流松遺跡	益田市遠田町	集落跡		34,900	8,600	水田	平成17年度	
2	流松南遺跡	益田市遠田町	集落跡		7,600	2,200	山林	平成17年度	
3	原浜遺跡	益田市遠田町	古墳及び集落跡	古墳？～	31,000	18,600	山頂･山腹		平坦地　緩斜面　北側に周知の遺跡「尾堤古墳群」が隣接
4	久城西Ⅱ遺跡	益田市久城町		古墳？～	8,300	4,200	山林		尾根上に緩斜面
5	久城西Ⅰ遺跡	益田市久城町			35,400	11,800	山林		H11年夏頃に一部削平される尾根上に平坦地　緩斜面
6	若葉台遺跡	益田市久城町			14,500	10,500	山林・畑		
7	久城東遺跡	益田市久城町	近世の石囲墓　集落跡散布地	奈良～	23,900	11,200	宅地･畑･墓地		平坦地　遺物表採
8	城角遺跡	益田市久城町	城館跡	中世～	18,600	3,500	宅地		
9	堂ノ上遺跡	益田市久城町			15,900	12,700	宅地･畑		平坦面
10	迫ノ谷古墳群	益田市久城町	古墳（横穴墓）　城館散布地	古墳～	11,100	2,100	宅地･山林･畑		平坦面　緩斜面　周知の遺跡須恵器表採
11	専光時脇古墳群	益田市久城町	古墳群　城跡　五輪塔	古墳～	9,700	2,800	山林･墓地		平坦地　周知の遺跡　普月城跡も含む
12	沖手遺跡	益田市中島町	散布地	中世～	80,000	29,700	水田	平成16年度～17年度	
13	中河原遺跡	益田市中島町	散布地　低湿地遺跡	中世～	184,800	47,100	水田･畑･宅地		
14	浜遺跡	益田市高津町	神社跡　散布地	中世～	37,000	14,700	畑･宅地	平成13年度～16年度	
15	浜寄･地方遺跡	益田市高津町	散布地　集落跡か	古墳～	118,400	42,200	畑･宅地	平成14年度～16年度	水田跡　集落
16	沖田遺跡	益田市高津町	散布地	弥生～古墳	45,100	16,400	山林･水田	平成13年度	
17	廿子Ⅰ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	11,200	8,000	山林	平成13年度	建物跡
18	廿子Ⅱ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	13,800	2,800	山林	平成13年度	建物跡
19	廿子Ⅲ遺跡	益田市飯田町		弥生・古墳	5,800	2,700	山林	平成14年度	
20	やばらⅠ遺跡	益田市飯田町	近世以降の墓地	古墳・近世～	8,500	2,400	山林･墓地	平成13年度	
21	やばらⅡ遺跡	益田市飯田町	古墳・城館	古墳～	10,200	3,800	山林	平成13年度	
22	じんだ遺跡	益田市飯田町		古墳～	18,000	9,100	山林	平成13年度	
23	恵比寿Ⅰ遺跡	益田市飯田町		古墳	7,400	3,900	山林	平成13年度	
24	恵比寿Ⅱ遺跡	益田市飯田町		古墳	8,600	3,800	山林	平成13年度	

※網かけは調査が終了した遺跡

その結果、基本的に記録保存を行うとの結論に達し、平成13年度から予定地内遺跡の現地調査を開始することとなった。

本書において報告する沖手遺跡は、平成16年度より調査が開始された遺跡である。



第１図　益田道路建設予定地内の遺跡(S=1/50,000)

第２章　調査に至る経緯

第１節　遺跡の位置

沖手遺跡は益田市久城町に所在する遺跡である。遺跡は、益田川右岸の低地帯、益田川の河口からは約1.2km遡った地点に広がっている。調査前の標高は約1.5mで、主に水田として利用されていた。

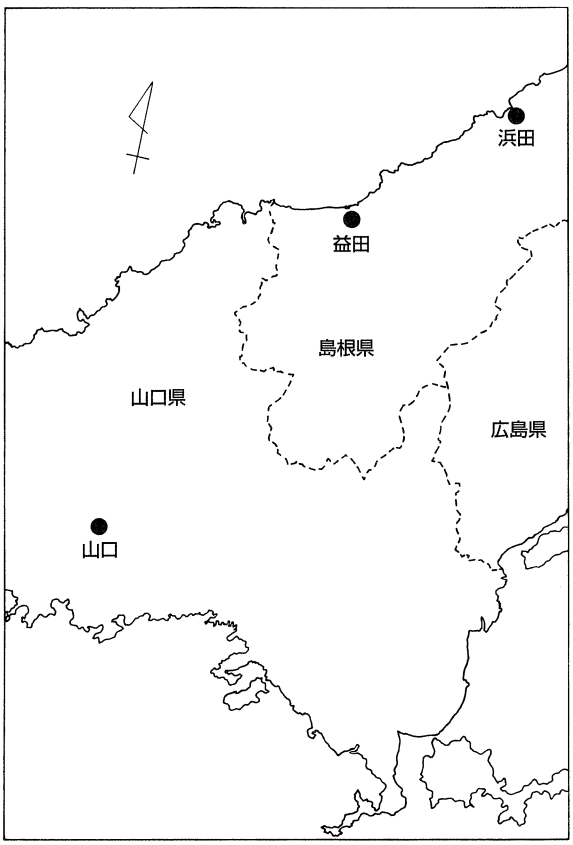
第２節　地理的環境

（概況）益田市は島根県の西部、山口県との県境に位置する、人口約53,000人の地方都市である。現在でもJR山陰線と山口線、国道９号線と191号線の分岐点となり、広島・山口へ通じているように、その地理的位置により古くから山口県・広島県との結びつきが強く、民俗・文化や風土の面でも県東部とは異なった様相を見せている。

（地形）益田市は北部の平野部（益田平野）とそれを取り囲むようにある周辺の丘陵部・山間部からなっている。

益田平野は美都・匹見両町境の春日山に源を発して北流する益田川と、六日市町（現吉賀町）に源を発し、支流の津和野川・匹見川を合わせながら北流する高津川の作用によって形成された複合三角州であり、石見部最大の規模を誇る。これまでの研究によれば、約6,000年前まで「古益田湖」とも称される湖が広がっていたものが、両河川による堆積作用の結果徐々に陸化していったと考えられている。[(1)] 平野の東側と南側は丘陵部で、中国山脈から伸びる支脈の先端部にあたり、東側の丘陵を開削している沖田川・津田川・遠田川の周辺には小規模な氾濫源や河岸段丘が見られる。また平野の北西側は海岸の砂が季節風によって吹き上げられた浜堤を形成し、南側は標高400m級の山々が連なり、さらにその南側は中国山地の中でも高い地点となるなど、変化に富んだ地形となっている。

第２図　沖手遺跡の位置



第３図　周辺関連地位置図

第３節　歴史的環境

石見部で最も規模の大きな沖積平野である益田平野及びその周辺では、旧石器時代以降数多くの遺跡が確認されている。それら遺跡のうち調査が行われたものは少なかったが、近年益田市教育委員会・匹見町教育委員会（現　益田市教育委員会）・美都町教育委員会（同）により積極的に調査が行われ、少しずつこの地域の歴史が明らかになりつつある。

本節ではそれらの全ての遺跡に触れる余裕がないため、主に今回調査を行った沖手遺跡と関係の深い奈良時代～戦国時代のものを中心に、各時代の様相を概観することとしたい。

奈良・平安時代

益田市のほぼ全域は、古代律令制下では石見国美濃郡に属していた。当時の国府は現在の浜田市下府町付近におかれていたと推定されており、そこを中心に地域支配が行われていたと考えられている。

益田周辺のこの時代の様子を窺うことのできる資料は多くないが、延喜927年に編纂された延喜式には染羽天石勝命神社・櫛代賀姫神社など五社が記載されており、現存するこれらの社が少なくともこの時代まで遡ることを示している。また、地元の伝承に寄れば、安福寺・妙福寺・福王寺・蔵福寺・専福寺という「福」のつく五寺が益田川下流域にあったとされ、確認はされていないものの寺院も存在していたことを窺わせている。

この時代の遺跡としては、大溢遺跡、サガリ遺跡、浜寄地方遺跡、暁音寺境内地遺跡などが知られている。このうち大溢遺跡において建物跡が確認されたほかは、顕著な遺構は確認されていないが、出土する遺物の量などから判断して近隣に集落が存在したことは確実であろう。遺跡の分布やこれまでの調査結果などから判断して、益田地区（旧益田－三宅御土居跡～暁音寺境内地にかけての一帯）及び高津地区（浜寄周辺）を中心に当時の集落があったものと思われる。また、石塔寺権現経塚からは中国製の褐釉四耳壺が５口出土しており、注目される遺跡である。

これらの遺跡の多くは近年の調査によって明らかとなったものであり、それまではこの時代の遺跡についてほとんど知られていなかったことから判断すると、今後その数が増えていくことは十分想定できる。

鎌倉時代

平安時代末期には益田市域に益田荘と長野荘が成立する。益田荘は益田市～浜田市にかけての荘園で、その開発・成立には石見国国府在庁官人藤原氏（のちの益田氏）が大きく関わっていたとされている。ただこの時代、益田氏総領は国府域を本拠に活動をしていたとされ、益田（本郷）は地域支配の拠点とはなっていなかったようである。

この時期の文献資料は少なく実態については明らかでない面が多いが、これまでに実施された発掘調査からは、それに近づく上での重要な資料が蓄積されつつある。

益田荘域では、今回報告する沖手遺跡や後の益田氏の居館となる三宅御土居跡などがあげられる。特に三宅御土居跡からは少なくとも12世紀代にまで遡る遺物が多く確認されており、益田氏の居館として機能する以前にも何らかの施設がおかれていた可能性も指摘されるようになってきている。また近年では、益田川中流域にある酒屋原遺跡の調査が行われ、そこでも中世前半期の多量の貿易陶磁類が検出されるなど、平安時代末～鎌倉時代にかけて、益田川流域の開発が積極的に進められ

たことが明らかとなりつつある。

長野荘域においても浜寄・地方遺跡や羽場遺跡など重要な遺跡が確認されている。特に羽場遺跡からは12世紀代の貿易陶磁類が多量に出土しており、規模の大きな集落が存在した可能性が考えられている。

いずれにしても、この時代に益田周辺の開発が進められたことを示す重要な遺跡が多く、今後の研究を進める上でも欠くことのできないものとなっている。

室町時代

室町時代は益田氏が益田を拠点とし大きく活躍する時代である。益田氏は、南北朝期を境にして強力な地域支配体制を確立し、核となる益田本郷の都市的空間をつくりだし始めたとされる。このことを示すかのように市内にはこの時代に創建されたとされる社寺が多く存在している。

文献資料も比較的多く残りそれらの研究も進んでいるが、近年の遺跡の調査からも多くの知見が得られている。

この時代の遺跡としては、上久々茂土居跡、大谷土居跡など益田氏に関係の深い遺跡が多く知られており、特にその本拠たる七尾城跡、三宅御土居跡などは著名である。

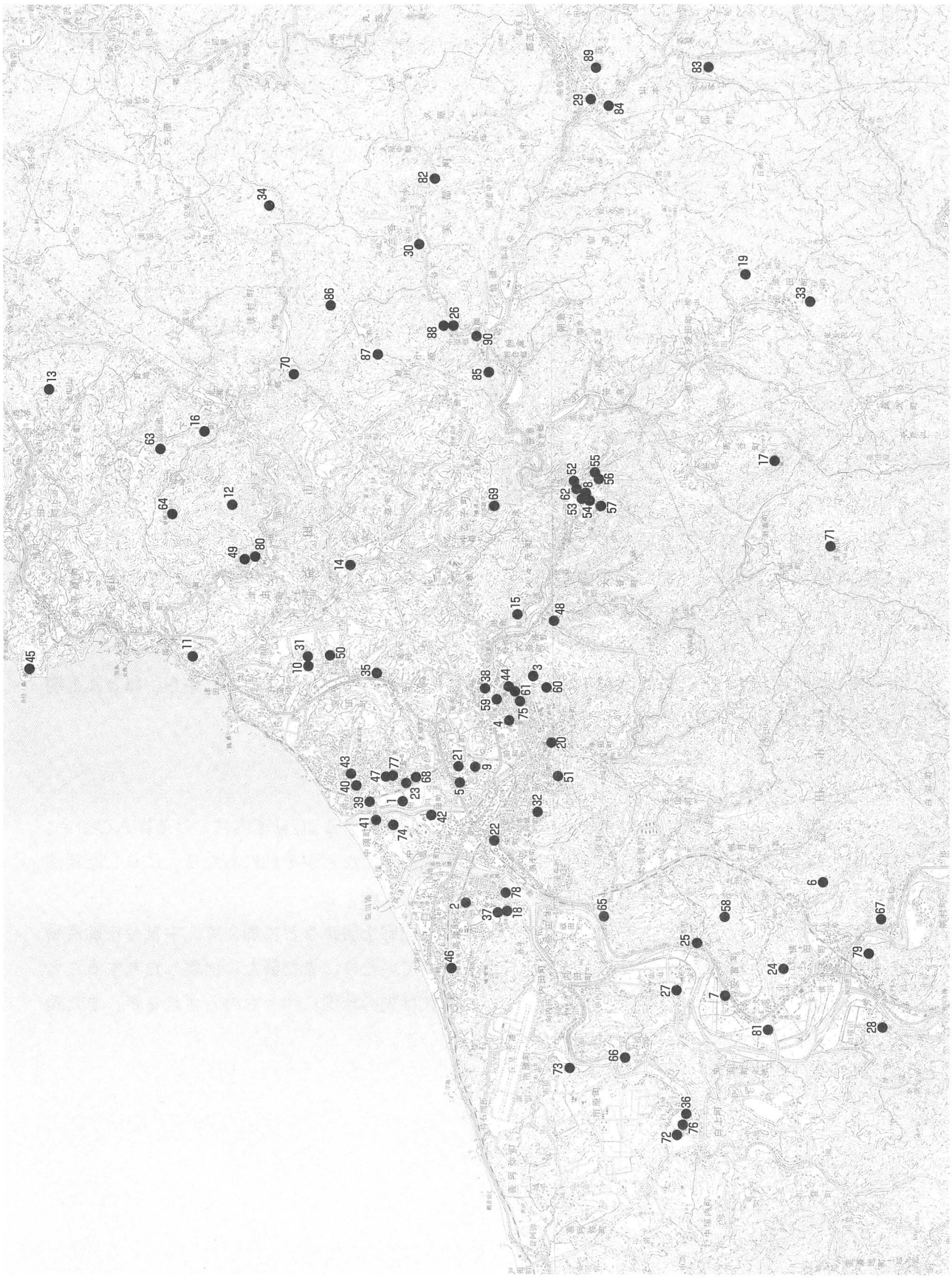
この両遺跡においては複数回にわたり調査が行われており、それから得られた資料をもとにした益田氏の活動実態についての研究も盛んである。また上久々茂土居跡の調査では、従来鎌倉時代とされていた年代観の変更を迫る結果を得るなど、この時代の様相は少しずつ明らかにされつつあるといえよう。

しかしながら、この時代の集落等についてはそれを証明する遺跡も少ないことから、ほとんど明らかになっておらず、今後の課題となっている。

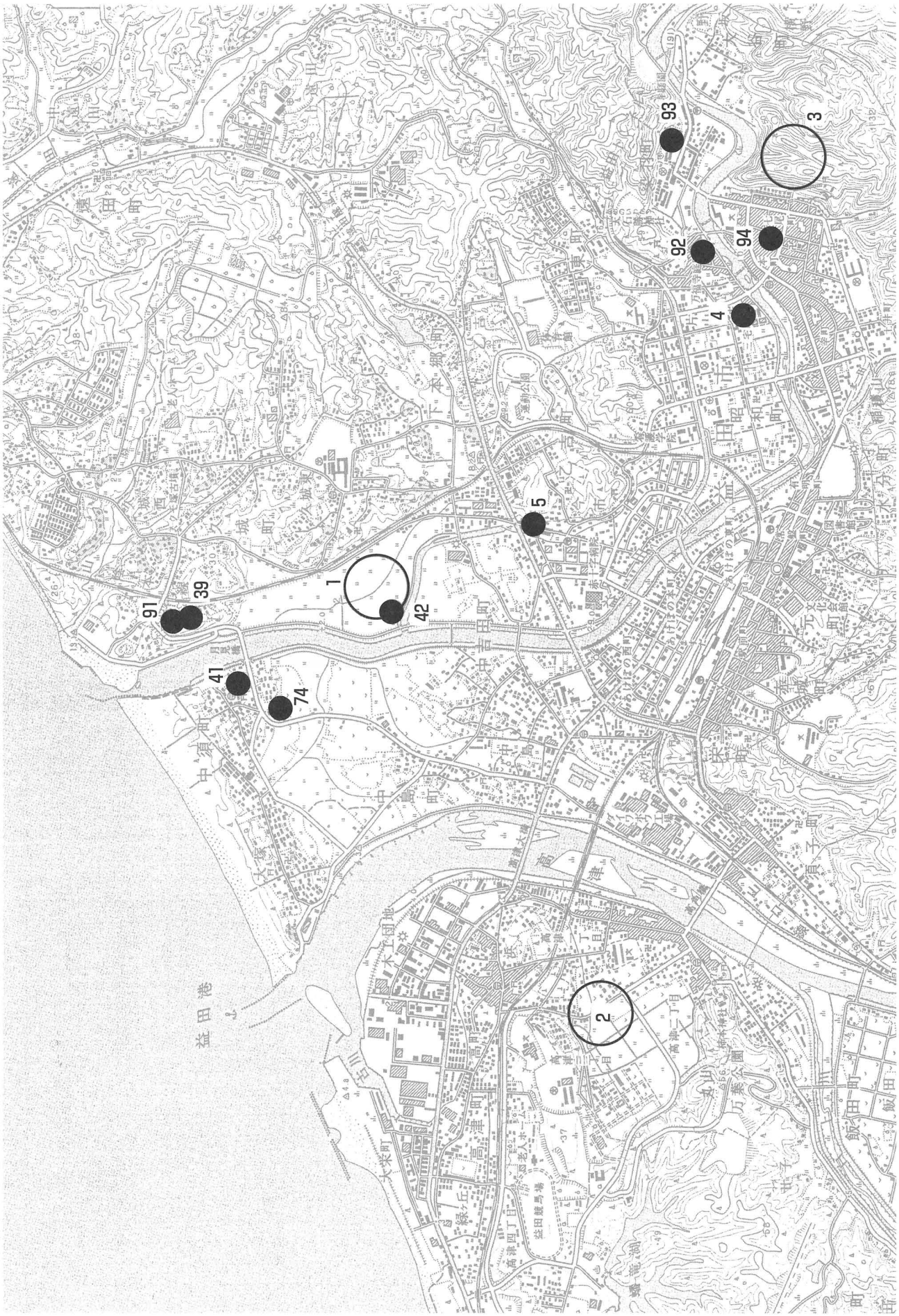
戦国時代

応仁の乱以後戦国時代にかけての益田氏は危機的状況に直面する。石見国内における国人の争い、陶氏の謀反による大内氏の滅亡、続く毛利氏による陶氏の滅亡などがそれにあたり、こうした状況に対応すべくさまざまな動きをしたことが、文献資料からも窺える。

この時期の遺跡としては、前時代からの七尾城跡や三宅御土居跡などに加えて、中世今市船着場跡などが挙げられるが、それらはこの時代に変質を遂げていたり、また新たに出現したりすることが調査の結果からも明らかとなっている。こうした変化は先の状況に伴うものとされるが、まだ検討は始まったばかりであり、実態の解明が期待されている。



第４図　周辺の遺跡（中世）（１）（Ｓ＝1/100,000）



第５図　周辺の遺跡（２）（Ｓ＝1/30,000）

第２表　沖手遺跡周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	種　別	主な遺構・遺物	備考	遺跡地図
1	沖手遺跡	散布地 集落跡	掘立柱建物跡　貿易陶磁器　土師質土器　須恵器	平成10年度 ～18年度	Q271
2	浜寄・地方遺跡	散布地	土師器　須恵器　貿易陶磁器　土錘　鉄滓	平成14年度 ～16年度	Q274
3	七尾城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切　連続空堀　礫石建物跡　庭園跡　門跡　礫石列　集石遺構 土壙　貿易陶磁器　施釉陶器　備前焼　土師質土器　土器　瓦質土器　鉄製品　鉄滓 銅滓　銭貨	平成10年度 ～14年度	Q57
4	三宅御土居館跡	館跡	土塁　鍛冶場跡　井戸　堀跡　掘立柱建物跡　柱穴　土壙　盛土跡　貿易陶磁器 施釉陶器　備前焼　土師質土器　土器　瓦質土器　銭貨　縄文土器　土師器　須恵器	平成２年度 ～３年度 平成10年度 ～14年度	Q136
5	中世今市船着場	その他	積石　礫石列　敷石遺構　土壙　貿易陶磁器　施釉陶器　備前焼　唐津焼　瓦質土器 施釉瓦　土師器	平成９年度 ～11年度	Q200
6	石塔寺権現経塚	経塚	陶製経筒５口		Q186
7	羽場遺跡	散布地	縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器　陶磁器	平成元年度	Q150
8	上久々茂土居跡	館跡	掘立柱建物跡　須恵器　土師器　陶磁器	平成２年度 ～３年度 平成５年度	Q151
9	鳶ヶ松城跡	城跡	山城		Q58
10	嶽城跡	城跡	山城　郭　堀切　連続空堀		Q59
11	城ヶ浦城跡	城跡	山城		Q60
12	平家ヶ嶽城跡	城跡	山城		Q61
13	大山城跡	城跡	山城		Q62
14	大草城跡	城跡	山城　郭　堀切		Q63
15	大谷城跡	城跡	山城　郭　堀切		Q64
16	高倉山城跡	城跡	山城		Q65
17	高嶽城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切　井戸		Q66
18	高津城跡	城跡	山城　郭		Q67
19	原城跡	城跡	山城　郭　腰郭　堀切		Q68
20	稲積城跡	城跡	山城　郭　堀切	昭和62年度	Q69
21	稲岡城跡	城跡	山城		Q70
22	高川城跡	城跡	山城		Q71
23	普月城跡	城跡			Q72
24	豊田城跡	城跡	山城　郭		Q73
25	安富城跡	城跡	山城　郭　堀切		Q74
26	粟島原遺跡	古墓	青磁椀　白磁小皿　小壺　銅鏡　硯		R56
27	大嶽城跡	城跡	山城　郭　竪堀　横堀		Q76
28	向横田城跡	城跡	山城　郭　土塁　空堀　堀切		Q77
29	大年ノ元遺跡	散布地	陶磁器片　土師器片		R64
30	大石前遺跡	散布地	土師質土器　陶磁器		R66
31	康神塚遺跡	その他	「享保九稔」銘		Q81
32	赤城跡	城跡	山城		Q82
33	波田城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切　横堀		Q83
34	竜雲寺跡	寺院跡	石垣２段		Q86
35	安養寺跡	寺院跡			Q87
36	竜玉寺跡	寺院跡			Q88
37	真福寺跡	寺院跡	井戸　墓石		Q89
38	勝達寺跡	寺院跡			Q90
39	真如坊跡	寺院跡			Q91
40	妙福寺跡	寺院跡			Q92
41	安福寺跡	寺院跡	十三重石塔		Q93
42	専福寺跡	寺院跡		平成10年度 ～11年度	Q94
43	藏福寺跡	寺院跡			Q95
44	大雄庵跡	寺院跡			Q96
45	唐音砦跡	城跡	石垣		Q133
46	鍋島砦跡	城跡			Q134
47	城角砦跡	城跡			Q135
48	大谷土居跡	館跡			Q137

49	赤雁土居跡	館跡	郭　土塁　石垣	昭和62年度	Q138
50	北ノ平経塚	経塚	礫石経塚		Q144
51	水分経塚	経塚	礫石経塚　石塔	昭和58年度	Q153
52	大峠古墓	古墓	五輪塔　集石		Q179
53	得毫寺裏古墓	古墓	宝篋印塔		Q180
54	土井殿の墓	古墓	五輪塔		Q181
55	とうのう山古墓	古墓	積石塚		Q182
56	山根古墓	古墓	宝篋印塔		Q183
57	小平古墓	古墓	宝篋印塔　五輪塔片		Q184
58	長原屋敷跡	館跡			Q185
59	益田兼見墓	古墓	五輪塔		Q194
60	益田藤兼墓	古墓	五輪塔		Q195
61	益田兼堯墓	古墓			Q196
62	大峠遺跡	散布地	掘立柱建物跡　陶磁器	平成５年度	Q216
63	宇治城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切　竪堀		Q243
64	烏帽子山城跡	城跡	山城		Q244
65	角井城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切　連続空堀群		Q246
66	松原城跡	城跡	郭　腰郭　堀切		Q247
67	井手カケの城跡	城跡	山城　郭　土塁　堀切		Q248
68	三百坂城跡	城跡			Q250
69	権現山城跡	城跡	郭		Q252
70	城山城跡	城跡	山城		Q253
71	韮草山城跡	城跡	山城　郭　堀切		Q254
72	白上館跡	城館跡	郭		Q255
73	市原氏館跡	城館跡			Q256
74	西浜遺跡	散布地	須恵器　陶磁器		Q325
75	古川遺跡	散布地	須恵器　土師器　陶磁器		Q326
76	宮ノ廻遺跡	散布地	須恵器　土師質土器　陶磁器		Q329
77	城角城跡	城跡	山城		Q331
78	鍋島城跡	城跡	山城		Q332
79	本郷地城跡	城跡	山城　郭　堀切　竪堀		Q334
80	天道山城跡	城跡	山城　郭　土塁　竪堀		Q335
81	大畑遺跡	集落跡	陶磁器		Q262
82	都賀根城跡	城跡	刀剣		R4
83	入船山城跡	城跡	山城		R19
84	要害山城跡	城跡	山城　石垣		R20
85	四ツ山城跡	城跡	山城　本丸　井戸		R21
86	土井山城跡	城跡			R45
87	久木経塚	経塚			R46
88	竹城跡	城跡			R47
89	都茂城跡	城跡	郭　帯郭　堀切　竪堀　横堀		R54
90	背戸山城跡	城跡	郭　横堀		R55
91	櫛代賀姫神社		式内社		
92	万福寺				
93	医光寺				
94	暁音寺				

註
（１）林　正久　「益田平野の古地理の変遷」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』　益田市教育委員会　2000

（主要参考文献）

矢富熊一郎『益田市史』
益田市誌編纂委員会『益田市誌』上巻
益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅰ』1991
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅰ－勝達寺・七尾城跡―』1993
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅱ』1994
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅲ』1995
益田市教育委員会『七尾城跡・三宅御土居跡―益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』1998
益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』2000
益田市教育委員会『身近なまちづくり支援街路事業　歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う暁音寺発掘調査概要報告書』2001
益田市教育委員会『自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う　浜寄遺跡発掘調査報告書』2002
益田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』2003
益田市教育委員会『中小路遺跡―平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』2004
益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅱ』1992
島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』1992
島根県教育委員会『上久々茂土居跡・大峠遺跡』1994
美都町教育委員会『森下遺跡－益美地区中山間地域総合整備事業（丸茂原）に伴う発掘調査報告』2004
益田市教育委員会『酒屋原遺跡－益美地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書』2005

第３章　調査の概要と経過

第１節　遺跡の概要

沖手遺跡は、益田道路・県道久城インター線・市道中吉田久城線の建設及び益田川下流域の区画整理事業といった大規模開発事業が計画されたことに伴って、益田市教育委員会によって行われた分布調査（平成８年度）及び確認調査（平成10年度から開始）によってその存在が明らかとなった遺跡である。

一帯は、近年までは遺跡が存在するとは考えられていなかった場所であったが、その後の調査により、総面積が50,000 ㎡にも及ぶ広大な遺跡と考えられるようになってきている。

これまでの調査で、主に12世紀から17世紀にかけての遺構・遺物が検出され、中世の益田を考える上で欠くことのできない重要な遺跡となりつつある。

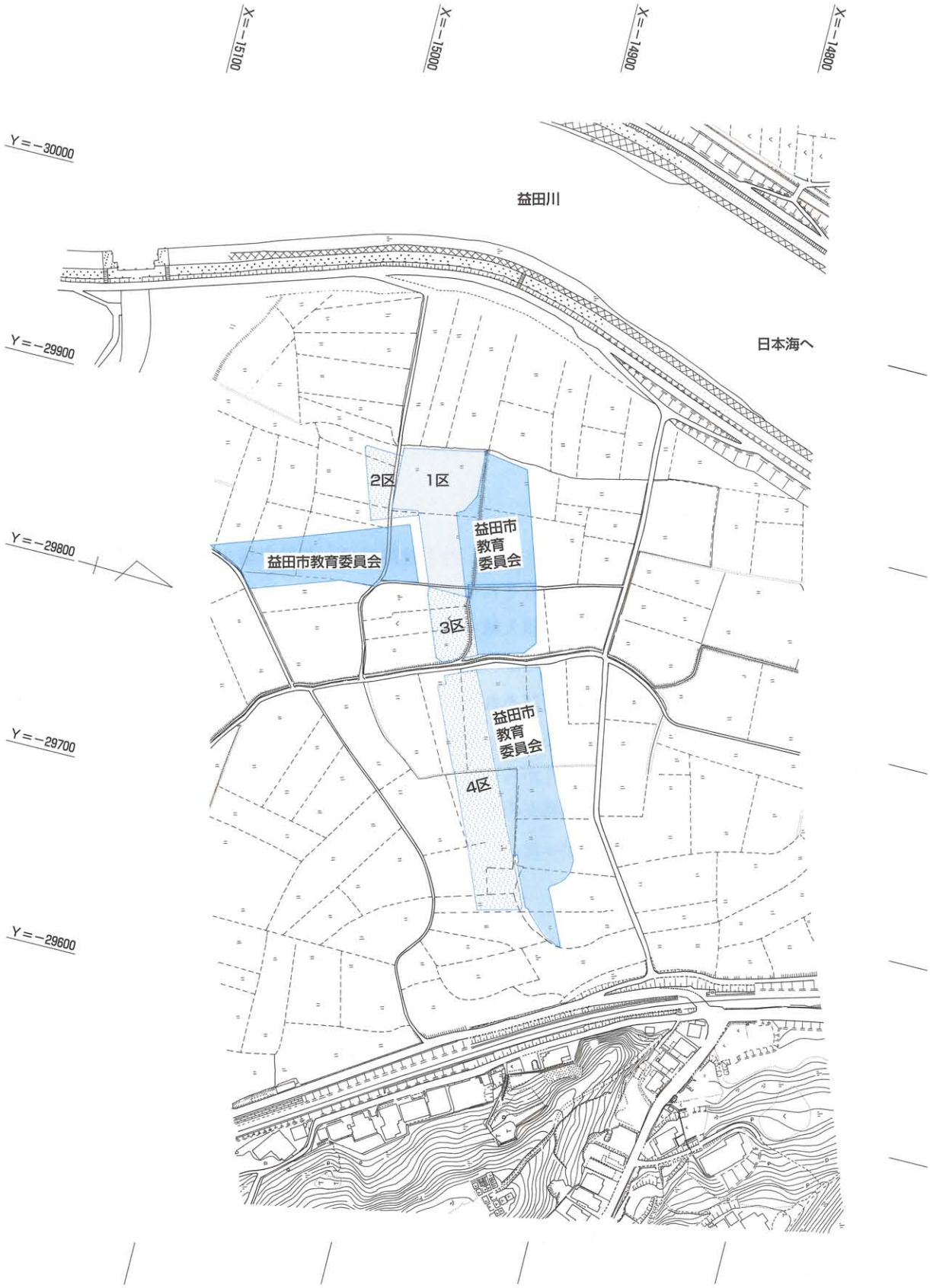
第２節　現地調査の概要

沖手遺跡の調査は平成16年度から開始された。沖手遺跡では、開発事業が複数の機関にまたがって計画されていたため、それに伴う調査もそれぞれの事業ごとに行っている。基本的には益田道路本線部分を島根県教育委員会が、また県道久城インター線及び市道中吉田久城線部分を益田市教育委員会が、それぞれ実施することとなったが、遺跡としては一つのものであることから、相互に緊密な連携をとりつつ行った（調査主体及びそれぞれの調査範囲については第６図参照）。

島根県教育委員会による調査は平成16年度・平成17年度に行われた。

沖手遺跡１区の調査は、平成16年９月から平成17年１月までの期間で、益田市教育委員会及び島根県教育委員会によって行われた試掘調査の結果をもとに範囲を絞り込んだ上で、多くの遺構が存在した面（報告では３層上面）まで行った。

調査前の状況



第６図　沖手遺跡調査区配置図（Ｓ＝1/3,000）

第7図　グリッド図（S＝1/1,000）

調査の実施にあたっては、島根県教育委員会・益田市教育委員会共通のグリッドを国土座標にあわせて設定し、これを基準に進めることとした（第7図）。

調査開始後まもなく、中世のものと考えられる相当数の遺構及び遺物を検出したことから、中世の集落の存在が想定されるに至った。こうした状況は同年５月から調査を開始した益田市教育委員会の調査区においても同様であり、これを受けて調査指導会が開催された。指導会では遺構・遺物の検討のみならず遺跡の立地、当時の景観的復元などさまざまな面からの検討がなされた。このような指導会に加えて、多方面からの指導・助言を得つつ調査は進められた。

その成果については現地説明会において公表したほか、益田市立歴史民俗資料館での「発掘調査速報展」や発掘調査だより「石見路の言伝」の配布等により広く周知を図った。

これらと平行して、随時、遺構の実測図の作成、遺物の出土状況の記録、取り上げ等を行い、またラジコンヘリコプターによる空中写真撮影及び空中写真測量等も実施して、平成17年１月14日現地におけるすべての調査を終了した。

第３節　調査の経過

平成16年度に実施した沖手遺跡１区の調査における、主な経過については以下のとおりである。

平成１６年

９月１３日	調査開始。重機による表土掘削を行う。
１４日～	基準杭設置後、グリッドの設定。 表土除去後すぐに多量の遺物を確認。
１５日～	調査区西側より掘削開始。グリッド毎に掘削。 掘削したグリッドから遺構の検出作業を行う。 開始後まもなく多数の遺構の存在を確認。
中旬～	溝状遺構・井戸など検出した遺構の調査を順次開始。
１０月　８日	文化庁玉田調査官、文化財課丹羽野主幹現地視察
１４日	安全巡回（埋蔵文化財調査センター・弘済会による現地安全点検）
１５日	益田市文化財保護審議員会視察
１１月下旬～	16年度調査区内のおよその概略が明らかとなる。
１２月　９日	調査指導会の開催
～１０日	大山喬平氏、小野正敏氏、大庭康時氏、村上　勇氏、中村唯史氏による現地及び遺物の指導

調査指導会の様子

１２月１２日　　現地説明会開催、約150名の参加を得る。
　　２２日　　調査を一旦中断
平成１７年
　１月　５日　　調査再開
　　１４日　　空中写真撮影実施、現地調査終了

第４節　整理作業の概要

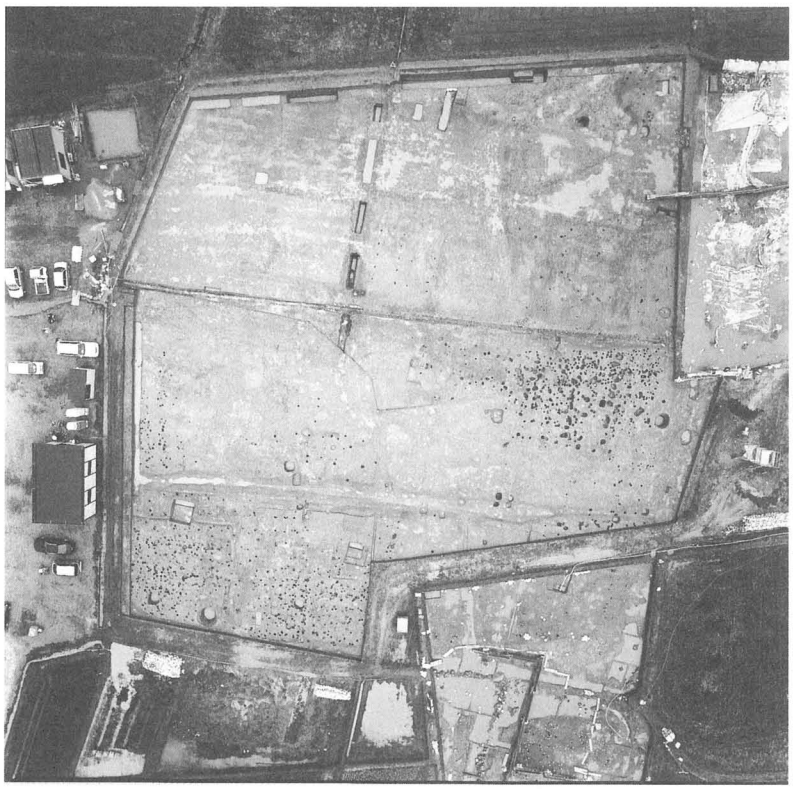
整理作業及び報告書の作成は、平成17年度に行った。出土遺物については、現地調査の段階で注記作業の大半を終えており、以下の作業を実施した。

土器類（磁器・陶器を含む）については、接合、復元、実測を行った。遺構出土のものについては基本的に実測を行っているが、小片など実測が不可能と判断したものについては実施していない。

木製品については、実測可能なものは実測を行い、一部の脆弱な製品については、専門の業者に委託して保存処理を行った。

金属製品については、Ｘ線写真撮影を行ったのち実測を行った。一部については専門の業者に委託して保存処理を行った。

実測等の終了した遺物については、必要に応じて写真撮影を行い、最終的に実測台帳に記載し、収蔵した。



沖手遺跡（上空から）

第４章　調査の結果

第１節　基本土層

本遺跡における土層は基本的に以下のとおりとなっている。なお、厚さは平成16年度調査範囲内の土層観察によるものである。

１層―灰色系粘質土

約20cmの厚さがある。主に近世以降の水田耕作土と考えられる層である。若干の遺物を含むものの基本的に重機により掘削した。

２層―黒色系土

約10cmの厚さがある。上部は酸化マンガンを多く含んでいる。全体的にやや砂質の土で、中世～近世にかけての遺物を包含する層となっている。２層は人力により掘削した。

３層―黄褐色系土

約10～20cmの厚さがある。上面が遺構面となっており、ほとんどの中世の遺構はこの面で検出された。

４層―褐色系土

約20cmの厚さがある。試掘調査及び本調査段階では顕著な遺構・遺物とも確認されなかったため調査を実施していないが、平成17年度に実施した隣接地での調査では一部で古墳時代のものと考えられる遺物が確認されており、それらが存在する可能性がある層である。

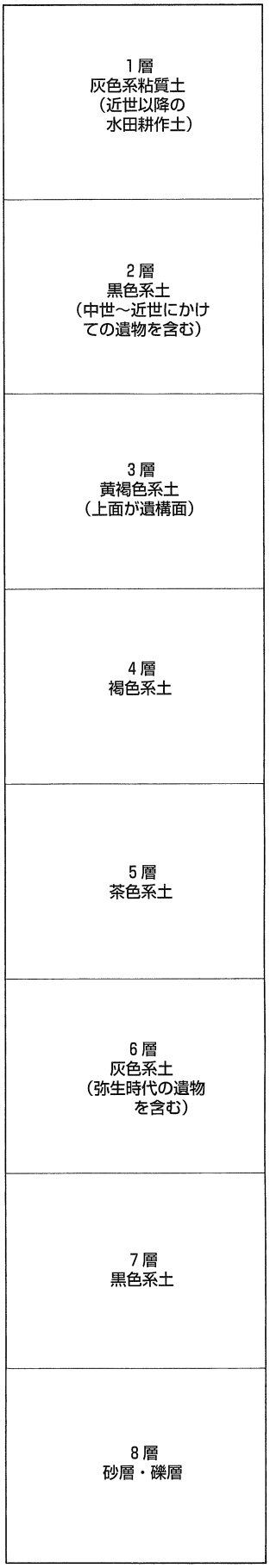
５層―茶色系土

平成16年度の調査ではこの層を確認するまでにとどまっている。4層と同様に確認調査段階及び本調査段階では顕著な遺構・遺物は確認していない。

６層―灰色系土

平成17年度の調査区では弥生時代の遺構・遺物が検出されている。

これ以下は黒色系の粘質土の層となり、砂層・礫層に到達する。礫層では益田平野の伏流水が流れている状況が確認できた。なお、５層以下の層の状況については別報告に譲ることとしたい。



第８図　土層概念図

第９図　調査区西壁（Ｔ１）土層実測図（Ｓ＝1/40）

第２節　検出遺構の概要

沖手遺跡１区の調査では多数の遺構を検出することができた。主な遺構としてあげられるのは、溝状遺構・井戸跡・建物跡・墓・ピットなどである（第10・11図）。これらは基本的に12世紀～16世紀までの異なる時代のものを含んでいるが、いずれも３層の上面という同じ面で検出している。

概要は以下のとおりである。

溝状遺構

溝状遺構は主なもの３条を確認した。主に東西方向に延びるものと、建物跡群を囲んでいると考えられるものが検出された。溝状遺構は他の調査区でも検出されているが、これらとは平行または直交する位置関係となる。

井戸跡

井戸跡として確認できたのは５基である。これらはいくつかの形態があり、石組みを伴うもの、縦板を桶状に組んだものを伴うものなど、その構造に違いをみせていた。また、井戸の廃絶に伴う祭祀行為のあとをうかがわせるものも検出された。

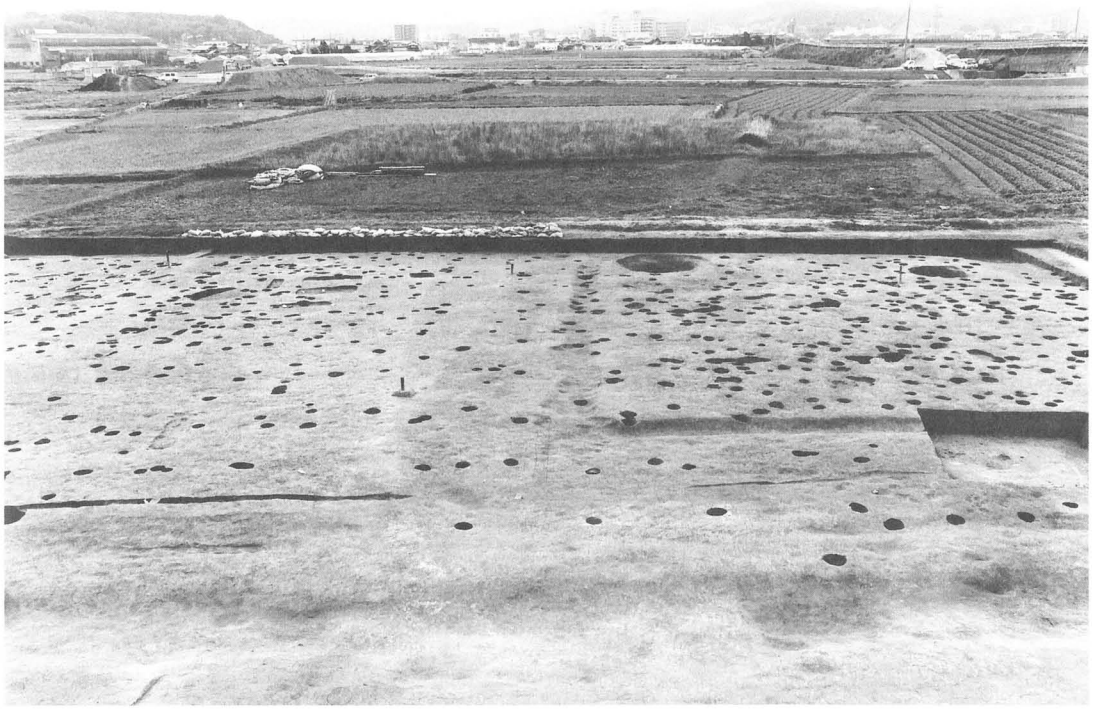
建物跡

建物跡は一応６棟を復元している。復元にあたり、決め手となる積極的な根拠にも乏しいことからこの数となっており、本来の棟数は反映していないと考えられる。復元できたのは主に溝状遺構よりも北側の場所が多いが、これはピットの密度が低かったため、抽出しやすかったことによる。

墓

墓は少なくとも５基を確認した。この数はあくまで棺が残っていた場合や、人骨が出土した場合などで判断しており、可能性のあるものを含めるとこれよりも多く存在すると考えられる。

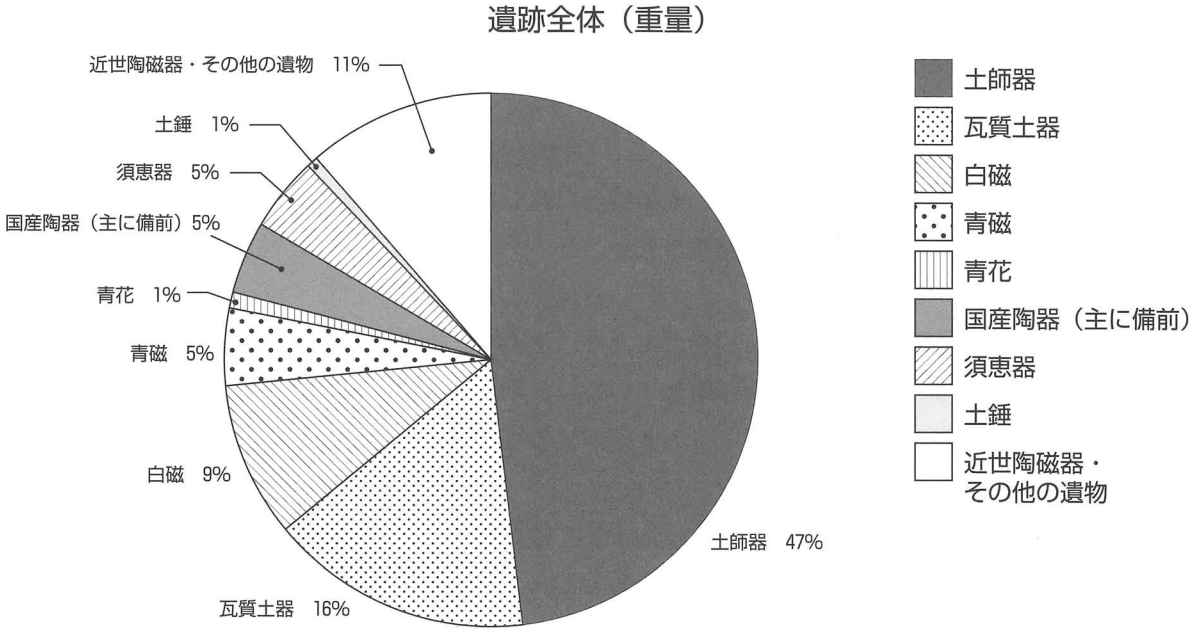
これら以外にも多数の遺構が検出されたが、各遺構の詳細については、第４節で報告することとする。

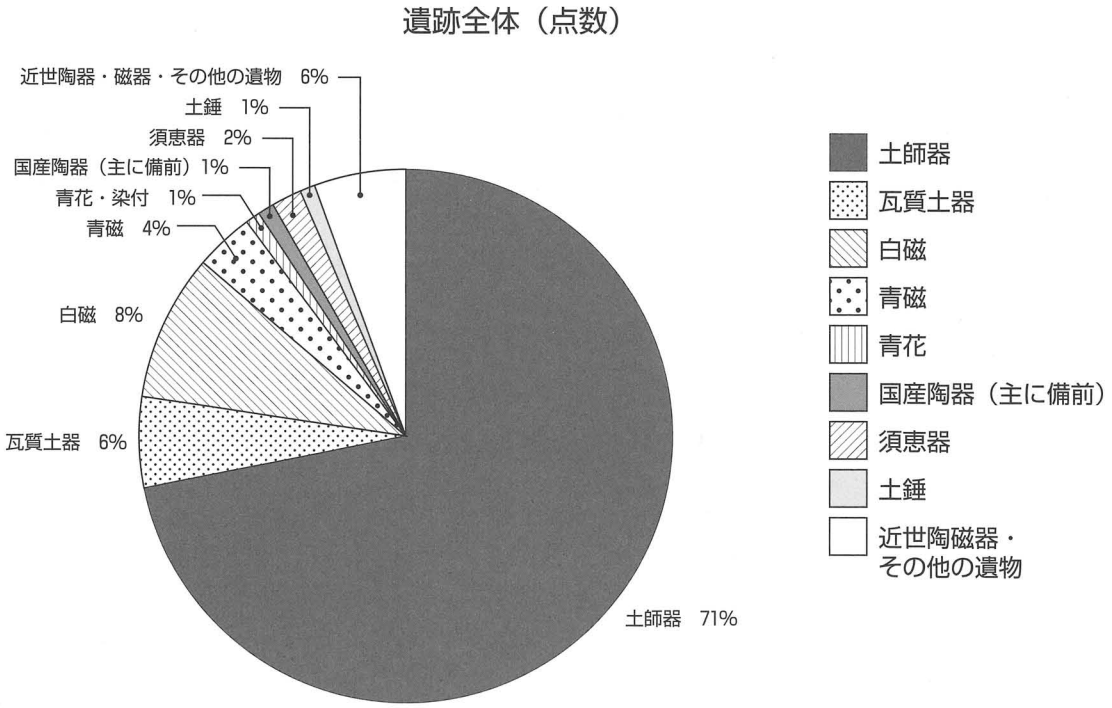


遺構の検出状況（調査区西側、北から）

第３節　出土遺物の概要

遺物は土師器・瓦質土器・磁器・陶器・鉄製品・木製品など多様なものが出土した。土師器の割合が最も高いが、白磁や青磁といった輸入陶磁類も一定量出土している。なお、時期による出土傾向の違いも見られた（これについては別途考察する）。





21から26は折り込み

第10図　遺構配置図（1）（S=1/200）

第11図　遺構配置図（２）遺物出土状況（S=1/200）

第12図　平成16年度・平成17年度　調査区遺構配置図（遺跡西側）（S=1/500）

第４節　検出した遺構とそれに伴う遺物

１．溝状遺構

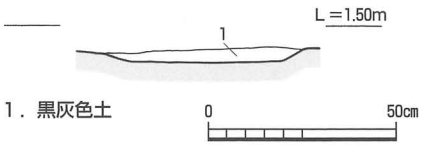
溝状遺構１（ＳＤ１）

調査区の南西側、後述する溝状遺構２よりも南側に位置している。

調査区境まで延びていたため全容は明らかでない。確認できた部分では冂状を呈しているが、□状であることも考えられる。規模は、一辺が約14ｍを測るが、深さは５～10㎝とほとんどない。

この遺構より内側は、ピットが密集している場所となっており、建物の存在は確実と考えられる。抽出には至らなかったが、そうした建物と関わりをもつ可能性が高い溝と判断される。

これに直接伴うと考えられる遺物は出土していない。したがって時期は明らかでない。



第13図　溝状遺構１（ＳＤ１）土層図（Ｓ＝1/20）

溝状遺構２（ＳＤ２）

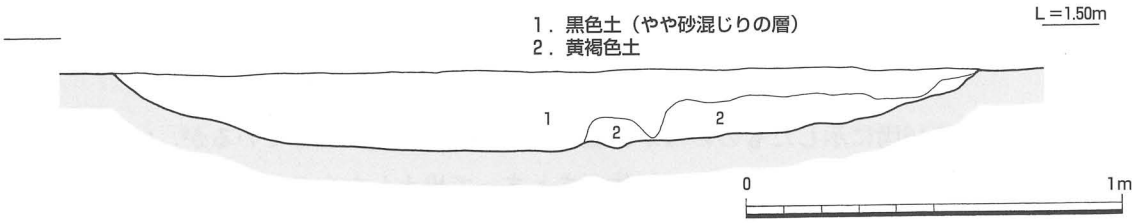
調査区中央を東西方向に延びる直線的な遺構である。

規模は東西方向長が約70ｍ、幅は上端で約３～４ｍ、東側ではやや減少して約1.5ｍを測る。深さは西側で約20～30㎝を測るが、東側にいくほど浅くなり、調査区東端付近ではほとんど認められなかった。断面形は非常になだらかなU字状で、床面は凹凸のない比較的平坦なものである。

埋土は基本的に単一土であり、違いは確認できなかった。この中から土師器・磁器・陶器・瓦質土器などが出土した。

出土した遺物はほとんどが小片であったため、実測が可能なもの及び時期判断が可能なものを抽出し、それを第15図に掲載した。

１は白磁・椀。玉縁状の口縁を持つ。２・３も白磁・椀と考えられる個体。３は口禿げである。４は白磁・皿の口縁部。５は白磁・水注の把手部分と考えられる。６は青磁・椀。外面には鎬連弁文を持つ。７は白磁・椀の高台部。高台は幅広で削り出しは浅く、施釉されていない。８は青磁・椀の高台部。高台は厚く、外面の一部まで施釉されている。９は青花・椀と考えられる個体。内面に１条、外面に２条の回線が描かれる。10も青花・椀と考えられるもの。外面には草花文が描かれる。11・12は土師器坏の底部と考えられるもの。11の底部外面には糸切り痕が認められる。13は瓦質土器・擂鉢。口縁端部は断面が三角形状に折り曲げられている。内面には横～斜め方向のハケメ、6条の擂目が観察できる。14・15も瓦質土器で、いずれも足鍋の口縁部と考えられるものである。16・17は土錘。17はほぼ完形で、全長が3.5㎝を測る。18は陶器・擂鉢の底部。備前焼と考えられるものである。19は瓦質土器。足鍋の脚部と考えられるものである。



第14図　溝状遺構２（ＳＤ２）土層図（Ｓ＝1/20）

第15図　溝状遺構２　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

これらは、12～16世紀の年代に収まるものである（遺構の時期については別途検討する）。

溝状遺構３（ＳＤ４）

調査区の南端に位置している。確認できたのは一部のみで、ほとんどは平成17年度に調査が行われている。したがって、ここでは概略のみを記すこととし、詳細は別の報告に譲ることとする。

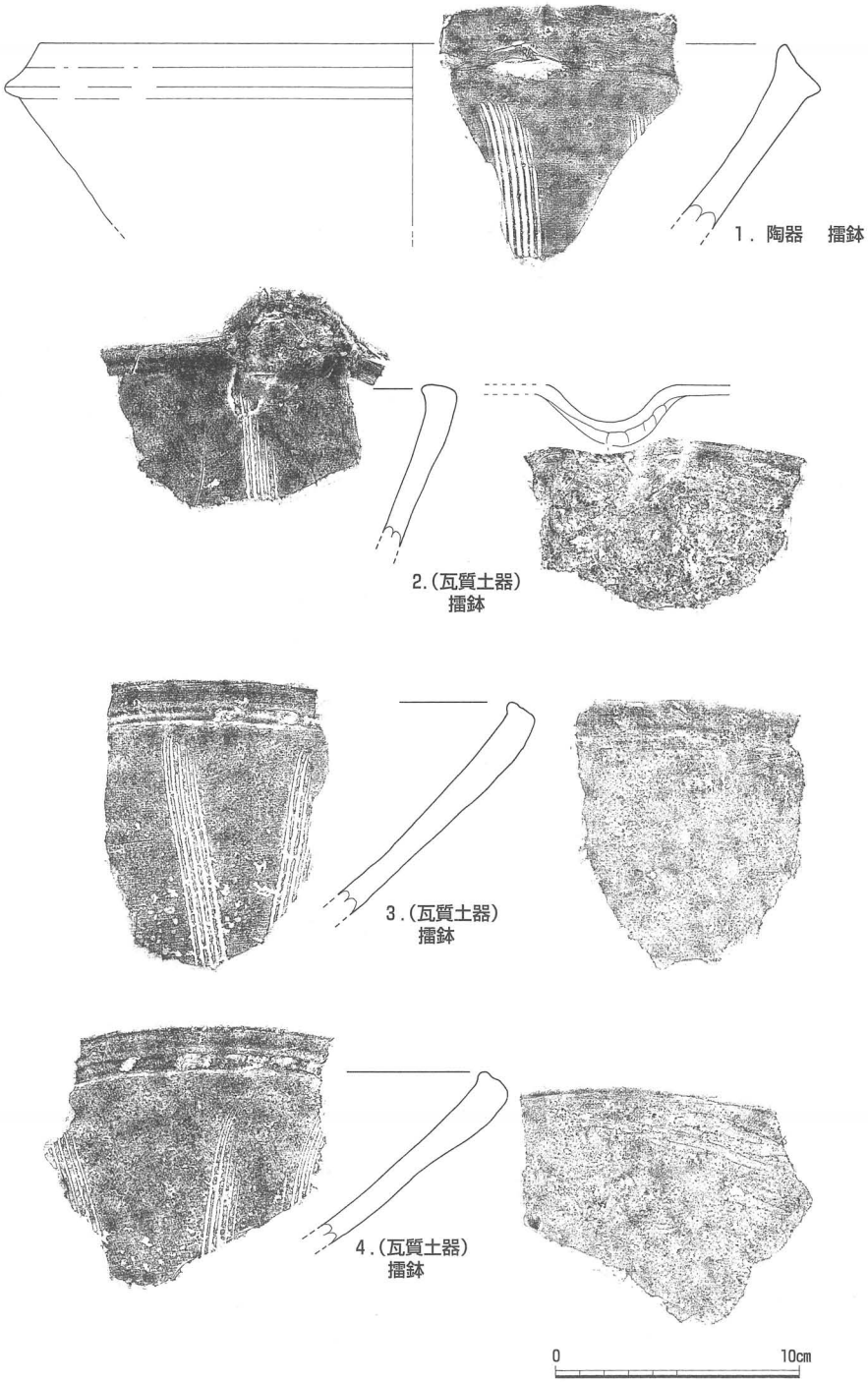
この遺構は溝状遺構２とはほぼ平行の位置関係にあるもので、それと同様に東西方向に延びている。

この遺構からは第16図に示したもののほか、磁器・陶器類が少量出土しているが、いずれも小片のため掲載していない。なお、図示した４個体はまとまって出土したものである。

１は陶器・擂鉢。備前焼と考えられるもので、口縁部はわずかに上方に伸びる。内面には６条以

上の擂目が確認できる。２～４は瓦質土器と考えられるものである。２は擂鉢の片口部分。３・４は擂鉢の口縁部から体部と考えられるもので、内面には５条1単位の擂目が施される。いずれも硬質の焼成で、灰色を呈するなど類似しており、同一個体である可能性が高い。

これらの年代については、備前焼の年代から15世紀前半が考えられる。



第16図　溝状遺構３（ＳＤ４）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

２．井戸

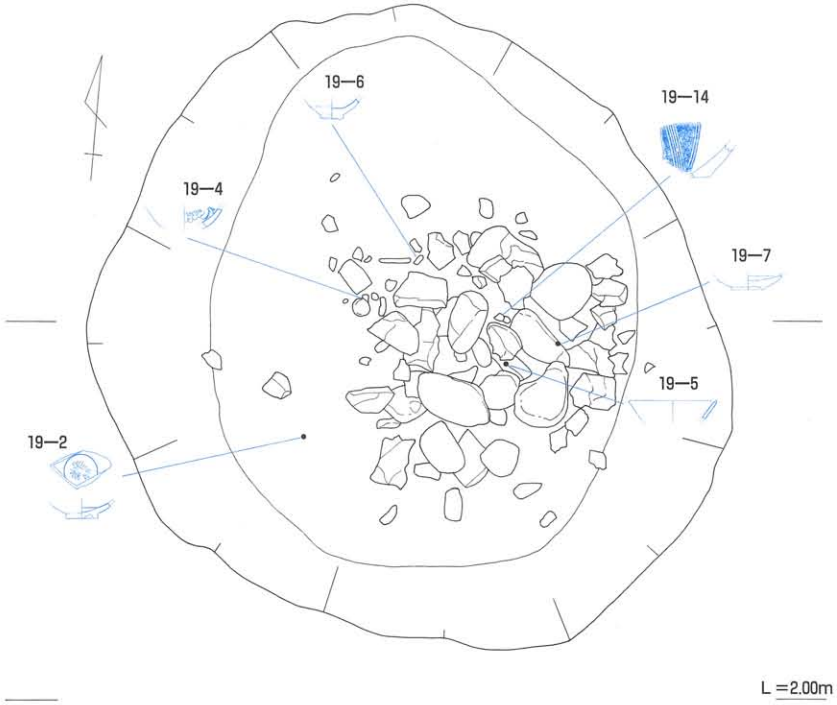
井戸１（ＳＫ１）（第17・18図）

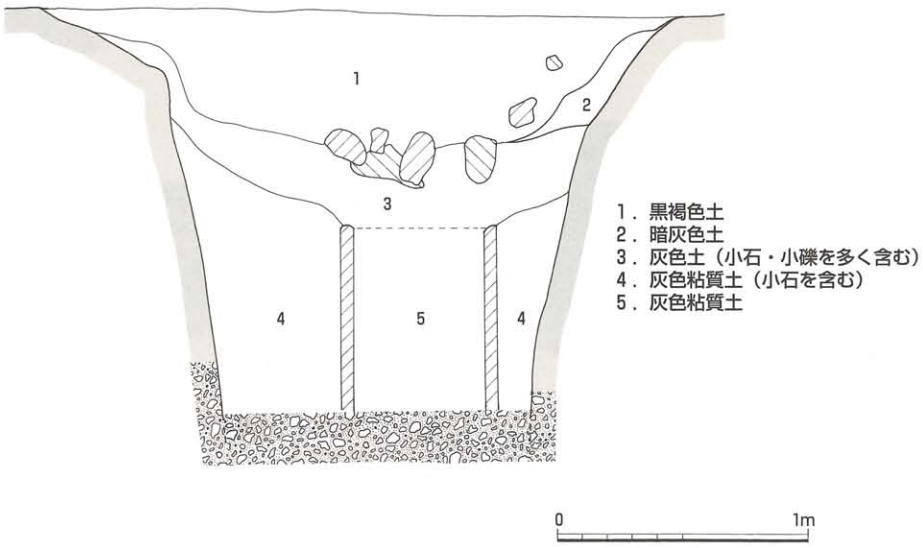
調査区の南西側に位置し、見かけ上は溝状遺構１の内側にある。

掘形は、平面形が不整円形状で、規模が径約2.5m、深さ約1.6mを測るものであり、井戸底面は礫層を一部掘り込んで造られている。

井側として、縦板を桶状に組んだもの（以下、組桶）が、掘形南西側に寄せて据えられていた。組桶は全部で21枚の縦板で構成され、その外面には竹皮の箍が巻かれていた。

掘形と井側の間には、井側を固定させるためと考えられる粘性の強い砂利混じりの粘土が充填されていた。



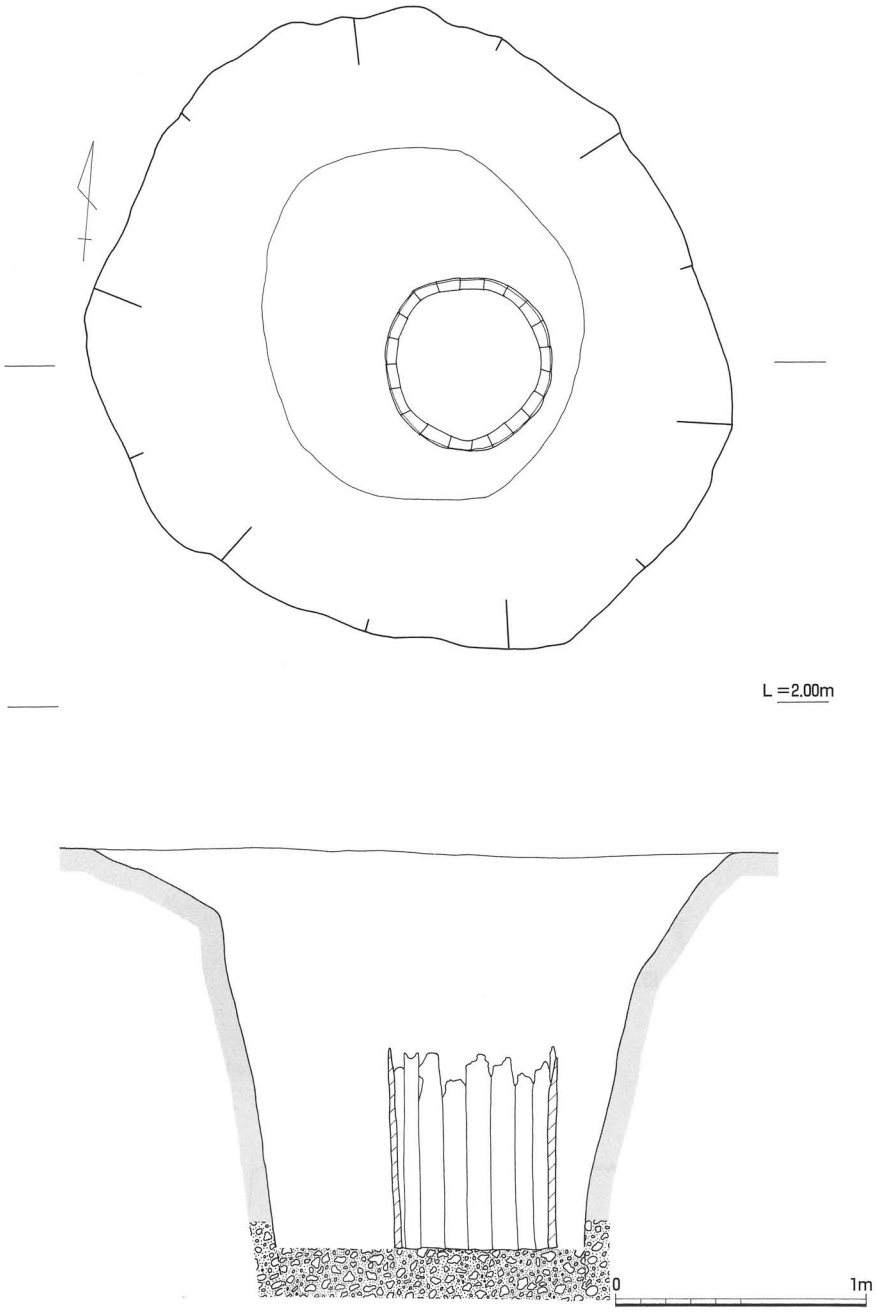


第17図　井戸１（ＳＫ１）実測図（１）　（Ｓ＝1/30）

井桁や井筒は確認されなかったが、桶の上部では人頭大の石が多数埋まっている状況が確認できた。調査時点では、井戸を廃絶する際に井戸を塞ぐ目的でこれらの石を用いたと判断したが、後述する井戸５（ＳＫ70）のように、もともとは桶の上に石組みの井側を伴う構造のものであった可能性も考えられる。

井戸１からの出土遺物は第19図のとおりである。いずれも桶の上部で検出された石の間からの出土であり、掘形と井側の間や井戸底からの出土はなかった。

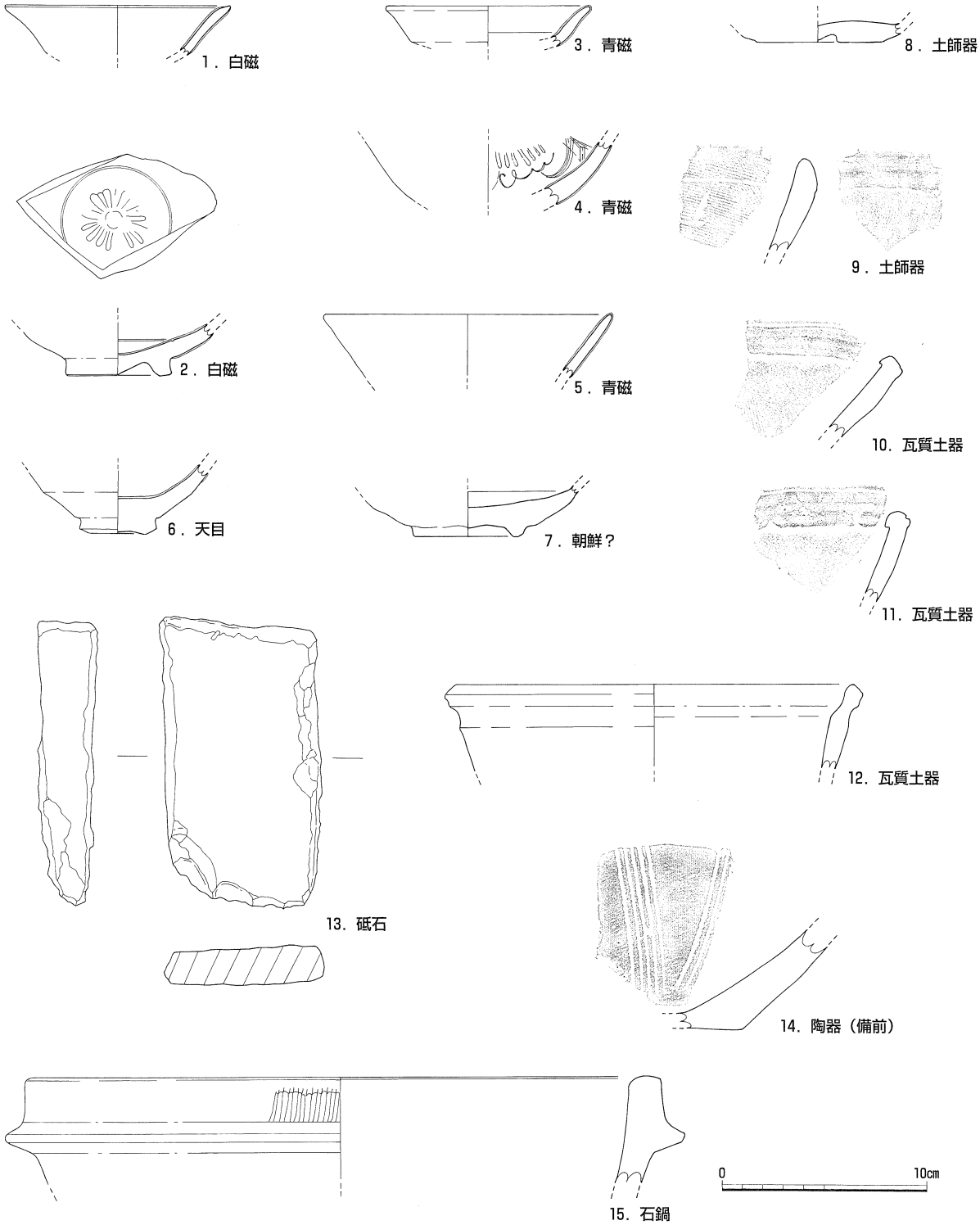
１は白磁・皿。口縁端部は口禿げである。２は白磁・椀。内面見込みには花文がある。高台部は施釉されていない。３は青磁・皿。体部中位で屈曲する。４は青磁・椀の体部と考えられるもの。５も青磁・椀。外面にはわずかに鎬蓮弁文が確認できる。６は天目。中国産と考えられるものである。



第18図　井戸１（ＳＫ１）実測図（２）　（Ｓ＝1/30）

７は朝鮮王朝陶磁の可能性が高いもので、椀と考えられる。内外面とも灰白色に施釉される。８は土師器・坏と考えられるもので、底部は糸切り。９は土師器・鉢。内面はハケメが密に観察できる。10は瓦質土器・鉢。口縁端部はわずかに折り曲げられる。11も瓦質土器・鉢。同じく口縁端部は折り曲げられる。12は瓦質土器・鍋と考えられるもの。13は砥石である。14は陶器・擂鉢で、備前と考えられる。15は石鍋である。

第20図は井戸１から出土した銭貨で「皇宋通宝」である。初鋳年は1038年。



第19図　井戸１（ＳＫ１）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

これらは12～16世紀の年代に収まるものである（遺構の時期については別途検討する）。

井戸２（ＳＫ２）

井戸２は井戸１の西約５ｍの所に位置している。調査時に、掘形が何度となく崩壊したため正確な規模は明らかにできなかったが、径が1.5ｍ前後で、平面形が円形のものと判断される。井戸１と同様に礫層を掘り込んでおり、深さは約1.5ｍであった。

井桁・井側・井筒といった施設は確認できなかった。また、井戸１で確認されたような石の出土もなかった。

出土遺物は、埋土より土師器の小片や陶器片があるが、図示できるものはなかった。

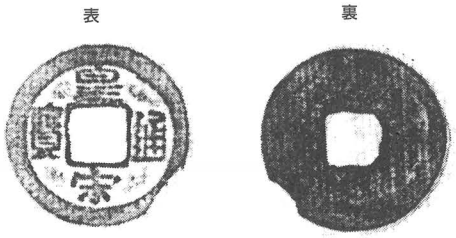
井戸３（ＳＫ18）（第21図）

井戸３は井戸１の東約10ｍのところに位置している。

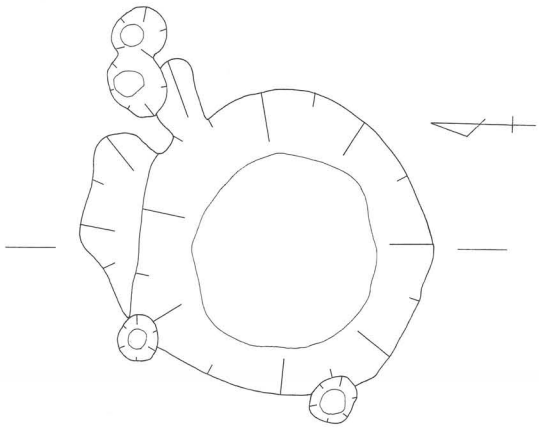
掘形は、径が約1.2ｍとやや小規模な井戸である。深さは約1.5ｍで、井戸底面は礫層を一部掘り込んで造られていた。

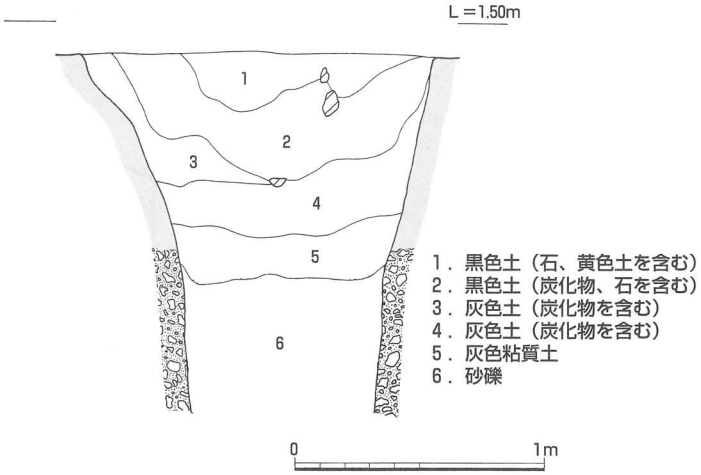
井桁・井側・井筒といった施設は確認されなかったが、井戸底に近いところで縦板の一部と考えられる板状の木が出土しており、井戸が機能していた時期には井戸１などと同様に組桶を井側として持つ井戸であった可能性も考えられる。

井戸３からは先に述べた板状の木片のほか、瓦質土器や土師器の小片、また井戸底礫層中からは曲物底板が２点出土した。



第20図　井戸１（ＳＫ１）出土銭貨拓影



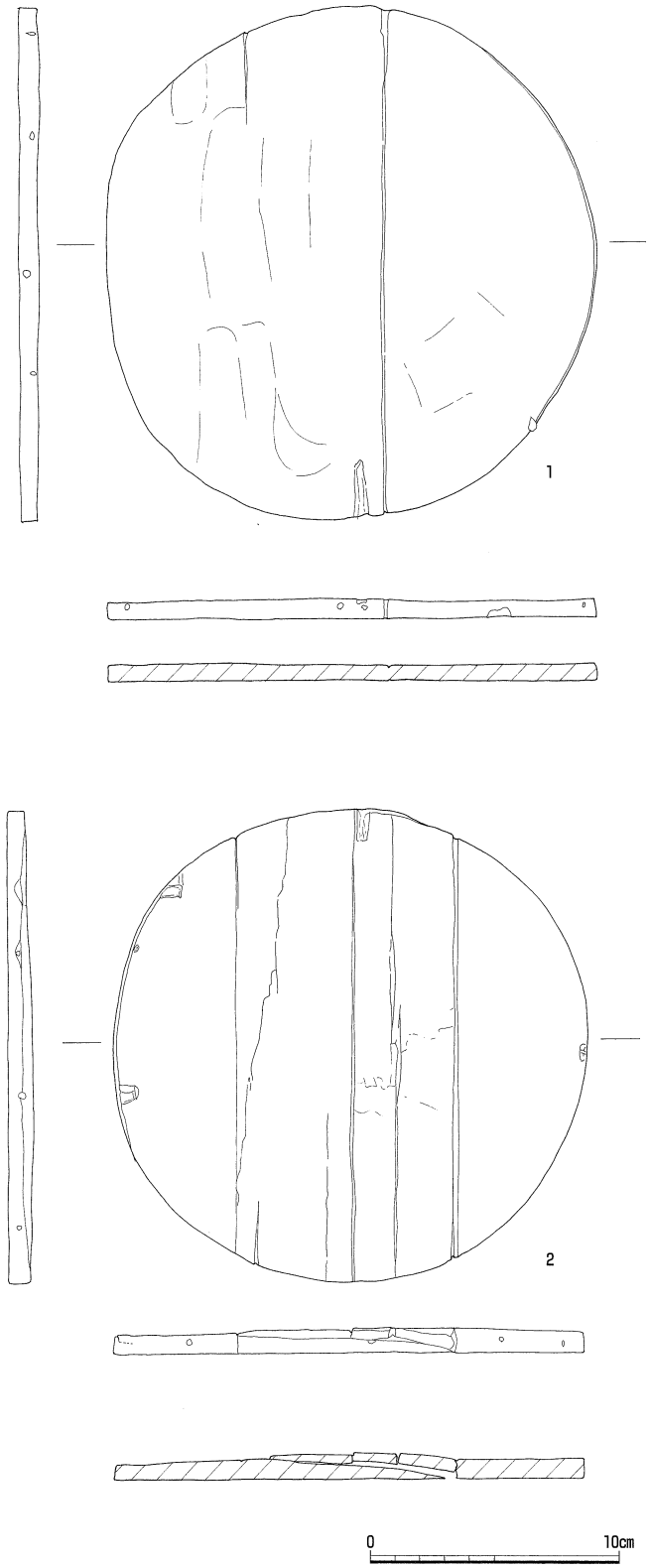


第21図　井戸３（ＳＫ18）実測図（Ｓ＝1/30）

第22図　井戸３（ＳＫ18）出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3）

第22図―１は瓦質土器の鉢と考えられるものである。小片のため口径等は明らかでないが、外面は粗いナデ、内面は横方向及び縦方向のハケメが観察できる。

第23図―１・２は曲物桶の底板と考えられるものである。いずれも径は約18～19cmで、側面には釘孔が確認できる。

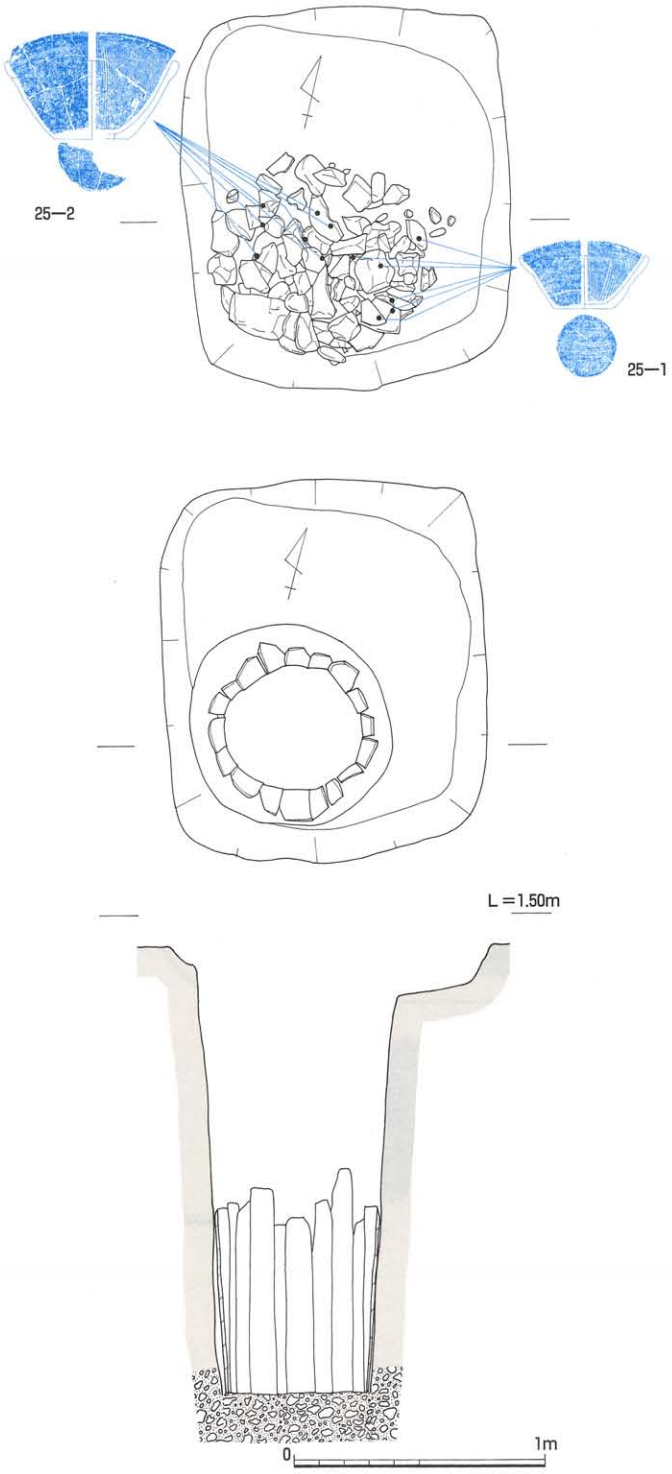


第23図　井戸３（ＳＫ18）出土遺物実測図（２）（Ｓ＝1/3）

井戸４（ＳＫ21）（第24図）

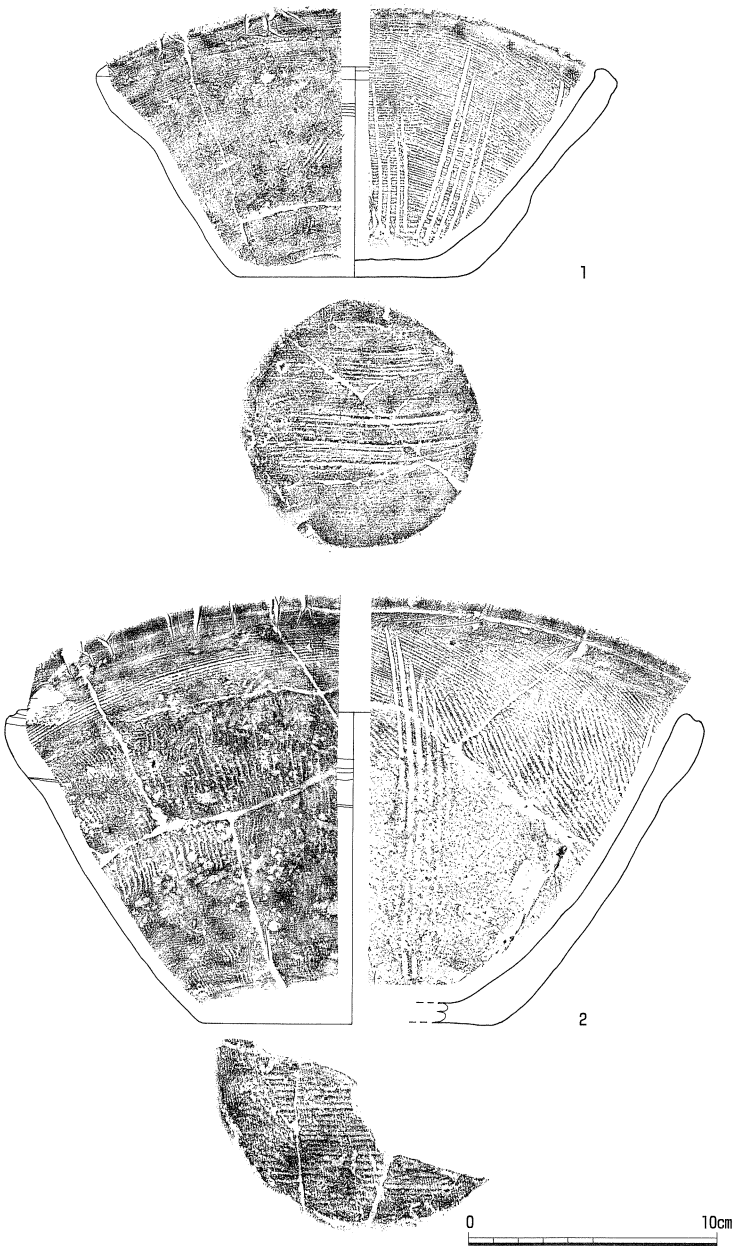
井戸４は溝状遺構２の北側、建物跡１からは南西側に位置している。

掘形は、結果的に上面が方形を、それ以下は円形を呈して二段状となっているが、埋土と基盤層の区別がつきにくかったこともあり、実際の形状はやや異なる可能性もある。



第24図　井戸４（ＳＫ21）実測図（Ｓ＝1/30）

規模は、径が約80～90cmとやや小型である。深さは約1.6mを測り、井戸底面は礫層を一部掘り込んで造られていた。



第25図　井戸４（ＳＫ21）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

井側として、井戸１と同様に組桶が据えられていた。組桶は全部で18枚の縦板で構成され、その外側を竹皮で締めて箍としていた。

井桁や井筒は確認されなかった。

井戸４からの出土遺物は第25図のとおりである。

第25図―１の擂鉢は一部を失っているが、ほぼ完形に復元できる個体である。片口の可能性もあるが現状では明らかにしえない。口縁端部は丸みを若干帯びるものの幅約７㎜ほどの面となり、内側にわずかに曲げられている。外面は基本的に粗いナデである。内面には横方向のハケメが密に施され、そこに５条１単位の擂目が入れられている。２は片口で、１よりも大きなものである。口縁端部はやや丸みを帯び、そこに１条の沈線が入れられている。内面は斜め～縦方向のハケメが密に施され、そこに６条１単位の擂目が入れられている。

これらは、14世紀代のものと考えられる（遺構の時期については別途検討することとする）。

なお、この井戸は検出時に、上面から井側内部にかけて井戸を塞ぐような状態で石が詰め込まれている状況で確認された。擂鉢2個体分は上面の石の間から破片で出土しており、その状況から考えて、井戸廃絶に伴う祭祀行為の痕跡を残すものと判断される。

井戸５（ＳＫ70）（第26図）

井戸５は建物跡４の東側６ｍのところに位置する。

掘形は、平面形が円形で、規模が径約2.0ｍ、深さ約1.0ｍを測るものであり、底面は礫層を一部掘り込んでいる。

井側として、下部に組桶が据えつけられ、その上部には内面が円形になるように石が組まれていた。上部石組み部分は30㎝大～５㎝大までのさまざまな大きさの石を用いて構築されており、基本的には小・中型のものが下方に、大型のものが上方に用いられていた。下部の組桶は他の井戸と同様に円形に組まれ、竹皮の箍で締められていた。

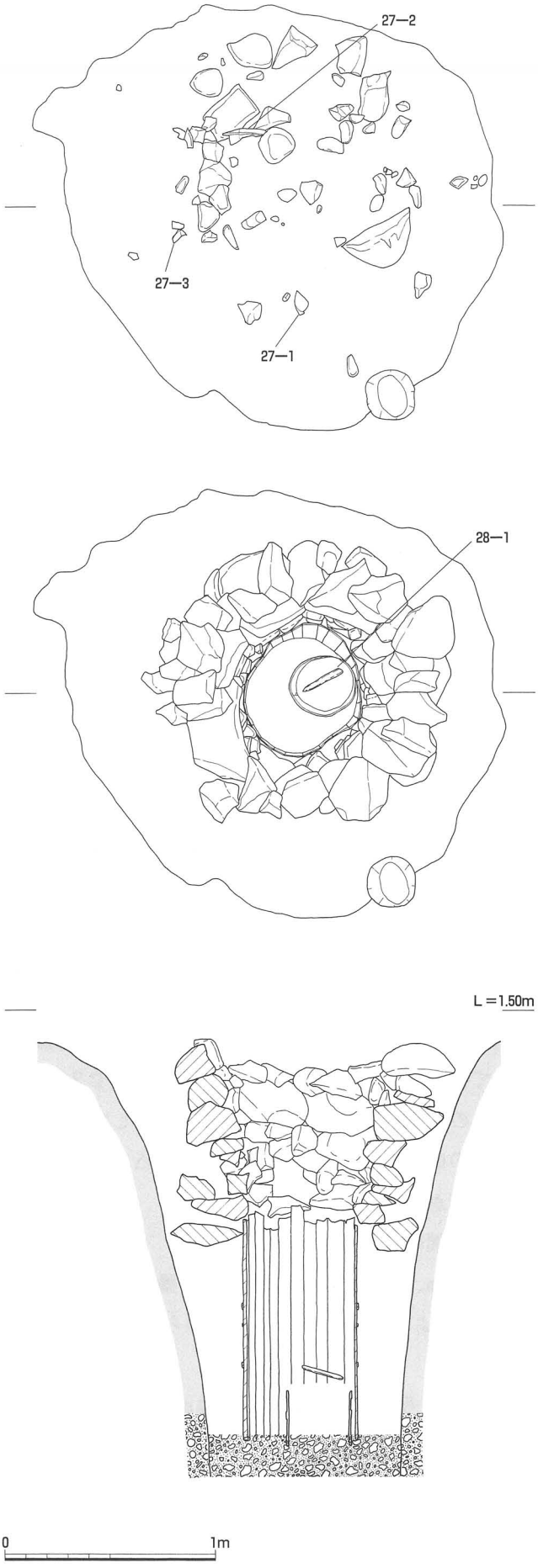
井側と掘形の間には砂利混じりの粘性の強い粘土が充填され、井側を固定していた。

井筒には径約60㎝、高さ約53㎝の曲物が据えられていた（第29図）。曲物は薄い1枚板を巻いたものをさらにもう一枚の板で巻いて枠をつくり、それを６～７㎝幅の板で３段に巻いて箍とし桜皮で綴じている。復元段階では最も上の箍をほかのものと逆向きに推測しているが、本来はほかの二段と同様であった可能性も高い。この曲物はしっかりと底面に埋め込まれており、これを取り上げると勢いよく伏流水が流れている状況が確認された。

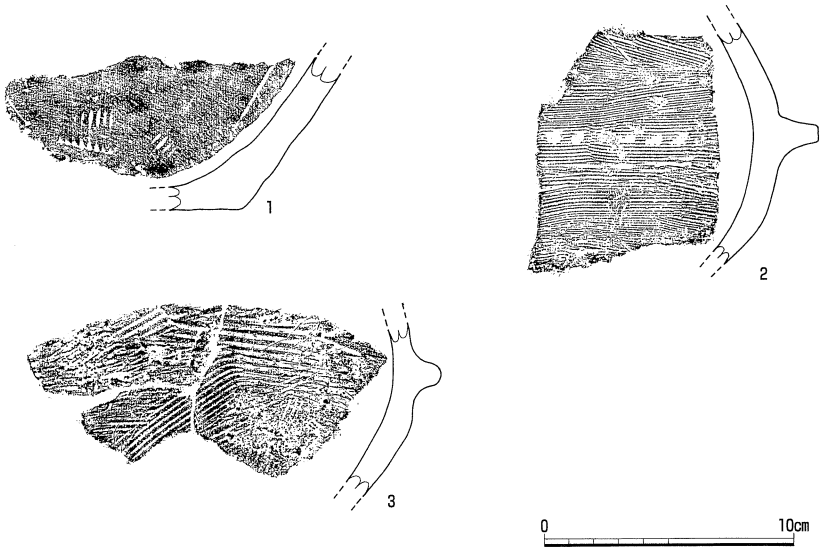
井戸５からの出土遺物は第27・28図のとおりである。

第28図―１は木札である。長さ32㎝、幅５㎝を測るもので、墨書等は認められなかった。井戸の内部、底面よりは数十cm上の埋土中より出土していることから、井戸廃絶の際に入れられた可能性もある。

第27図―１は陶器・擂鉢で、備前と考えられる。内面には8条１単位の擂目が確認できる。２・３は瓦質土器・羽釜と考えられるもの。２の外面には煤が多く付着している。３は摩滅しており不明瞭なものの、内面ではハケメが観察できる。なお、これらは井戸検出面で確認されたもので、直接伴わない可能性もある。

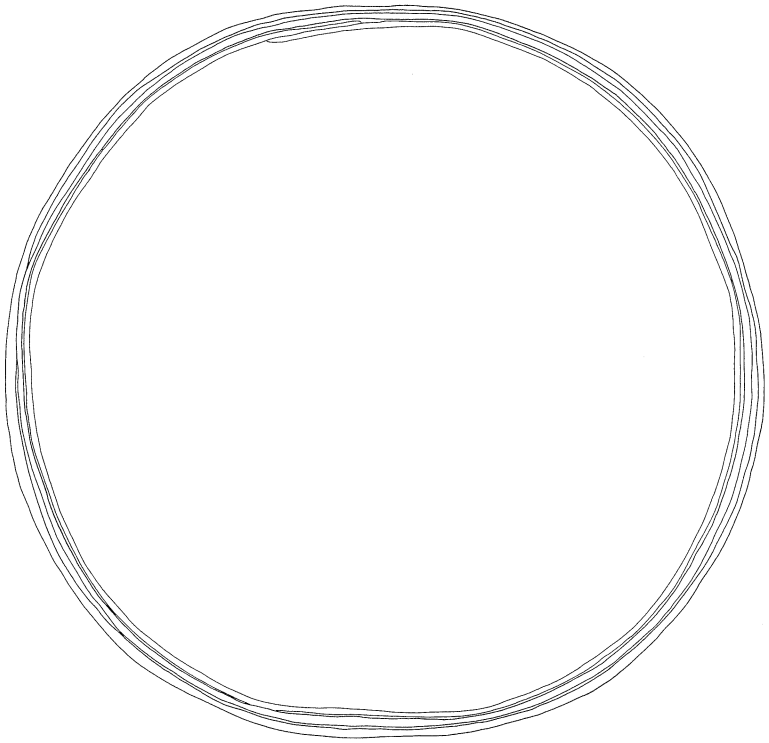


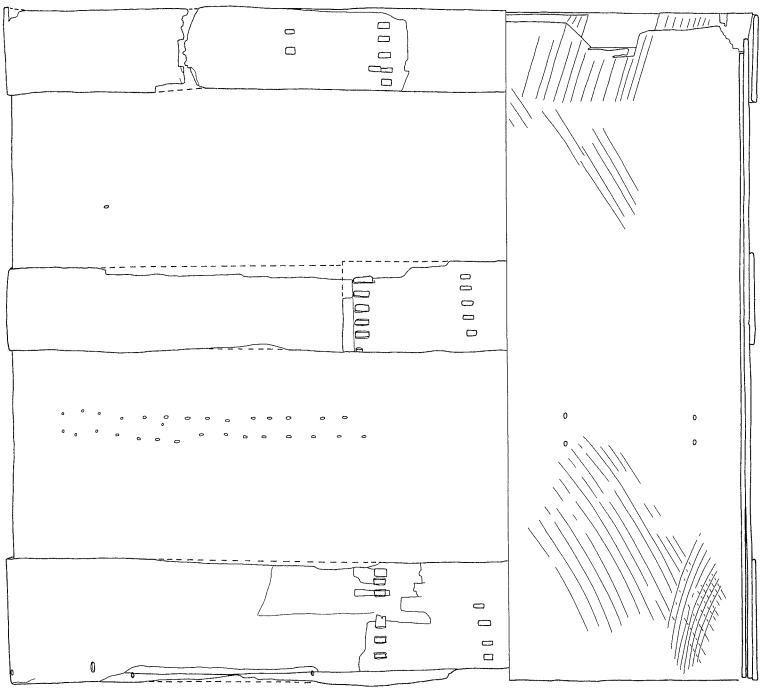
第26図　井戸５（ＳＫ70）実測図（Ｓ＝1/30）

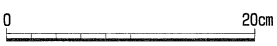


第27図　井戸５（ＳＫ70）出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3）

第28図　井戸５（ＳＫ70）出土遺物実測図（２）（Ｓ＝1/3）







第29図　井戸５（ＳＫ70）出土遺物実測図・桶（Ｓ＝1/6）

３．建物跡

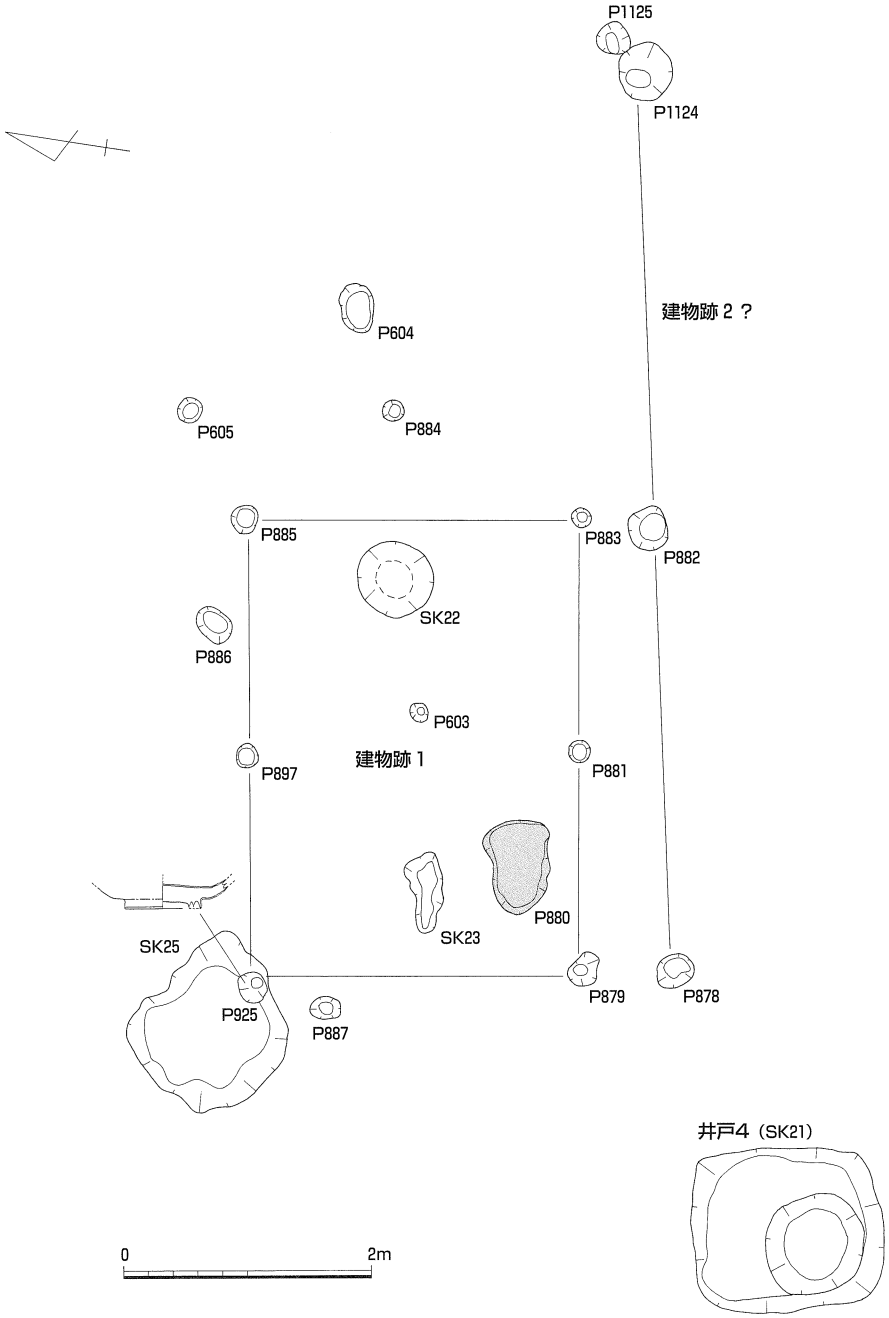
建物跡１

建物跡１は調査区の中央付近、溝状遺構２より北側に位置している。溝状遺構２とはほぼ平行な位置関係にあり、主軸はN—80°—Eである。

軸の通る６基のピットから、２間（3.7m）×１間（2.7m）の掘立柱建物と判断した。柱穴と考えたピットの大きさは径約30cmと小規模なものである。

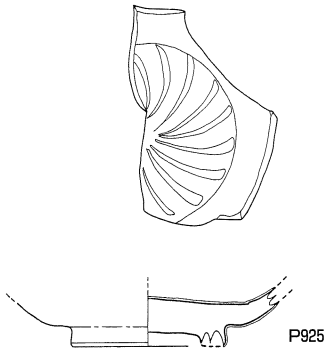
建物の空間内からは比熱により赤変した場所（P880）が確認されたほか、わずかながら金属滓も出土していることから、鍛冶的な作業をおこなった建物であった可能性が高い。

なお、先に報告した井戸４はこれに隣接していることから、同時期に存在した井戸である可能性もある。



第30図　建物跡１・２　周辺遺構実測図（S＝1/60）

建物跡１に伴う遺物は土師器・磁器などがあるが、ほとんどが小片であり図化できたのはＰ925から出土した青磁・椀のみである。青磁・椀は、口縁部及び高台の一部を失っているが、内面には蓮花文が確認できる。



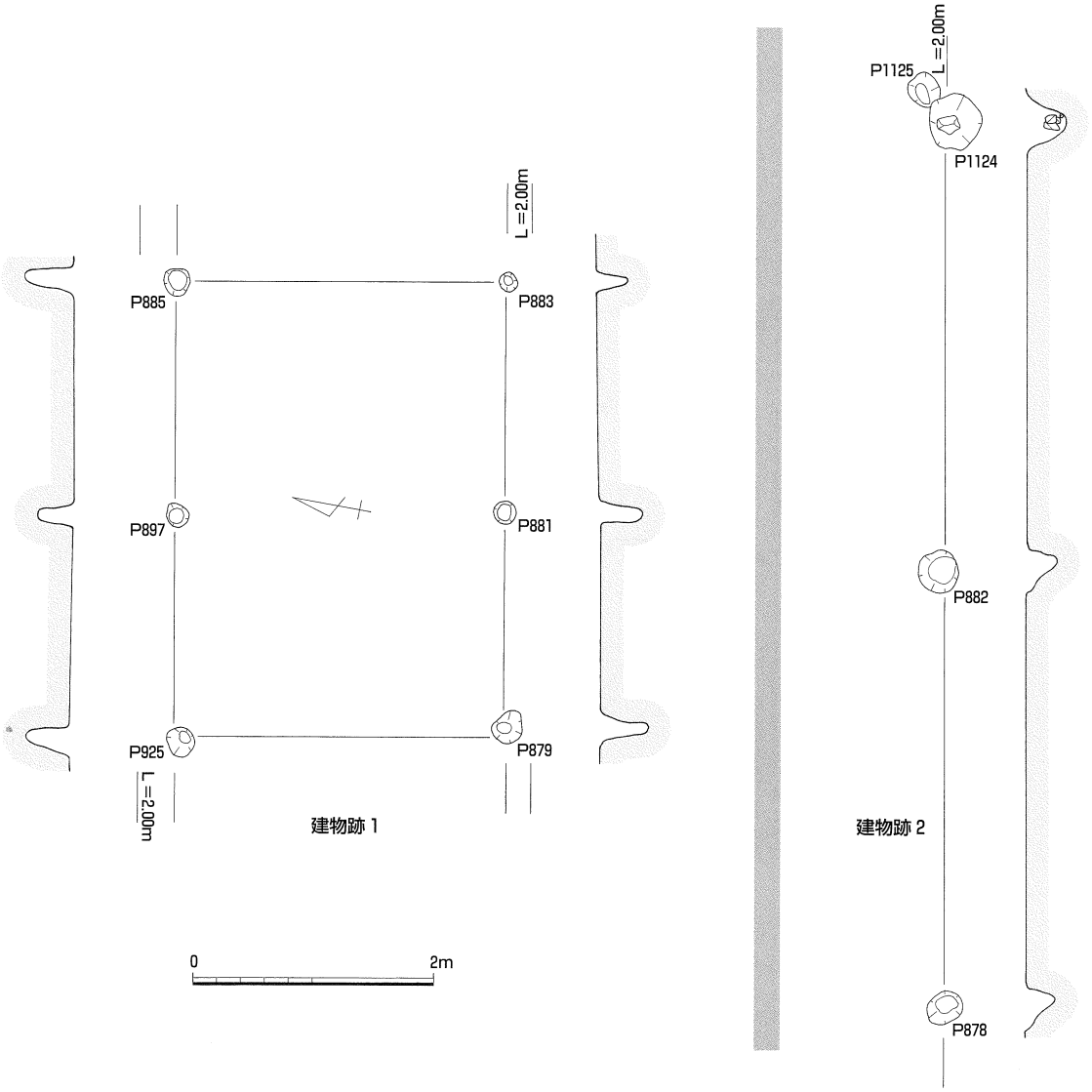
第31図　建物跡１（Ｐ925）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

建物跡２

建物跡２は建物跡１に隣接して存在する。径が約30～50cm、深さ約30cmの比較的しっかりとしたピット３基が、軸の通る状況で並んでいることから一応建物跡と判断したが、柵等の可能性も十分考えられる。建物跡である場合、残りの柱穴は建物跡１側か溝状遺構側に存在することになるが、調査では確認できなかった。

建物跡１と同様に溝状遺構２とはほぼ平行な位置関係にあり、主軸はＮ―80°―Ｅである。規模は約7.1ｍを測る。

これに伴う遺物は確認できなかった。



第32図　建物跡１・２　実測図（Ｓ＝1/60）

建物跡３

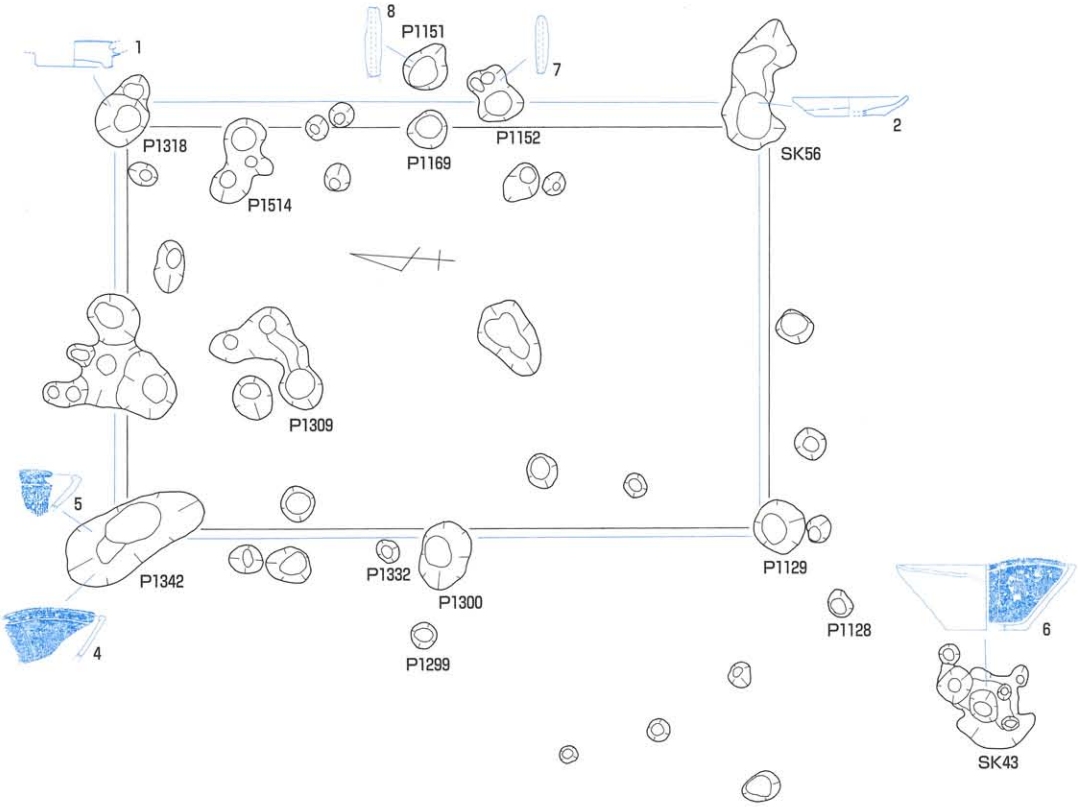
建物跡３は、調査区東側の遺構が密集するところで確認した。溝状遺構２よりは９ｍほど北側に位置する。柱穴と考えられる遺構は図示したもののほかにも存在したが、明らかに柱根の残っているもの（Ｐ1152、Ｐ1169、ＳＫ56）や、根石状に石が置かれているもの（Ｐ1318）を基本に、ほぼ軸の通るものを抽出して復元した。

建物は軸線の違いから、建物跡３－１と建物跡３－２との２棟を復元し、一度の建て替えを想定しているが、実際のところは明らかでない。いずれにせよ、主軸がN―5°―W前後で、規模が２間（5.2m）×１間（3.1m）程度のものと判断される。

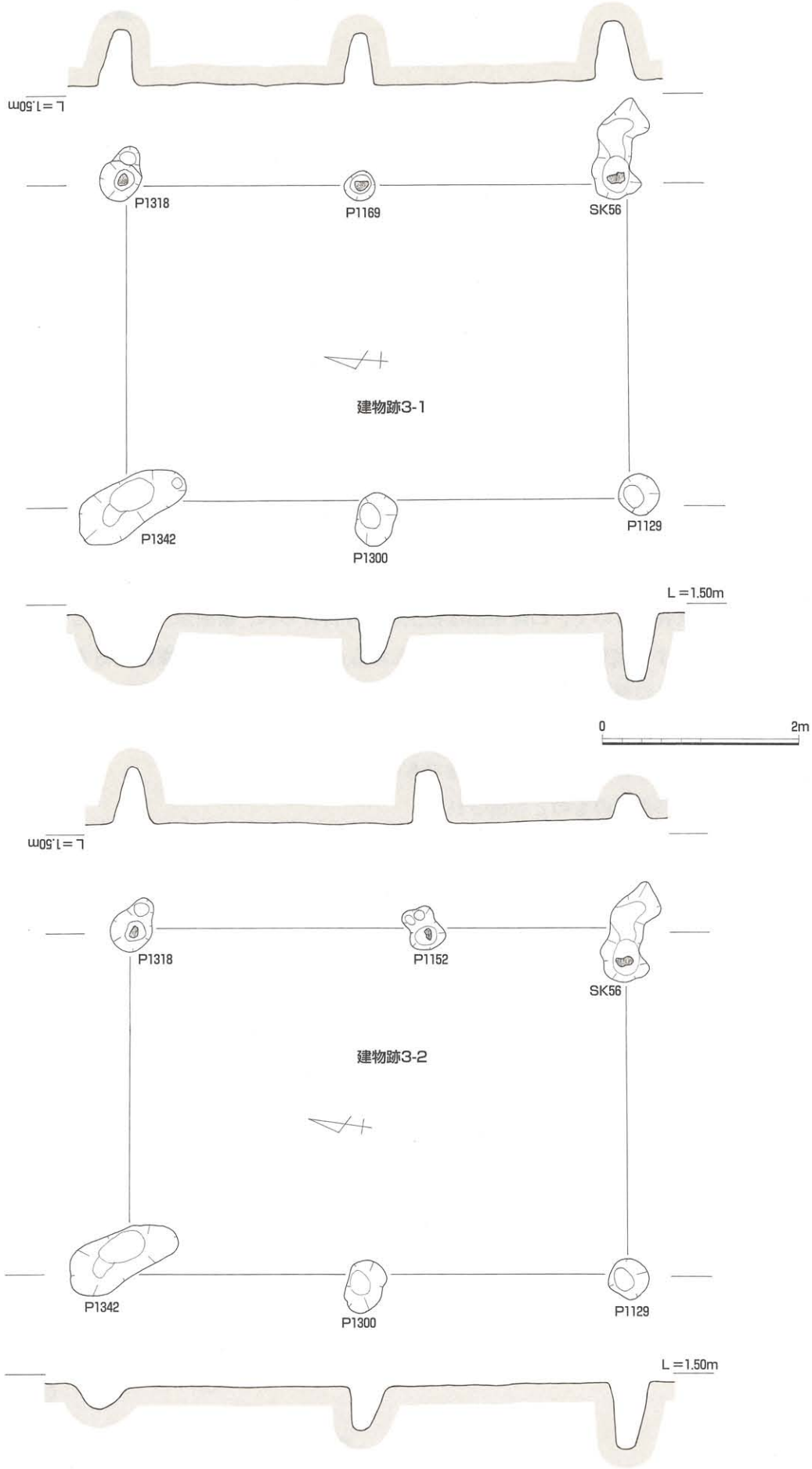
この建物を構成する遺構及びその周辺の遺構からは、第36図に掲載した遺物が出土している。

１はＰ1318から出土した青磁・椀の高台部である。高台畳付まで施釉されている。２は一応土師器・皿としているが、口縁部と判断した部分の状態が非常に悪く、さらに延びて坏になる可能性も否定できないものである。３は青磁・椀の破片と考えられるものであるが詳細は不明である。４・５はともにP1342から出土した瓦質土器・擂鉢である。４は焼きの良い個体で、外面は粗いナデ調整が行われている。内面には横方向のハケメが顕著に見られ、4条～５条を１単位とする擂目が施される。５はやや軟質のもので、口縁端部は粘土が貼り付けられ、断面が三角形状となる。６は建物跡に隣接して存在する遺構（SK43）から出土したもので、瓦質土器・擂鉢である。約半分が残っており、口径や傾きの判明するものである。体部は直線的に開く。口縁端部は粘土が貼り付けられ、断面は三角形状となっている。外面は風化しておりはっきりとしないが、内面には最大で８条１単位の擂目が施されている。７・８は土錘である。

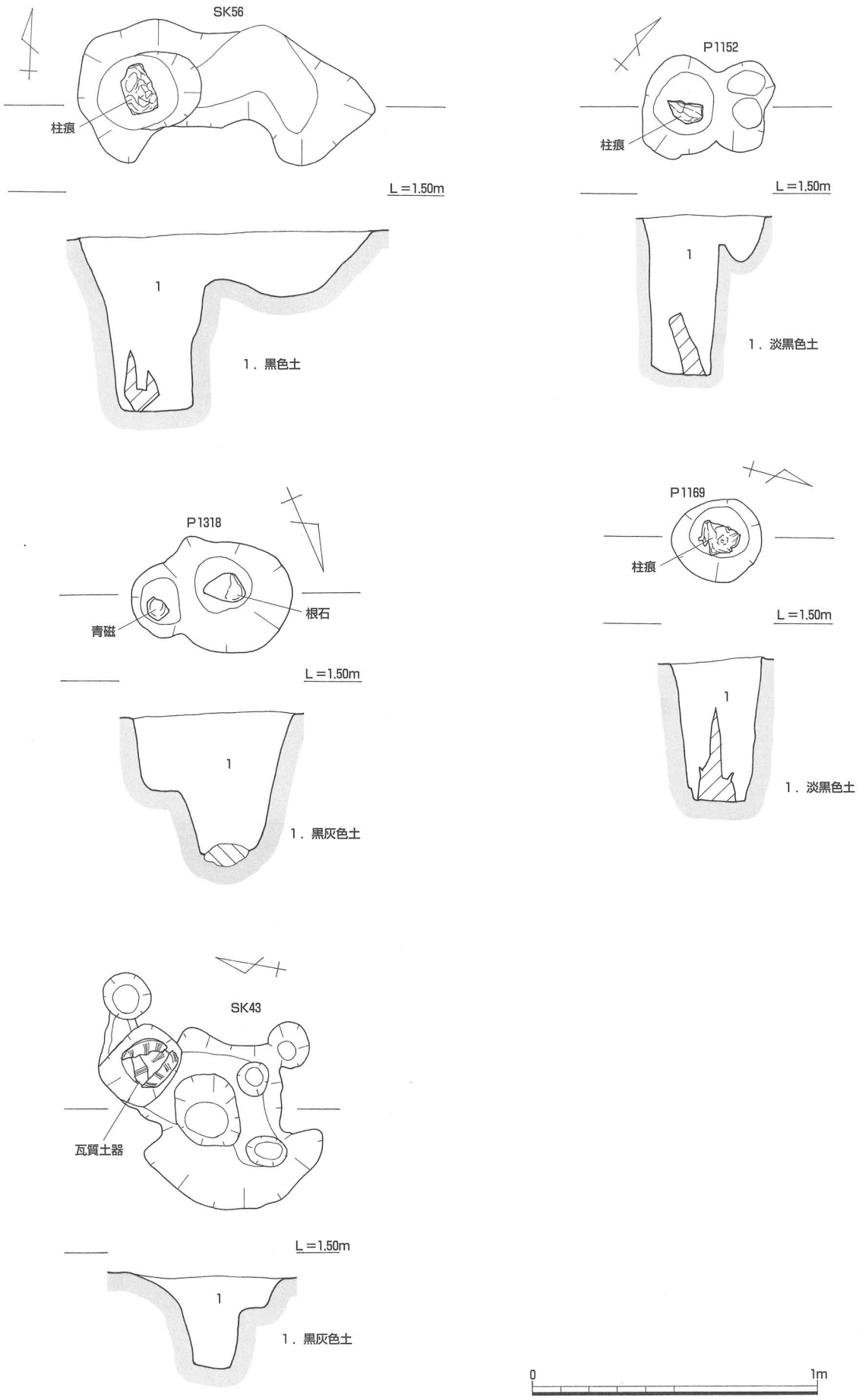
これらは基本的に15世紀のものと判断される。



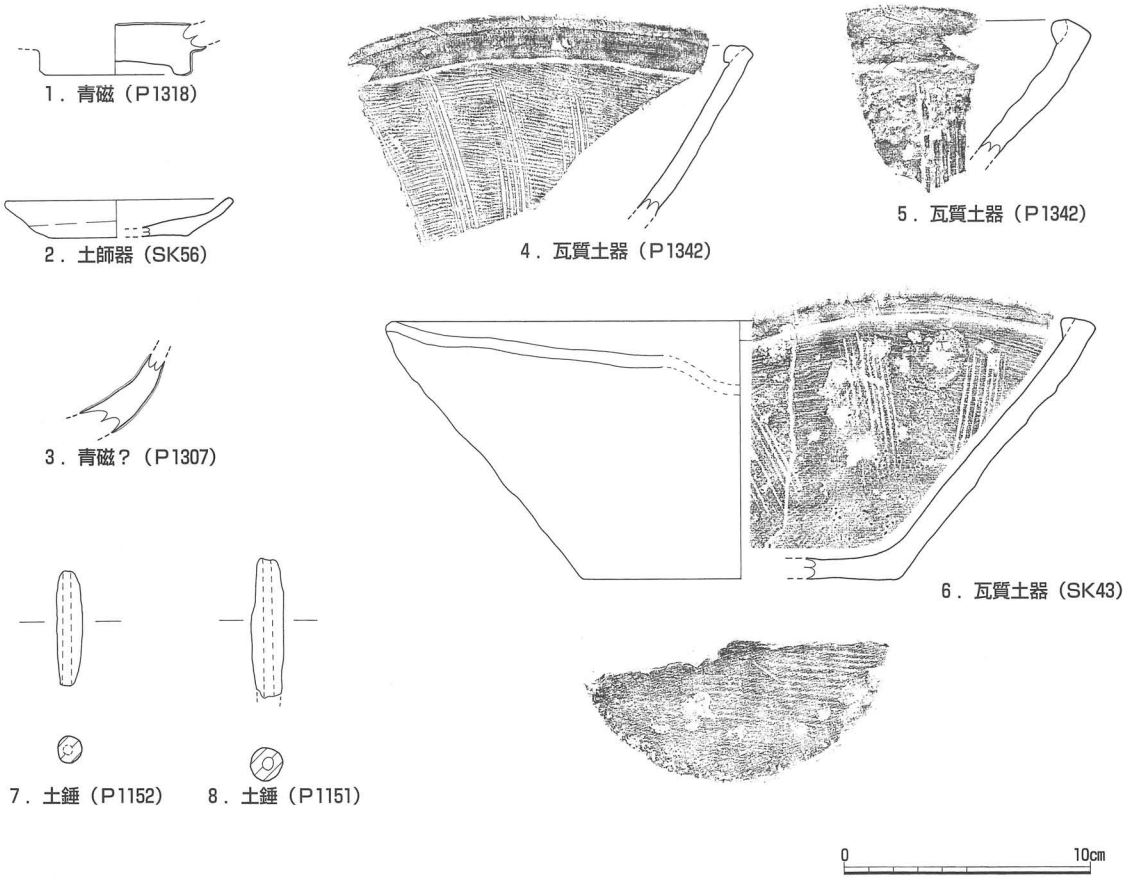
第33図　建物跡３　周辺実測図（Ｓ＝1/60）



第34図　建物跡３（3-1・3-2）実測図（Ｓ＝1/60）



第35図　建物跡３　関連遺構実測図（Ｓ＝1/20）



第36図　建物跡３　関連遺構　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

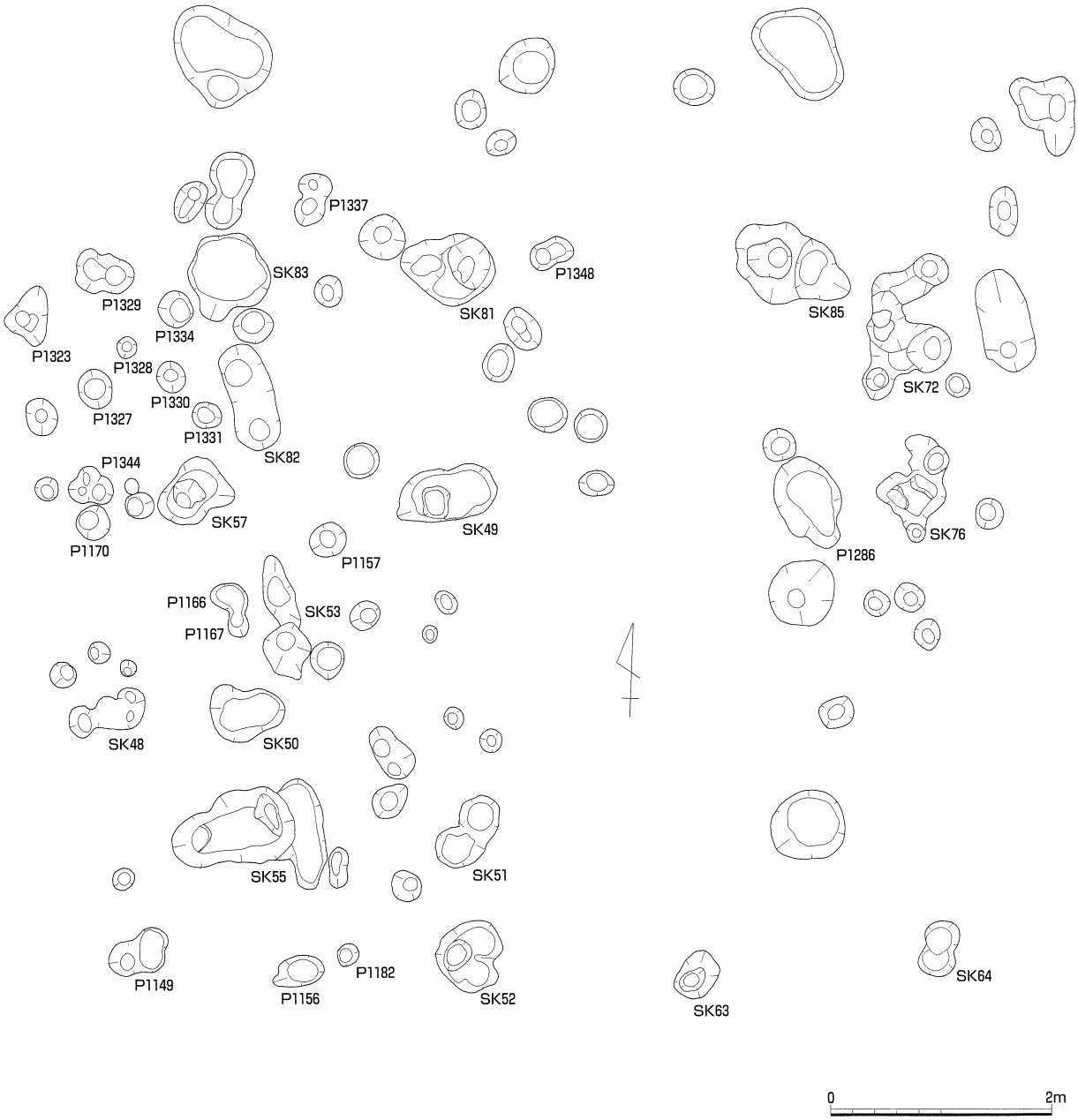
建物跡３・４の周辺

建物跡４

建物跡４は建物跡３と同様、調査区東側の遺構が密集するところで確認した。建物跡３からは約２ｍ東側に位置する。

検出場所は益田市教育委員会が実施した調査区に隣接しており、建物の一部は同調査区に伸びている。両方の調査区にまたがって存在するものの、一連のものであるためこの建物を構成する遺構を含めて報告する。

柱穴と考えられる遺構には、径が50cm～１ｍ前後の比較的大きなものと、それよりも小さな径20cm前後のものが存在するが、前者を基準に復元したのが第38図に示した建物である。これを構成する遺構のうちＳＫ49、ＳＫ55、ＳＫ83からは柱根が、またＳＫ51、Ｐ1286からは根石が検出された。なお、主な遺構については第39・40図に掲載した。

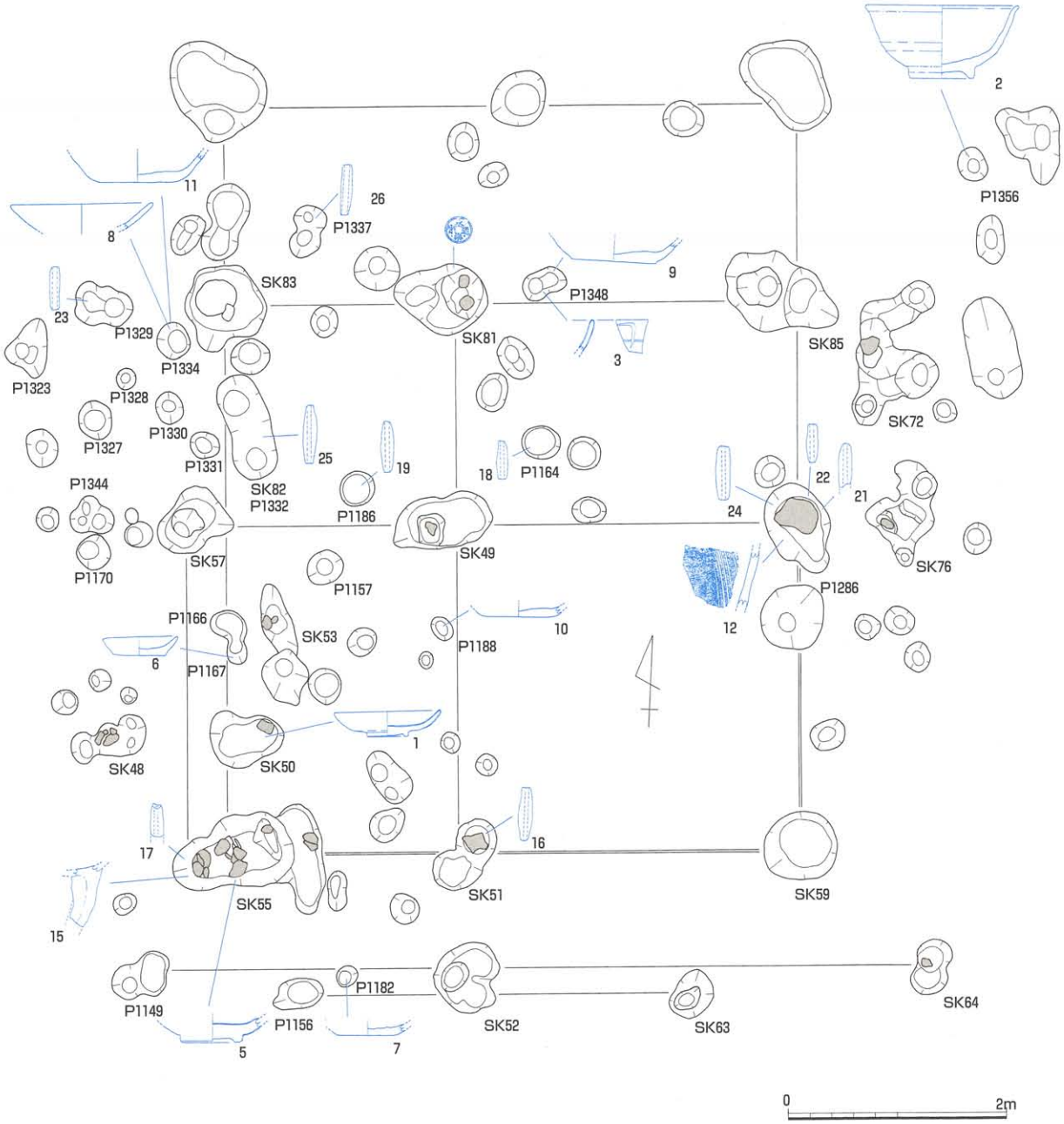


第37図　建物跡４　周辺実測図（１）（Ｓ＝1/60）

復元した建物は、主軸をN—3°—Wにとり、規模が３間（6.9m）×２間（5.7m）のものである。当初はＳＫ59—Ｐ186－ＳＫ85－ＳＫ81－ＳＫ49－ＳＫ51という軸線の建物跡を考えたが、先述のとおり益田市教育委員会側にも同規模の遺構の存在が明らかとなったことから、規模を拡大している。

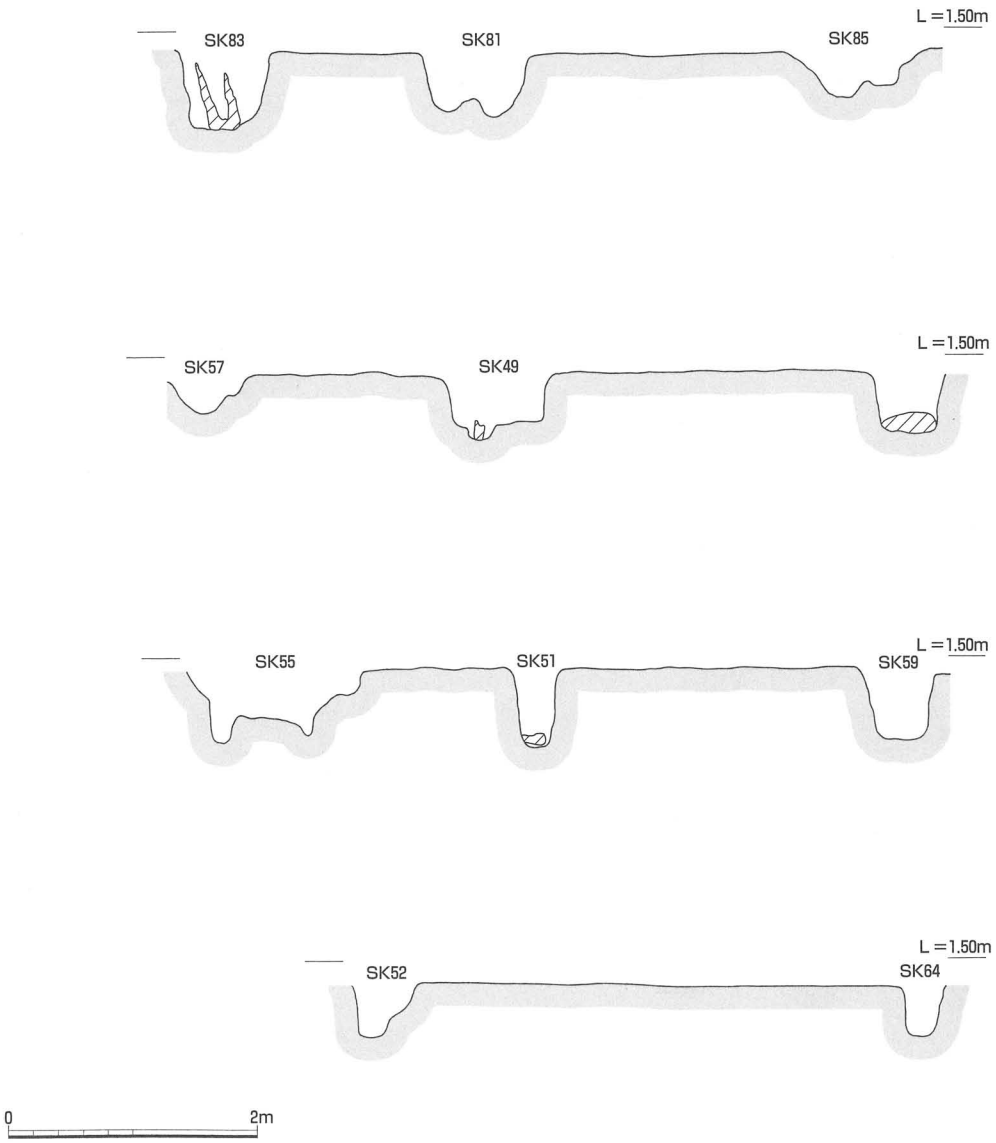
しかしながら、南側では軸のことなる部分も存在することから、主軸をN—88°—Wにとり、これと直交する位置関係になる、２間×１間の建物を想定することも十分考えられる。

いずれにしても、１間×２間以上の建物が存在したことは確実であろう。

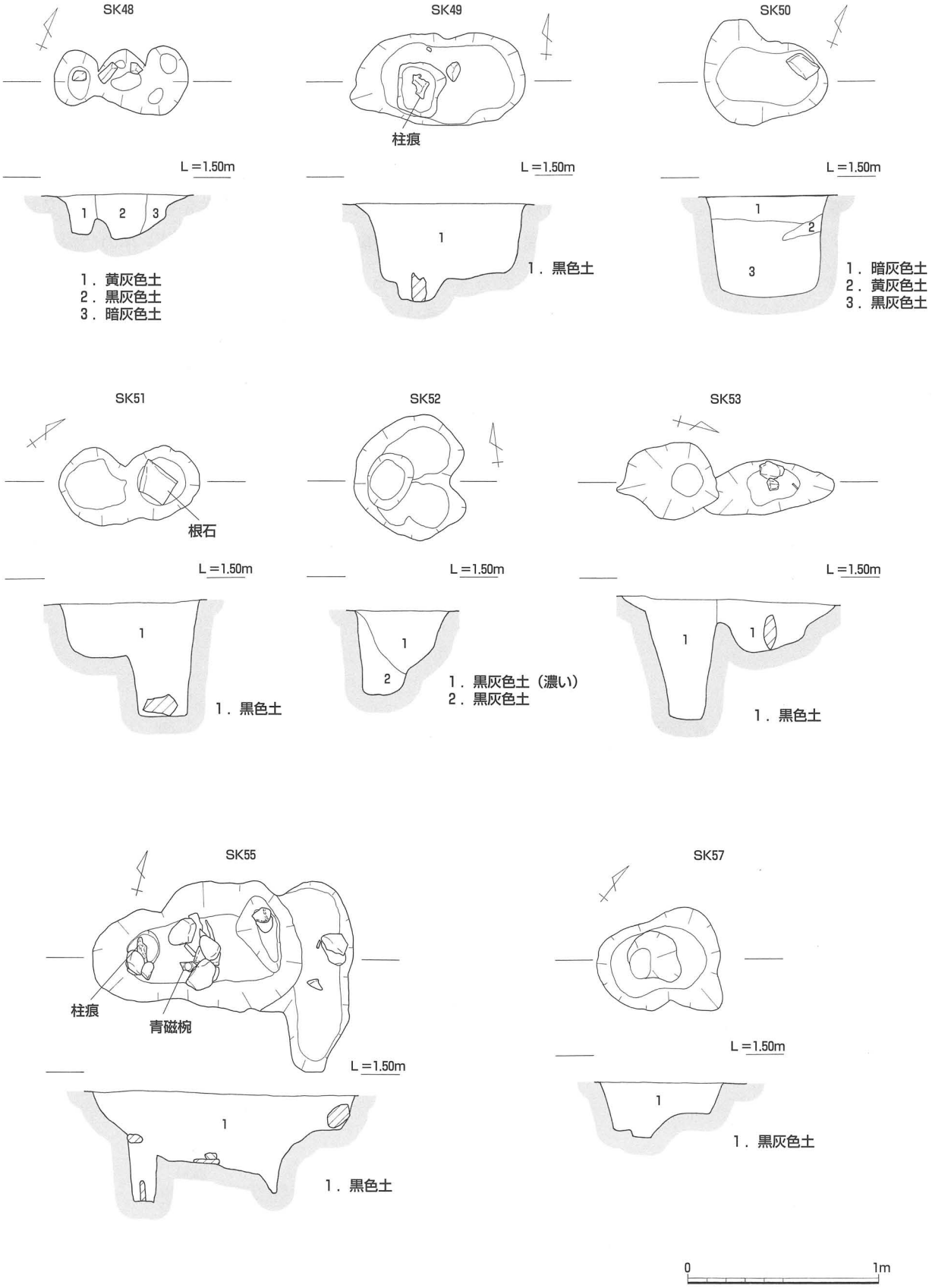


第38図　建物跡４　周辺実測図（２）（Ｓ＝1/60）

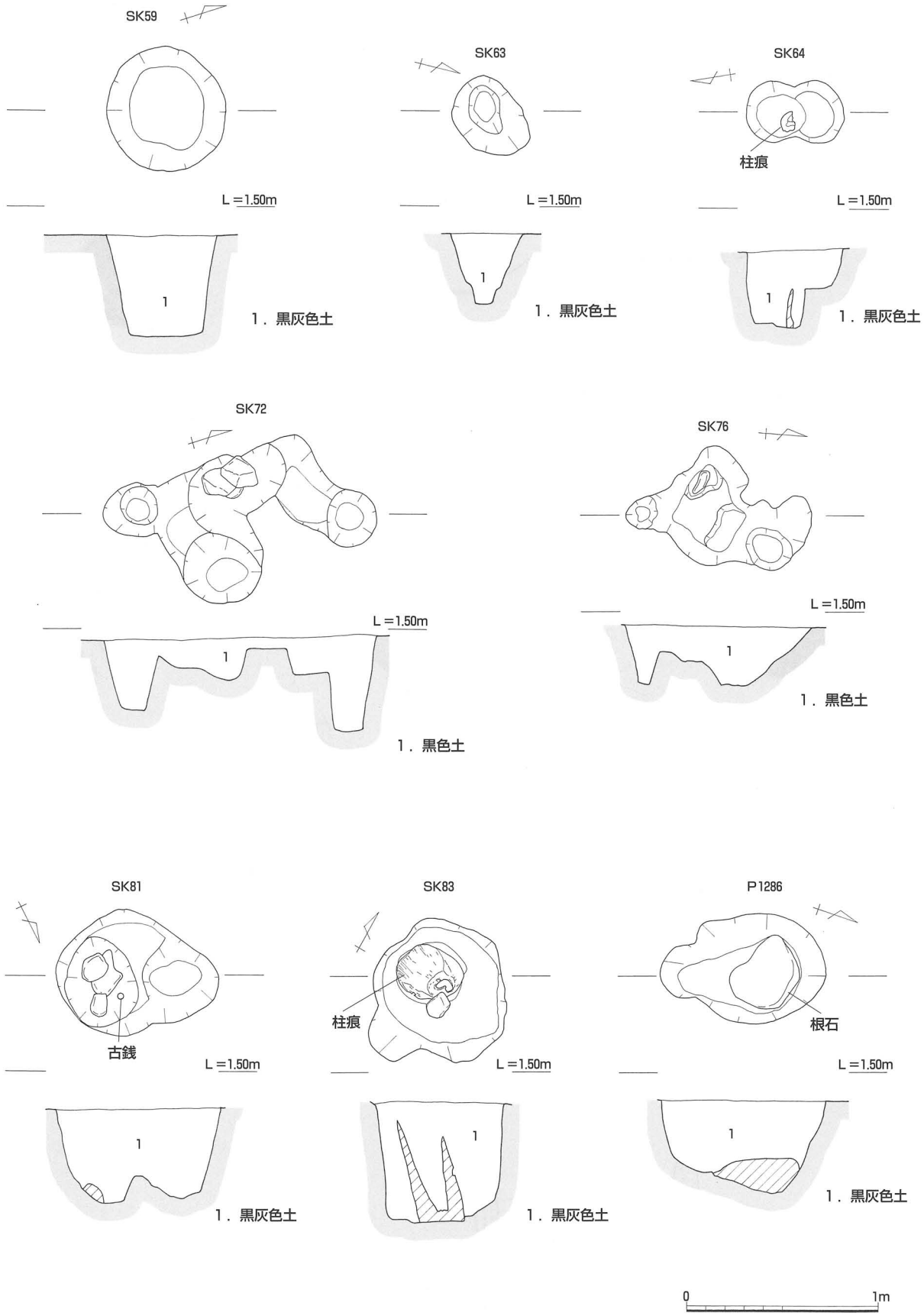
この建物を構成する遺構及びその周辺の遺構からは、第42図に掲載した遺物が出土している。１はＳＫ50から出土した白磁・皿。復元した口径が9.6cm、器高2.3cmを測るもので、体部下半まで施釉される。内面見込みには胎土目が見られる。２は建物に隣接する遺構（Ｐ1356）から出土した白磁・椀。朝鮮半島産と考えられるもので、約半分が残存している個体である。全面が灰白色に施釉されている。復元した口径は13.8cm、器高は6.7cmを測る。３は青磁・椀の口縁部である。外面には雷文が認められる。５はＳＫ55から出土した青磁・椀。高台畳付近くまで施釉される。内面には花文が認められる。６は土師器・皿。完形で口径6.8cm、底径4.8cm、器高1.5～1.8cmを測る。底部は糸切り痕が確認できる。口縁部に煤が付着していることから、灯明皿の可能性も考えられる。７は土師器・坏の底部と考えられるもの。底部には糸切り痕が観察できる。８は土師器・坏の口縁部である。９・10も土師器・坏の底部と考えられるものである。11は土師器・坏と判断されるが、器形・胎土等ほかの個体と比べるとやや異質な感じを受けるものである。12は瓦質土器・擂鉢。口縁端部は粘土貼り付けと考えられる。内面にはハケメが施されている。13も擂鉢。14は瓦質土器で、



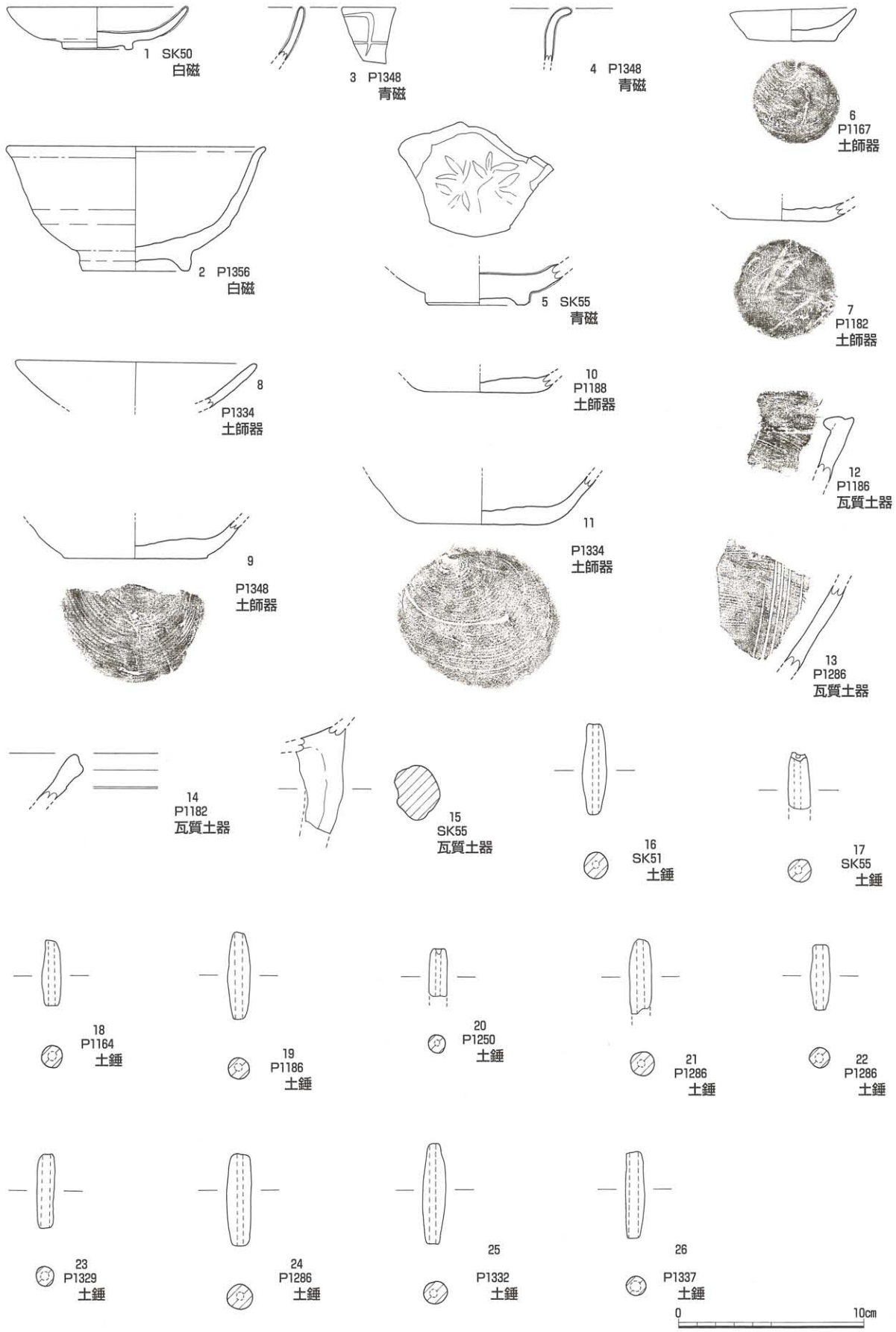
第39図　建物跡４　断面図（Ｓ＝1/60）



第40図　建物跡４　関連遺構実測図（１）（Ｓ＝1/30）



第41図　建物跡４　関連遺構実測図（２）（S＝1/30）



第42図　建物跡４　関連遺構　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

鉢と考えられるもの。15はＳＫ55から出土したもので、瓦質土器・足鍋の脚部である。16～26は土錘である。建物跡４に関連した遺構からは土錘が多く出土しており注目される。長さ４～５㎝で、幅が1.3㎝前後のものが多数を占める。

第43図はＳＫ81から出土した銭貨で、「永楽通宝」である。

これらは、基本的に15世紀代ものと判断される。

第43図　ＳＫ81　出土銭貨拓影

建物跡５

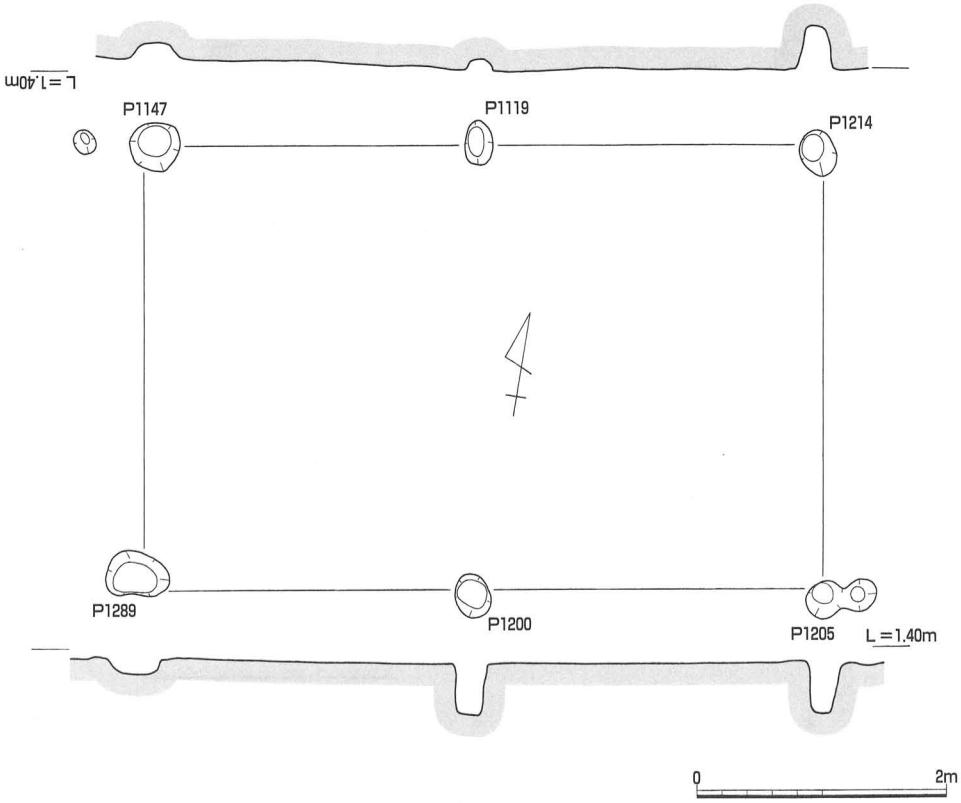
建物跡５は調査区の東側、建物跡４よりは約６ｍ南に位置している。ちょうど溝状遺構２に面した場所になる。

復元した建物は２間（約5.3ｍ）×１間（3.6ｍ）で、主軸をＮ－86°―Ｅにとる。

柱穴と考えられるピットは６基で、径約20cm、深さ約10～40㎝を測る。

遺物は、Ｐ1205からは瓦質土器１点が出土しているが、埋土上部からの出土であり直接これに伴う可能性は低い。

したがって時期については明らかにできなかった。また溝状遺構２との前後関係についても、この付近で溝状遺構２はほとんど深さを失っており、切りあい関係をはっきりとさせることができなかったため不明である。



第44図　建物跡５　実測図（Ｓ＝1/60）

建物跡６

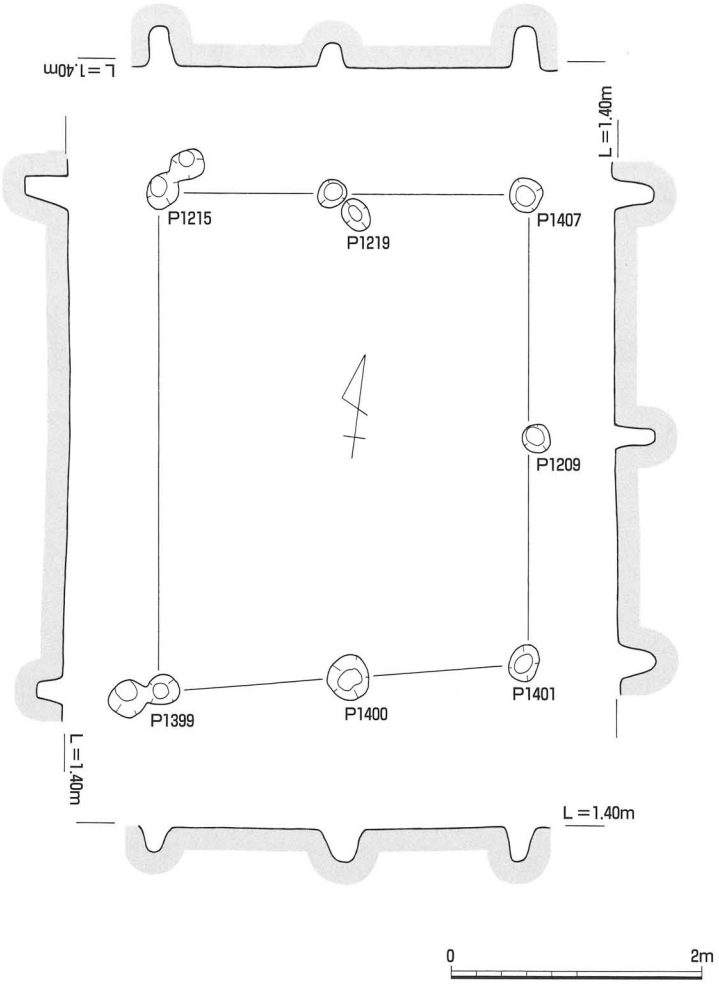
建物跡６は建物跡５の西隣に位置している。

南北２間（3.9m）×東西２間（2.9m）のもので、主軸をN—10°—Wにとり、ほぼ東西方向を向いている。

柱穴と判断したピットは７基で、このうちP1215、1219、1399は２基のピットが隣接した位置関係にある。

この建物に伴う遺物は出土しなかった。

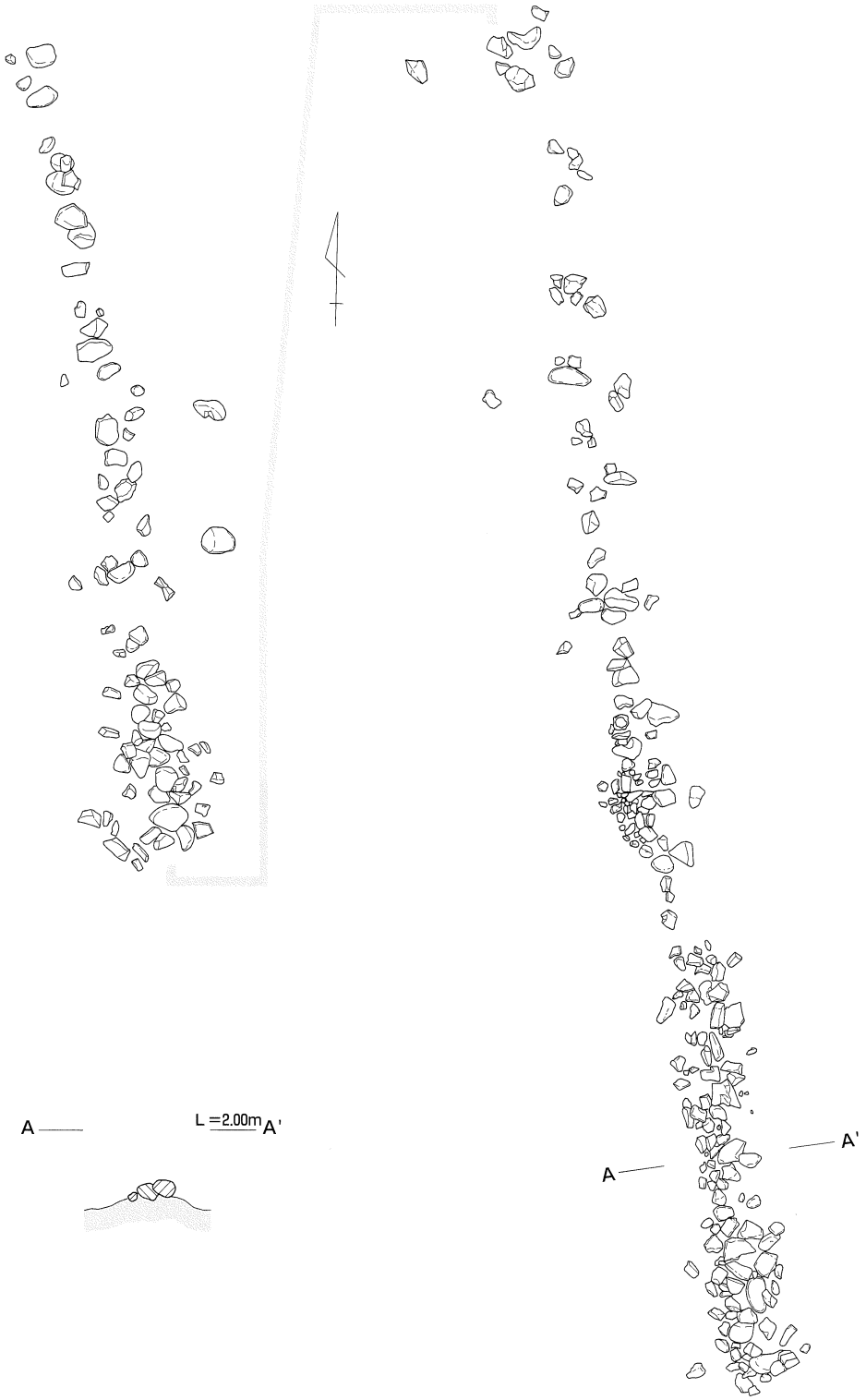
したがって時期は明らかでない。また建物跡５と同様に溝状遺構２との前後関係についても明らかにできなかった。



第45図　建物跡６　実測図（S＝1/60）

石列１

調査区の東側端で確認した。溝状遺構２とは直交する位置関係で、長さ約19mにわたって10～20㎝大の円礫・角礫が南北方向に直線的に並んでいた。中央付近でやや石が少なくなる状況が認められるが、本来は同様に並べられていたものと判断される。検出状況からは北側・南側のどちらにもさらに延びているものと考えられる。

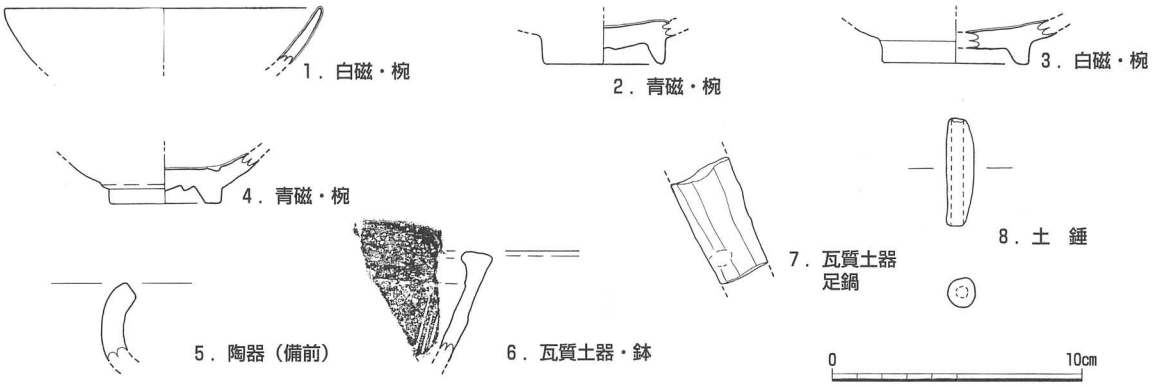


第46図　石列１　実測図（S＝1/60）

またこの石列を境にして、東側は次第に傾斜している状況が窺えた（なお、平成17年度の調査結果からは、この部分が幅広の溝状または凹地状となることが明らかとなっている）。

石列及びそれより東側の傾斜地からは第47図に掲載した遺物が出土した。１は白磁・椀の口縁部である。２は青磁・椀の高台。高台外面は施釉されておらず、露体である。３は白磁・椀の高台。２と同様高台外面は施釉されていない。４は青磁・椀の高台。これも高台外面は施釉されていない。５は陶器で、壺などの口縁部と考えられるものである。６は瓦質土器・擂鉢。口縁部は肥厚する。内面には擂目が施されているのが観察できる。７は瓦質土器・足鍋の脚部。８は土錘である。

この石列の性格・時期については明らかにすることができなかった。



第47図　石列１・溝状遺構　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

石列の状況（北から）

墓１（ＳＫ38）

溝状遺構２の南側、調査区中央付近に位置する。

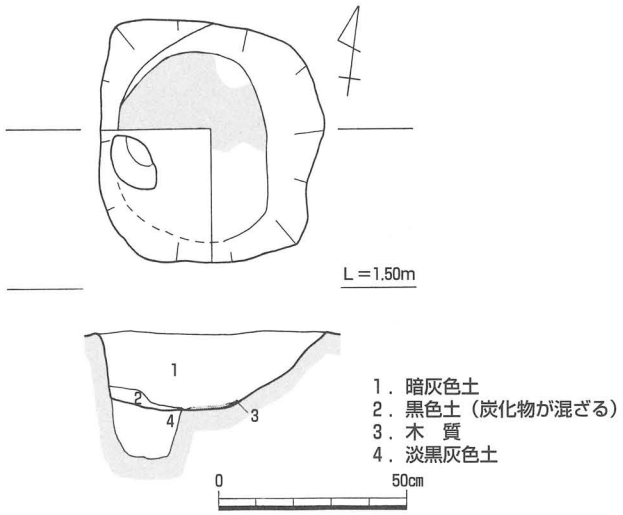
掘形は、平面形が不整形な形状を呈しているが、もともとは楕円形状と判断されるものである。規模は長辺が約60㎝、短辺が約50cmを測る小型のもので、深さは、調査段階では約20㎝であった。

墓坑内では棺などは検出されなかった。ただし、木質が残っている部分が確認されており、それを棺底面と考えた場合、その範囲から長さ45㎝、幅30㎝前後の木製棺が納められていたと推測される。

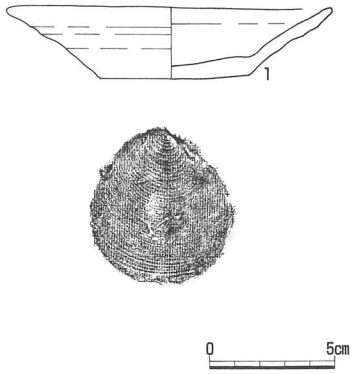
墓坑内からは小児のものと考えられる人骨（歯）と土師器・杯１点が出土した。

土師器・坏は、床面よりも上部で出土しており、棺上に置かれていたと推測される。口径が13.0㎝、器高が約３㎝を測るもので、体部は直線的に開く。回転ナデによる成形がされ、底部は糸切りである。

出土した土師器から16世紀のものと考えられる（時期については別途検討する。以下同じ）。



第48図　墓１（ＳＫ38）実測図（Ｓ＝1/20）



第49図　墓１（ＳＫ38）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

第３表　墓一覧表

遺構名	掘形・規模	棺	出土遺物	年代	備考
墓１ (SK38)	楕円状・60×50cm	(箱棺)	土師器１	16世紀	子供の墓の可能性
墓２ (SK39)	円形・径約70cm	桶棺	土師器１	16世紀	人骨（歯）が出土
墓３ (SK71)	楕円状・110×80cm	(箱棺)	土師器２	16世紀	
墓４ (SK77)	楕円状・85×75cm	(箱棺)	土師器１	16世紀	床面で炭化状の木片
墓５ (SK74)	円形状（下段は長方形状） 径約1m・下段は約70×50cm	(箱棺)	土師器１・ 瓦質土器１	16世紀	
墓６ (SK75)	方形状・一辺約90cm	箱棺	土師器１	16世紀	人骨（大腿骨・歯）が出土

墓２（ＳＫ39）

墓１の北側、約５ｍのところに位置し、溝状遺構２を切り込んで造られている。

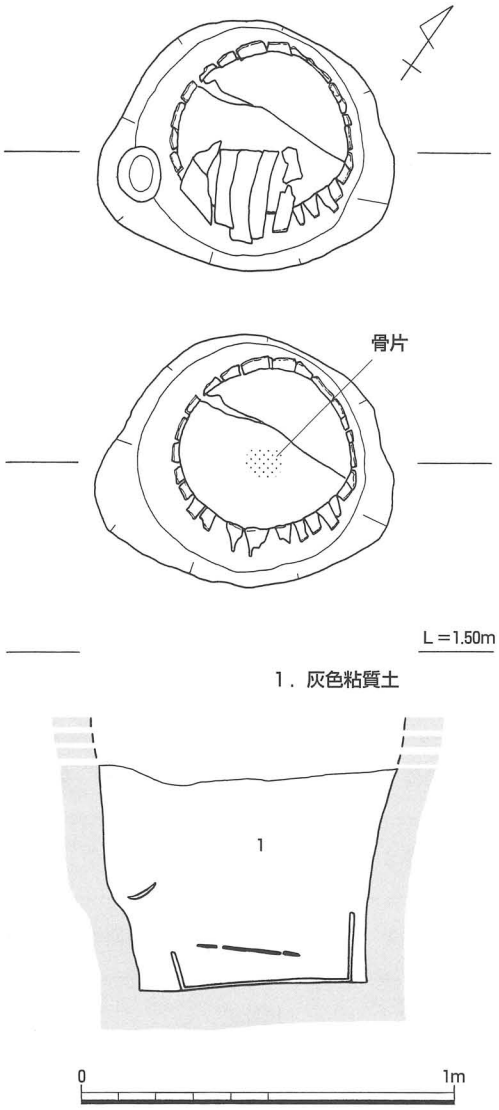
掘形は、平面形がやや不整形ながらも円形で、規模は上面で径約70cmを測る。検出面からの深さは約70～80cmである。

墓坑内には桶が棺として納められていた。桶は、底部内法で約40cmを測るもので、底板と側板の一部が残っていた。底板は、径が44cm前後の円形で約２cmの厚みがある。側板は、残存状況があまりよくないため詳細は明らかでないが、約５～７mm前後の厚みをもつ板である。検出時には、主に南側を中心に土圧によるためか、内側に折り曲がった状態で確認された。

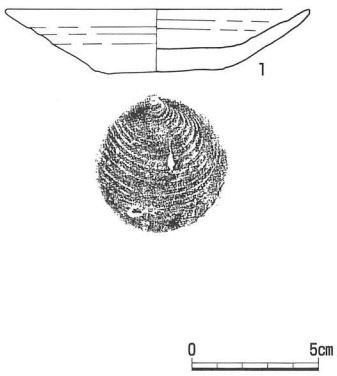
墓坑内からは成人のものと推定される人骨（歯）と土師器・杯１点が出土した。

土師器・杯は、桶よりも外側で出土しており、桶外に副葬されたものと判断される。口径が12.2cm、器高が2.5cmを測るもので、体部は直線的に開く。回転ナデによる成形がされ、底部は糸切り痕が認められる。

出土した土師器から16世紀のものと考えられる。



第50図　墓２（ＳＫ39）実測図（Ｓ＝1/20）



第51図　墓２（ＳＫ39）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

墓３（ＳＫ71）

墓２の北側に隣接して造られている。

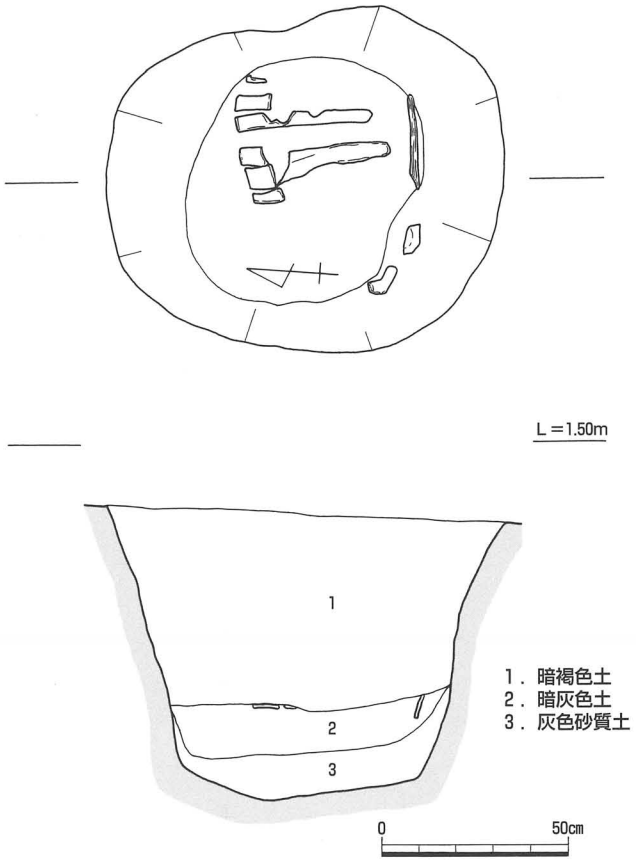
掘形は、平面形が楕円形状で、規模は長辺が約110cm、短辺が約80cmを測り、検出面からの深さは約50～60cmである。

墓坑内からは棺材と考えられる板片が確認されており、埋葬時には木棺が納められていたと判断される。現状ではその規模等は明らかにしえないが、板片の残存状況や他の墓から判断して、長さ50cm、幅が30～40cm程度の棺が納められていた可能性が高い。

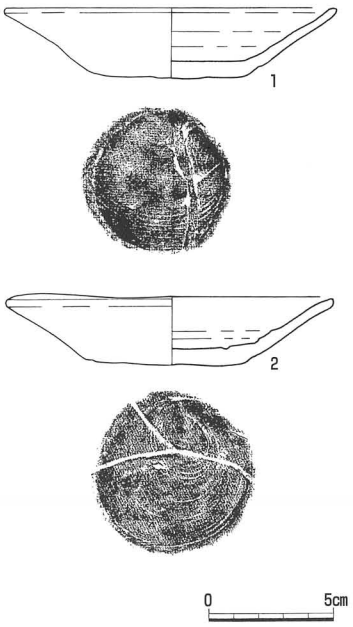
墓坑内からは土師器・杯２点が出土した。土師器・杯は、床面よりも上部で出土しており、棺上または棺外に副葬されたものと判断される。

第53図－１は口径が13.2cm、器高2.8cmを測るもので、回転ナデによる成形がなされ、底部には糸切り痕が認められる。２は口径が13.2cm、器高2.8cmを測り、１と同様回転ナデによる成形で、底部には糸切り痕が認められる。いずれも体部は直線的に開く器形である。

出土した土師器から16世紀のものと考えられる。



第52図　墓３（ＳＫ71）実測図（Ｓ＝1/20）



第53図　墓３（ＳＫ71）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

墓４（ＳＫ77）

墓３の東側に隣接して造られている。

掘形は、平面形が不整形な形状を呈するもので、規模は長軸で約85㎝、短軸で約75㎝を測る。検出面からの深さは約20cmと浅い。

底面では、炭化状の木片が幅30～40㎝ほど広がっている状況が確認された。火葬墓の可能性も考えられなくもないが、壁面等が焼けていないなどの状況から判断して、ほかのものと同様木棺を納めたものと推測される。

墓坑内からは土師器一点が出土した。底面よりやや上部で出土しており、棺外に副葬されたものと考えられる。

１は口径が12.2㎝、器高約3.0㎝を測るもので、回転ナデによる成形がなされ、底部には糸切り痕が認められる。

出土した土師器から16世紀のものと考えられる。

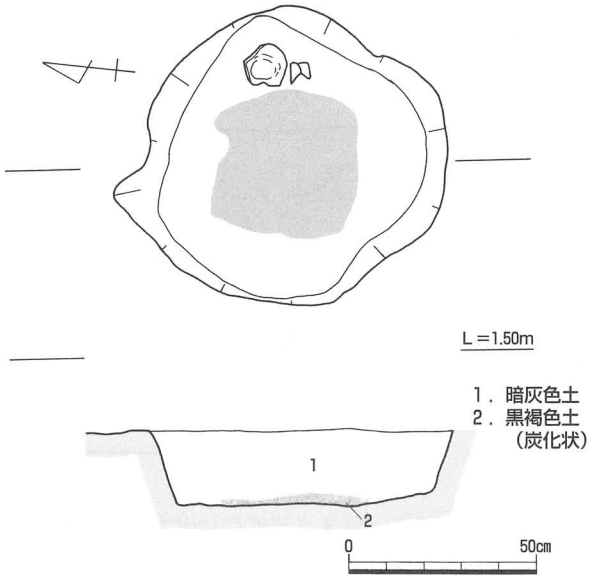
墓５（ＳＫ74）

調査区の東側に位置し、溝状遺構２を切り込んで造られている。

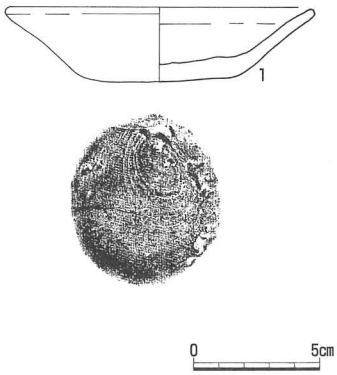
掘形は二段状になっており、上段は円形状、下段は長方形状である。規模は上段では１ｍ前後、下段では長軸約70㎝、短軸約50cmを測る。検出面からは約20cmの深さがある。

棺は検出されていないが、掘形下段の形状から判断して、長さ70㎝×幅50cm以下の木棺が納められていた可能性が高い。

墓坑内からは土師器・杯１点、瓦質土器１点が出土した。土師器・杯は口径が12.2㎝、器高約2.5



第54図　墓４（ＳＫ77）実測図（Ｓ＝1/20）



第55図　墓４（ＳＫ77）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

cmを測るもので、回転ナデによる成形がなされ、底部には糸切り痕が認められる。瓦質土器・足鍋脚部と考えられるものである。なお、これ以外の破片は出土しておらず、混入品の可能性が高い。

出土した土師器から16世紀のものと判断しておきたい。

墓６（ＳＫ75）

墓５よりもさらに東側に位置している。ほかの墓と同様に、溝状遺構２を切り込んで造られている。

掘形は方形で、一辺が約90cm、検出面からの深さは約30～40cmを測る。

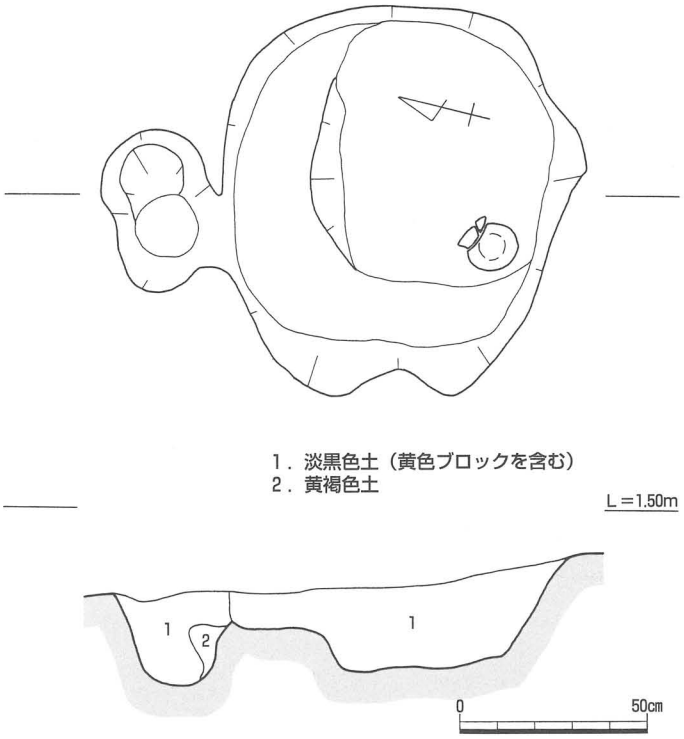
墓坑内には木棺が納められていたが、比較的良好な状態で遺存しており、その構造や規模が明らかにできるものである。棺は、長方形の板を組み合わせて作られた箱型のもので、長さが約51cm、幅約33cmを測る。高さは側板から判断して約30～40cmと判断されるが、板の上側は破損しており実際はもう少し高くなる可能性もある。棺蓋板についても検出したものの、土圧により棺内に向けて落ち込んでいる状況で、非常に脆くなっていたため取り上げることはできなかった。

棺内には土砂が堆積していたが、それらを取り除くと成人女性と推定される人骨が確認された。

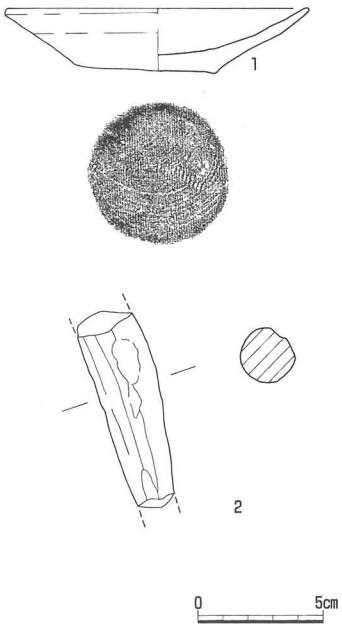
墓坑内からは土師器・杯１点が出土した。棺外での出土であり、棺上に置かれたものもしくは棺の周囲に置かれたものと判断される。

土師器・杯はやや歪みのあるもので、口径が13.4～14cm、底径6.0cm、器高2.8～2.9cmを測るものである。底部は糸切り痕が認められる。

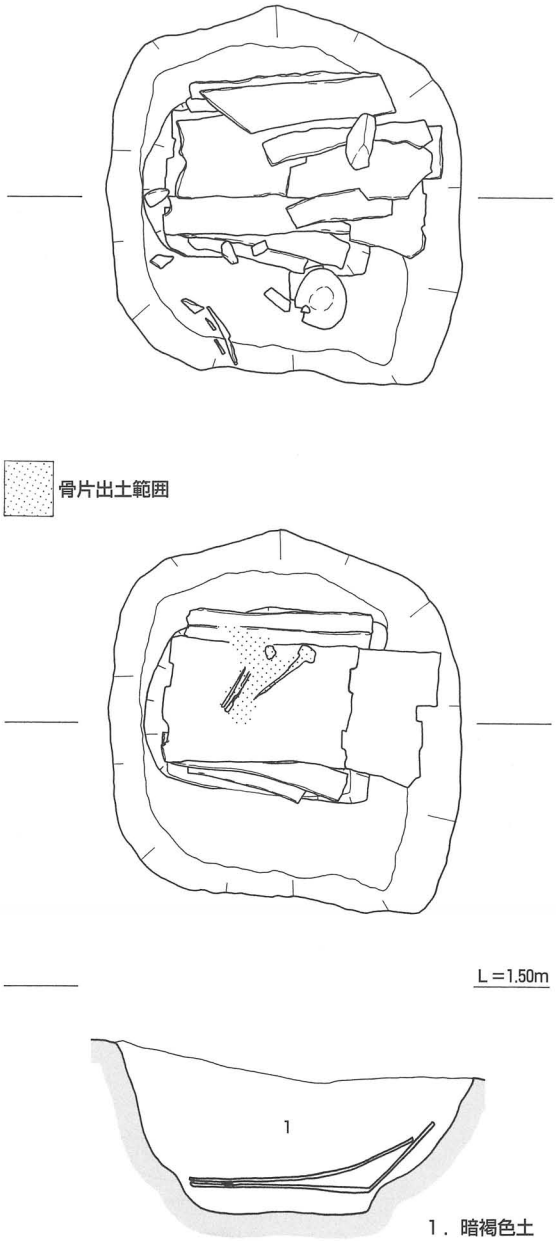
出土した土師器から16世紀のものと考えられる。

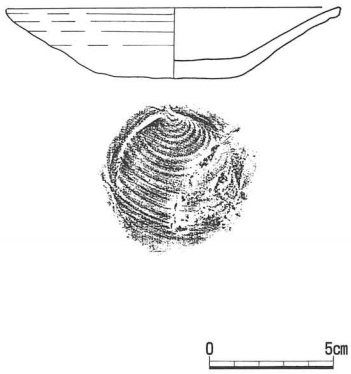


第56図　墓５（ＳＫ74）実測図（Ｓ＝1/20）

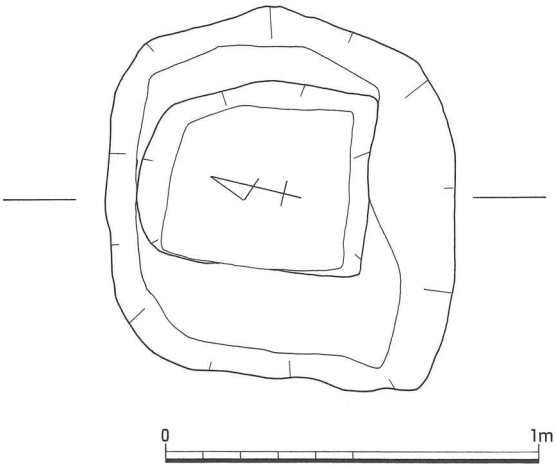


第57図　墓５（ＳＫ74）出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）





第59図　墓６（ＳＫ75）出土遺物実測図
（Ｓ＝1/3）



第58図　墓６（ＳＫ75）実測図（Ｓ＝1/20）

その他の遺構

ＳＫ12～16

調査区西側のピット密集部分で確認した遺構である。

検出された遺構は平面形が長方形を呈するもので、規模は最大のもので長さ1.8m、幅70～80cm、小さなもので長さ1.0m、幅70cmを測る。調査段階での深さは約10～20cmと非常に浅い状態であったが、これは上面が削平された結果と考えられる。

これらはほぼ同様の形態で、しかもまとまって存在していることから判断して、共通の性格を有すると考えられるものである。平成17年度調査区から確認された墓などに形状・規模とも類似していることから考えると、墓である可能性も考えられるが推測の域を出ない。また遺物も出土しなかったため、年代についても明らかにし得なかった。

ＳＫ20

建物跡１・２の南側約３ｍのところにある遺構である。

平面形は長方形で、規模が長軸で1.8m、短軸で1.0m、深さ30cmを測るものである。北側を除いてほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦となっている。

遺物は出土しなかったが、内部には40～50cm大の角礫６個と、それよりも小さな角礫十数点が入っており、とくに南東側に集中している状況が窺えた。また埋土中には炭化物や焼土もわずかながら認められた。

この遺構の性格については、墓と考えられるものの決定的な証拠もないことから可能性に留めておく。時期については、溝状遺構２とは切り合う位置関係にあり、それよりも以前に造られた可能性が高いものの、前後関係は明らかにできなかった。

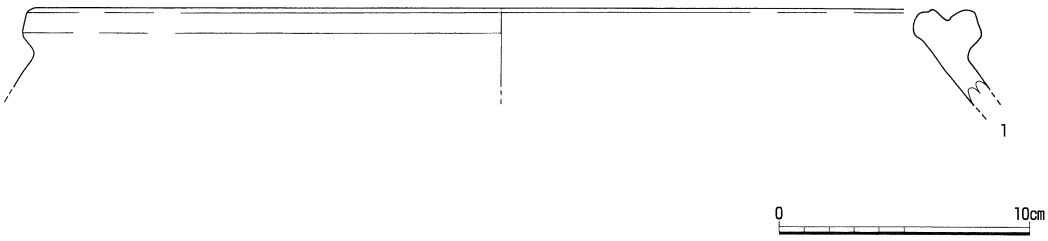
ＳＫ26

調査区の中央付近、溝状遺構２よりは約８ｍ南側で確認した。

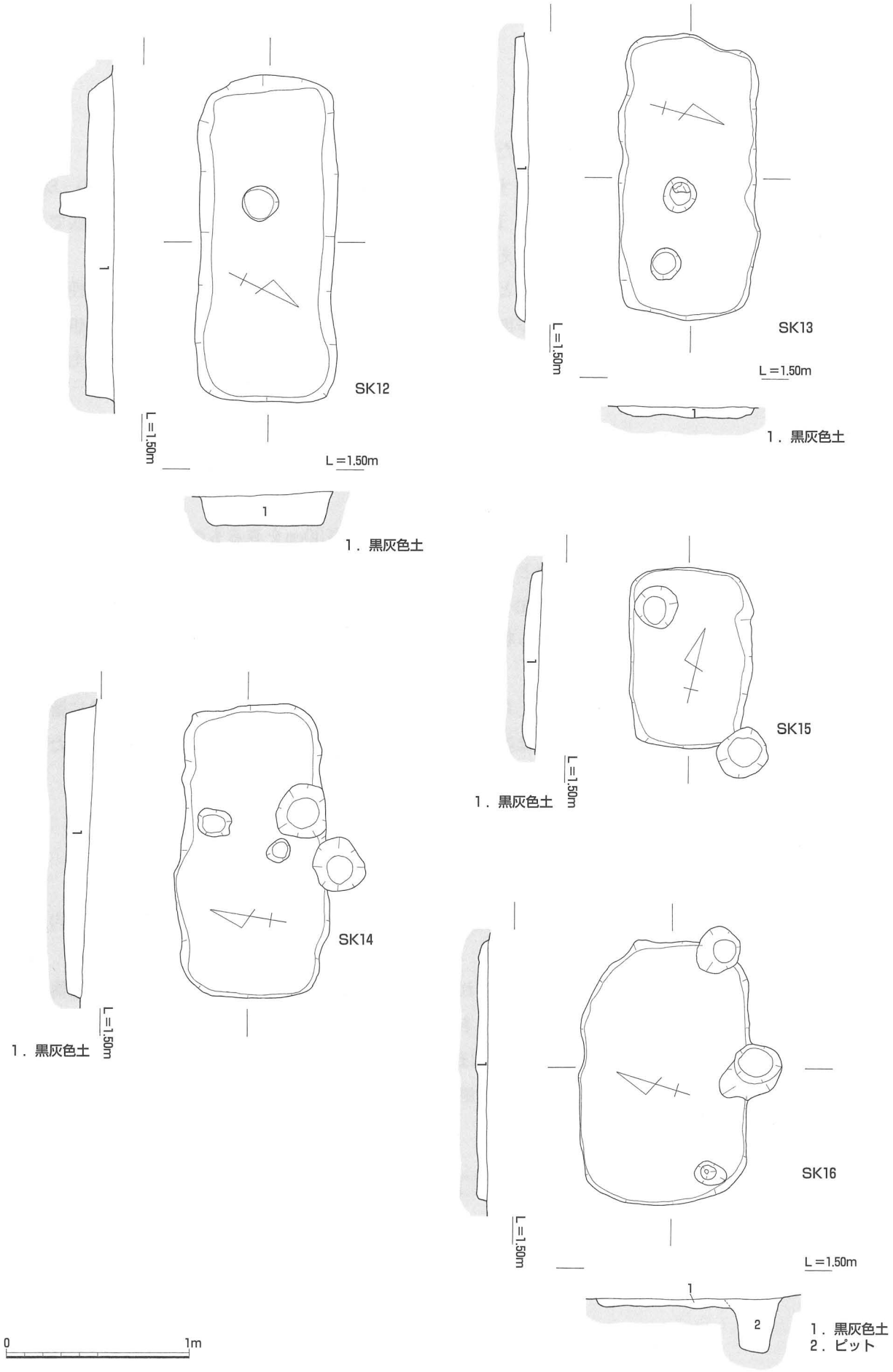
形状は溝状に近く、長さ約3.5m、幅約0.7mの規模のものである。深さはそれほどなく、約10cmである。

調査では以上のような形状・規模が確認されたが、これを境に北側と南側では検出した遺構の数に大きな差があることなどから判断すると、本来は溝状遺構１と同様に溝状遺構であった可能性が高い。上部が削平されるなどの結果、深さがほとんどなくなり検出できなかったと考えられる。

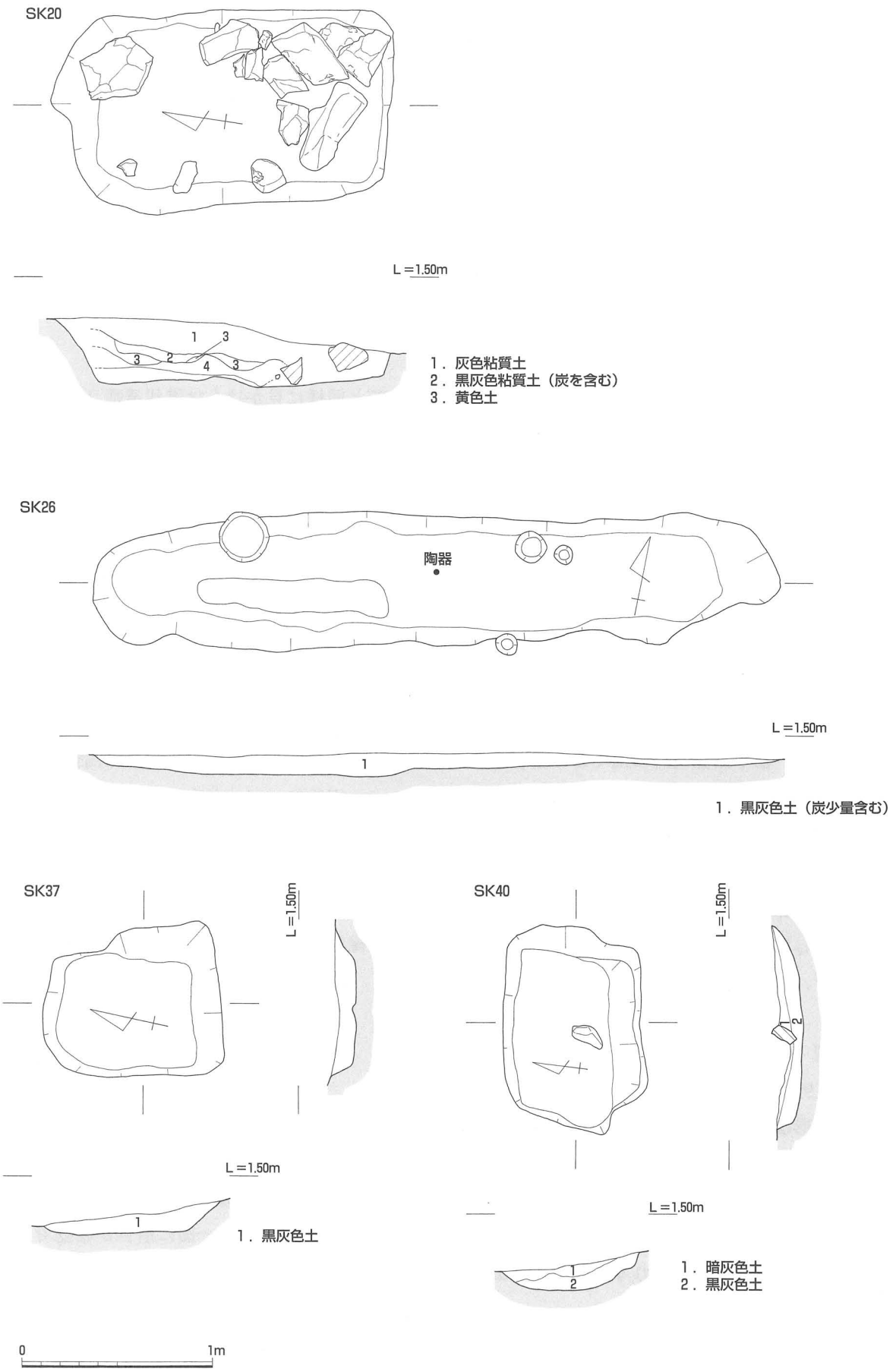
この遺構に伴うものとしては、埋土中より第60図掲載の陶器・甕が出土している。陶器・甕は復元した口径が約34.2cmを測るものである。



第60図　ＳＫ26　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第61図　ＳＫ12～16　実測図（Ｓ＝1/30）



第62図　ＳＫ20・ＳＫ26・ＳＫ37・ＳＫ40　実測図（S=1/30）

ＳＫ37

調査区の中央付近、見かけ上は溝状遺構２の中という位置にある遺構である。墓１からは北東約６ｍのところにあたる。

平面形は長方形状を呈しており、規模は長さが約１ｍ、幅が0.7ｍを測る。深さは約15cm程度しかなかったが、これは溝状遺構２の調査後に確認したことによるためで、本来はもう少し深さのあるものと判断される。

これに伴う遺物は出土していないため、時期については明らかにできなかった。また性格についても明らかでないが、規模や形状などから判断すると、墓である可能性も考えられる。

ＳＫ40

ＳＫ37の西側に隣接して存在する遺構である。ＳＫ37と同様に見かけ上は溝状遺構２の中という位置にある。

平面形は上場がやや不整形な形状となっているが、下場は長方形状である。規模は長さが約１ｍ、幅が70㎝を測る。深さは調査段階で約15cmであった。掘形はわずかに傾斜をもっており、床面は平らであった。

これに伴う遺物は出土していないため、時期については明らかにできなかった。また性格についても明らかでないが、規模や形状などから判断すると、墓である可能性も考えられる。

ＳＫ91

調査区東端付近で確認した遺構である。

遺構の一部が調査区外に出ており全容は明らかでないが、調査した部分の平面形は円形土坑を二つ重ねたような形状をしている。規模は現状で長さ１ｍ、幅約70～80㎝を測り、底面は平らであった。

石列東側の地形が傾斜する部分を掘削した後で検出しているが、埋土の色調が同じであることから前後関係については明らかでない。

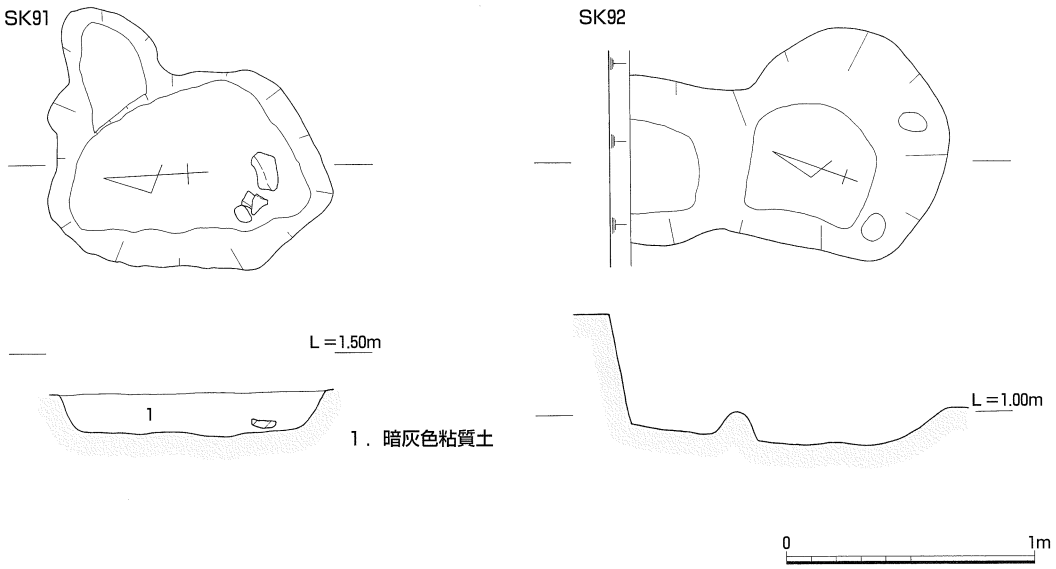
出土した遺物は第68図に掲載した。１は白磁・椀。玉縁状の口縁である。２は陶器・鉢と考えられるが、別のものである可能性もある。

ＳＫ92

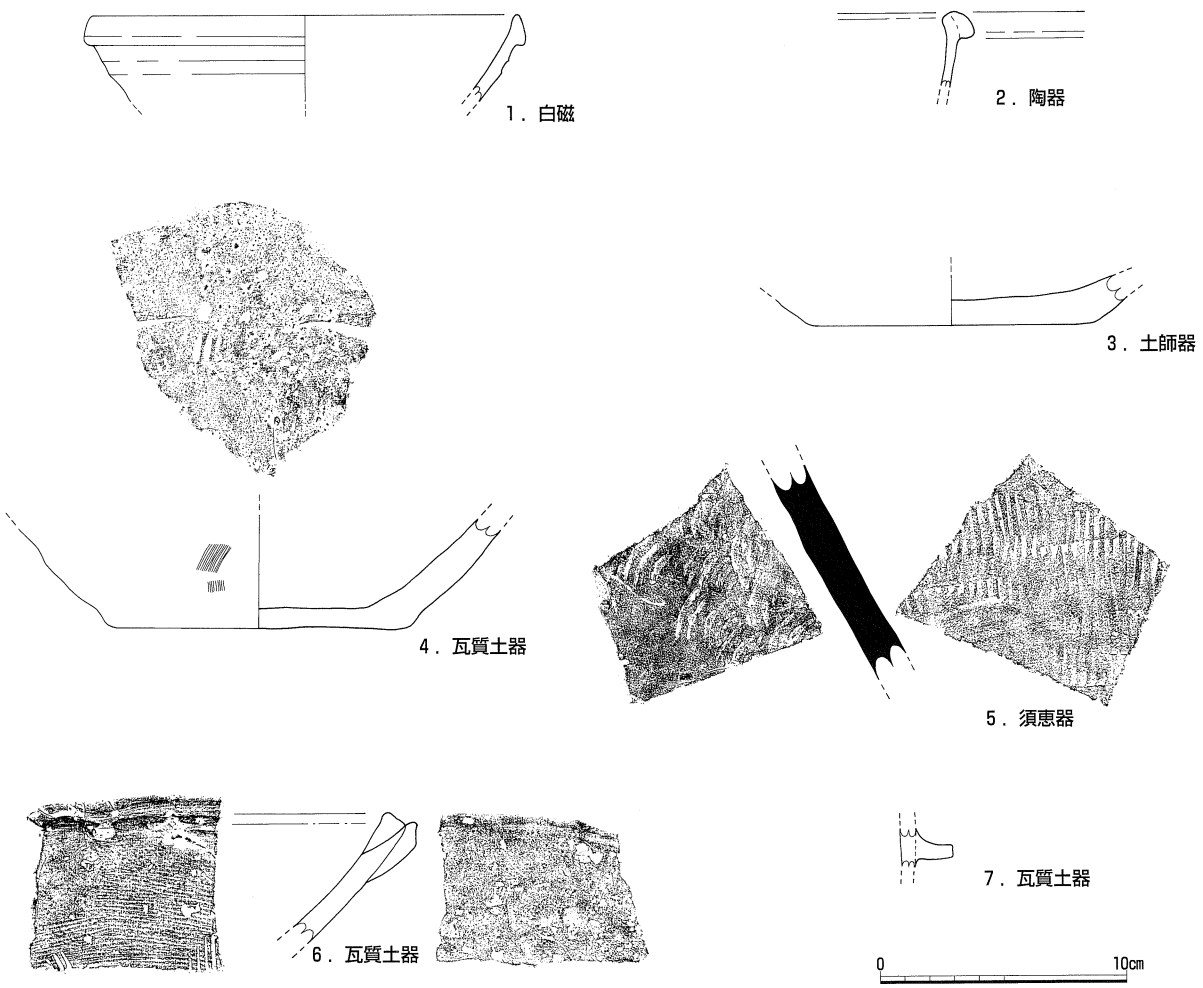
ＳＫ91より南約５ｍのところに位置する。

平面形は不整形で、規模は南北軸長が約1.2cmを測り、調査で確認した深さは約20cmであった。これも地形の傾斜部を掘削したあとで検出したため、厳密な前後関係は明らかでない。

これから出土した遺物については第64図に掲載した。３は土師器・擂鉢の底部と考えられるものである。４・６は瓦質土器・擂鉢の底部と考えられるもので、内面には一部に擂目が確認できる。５は須恵器甕片と考えられるもので、７㎜の厚さがある。



第63図　ＳＫ91・ＳＫ92　実測図　(S=1/30)



第64図　ＳＫ91・ＳＫ92　出土遺物実測図（S=1/3）

第５節　出土遺物

１．ピット出土遺物

沖手遺跡１区では約1500基にも及ぶピットを確認した。これらのピットのうち、いくつかからは直接伴うと考えられる遺物やその可能性のある遺物が出土している。復元した建物に伴うものについては先に報告しているが、ここではそれ以外の主なものについて概要を記すこととしたい。

なお、以下の遺物を伴うピットは調査区の西側、ピットが密集している場所にあるもので、復元はできなかったがこれらも建物に伴う可能性が高いと判断できるものである。時期的には中世前半が多い傾向にある。

第65図―１はP197から出土した土師器・坏である。P197は径約30cm、深さ約20cmを測るピットで、土師器・坏はその底面から出土している。口径は復元で13.2cm、器高5.0cmのもので、体部は直線的に開く器形である。底部は糸切り痕が残る。

２はP210から出土した土師器・皿である。土師器・皿は口径7.4cm、底径3.8cm、器高2.0cmを測るもので、底部は柱状高台状となり中央は焼成前に穿孔されている。埋土中よりの出土である。

３はP221から出土した砥石である。砥石は両端を欠いており、現状で長さ7.6cm、最大幅3.5cm、最大厚2.5cmを測るものである。ピット底面から出土している。

４はP277から出土した土師器・坏である。底部のみの出土で、口縁部から体部は失っている。底径は5.2cmを測る。埋土中からの出土である。

５はＰ294から出土した白磁・椀である。直口の口縁となる個体で、体部下半以下は失っている。埋土中からの出土である。

６はP334から出土した土師器・坏である。土師器・坏は全体的に歪みをもつもので、復元した口径が14.8cm、器高4.2cmを測る。埋土中からの出土である。

７はP340から出土した白磁・椀である。白磁・椀は玉縁状の口縁を持つものである。埋土中からの出土である。

８・９はP342から出土した白磁・椀である。P342は、径約30cm、深さ約20cmを測る小規模なものである。白磁・椀は図示したもののほかにもう一点が出土しているが、３点とも口縁部の形態は異なっている。口縁部の形態の特徴から、８はⅣ類、９はⅡ類と考えられる。もう一つもⅡ類と判断されるものである。

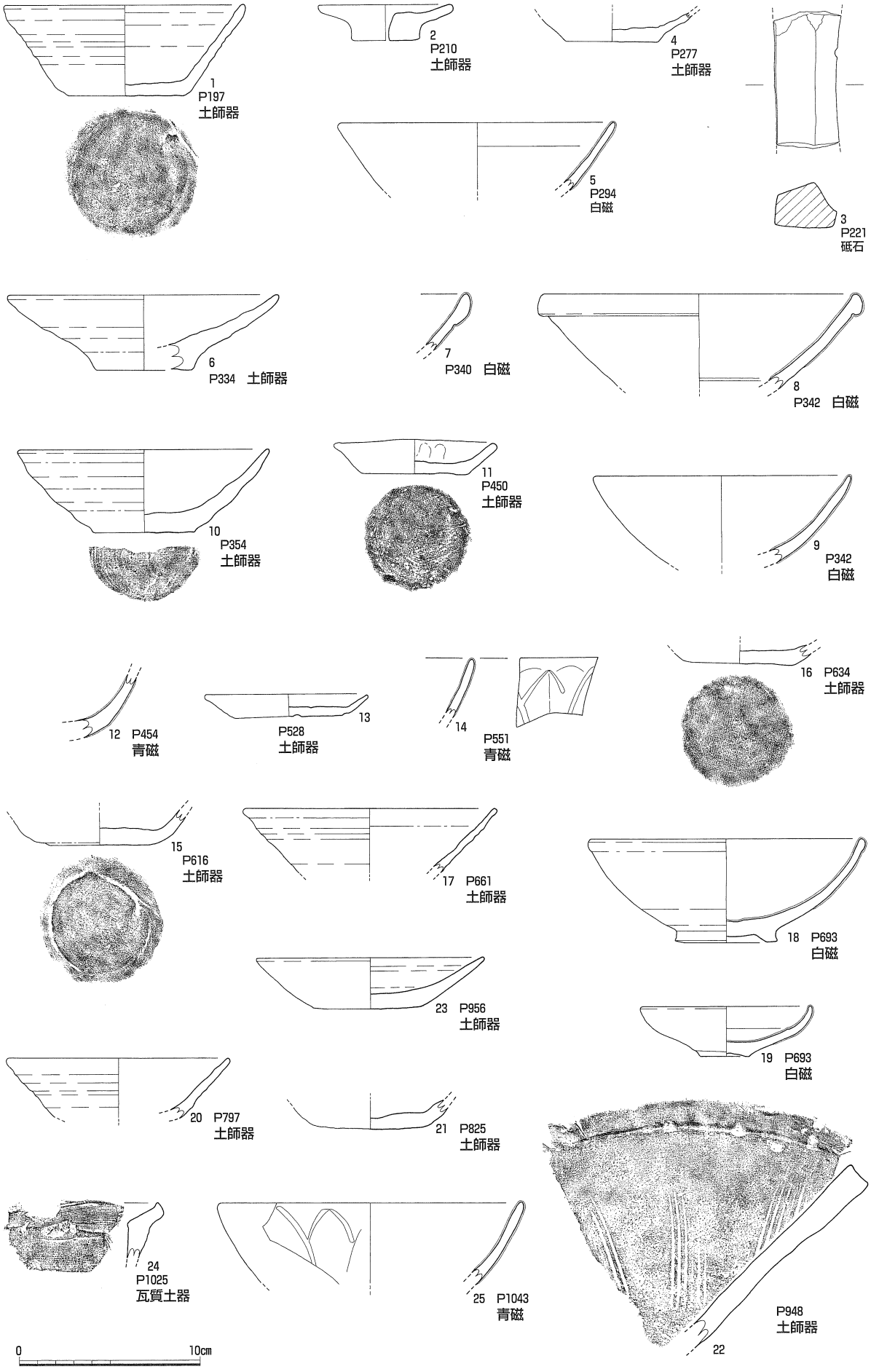
10はP354から出土した土師器・坏である。土師器・坏は復元した口径が13.8cmを測るもので、体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。底部は糸切りである。埋土中からの出土である。

11はP450から出土した土師器・皿である。P450は径約30cm、深さ約20cmを測るものである。土師器・皿はほぼ完形で、口径9.0cm、器高1.9cmを測る。埋土中、壁面近くから出土した。

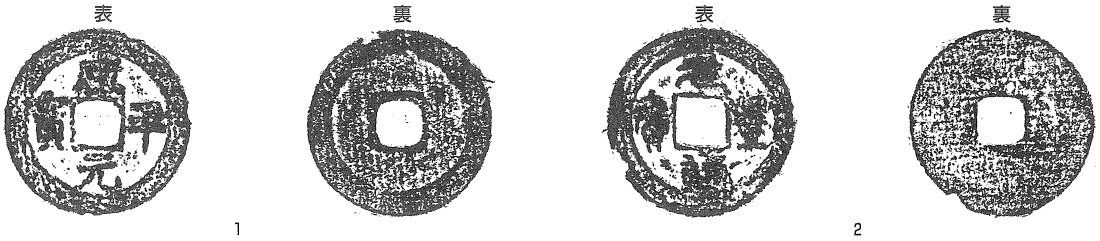
12はＰ454から出土した青磁で、椀の体部と考えられるものである。埋土中からの出土である。

13はP528から出土した土師器・皿である。P528は溝状遺構２よりも北側にあるピットで、径40cm、深さ20cmを測る。土師器・皿は口径9.0cm、器高1.1～1.4cmを測るもので、平べったい器形をしている。ピット底面からの出土である。

14はP551から出土した青磁・椀である。口縁部のみの出土で、外面には鎬蓮弁文を有している。埋土中からの出土である。



第65図　ピット　遺物出土状況図（S=1/3）



第66図　P1005　出土銭貨拓影

15はＰ616から出土した土師器である。坏の底部と考えられるもので、埋土中からの出土である。

16はＰ634から出土した土師器である。坏の底部と考えられるもので、埋土中からの出土である。

17はＰ661から出土した土師器である。直線的に開く体部を持つ形態のもの坏と考えられるものである。埋土中からの出土である。

18・19はP693から出土した白磁・椀、白磁・皿である。P693は、径約20cm、深さ15～20cmの小型のピットで、白磁はその中に納められたような状況を示していた。白磁・椀は小さな玉縁状の口縁を持つもので、外面は体部下半まで施釉される。白磁・皿は口径9.4cmを測るもので、体部下半までやや黄色味がかった釉がかけられている。

20はＰ797から出土した土師器で、坏と考えられるものである。底部を失っており全形は明らかでないが、体部が直線的に開きあまり深さのない形態のものと考えられる。

21はＰ825から出土した土師器である。坏の底部と考えられるが詳細は明らかでない。

22はP948から出土した土師器・擂鉢である。口縁端部は８mmほどの平坦面を有し、内面には６条１単位の擂目が施されている。埋土中よりの出土である。

23はＰ956から出土した土師器・坏である。体部は直線的に開き、深さのあまりない形態のものである。床面からはやや浮いた状態で出土している。

24はＰ1025から出土した瓦質土器で、鍋と考えられるものである。受口状の口縁で、内面にはハケメが観察できる。埋土中からの出土である。

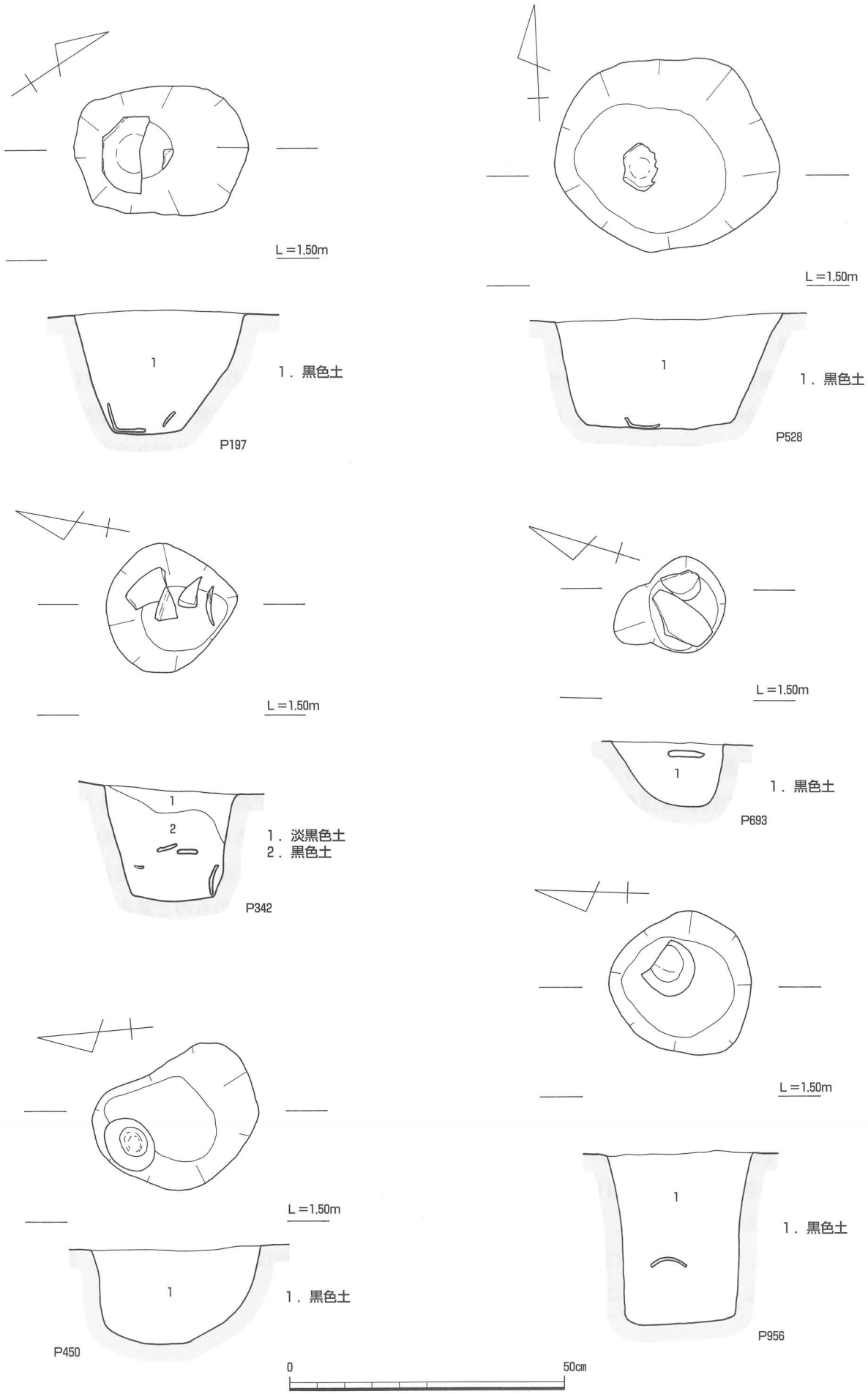
25はＰ1043から出土した青磁・椀である。口縁部のみの出土で、外面には鎬蓮弁文を有している。ピット上部からの出土である。

第66図はＰ1005から出土した銭貨である。１は「咸平元寶」、２は「元豊通寶」である。

２．そのほかの遺物

沖手遺跡１区の調査では、須恵器・土師器・瓦質土器・磁器・陶器・鉄製品・木製品など多様な遺物が出土した。

ここでは主に包含層中より出土した須恵器・土師器・磁器・陶器・銭貨と鉄製品（遺構出土のものも含めむ）・木製品（井戸及び墓に用いられたもの）について報告することとする。



第67図　ピット　遺物出土状況図（S=1/10）

須恵器

須恵器は３点のみ掲載したが、全体の中で占める量もわずかである。第68図－１は坏蓋と考えられるもので、今回出土した須恵器の中では最も古い時期のものである。口縁部は出土していないため、大きさなどは明らかでないが、外面にはヘラケズリが観察できる。２も蓋と考えられるものである。輪状またはボタン状のつまみを伴うものと考えられるが、その部分は失っている。３は坏。高台を伴うものである。

土師器

土師器は多量に出土しているが、全体的に残存状態が悪く、詳細のはっきりしないものが多い。器形のわかるものでは皿、坏、擂鉢などが認められ、そのうち21点を掲載した。第68図－４～11は皿である。４は復元した口径が７.8cm、器高が1.4cmを測るもので、底部は糸切りである。５は復元した口径が7.4cmを測るものである。外面及び内面の一部には赤色顔料が残っている。６は復元した口径が9.4cm、器高1.1cmと平べったい形態である。底部は糸切り。７は復元した口径が8.5cm、器高が1.5cmを測る。８はほぼ完形のもので、口径6.4～6.8cm、器高1.1cmを測る。底部は糸切り。９は１／３が残っている。復元した口径は9.0cm、器高1.8cmとこれまでのものに比べて一定の深さを持っている。10は復元した口径が7.4cmを測るが、数値は不確定なもの。器高は2.0cmと９と同様深さを持つ個体である。底部は糸切り。11は口径が7.2cm、器高が1.4cmを測るものである。

12～22は土師器・坏である。12は体部が内湾気味に立ち上がる器形になると考えられるもの。底部は糸切りで、6.2cmを測る。13も体部はやや内湾気味となると考えられる。14は１／３が残っており、口縁部から底部までの形態のわかるものである。体部は内湾しながら立ち上がり、器高4.7cm、復元した口径は13.6cmを測る。16も同様の形態である可能性が高いと考えられるもので、底部は穿孔されている。15・17～21も体部が内湾気味になると考えられるが、底部のみの出土のため明らかでない。22は体部が直線的に開く形態で、器高3.9cm、復元した口径で14.0を測るものである。

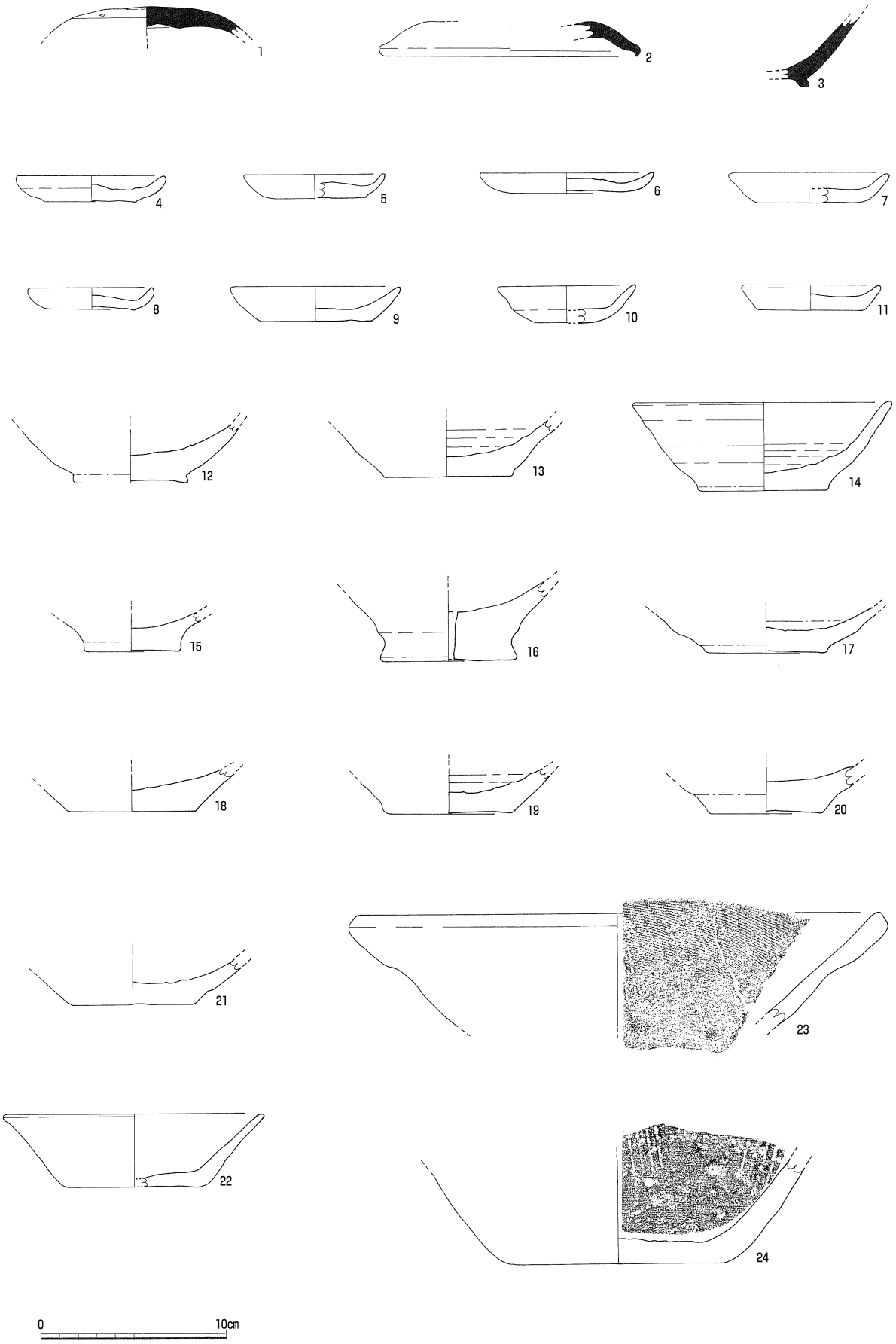
23・24は土師器・擂鉢と考えられるものである。後述する瓦質焼成のものと基本的な成形は同じである。23は内面に横～斜め方向のハケメとわずかながら擂目が観察できる。24はそれとは別の個体の底部と考えられるものである。同じく内面にはハケメ・擂目が観察できる。

瓦質土器

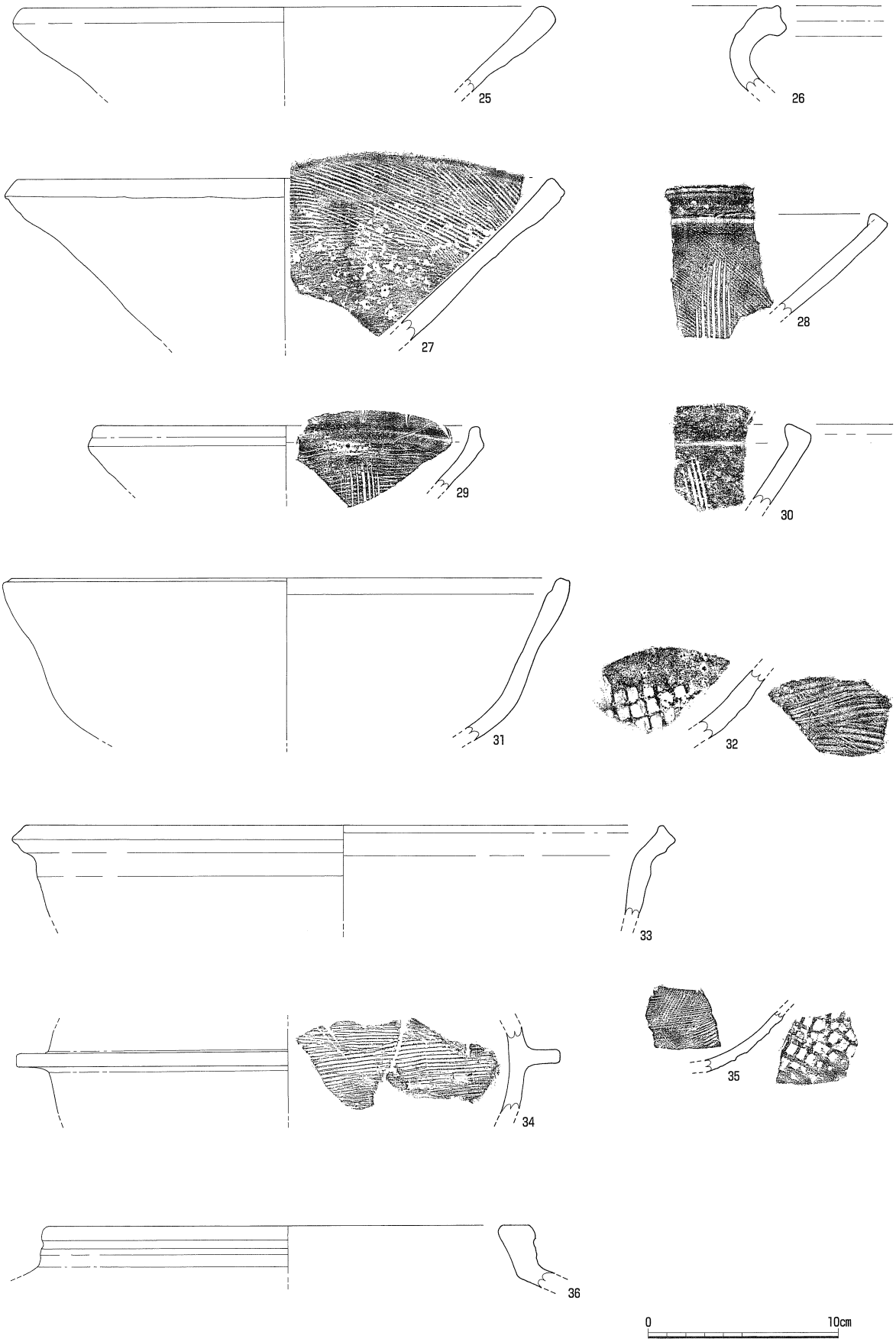
瓦質土器は重量的には土師器に次ぐ量が出土している。残存状況の悪いものが多く全形のわかるものは少ないが、防長系瓦質土器と考えられるものである。瓦質土器は器形の判明するものを中心に12点を掲載した。第69図－25・27～30は擂鉢と考えられるものである。25・２７は内面にハケメは観察できるものの、擂目は認められない。28～30は口縁端部が肥厚するものや上方に伸びるものなど口縁の形態は違うが、内面には擂目が施されている。31～33・35は鍋（足鍋）と考えられるものである。31は復元した口径が29.0cmを測るもので、口縁部内面は段状となっている。34は羽釜と考えられるもので、内面にはハケメが観察できる。

磁器

磁器は中国製の白磁・青磁のほか、わずかではあるが朝鮮半島産の陶磁器類も出土している。白磁の割合が高く、中でも白磁・椀（Ⅳ類）が多く認められる（磁器については別で検討）。



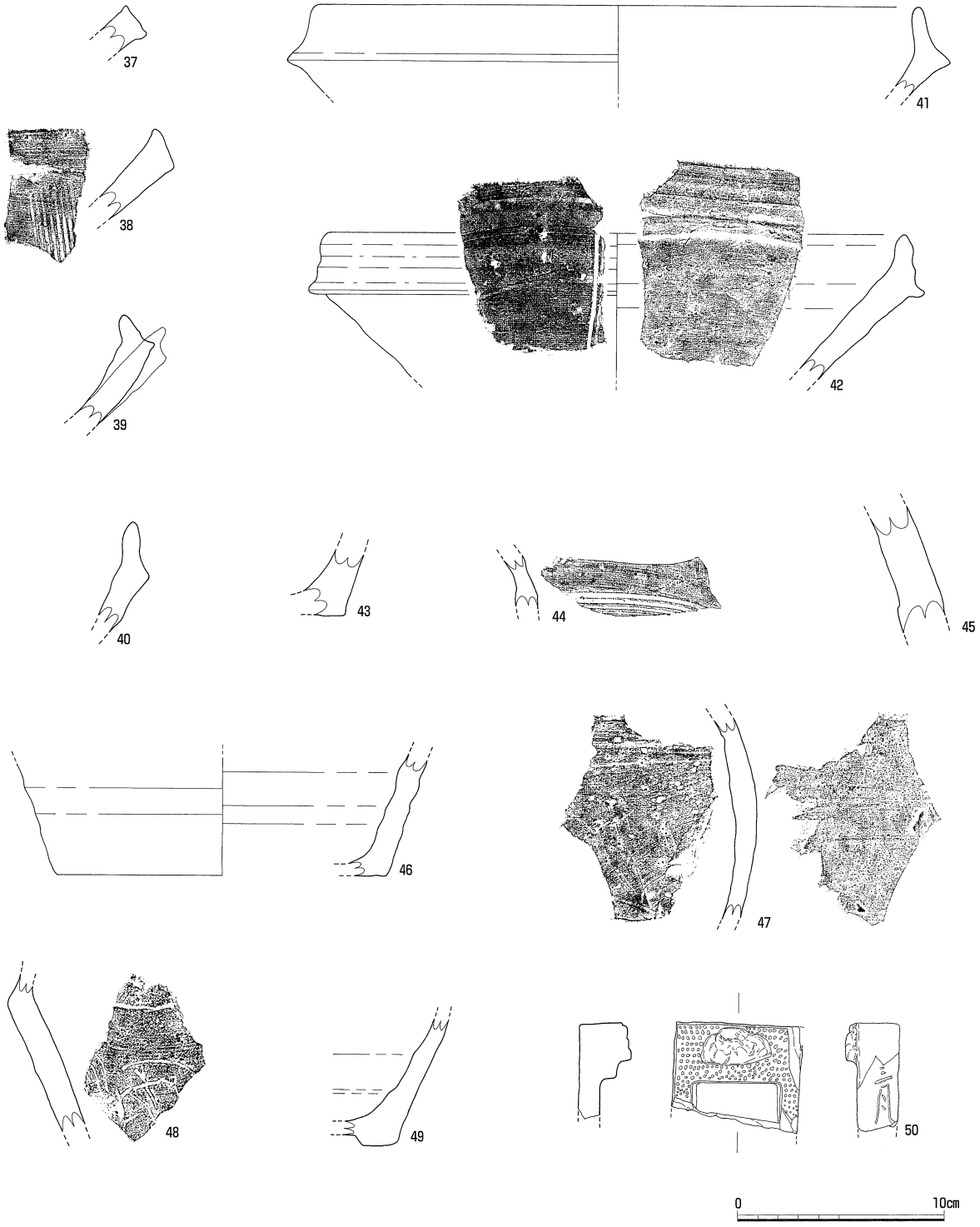
第68図　出土遺物（1）須恵器・土師器（S=1/3）



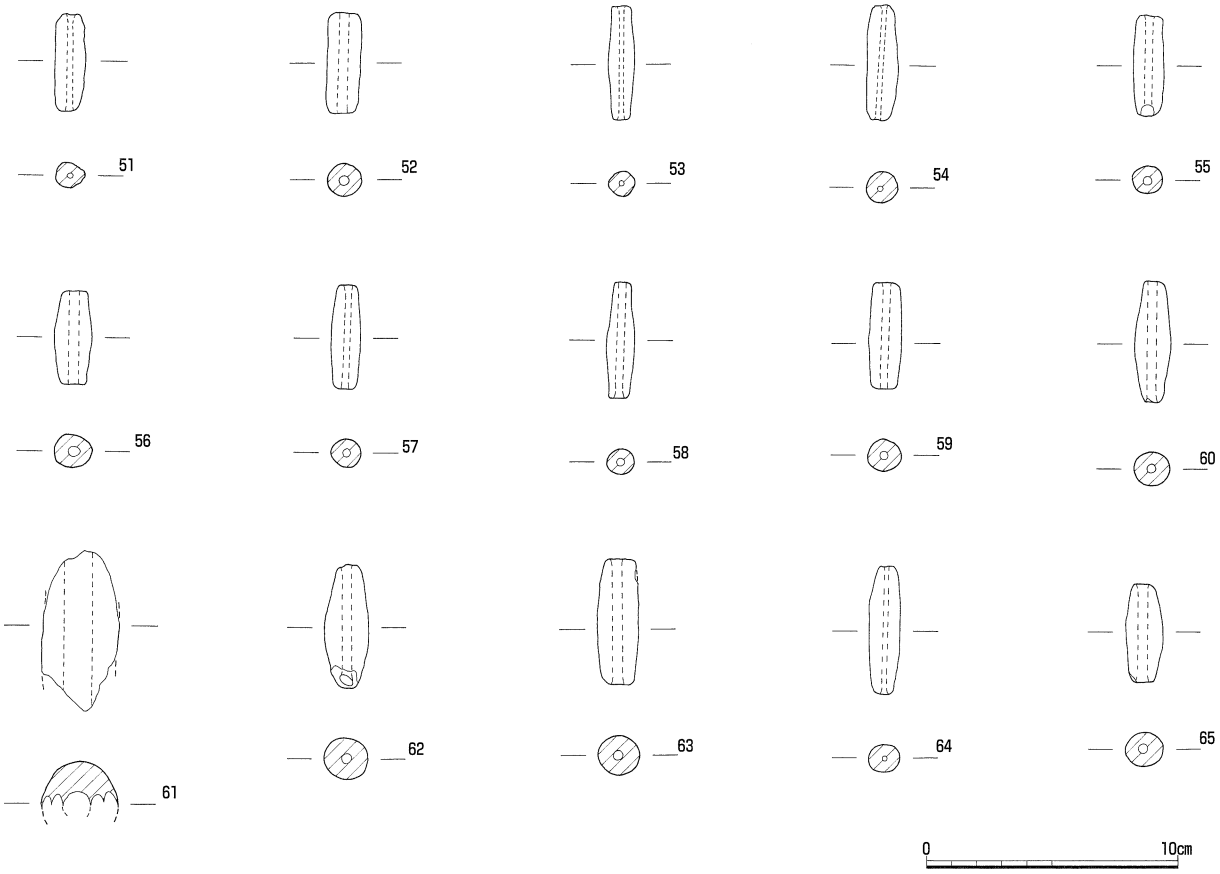
第69図　出土遺物（２）瓦質土器（S=1/3）

陶器

陶器は東播系と考えられるものや備前系・肥前系・国外産など一定の量が出土しているが、いずれも小片である。このうち形態の判明するものについて掲載した。第70図－37～47は備前と考えられるものである。37・38のように口縁端部が面となるものや、39～42のように上方に伸びるものなどがある。擂鉢の割合が多いが壺・甕と判断されるものもわずかながら認められる。48は常滑系と



第70図　出土遺物（３）陶器（S=1/3）



第71図　出土遺物（４）土錘（S=1/3）

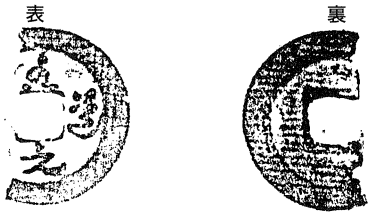
考えられるもの。壺の一部と思われ、外面にはヘラ状の工具によるものか線描き模様が認められる。49は鉢等の底部と考えられるものである。50は硯である。半分以上を失っているが、側面には「三月」と書かれているのが確認できる。

土錘

土錘は全部で約50点と比較的多数が出土している。このうち長細い形をしたもの14点と、それとは形態の異なる1点を第71図に掲載した。前者は長いもので5.1㎝、短いもので3.7㎝を測る。
後者は最大幅が3.1㎝とやや寸胴形である。

銭貨

遺構外から出土した銭貨は第72図に掲載したものである。１／３を失っているが「至道元寶」（草書）と判断できる。初鋳年は995年。



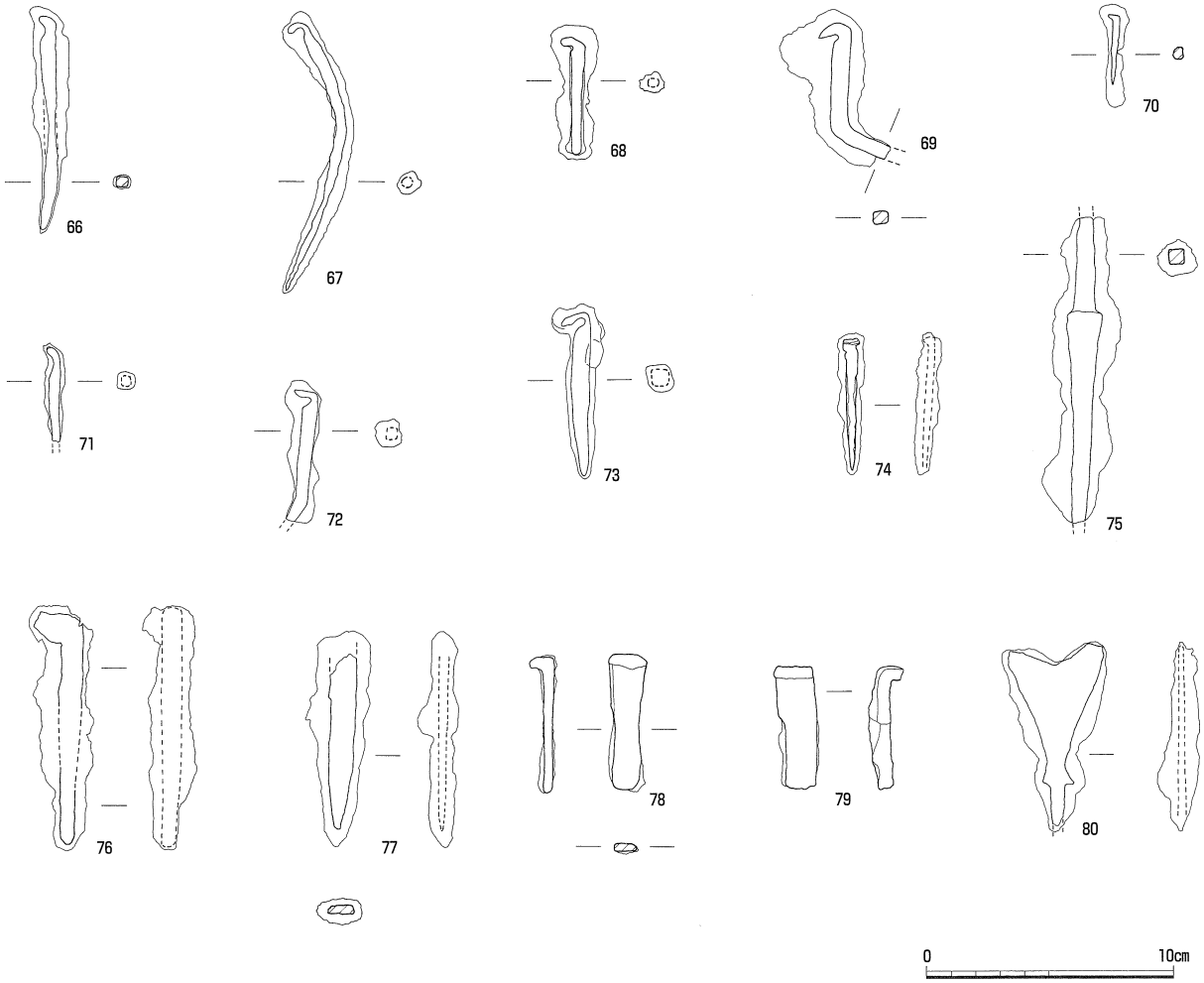
第72図　出土遺物（５）銭貨拓影

鉄製品

鉄製品は約70点の出土があるが、残存状況は良くないものが多い。このうち比較的残りの良いものについて、第73図に掲載した。なお鉄製品については、遺構出土のものと遺構外出土のものを一括で図示し、概略を述べることとしたい。

錆化が進んでおり形態が判別しにくいものが多いが、66～74、76～79は釘、75は鉈、80は鏃と考えられる。このうち67・68・69・70・74・75・76が井戸・溝状遺構・ピットなどからの出土である。

釘は、確認できたもののほとんどの頭部が水平方向に折り曲げられている形態のものである。２つの形態が認められ、釘身の太さが５㎜前後で細いもの（66～74）と、幅が最大で１㎝前後の太いもの（76～71）がある。前者はさらに、10㎝前後のものと５～６㎝前後のものとの二つに分けることが可能である。後者についても10㎝前後のものと５㎝前後のものが認められる。したがって確認できた範囲では大きく４種類のものがあることがわかるが、先述のとおり形態の判別しにくいものも多く、さらにほかの形態が存在する可能性も十分考えられよう。



第73図　出土遺物（６）鉄器（S=1/3）

木製品（井側組桶材・棺材）

平成16年度の調査では、曲物などわずかではあるが木製品を確認することができた。それらについては先に報告したが、ここではそこで取り上げなかった井側組桶材や墓に納められていた木棺の棺材について記すこととしたい。

井側組桶材

第74図～第80図は、井戸１の井側として据えられていた組桶の縦板である。全部で21本の板で構成されており、長さは長いもので83.4㎝、短いもので67.6㎝、幅は最大のもので11.7㎝、最小のもので9.4㎝、厚さは最も厚いものが4.2㎝、薄いものが2.7㎝を測る。平均すると長さ76.2㎝、幅10.3㎝、厚さ3.4㎝前後の板が使用されていた。

板は下端が直線状に切りそろえられており、比較的整った面となっているが、15のように加工がされているものもある。上端はほとんどのものの厚さが薄くなり不整形な形状となっているが、これは井戸の使用に伴って破損・減厚したものと考えられる。

なお、井戸１に伴うこれらの板は、ほかの井戸からのものに比べて脆い状態であった。

第81図～第86図は、井戸４の井側として据えられていた組桶の縦板である。全部で18本の板で構成されていた。長さは長いもので111.8㎝、短いもので88.0㎝、幅は最大のもので13.5㎝、最小のもので8.5㎝、厚さは最も厚いものが5.8㎝、薄いものが2.4㎝を測り、規模にかなりの差が認められる。平均すると長さ98.8㎝、幅11.7㎝、厚さ3.9㎝前後となり、井戸１に比べると大きめの板が使用されている。

板は下端が井戸１のものと同様切りそろえられており、整った形となっている。上端は内面側であった面が減じており、これもおそらく井戸の使用に伴う結果と考えられる。上端はそうしたこともあってかやや脆くなっていたが、それ以外の部分はしっかりと残っており、その多くで表面に鉋？痕が観察できた。

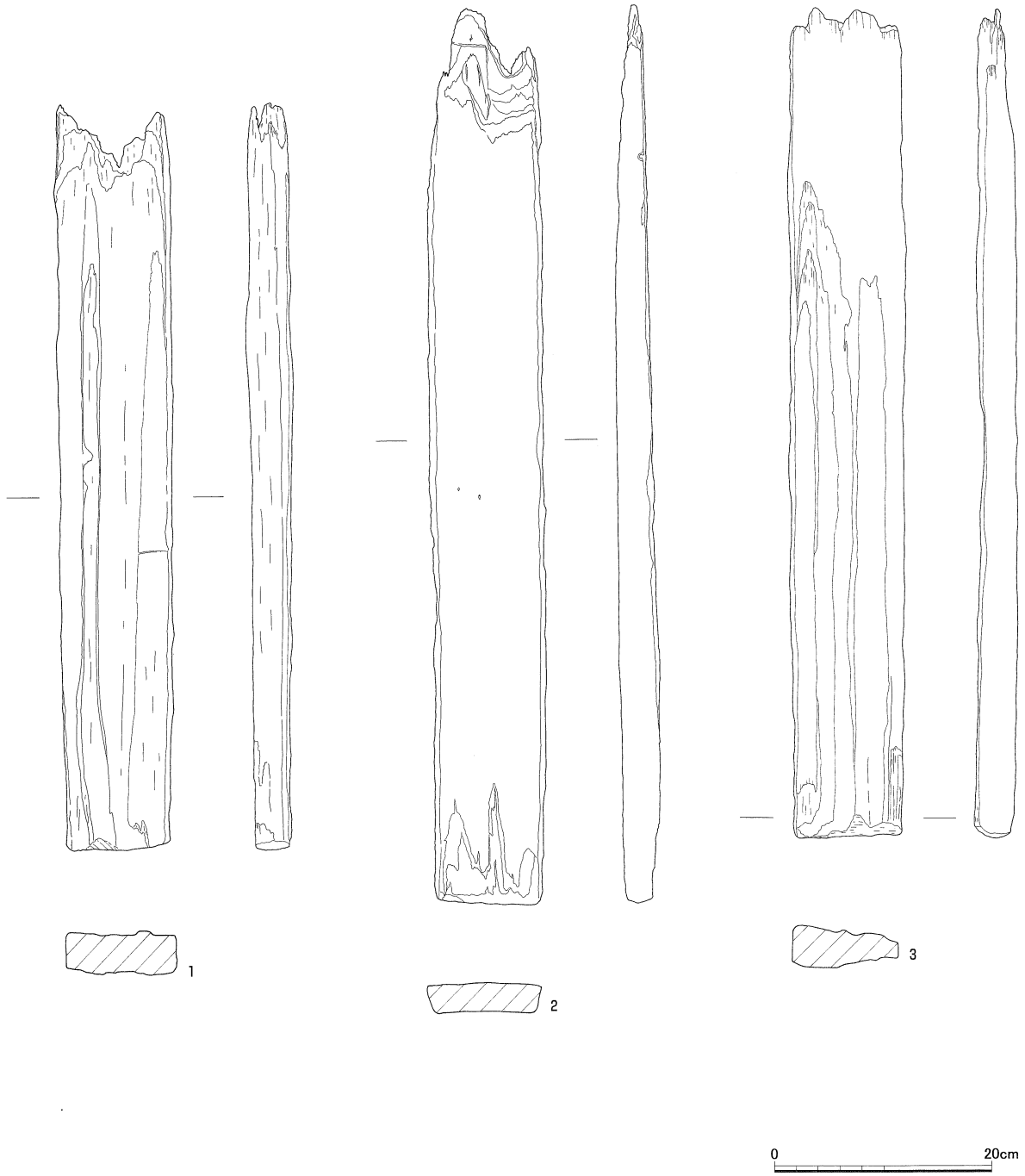
第87図～第94図は、井戸５の井側として据えられていた組桶の縦板である。全部で24本の板で構成されており、今回の調査の中では最も多くの板で構成されている。長さは長いもので117.6㎝、短いもので99.1㎝、幅は最大のもので13.1㎝、最小のもので7.6㎝、厚さは最も厚いものが2.6㎝、薄いものが1.7㎝を測る。規模には差が認められるものの、平均すると長さ106.1㎝、幅9.6㎝、厚さ2.1㎝前後の、整った板が使用されている。

なお、井戸５から確認した板で注目されるのは、第89図―９のように板の上端からやや下のところに約５㎝×６㎝の方形の穴があけられているものや、おそらくそれと同様の構造をもつと考えられる第88図―４のように、建築材等ほかの使用目的が認められる板が存在することである。このことは、井側の構築に際し木材の再利用・転用があったことの一例と言えるであろう。

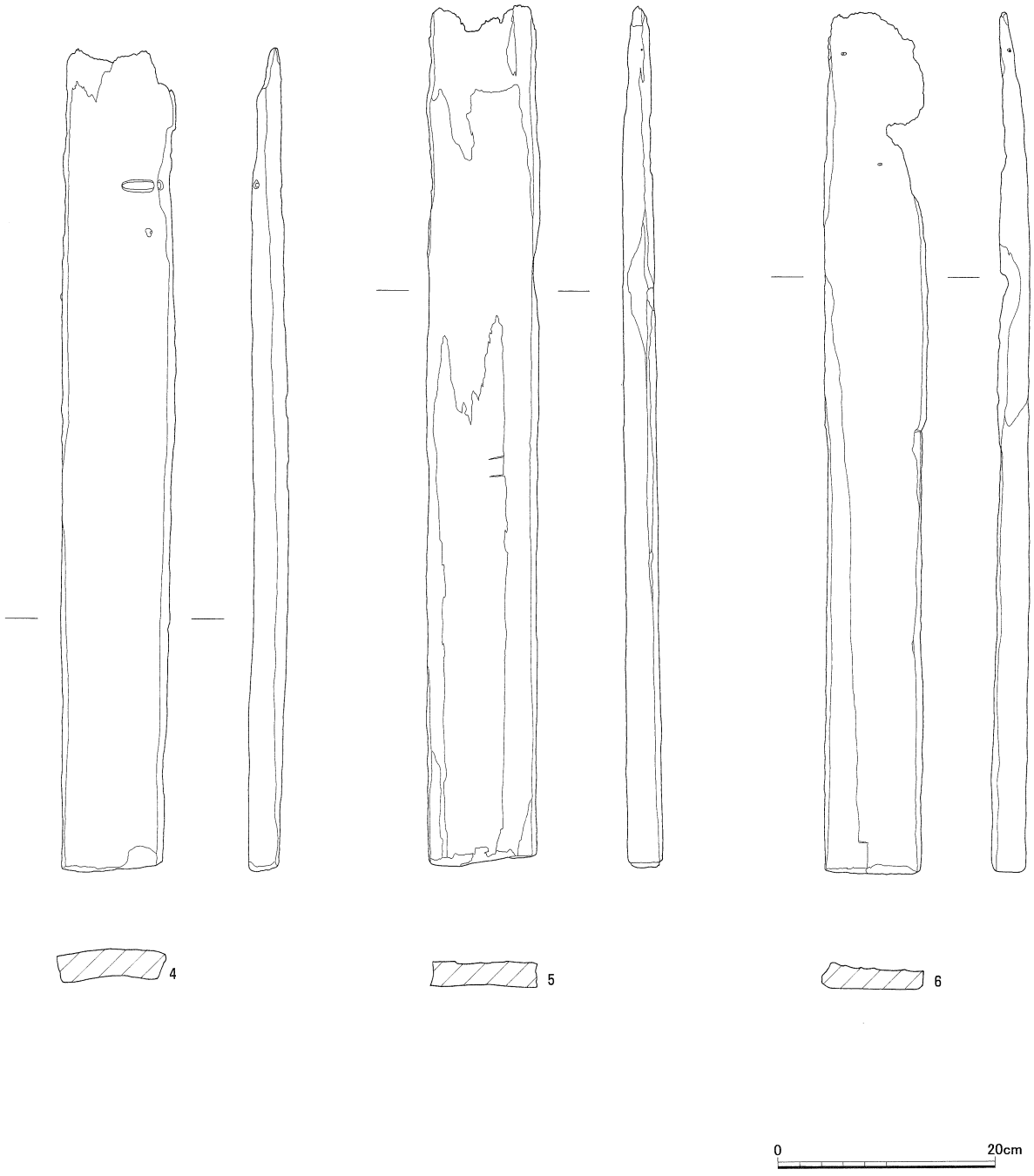
棺材

第95図は墓２に納められていた桶棺の底板である。円形で、径が約42㎝、厚さ２～３㎝を測る。

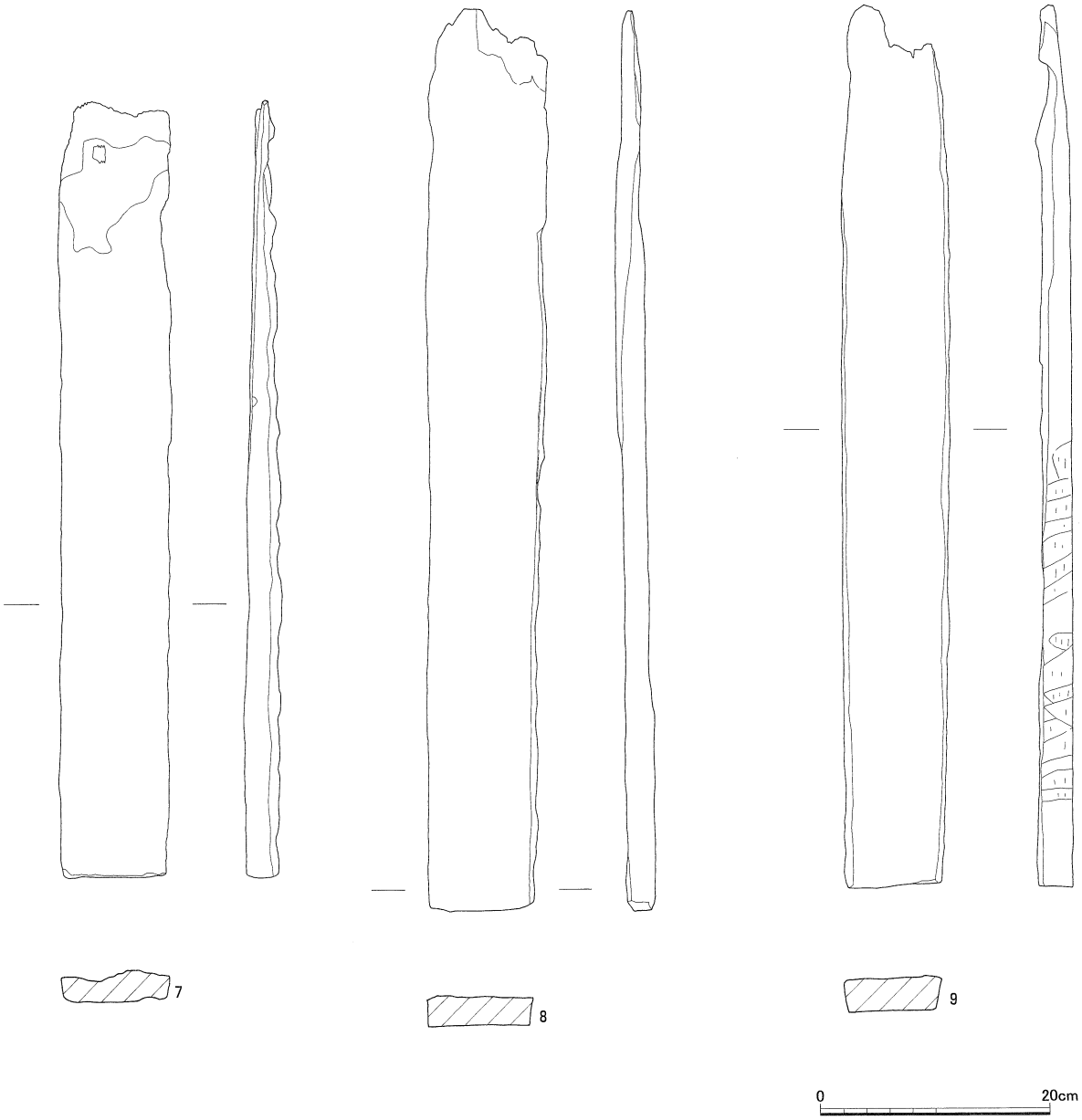
第96図は墓6に収められていた箱型の棺の底板と側板である。底板・側板ともお互いを組み合わせるための加工がされ、側面には釘穴の痕跡が観察できる。



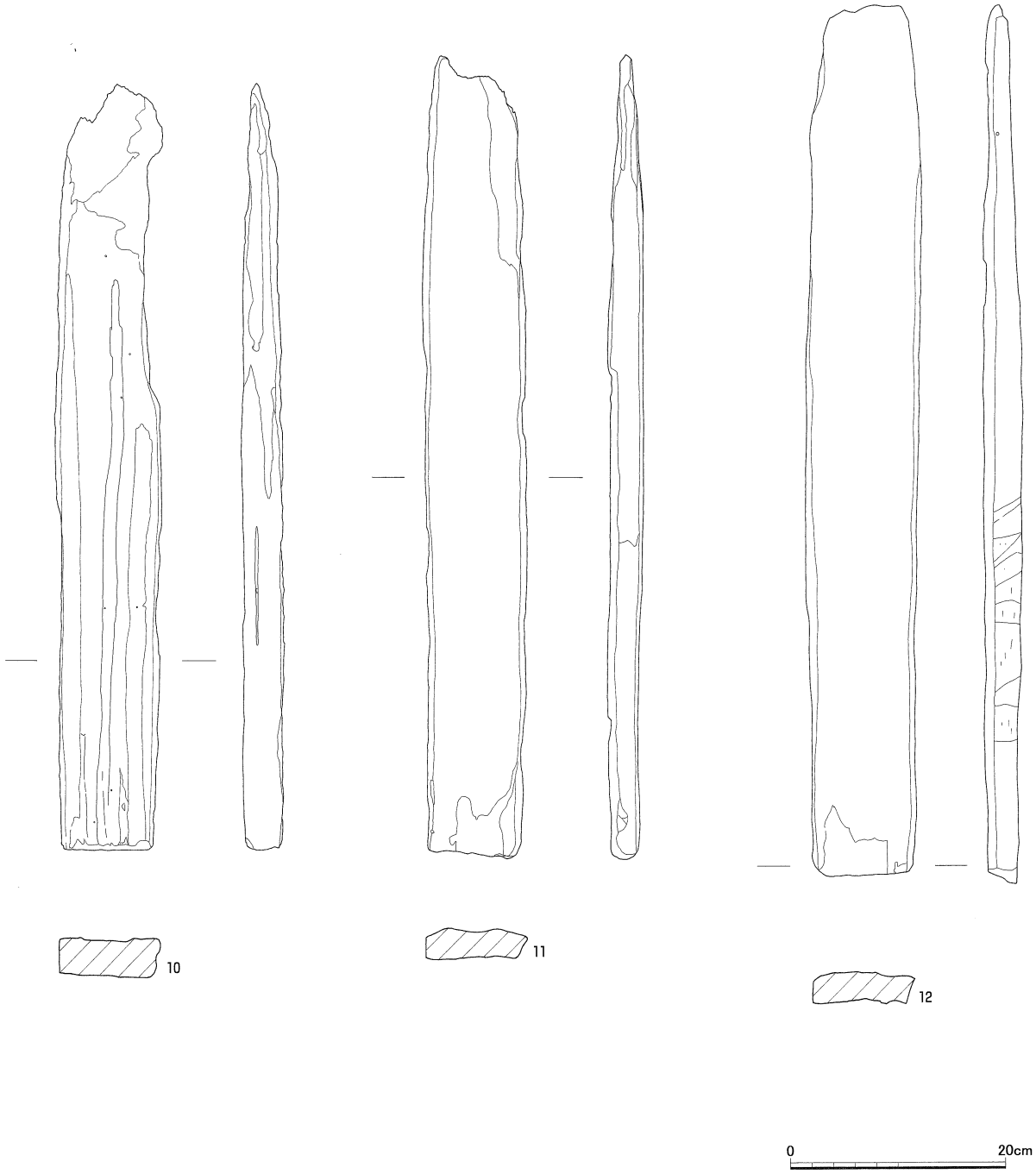
第74図　井戸１　井側組桶材　実測図（１）（S=1/6）



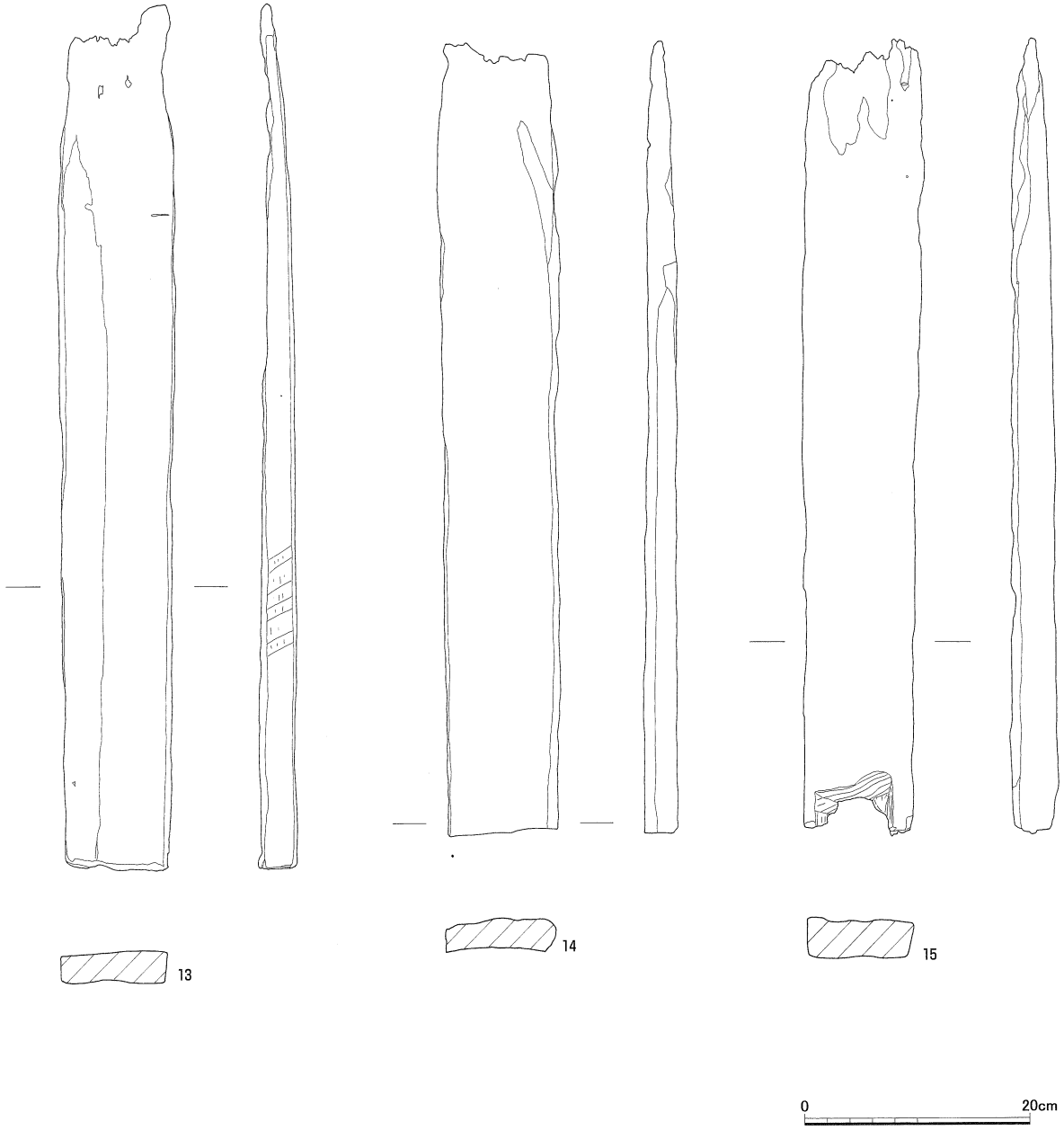
第75図　井戸１　井側組桶材　実測図（２）（S=1/6）



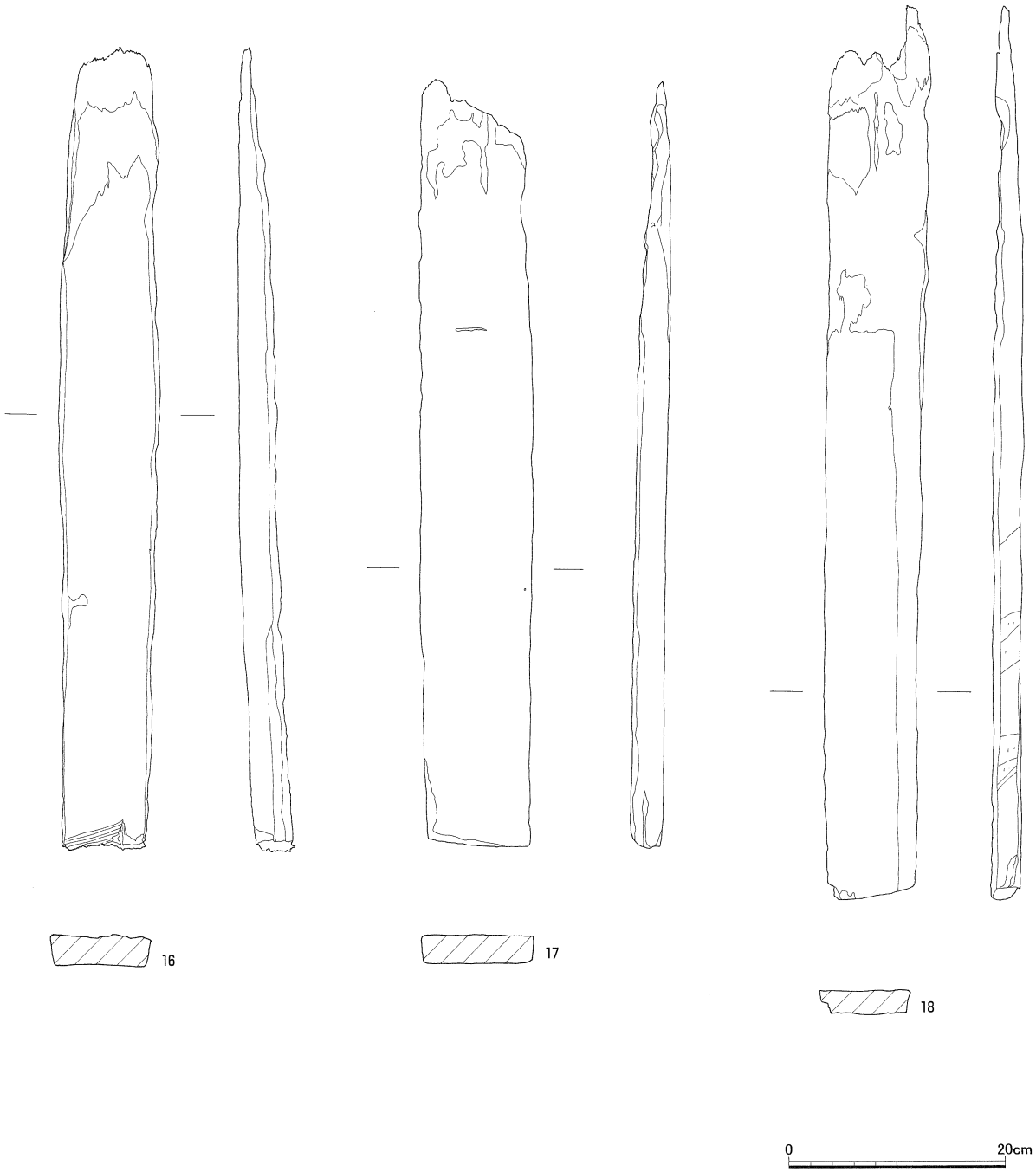
第76図　井戸１　井側組桶材　実測図（３）（S=1/6）



第77図　井戸１　井側組桶材　実測図（４）（S=1/6）

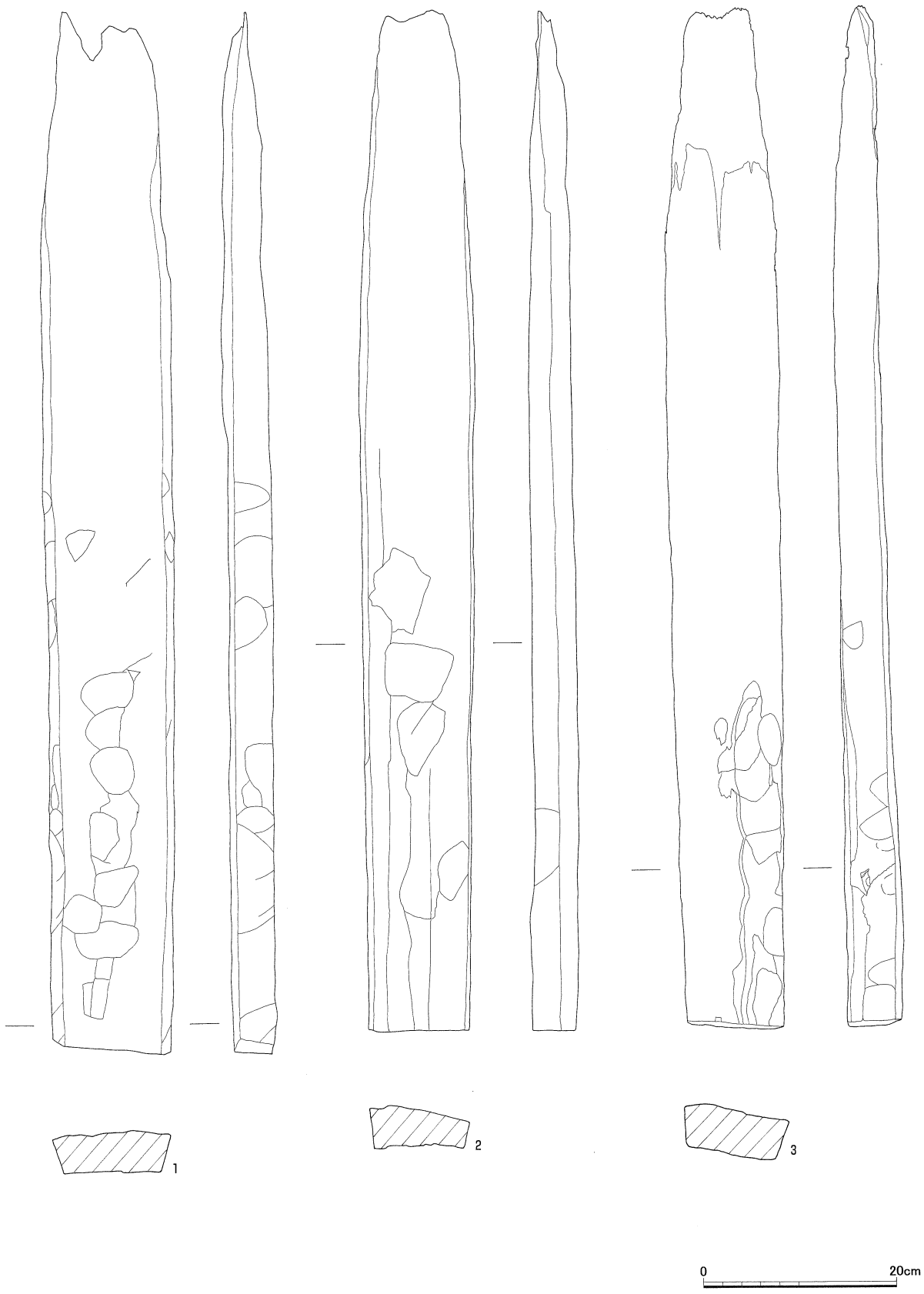


第78図　井戸１　井側組桶材　実測図（５）（S=1/6）

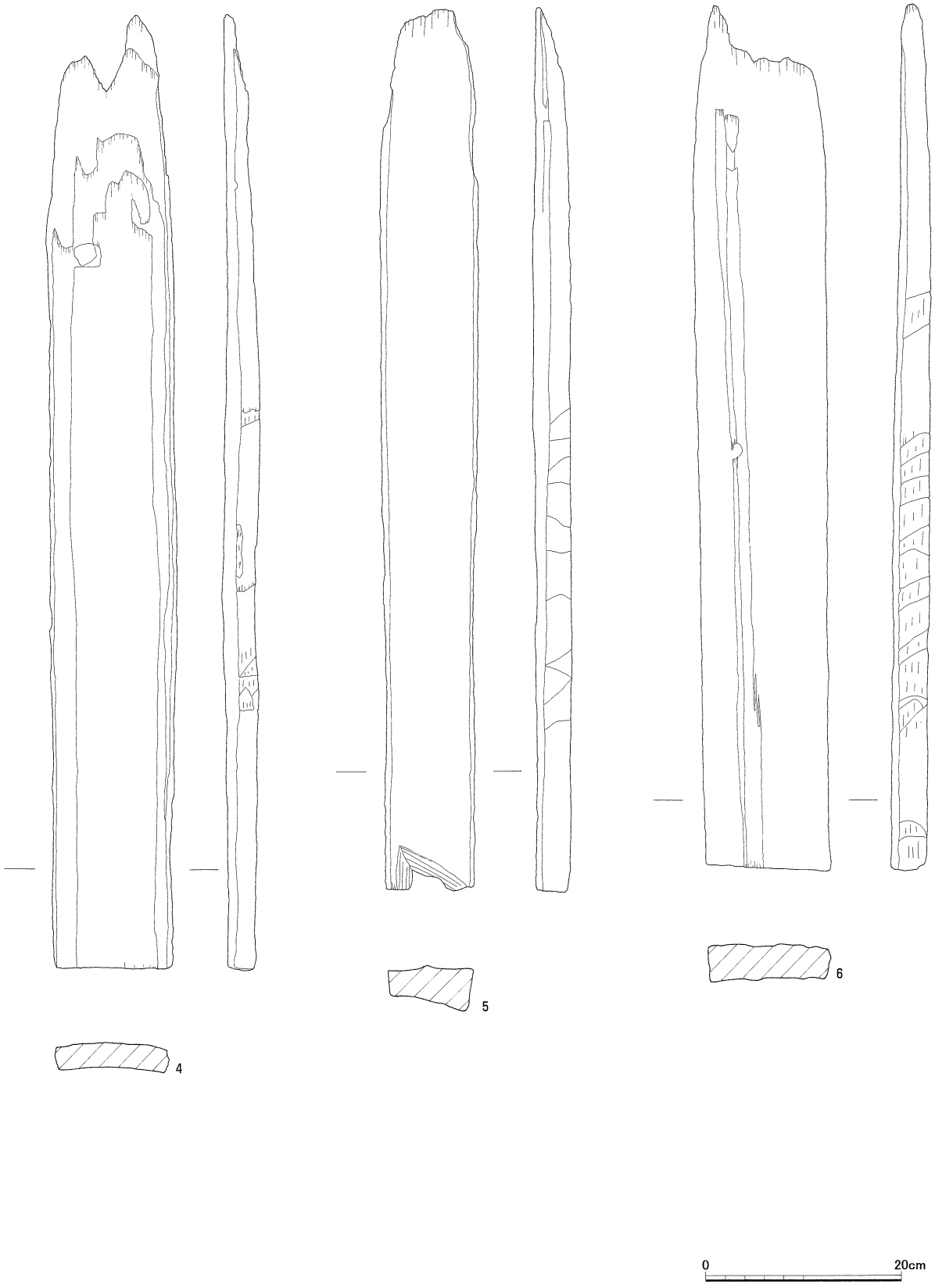


第79図　井戸１　井側組桶材　実測図（６）（S=1/6）

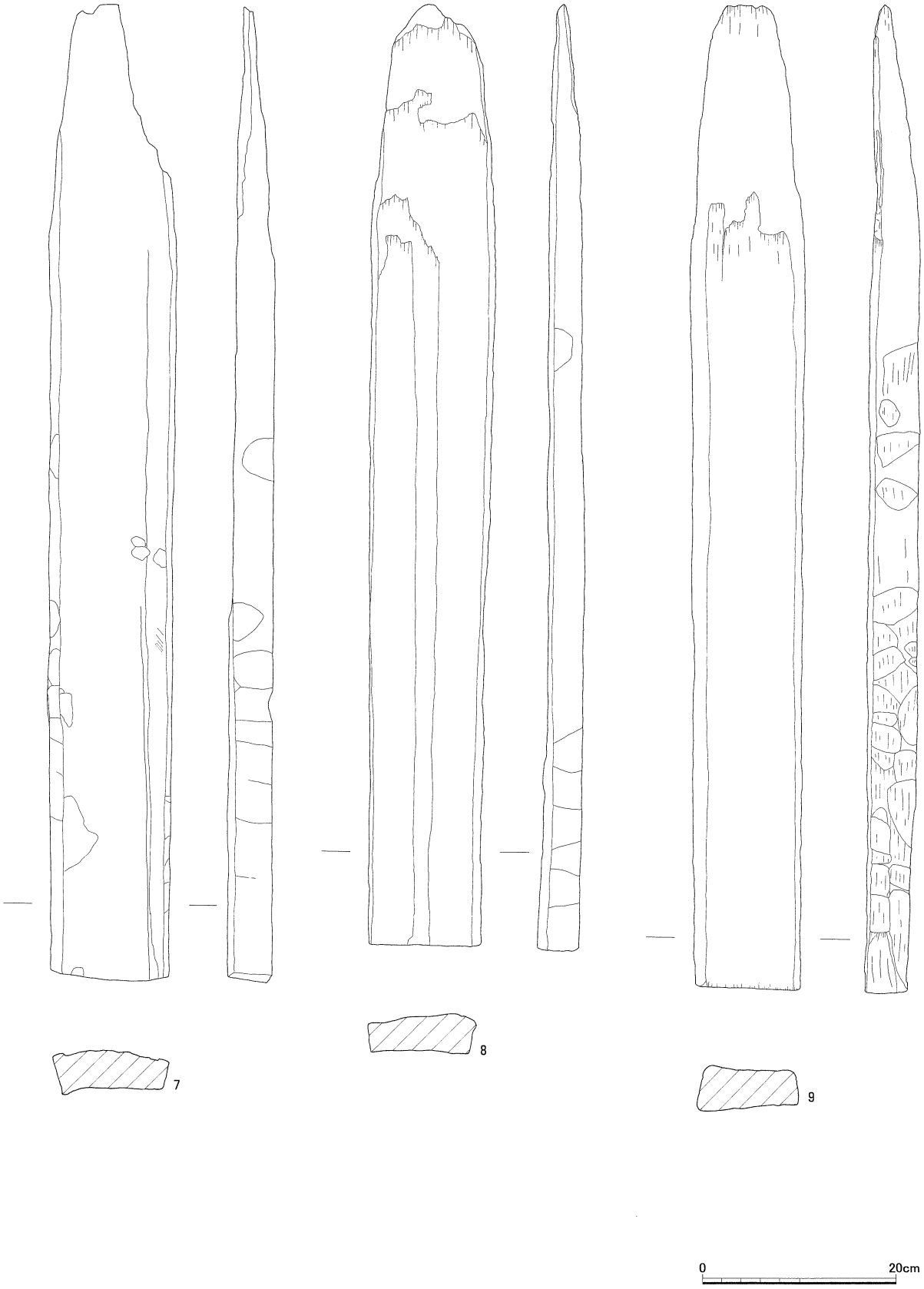
第80図　井戸１　井側組桶材　実測図（７）（S=1/6）



第81図　井戸４　井側組桶材　実測図（１）（S=1/6）

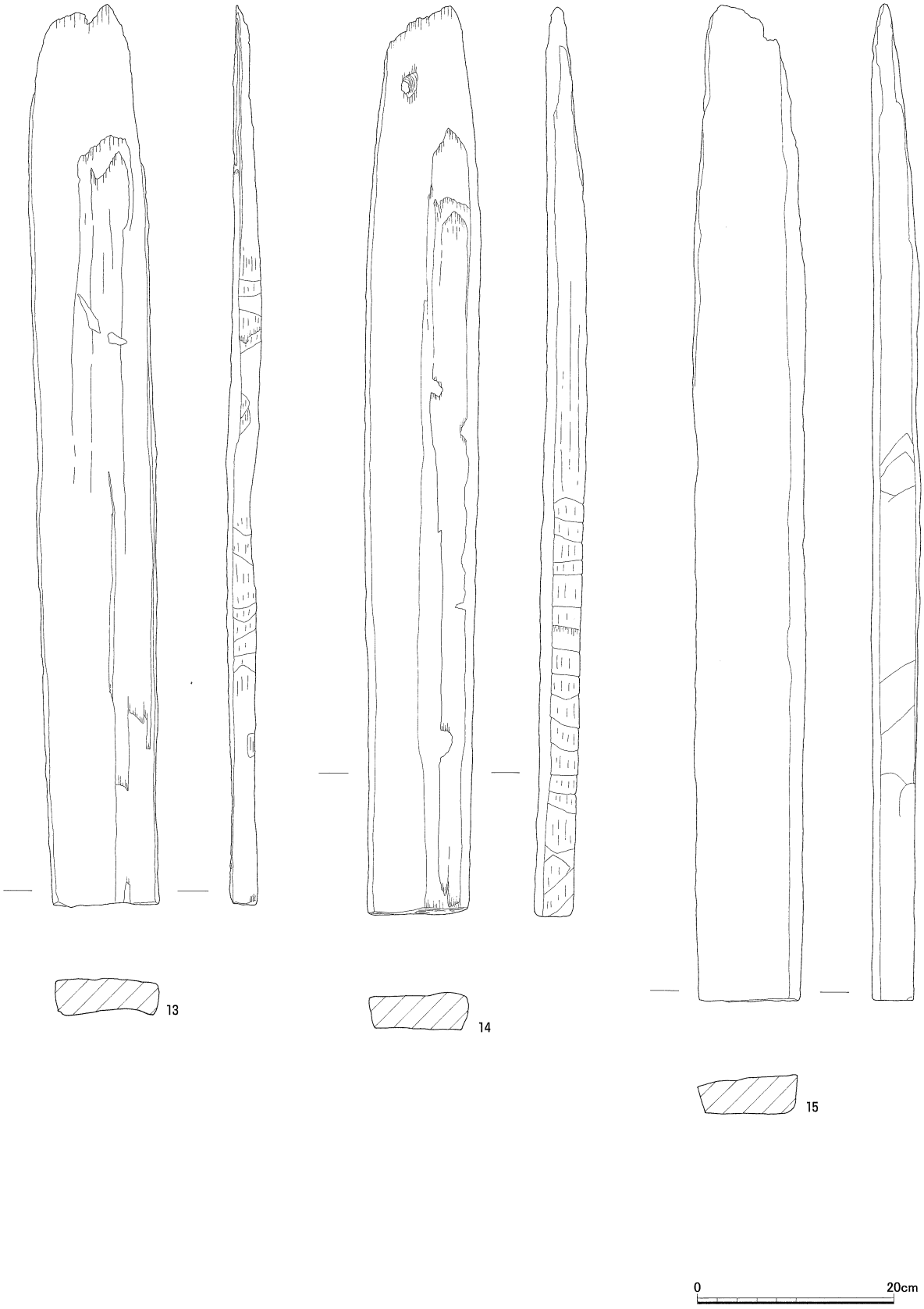


第82図　井戸４　井側組桶材　実測図（２）（S=1/6）



第83図　井戸４　井側組桶材　実測図（３）（S=1/6）

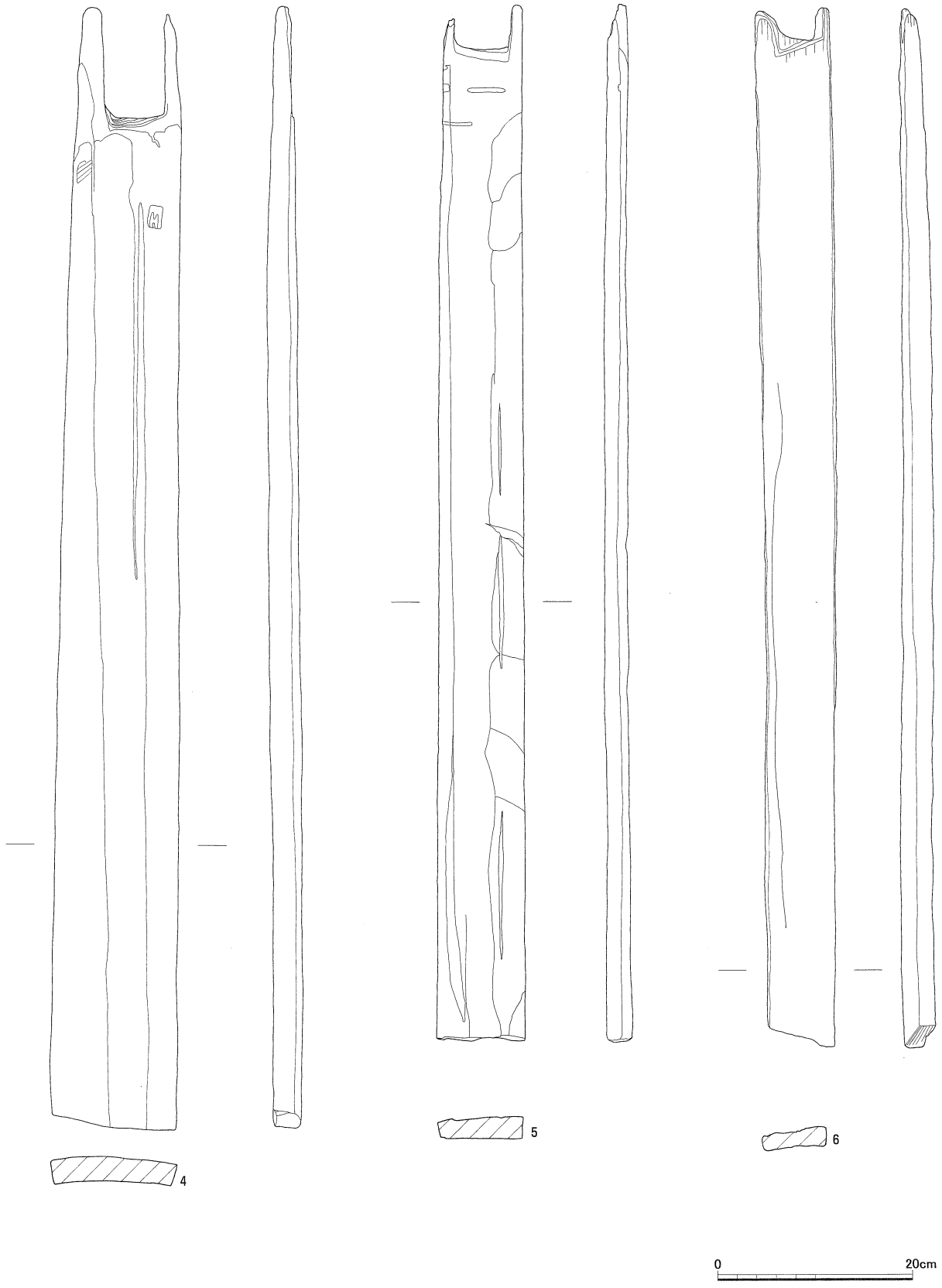
第84図　井戸４　井側組桶材　実測図（４）（S=1/6）



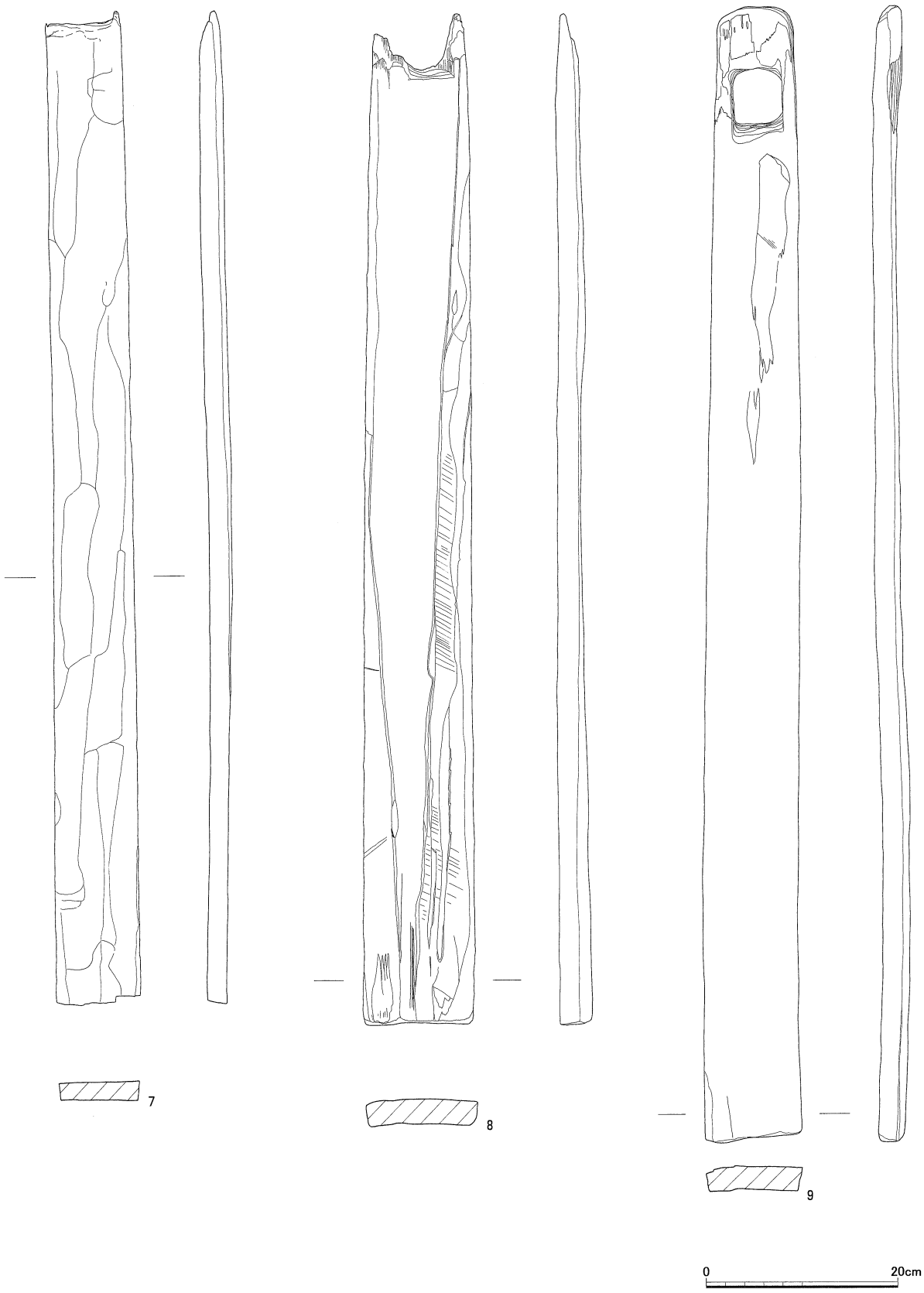
第85図　井戸４　井側組桶材　実測図（５）（S=1/6）

第86図　井戸４　井側組桶材　実測図（６）（S=1/6）

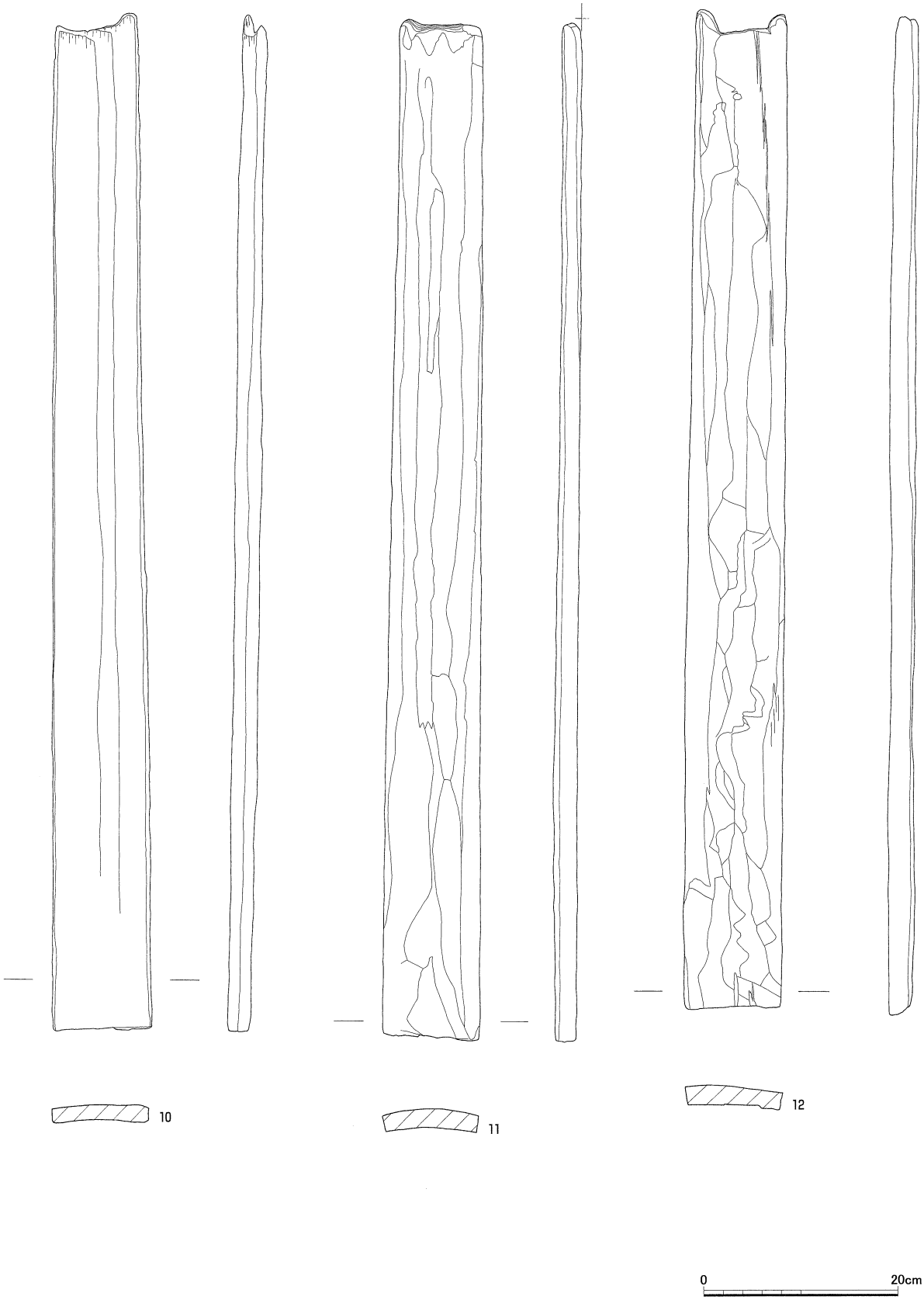
第87図　井戸５　井側組桶材　実測図（１）（S=1/6）



第88図　井戸５　井側組桶材　実測図（２）（S=1/6）



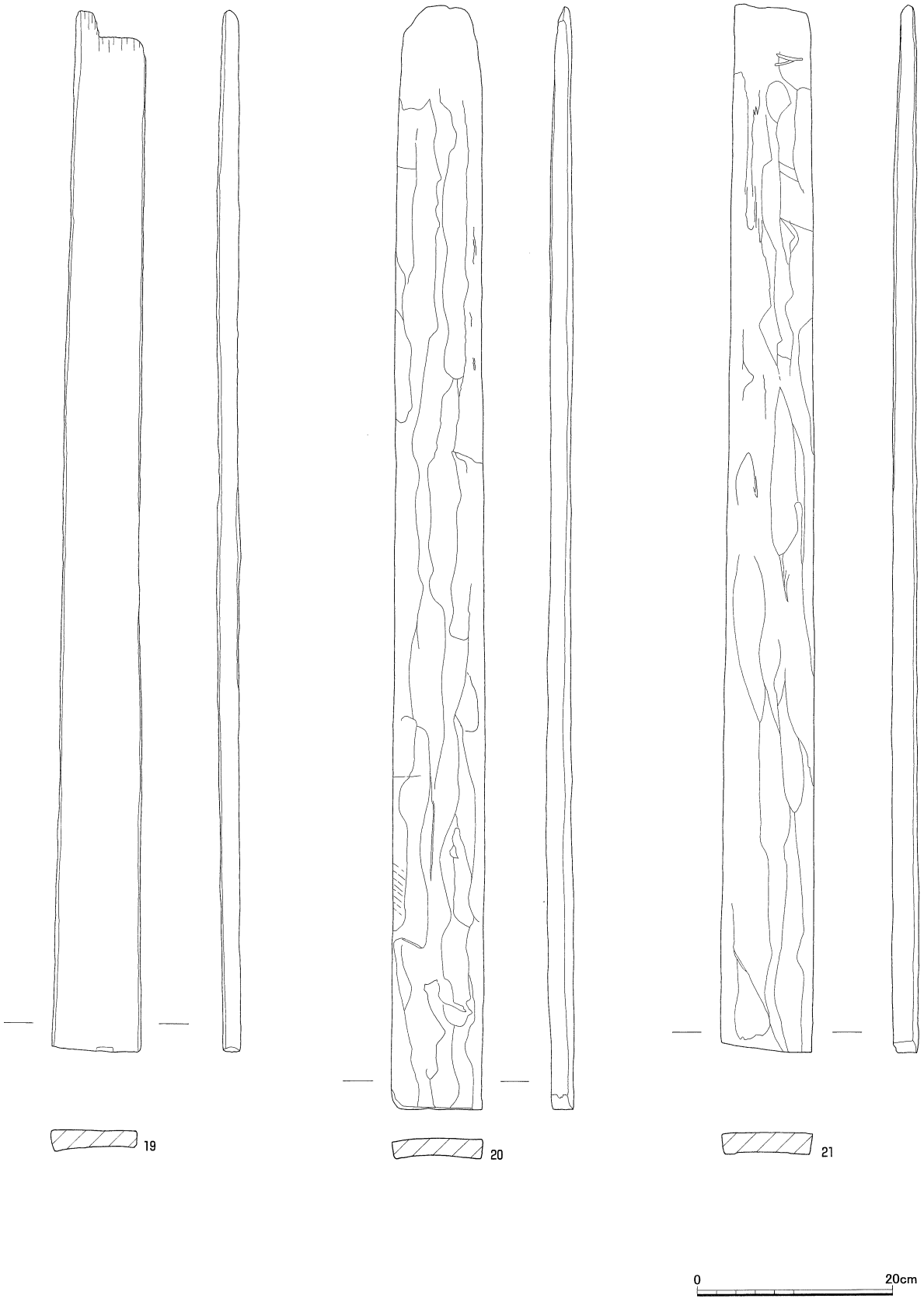
第89図　井戸５　井側組桶材　実測図（３）（S=1/6）



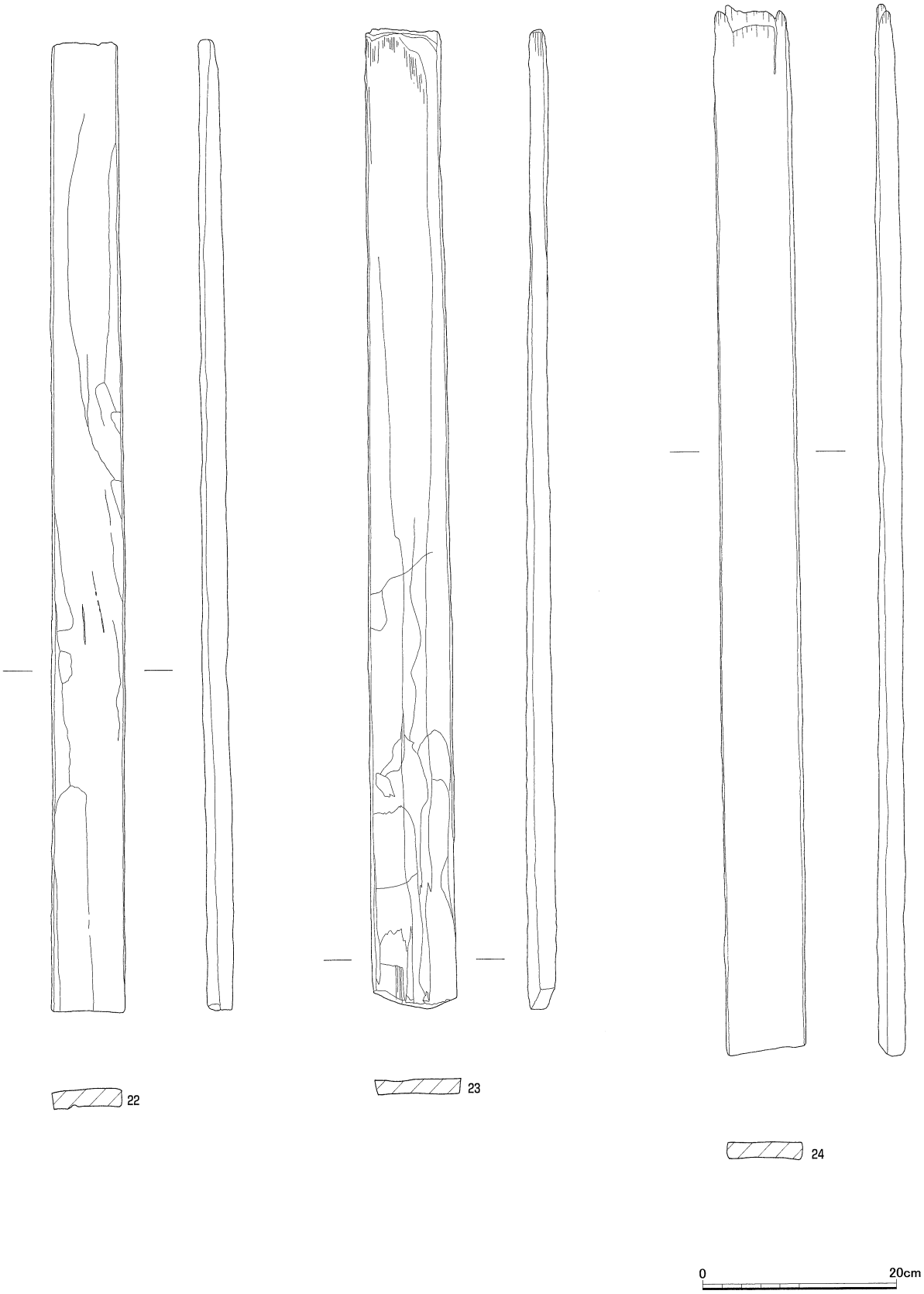
第90図　井戸５　井側組桶材　実測図（４）（S=1/6）

第91図　井戸５　井側組桶材　実測図（５）（S=1/6）

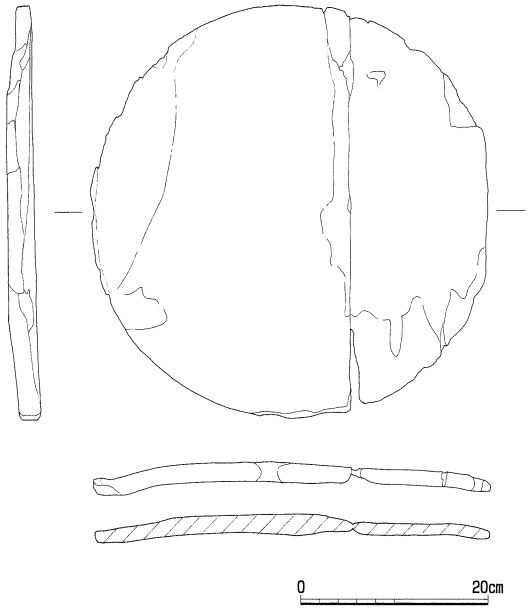
第92図　井戸５　井側組桶材　実測図（６）（S=1/6）



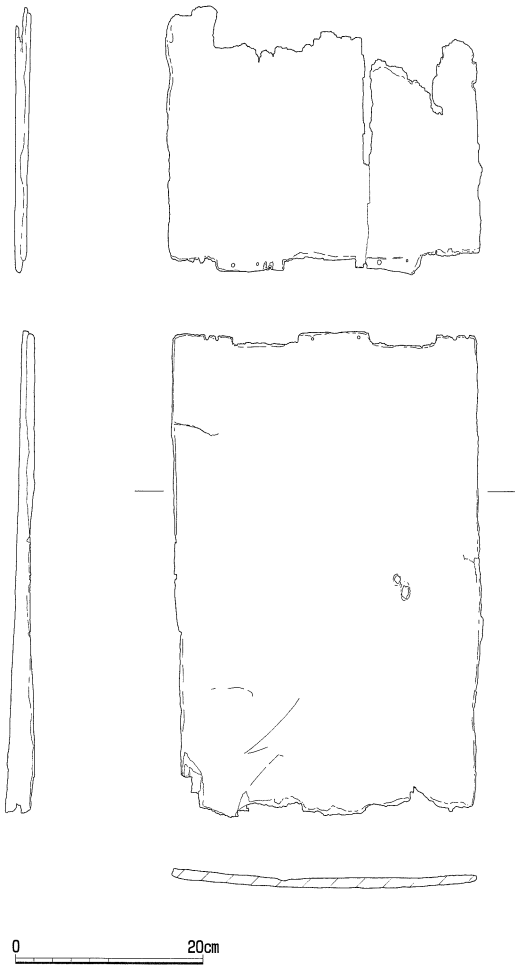
第93図　井戸５　井側組桶材　実測図（７）（S=1/6）



第94図　井戸５　井側組桶材　実測図（８）（S=1/6）



第95図　墓２（ＳＫ39）棺底板実測図（S=1/8）



第96図　墓６（ＳＫ75）棺材実測図（S=1/8）

第４表　溝状遺構２・３（ＳＤ２・ＳＤ４）　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
15－1	17	白磁	椀	溝状遺構2					口縁部は玉縁状	外： 内：				(椀Ⅳ類)
15－2	17	白磁	椀	溝状遺構2						外： 内：				
15－3	17	白磁	椀	溝状遺構2					口縁部は口禿げ	外： 内：				
15－4	17	白磁	皿	溝状遺構2						外： 内：				
15－5	17	白磁	水注	溝状遺構2						外： 内：				把手部分と考えられる
15－6	17	青磁	椀	溝状遺構2					外面に鎬蓮弁文	外： 内：				(龍泉窯系)
15－7	17	白磁	椀	溝状遺構2						外： 内：				(椀Ⅳ類)高台部
15－8	17	青磁	椀	溝状遺構2				6.0		外： 内：				高台内露胎
15－9	17	青花	椀	溝状遺構2		(12.4)			外面に一条、内面に三条の回線	外： 内：				
15－10	17	青花	椀？	溝状遺構2					草花文	外： 内：				
15－11		土師器	坏	溝状遺構2				(6.6)	底部は糸切り	外：回転ナデ内：回転ナデ	精良	良好	橙	
15－12	17	土師器	坏	溝状遺構2						外：回転ナデ 内：ナデ	精良	良	浅黄橙	
15－13	17	瓦質土器	擂鉢	溝状遺構2					内面には擂目	外：ナデ？ 内：ハケメ、ナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰～黒	口径、傾きは不明
15－14	17	瓦質土器	足鍋	溝状遺構2						外：ナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	浅黄～黄灰	口径、傾きは不明
15－15	17	瓦質土器	足鍋	溝状遺構2						外：ナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	オリーブ灰～灰	口径、傾きは不明
15－16			土錘	溝状遺構2		現存長 2.9	最大幅 1.5	孔径 0.4						
15－17			土錘	溝状遺構2		現存長 3.5	最大幅 1	孔径 0.35						
15－18		陶器	擂鉢	溝状遺構2						外：ナデ 内：ナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰	備前
15－19		瓦質土器	足鍋	溝状遺構2		現存長 5.8				外：粗いナデ 内：				
16－1	18	陶器	擂鉢	溝状遺構3		(30.4)			擂目（６条） 口縁端部は上方に引き上げられる	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	内：褐灰 外：にぶい赤褐～黄褐	備前
16－2	18	瓦質土器?	擂鉢	溝状遺構3					擂目（５条）	外：粗いナデ 内：丁寧なナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰～灰白	同一個体か
16－3	18	瓦質土器?	擂鉢	溝状遺構3					擂目（５条）	外：粗いナデ 内：丁寧なナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰	
16－4	18	瓦質土器?	擂鉢	溝状遺構3					擂目（５条）	外：粗いナデ 内：丁寧なナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰	

第５表　井戸１（ＳＫ１）・井戸３（ＳＫ18）・井戸４（ＳＫ21）・井戸５（ＳＫ70）　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
19－1	19	白磁	皿	井戸1		(11.0)			口縁部は口禿げ	外： 内：				(ⅢⅨ類)
19－2	19	白磁	椀	井戸1				5.1	内面見込みには花文	外： 内：				(Ⅸ類)
19－3	19	青磁	皿	井戸1		(10.0)			体部中位で屈曲	外： 内：				(同安系)
19－4	19	青磁	椀	井戸1					内面には劃花文	外： 内：				(龍泉窯系)
19－5	19	青磁	椀	井戸1					外面には鍋蓮弁文	外： 内：				(龍泉系)
19－6	19	天目	椀	井戸1				3.8 (2.5)		外： 内：				中国産か
19－7	19	朝鮮	椀	井戸1					低い高台がつく	外： 内：				全体に灰白色の施釉
19－8	20	土師器	坏	井戸1				6.2	底部は糸切り	外： 内：回転ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	良好	橙	
19－9	20	土師器	鉢	井戸1						外：ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
19－10	20	瓦質土器	鉢	井戸1					口縁端部はわずかに折り曲げられる	外：ヨコナデ 内：ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	外：灰 内：黄灰	
19－11	20	瓦質土器	鉢	井戸1					口縁端部は折り返し(貼り付けの可能性あり)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰白	
19－12	20	瓦質土器	鍋	井戸1					口縁部は外方に屈曲	外：ナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	外：灰 内：黄褐	
19－13			砥石	井戸1						外： 内：				
19－14	20	陶器	擂鉢	井戸1					擂目（５条）	外：ナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を含む		赤～赤褐	備前
19－15	20		石鍋	井戸1		(30.0)			鍔（断面縦長張出台形？）	外： 内：				口径は推測
22－1		瓦質土器	鉢	井戸3						外：粗いナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰	
25－1	21	瓦質土器	擂鉢	井戸4		19.8 (21.0)			口縁端部は内側にやや屈曲　幅7～8㎜の平坦面を有する 擂目（５条）	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰白	
25－2	21	土師器	擂鉢	井戸4		26.6 (28.0)			口縁端部に沈線(１条) 擂目（６条） 底部外面に板目	外：粗いナデ、ハケメ 内：ハケメ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
27－1		陶器	擂鉢	井戸5					擂目（８条か）	外：ナデ 内：ナデ			灰黄～灰黄褐	底部のみ残存
27－2		瓦質土器	羽釜	井戸5						外：器表面に煤が付着しており調整不明瞭 内：ハケメ	精良	良好	灰黄	傾きは推定
27－3		瓦質土器	羽釜	井戸5						外：風化により不明瞭(ナデか) 内：ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰白	傾きは推定

第６表　建物跡１・建物跡３関連遺構・建物跡４関連遺構　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
31—1		青磁	椀	P925					内面は片彫り蓮花文	外： 内：				龍泉窯系Ⅰ類
36—1	22	青磁	椀	P1318						外： 内：				高台畳付まで施釉
36—2	22	土師器	皿？	SK56		9.0	1.5	5.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	端部が不明のため坏の可能性あり
36—3	22	青磁	椀	P1307						外： 内：				
36—4	22	瓦質土器	擂鉢	P1342					擂目(4～5条) 端部貼り付け	外：ナデ、粗いナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	灰	口径、傾きとも不明
36—5	22	瓦質土器	擂鉢	P1342					端部貼り付け	外：ナデ 内：ナデ	1mm程度の砂粒を含む	軟	灰	口径、傾きとも不明
36—6		瓦質土器	擂鉢	SK43		(27.0)			断面三角形状の肥厚（貼り付け） 擂目（８条）	外：粗いナデ 内：粗いハケメ	1～2mm程度の砂粒を含む	軟？	灰	
36—7	22		土錘	P1152		現存長 4.6	最大幅 1.2	孔径 0.4						
36—8	22		土錘	P1151		現存長 5.6	最大幅 1.4	孔径 0.4						
42—1	23	白磁	皿	SK50		(9.6)	2.3	(3.8)		外： 内：				高台下半まで施釉 見込みには胎土目
42—2	24	白磁	椀	P1356		(13.8)	6.7			外： 内：				全面施釉(灰白色) 朝鮮半島産?
42—3	23	青磁	椀	P1348					外面には雷文	外： 内：				
42—4	23	青磁	椀	P1348						外： 内：				
42—5	23	青磁	椀	SK55				5.4 (5.6)	内面見込みは草花文	外： 内：				高台畳付近くまで施釉
42—6	23	土師器	皿	P1167		6.8	1.5 ～1.8	4.8	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	精良	良好	浅黄橙	口縁端部に煤付着 灯明の可能性
42—7	23	土師器	坏	P1182				5.2	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良		にぶい黄橙	
42—8	23	土師器	坏	P1334		(12.8)			口縁端部は面を有する	外： 内：				
42—9		土師器	坏	P1348				7.8	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	にぶい黄橙	
42—10	23	土師器	坏	P1188				7.0		外：風化により不明瞭 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
42—11	23	土師器	坏	P1334				7.2 ～8.5	底部は糸切り	外：回転ナデ？ 内：回転ナデ？	精良	良好	灰黄褐 ～暗黄灰	
42—12	23	瓦質土器	擂鉢	P1186					口縁端部は粘土貼り付け	外：ナデ 内：ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	やや良	灰	口径、傾きは不明
42—13	23	土師器	擂鉢	P1286						外：ナデ 内：ハケメ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	淡黄 ～浅黄橙	
42—14	23	瓦質土器	鉢	P1182						外：回転ナデ 内：回転ナデ	1㎜程度の砂粒を含む		灰	口径、傾きは不明
42—15	23	瓦質土器	足鍋	SK55						外： 内：				脚部の一部のみ
42—16			土錘	SK51		現存長 4.9	最大幅 1.4	孔径 0.4						
42—17			土錘	SK55		現存長 3.0	最大幅 1.3	孔径 0.4						赤色顔料
42—18			土錘	P1164		現存長 3.6	最大幅 1.2	孔径 0.4						赤色顔料
42—19			土錘	P1186		現存長 4.7	最大幅 1.3	孔径 0.4						赤色顔料
42—20			土錘	P1250		現存長 2.6	最大幅 1.0	孔径 0.3						
42—21			土錘	P1286		現存長 4.0	最大幅 1.3	孔径 0.4						
42—22			土錘	P1286		現存長 3.5	最大幅 1.1	孔径 0.4						
42—23			土錘	P1329		現存長 4.0	最大幅 1.1	孔径 0.4～0.5						
42—24			土錘	P1286		現存長 5.0	最大幅 1.4	孔径 0.3						
42—25			土錘	P1332		現存長 5.4	最大幅 1.3	孔径 0.4						
42—26			土錘	P1337		現存長 4.6	最大幅 1.1	孔径 0.5						

第７表　石列・溝状遺構５　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
47—1		白磁	椀？	石列		(12.4)				外： 内：				施釉
47—2		青磁	椀	溝				(5.0)		外： 内：				施釉 高台外面は露体
47—3		白磁	椀	溝				(5.8)		外： 内：				施釉 高台外面は露体
47—4		青磁？	椀	石列				4.5		外： 内：				施釉 高台外面は露体
47—5		陶器	壺？	石列						外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜以下の砂粒を含む	良好	褐灰～灰	傾きは推定
47—6		瓦質土器	擂鉢	石列					擂目	外：粗いナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を含む	良好	灰白	傾きは推定
47—7		瓦質土器	足鍋	溝		現存長 4.6				外：ヘラケズリ 内：				
47—8			土錘	溝		現存長 4.3	最大幅 1.1	孔径						

第8表　墓1(SK38)・墓2(SK39)・墓3(SK71)・墓5(SK74)・墓6(SK75)・墓4(SK77)・SK26　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
49—1		土師器	坏	墓1		13.0	2.8～2.9	6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	黄橙	
51—1		土師器	坏	墓2		12.2	2.5	6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ		良好	灰白～淡黄	
53—1		土師器	坏	墓3		13.2	2.8	6.4	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
53—2		土師器	坏	墓3		13.2	2.8	6.4	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
55—1		土師器	坏	墓4		12.2	2.8～3.0	6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
57—1		土師器	坏	墓5		12.2	2.3～2.6	5.6	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白～黄灰	
57—2		瓦質土器	足鍋	墓5						外： 内：		良好	灰	ヘラケズリ、ナデによる整形か
59—1		土師器	坏	墓6		13.4～14.0	2.8～2.9	6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	
60—1	29	陶器	甕	SK26-1						外：ナデ 内：タタキ？				口径等は推定コンテナ用か？

第9表　SK91・SK92　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
64—1		白磁	椀	SK91					口縁部は玉縁状	外： 内：				(Ⅳ類) 口径、傾きとも推定 施釉
64—2		陶器	鉢	SK91						外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰	口径等不明
64—3		土師器	擂鉢	SK92				(10～12)		外： 内：	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
64—4		瓦質土器	擂鉢	SK92				(12.0)	一部に擂目	外：粗いナデ、ハケメ、板目 内：風化により不明瞭、ナデ？	1～2mm程度の砂粒を含む	軟	淡黄～暗灰黄	
64—5		須恵器	甕	SK92						外：タタキ（平行） 内：タタキ（同心円）	密	良好	青灰	傾きは推定
64—6		瓦質土器	擂鉢	SK95					一部に擂目	外：粗いナデ 内：ハケメ	ほとんど砂粒を含まない	良好	灰	口径等不明
64—7		瓦質土器？	釜	SK92						外：ナデ 内：ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良？	にぶい赤褐	

第10表　ピット　出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法(cm) 口径	器高	底径	形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
65—1	28	土師器	坏	P-197		(13.2)	5.0	7.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
65—2	28	土師器	皿	P-210		7.4	2.0	3.8	柱状高台 穿孔 底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	淡黄～浅黄橙	
65—3			砥石	P-221		現存長 7.6	最大幅 3.5	最大厚 2.5		外： 内：				
65—4		土師器	坏	P-277				5.2	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ？風化により不明瞭	1mm程度の砂粒を含む	良	黄橙	
65—5	27	白磁	椀	P-294		(15.4)			口縁は直口	外： 内：				
65—6	28	土師器	坏	P-334		(14.8)	(4.2)	(5.4)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良	橙～浅黄橙	
65—7	27	白磁	椀	P-340					口縁部は玉縁状	外： 内：				(Ⅳ類) 二次的に火？
65—8	26	白磁	椀	P-342		(17.4)				外： 内：				灰白色の釉 貫入有り
65—9	26	白磁	椀	P-342		(14.2)				外： 内：				Ⅱ類か？ 灰白～淡黄色の釉 貫入がみられる
65—10	28	土師器	坏	P-354		(13.8)	4.6	(5.6)	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	にぶい黄橙	底径で復元すると6.0cm
65—11	28	土師器	皿	P-450		9.0	1.9	6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ後ナデ	精良	良好	淡橙～浅黄橙	
65—12	27	青磁	椀	P-454						外： 内：				
65—13		土師器	皿	P-528		9.0	1.4～1.1	6.0		外：回転ナデ、ヘラ切り 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
65—14	27	青磁	椀	P-551					鎬蓮弁文	外： 内：				(龍泉窯系)
65—15		土師器	坏	P-616				5.6	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
65—16		土師器	坏	P-634				6.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
65—17		土師器	坏	P-661		(14.0)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	淡黄	器壁は薄く直線的
65—18	26	白磁	椀	P-693		(15.0)			口縁部は玉縁状	外：ヘラケズリ 内：				(Ⅱ類？) 灰白～淡黄色の釉
65—19	26	白磁	皿	P-693		9.4				外： 内：				(Ⅵ類？) 淡黄色の釉 やや上げ底
65—20		土師器	坏	P-797		(12.2)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	にぶい橙～浅黄橙	
65—21		土師器	坏	P-825				(6.4)	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙	
65—22		土師器	擂鉢	P-948		(30.0?)			口縁端部は8mmの平坦面 擂目(6条)	外：粗いナデ、ハケメ？ 内：ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	口径不明 赤色顔料が一部残る
65—23	28	土師器	坏	P-956		12.6	2.8	6.2	底部は糸切り	外：回転ナデ？ 内：回転ナデ	精良	良好	にぶい黄橙	
65—24		瓦質土器	鍋	P-1025					口縁部は受口状	外：ナデ 内：ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	口径、傾きともに不明
65—25	27	青磁	椀	P-1043					鎬蓮弁文	外： 内：				口径、傾きともに不明 (龍泉窯系)

第11表　そのほかの遺物（須恵器・土師器）観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法（cm）			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
68—1		須恵器	蓋？							外：ヘラケズリ、ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰	
68—2		須恵器	蓋	6N	2層	(13.6)				外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰	傾きは推定 径復元
68—3		須恵器	坏	9M					高台を伴う	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密	良好	灰白	傾きは推定
68—4	28	土師器	皿	6O	2層	(7.8)	1.4		底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—5		土師器	皿	8N	2層	(7.4)	1.3		底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	橙～浅黄橙	内外面とも赤色顔料塗彩
68—6	28	土師器	皿	5O	1層	(9.4)	1.1		底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—7		土師器	皿	6O	2層	(8.5)	1.5			外：ナデ 内：ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—8		土師器	皿	6O	2層	6.4 ～6.8	1.1		底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—9	28	土師器	皿	10M	2層	(9.0)	1.8	(6.0)	底部は糸切り	外：ナデ？ 内：ナデ？	精良	良好	浅黄橙	
68—10		土師器	皿	9L	2層	(7.4)	2.0	(4.4)	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—11	28	土師器	皿	7M	2層	(7.2)	1.4	(5.6)		外：ナデ？ 内：ナデ？	精良	良好	浅黄橙	
68—12		土師器	坏	6O	2層			(6.2)	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良	灰白 ～浅黄橙	
68—13		土師器	坏	6O				6.6 ～7.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—14	28	土師器	坏	5O	1層	(13.6)	4.7	(7.0)	端部は丸い 底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良		浅黄橙	
68—15		土師器	坏	5N	2層			5.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—16		土師器	坏	6O	2層			7.2	底部穿孔 底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄	
68—17		土師器	坏					6.6	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙～ にぶい黄橙	
68—18		土師器	坏	5O	1層			6.8	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良	淡黄	
68—19		土師器	坏	6O	2層			6.6 ～7.0	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—20		土師器	坏	9M	2層			(6.2)	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ？	精良	良	浅黄橙	
68—21		土師器	坏	6O	2層			6.6	底部は糸切り	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良	淡橙 ～にぶい橙	回転ナデ痕が顕著に残る
68—22	28	土師器	坏	4O	2層	(14.0)	3.9	(7.2～ 7.4)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	浅黄橙	
68—23		土師器	擂鉢	9M	2層	(28.0)				外：ナデ、粗いナデ 内：ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄	
68—24		土師器	擂鉢	6M	2層			11.6	擂目（4条）	外：粗いナデ、粗いハケメ 内：ハケメ、ナデ？	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	淡黄	内面は使用痕が顕著

第12表　そのほかの遺物（瓦質土器）観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法（cm）			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
69—25		瓦質土器	擂鉢	5O		(27.6)				外： 内：	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白	
69—26		瓦質土器	甕か？	6N	2層					外：ヨコナデ 内：ハケメ	ほとんど砂粒を含まない	良	黒	
69—27		瓦質土器	擂鉢	T1		(28.2)				外：粗いハケメ、粗いナデ 内：ハケメ	4mm大の小石をわずかに含む	良好	灰～灰白	
69—28		瓦質土器	擂鉢						口縁端部折り曲げ 卸目（8条）	外：ナデ 内：ハケメ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰	
69—29		瓦質土器	擂鉢	10M	2層	(20.0)			擂目（6～8条）	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良好	灰白	
69—30		瓦質土器	擂鉢	8N	2層				擂目（4条？）	外：ナデ 内：ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰	傾きは推定
69—31		瓦質土器	鍋	4O	2層	(29.0)				外：ナデ 内：ヨコナデ	ほとんど砂粒を含まない	良好	暗褐～浅黄	
69—32		瓦質土器	鍋							外：タタキ 内：ハケメ	1～2mm程度の砂粒を含む	良	淡黄	
69—33		瓦質土器	鍋	5P		(33.6)				外：ヨコナデ、粗いナデ 内：ヨコナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	淡黄	
69—34		瓦質土器	羽釜	8N7N	2層					外：回転ナデ 内：ハケメ	密	良好	灰	傾きは推定
69—35		瓦質土器	鍋	10M	2層					外：タタキ 内：ハケメ	ほとんど砂粒を含まない	良好	灰	傾きは推定
69—36		瓦質土器	壺？	10M	2層	(22.8)				外：風化により不明瞭 内：丁寧なナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰	

第13表　そのほかの遺物（陶器）観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法（cm）			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
70—37		陶器	擂鉢	7N	2層				口縁端部は平坦面	外：ヨコナデ、粗いヨコナデ 内：ヨコナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰～黄灰	備前 傾きは推定
70—38	29	陶器	擂鉢	5N	2層				口縁端部は平坦面	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰白～褐灰	備前 傾きは推定
70—39	29	陶器	擂鉢	9N	2層				片口（1つ）	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ（片口部分はナデ）	1～3㎜程度の砂粒を含む	良好	にぶい赤褐～明赤褐	備前 傾きは推定
70—40	29	陶器	擂鉢	7L	2層				端部は上方へ引き伸ばされる	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	褐灰～にぶい褐	備前 傾きは推定 片口近くか、焼き歪みによる変形
70—41	29	陶器	擂鉢	5N	2層	(29.0)				外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良好	灰	備前
70—42	29	陶器	擂鉢	9M	2層	(28.0)			端部は上方へ引き伸ばされる擂目	外：ヨコナデ、粗いヨコナデ 内：ヨコナデ	1～4㎜程度の砂粒を含む（粗い）	良好	にぶい赤褐～暗黄灰	備前
70—43		陶器	甕？							外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1～3㎜程度の砂粒を含む	良好	褐灰～灰黄褐	備前
70—44	29	陶器	壺？	6N	2層				外面にクシ状工具による施文	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	2㎜程度の砂粒をわずかに含む	良好	褐灰	備前
70—45	29	陶器	甕							外：ナデ？ 内：ナデ？（板状工具によるものか？）	1～2㎜程度の砂粒を含む	良好	灰褐	備前
70—46	29	陶器	甕					(16.0)		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	1㎜程度の白色砂粒を含む	良好	灰赤～灰	備前
70—47	29	陶器	壺？							外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、一部板状工具によるナデ？	ほとんど砂粒を含まない	良好	褐灰	備前
70—48	29	陶器		5N	2層					外：ナデ 内：ナデ、センガキ	1～2㎜程度の砂粒を多く含む	良	明赤褐	常滑か
70—49	29	陶器	鉢	5P	1層					外：ナデ 内：ナデ	1㎜程度の砂粒を少量含む	良	灰	
70—50		陶器	硯	10L	2層	現存長 5.1	最大幅 6.1	最大厚 2.6		外： 内：				

第14表　そのほかの遺物（土錘）観察表

挿図番号	写真番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法（cm）			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						現存長	最大幅	孔径						
71—51	30	土師器	紡錘形土錘	7N		3.9	1.2	0.2			1㎜程度の砂粒を含む	良好	明黄褐	
71—52	30	土師器	紡錘形土錘	8M		4.0	1.4	0.4			密	良好	灰～灰白	
71—53	30	土師器	紡錘形土錘	4N	1層	4.6	1.1	0.4			密	良好	黄灰～黒	
71—54	30	土師器	紡錘形土錘	8M	2層	4.7	1.3	0.2			1㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	灰白	
71—55	30	土師器	紡錘形土錘	7O	2層	4.0	1.2	0.3			密	良好	灰白	
71—56	30	土師器	紡錘形土錘	9M	2層	3.7	1.5	0.4			密	良好	橙～灰白	
71—57	30	土師器	紡錘形土錘	9L	2層	4.1	1.2	0.3			密	良好	赤橙	
71—58	30	土師器	紡錘形土錘	4N	1層	4.6	1.1	0.3			密	良好	灰	
71—59	30	土師器	紡錘形土錘	6N	2層	4.2	1.4	0.3			密	良好	赤橙	
71—60	30	土師器	紡錘形土錘	6O	2層	4.8	1.5	0.4			1㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	黒褐	
71—61		土師器	紡錘形土錘	4N	2層		3.1	1.1			1㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	にぶい橙～にぶい黄	
71—62	30	土師器	紡錘形土錘	7N		4.9	1.8	0.4			密	良好	にぶい黄橙	
71—63	30	土師器	紡錘形土錘	5O	1層	5.0	1.7	0.4			密	良好	灰黄	
71—64	30	土師器	紡錘形土錘	6M	2層	5.1	1.3	0.2			1㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	灰黄褐	
71—65	30	土師器	紡錘形土錘	10L	2層	3.9	1.5	0.4			1㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白	

第15表　そのほかの遺物（鉄器）観察表

挿図番号	写真番号	出土地点	層位	器種	寸法（cm）			備考
					最大長	最大幅	最大厚	
72—66		6O	2層	釘	8.5	0.7	1.2	
72—67		井戸1		釘	10.7	1.2	1.2	
72—68		井戸1		釘	4.9	0.9	0.8	
72—69		P50		釘？	5.6	1.3	1.3	
72—70		P216		釘	3.3	0.5	0.4	
72—71		SD3		釘	3.9	0.6	0.8	
72—72		5M		釘	5.5	1.1	1.2	
72—73		6O	2層	釘	6.7	1.4	1.2	
72—74		P1093		釘	5.5	0.9	0.7	
72—75		SD2		鉋	12.0	1.2	1.3	
72—76		P630		釘	9.3	1.7	1.5	
72—77		5O		釘	8.0	1.6	0.6	
72—78		4L	2層	釘	5.4	1.4	0.8	
72—79		4L	2層	釘	4.8	1.4	0.9	
72—80		5O		鏃（雁又鏃）	6.5	3.7	1.2	

第15表　井戸1（SK1）・井戸4（SK21）・井戸5（SK70）・墓2（SK39）・墓6（SK75）　出土木製品観察表

挿図番号	写真番号	遺構名	用途	形状	寸法（cm）			備　　考
					長辺	短辺	厚さ	
74—1		井戸1	井側組桶材	板	70.0	10.6	4.2	
74—2		井戸1	井側組桶材	板	82.8	10.6	3.8	
74—3	30	井戸1	井側組桶材	板	81.6	10.9	3.7	
75—4		井戸1	井側組桶材	板	75.0	10.5	3.2	
75—5		井戸1	井側組桶材	板	78.3	10.5	3.2	
75—6		井戸1	井側組桶材	板	78.5	9.6	3.3	
76—7	30	井戸1	井側組桶材	板	67.6	9.7	3.2	
76—8		井戸1	井側組桶材	板	78.6	10.5	2.7	
76—9		井戸1	井側組桶材	板	76.8	9.5	3.1	
77—10		井戸1	井側組桶材	板	70.7	10.0	3.9	
77—11	30	井戸1	井側組桶材	板	74.0	9.6	3.2	
77—12		井戸1	井側組桶材	板	81.1	10.7	2.6	
78—13	30	井戸1	井側組桶材	板	76.4	10.6	3.4	
78—14		井戸1	井側組桶材	板	70.0	10.7	3.0	
78—15		井戸1	井側組桶材	板	70.3	10.7	4.2	
79—16		井戸1	井側組桶材	板	73.7	9.4	3.5	
79—17		井戸1	井側組桶材	板	69.7	10.5	2.9	
79—18		井戸1	井側組桶材	板	82.1	9.5	2.7	
80—19		井戸1	井側組桶材	板	83.4	9.4	3.6	
80—20		井戸1	井側組桶材	板	81.5	11.7	3.7	
80—21		井戸1	井側組桶材	板	78.7	10.4	3.8	
81—1		井戸4	井側組桶材	板	107.9	13.5	4.2	
81—2		井戸4	井側組桶材	板	105.5	12.0	4.4	
81—3	31	井戸4	井側組桶材	板	105.4	11.9	5.8	
82—4	31	井戸4	井側組桶材	板	97.3	12.9	2.7	
82—5		井戸4	井側組桶材	板	89.8	9.9	2.4	
82—6		井戸4	井側組桶材	板	88.0	8.5	2.6	
83—7		井戸4	井側組桶材	板	101.2	13.1	4.1	
83—8		井戸4	井側組桶材	板	97.6	10.5	3.9	
83—9	31	井戸4	井側組桶材	板	102.5	11.9	4.7	
84—10		井戸4	井側組桶材	板	92.4	12.5	2.4	
84—11		井戸4	井側組桶材	板	111.8	12.5	4.8	
84—12	31	井戸4	井側組桶材	板	98.8	11.6	5.1	
85—13		井戸4	井側組桶材	板	92.1	10.4	3.2	
85—14		井戸4	井側組桶材	板	93.0	11.7	3.8	
85—15		井戸4	井側組桶材	板	101.9	11.3	4.3	
86—16		井戸4	井側組桶材	板	89.1	11.8	3.6	
86—17		井戸4	井側組桶材	板	96.5	11.5	4.9	
86—18		井戸4	井側組桶材	板	107.5	12.4	3.5	
87—1		井戸5	井側組桶材	板	102.1	9.6	2.2	
87—2		井戸5	井側組桶材	板	104.8	9.4	1.9	
87—3		井戸5	井側組桶材	板	107.9	8.6	2.0	
88—4	31	井戸5	井側組桶材	板	115.3	13.1	2.5	
88—5	31	井戸5	井側組桶材	板	106.3	9.1	2.6	
88—6	31	井戸5	井側組桶材	板	106.6	8.0	2.2	
89—7		井戸5	井側組桶材	板	109.8	8.9	1.8	
89—8		井戸5	井側組桶材	板	104.8	11.6	2.5	
89—9	31	井戸5	井側組桶材	板	117.6	10.1	2.3	
90—10		井戸5	井側組桶材	板	104.0	10.2	1.7	
90—11		井戸5	井側組桶材	板	104.5	10.0	1.9	
90—12		井戸5	井側組桶材	板	102.5	10.1	2.3	
91—13		井戸5	井側組桶材	板	102.8	9.5	2.5	
91—14		井戸5	井側組桶材	板	99.1	10.5	2.1	
91—15		井戸5	井側組桶材	板	106.5	10.0	2.1	
92—16		井戸5	井側組桶材	板	105.7	9.8	2.3	
92—17		井戸5	井側組桶材	板	107.3	10.8	1.9	
92—18		井戸5	井側組桶材	板	106.0	9.6	2.3	
93—19		井戸5	井側組桶材	板	106.3	7.6	2.1	
93—20		井戸5	井側組桶材	板	112.6	9.4	2.0	
93—21		井戸5	井側組桶材	板	106.8	9.6	2.2	
94—22		井戸5	井側組桶材	板	99.4	7.7	1.8	
94—23		井戸5	井側組桶材	板	100.5	8.9	2.0	
94—24		井戸5	井側組桶材	板	107.9	8.4	2.1	
95—1		墓2	井側組桶材	板				
96—1		墓6	井側組桶材	板				

益田平野の成り立ちと沖手遺跡

島根大学教育学部　林　　正　久

１．はじめに

益田平野は高津川と益田川の沖積作用によって形成された三角州平野で、島根県西部では最大の平野である。益田地域では縄文時代以降の数多くの遺跡・遺構が分布しており、古くから人々がこの地域で生活を営んできたことが知られる。しかし、これらの遺跡は平野周辺の丘陵・台地上や益田川の平野への出口付近に限られており、三角州平野面での遺跡や遺構は、三宅御土居や今市船着場、日赤敷地遺跡、専福寺跡など数えるほどしか見つかっていない（益田市教育委員会、2002；2003）。益田道路等の建設に伴って調査が進められている沖手遺跡は益田川の右岸地域、益田平野の中央やや東寄りの三角州上に位置しており、益田平野の成り立ちを検討する上で極めて重要であり、益田の歴史を考える上でも貴重なものである。ここでは平野の地形環境や土地条件を沖手遺跡との関わりから検討してみたい。

２．益田平野の地形

島根県西部の海岸線は北東―南西方向へと比較的平滑で直線的に続いている。大きな湾入部が存在しないため、あまり大きな平野が発達していない。益田平野は高津川・益田川の両河川の沖積作用によって形成されており、江津や浜田などに比べるとやや広い平野となっている。

益田平野の地形分類図を図１に示す。平野の周辺は標高200m以下の山地や丘陵地に囲まれ、平野面と山地・丘陵との境界はかなり明瞭である。平野の概形は右あがりのπの字型を呈している。平野の北側には砂浜・砂丘地が海岸線と平行に続く。標高５m以下の砂浜・浜堤とそれを覆う砂丘から構成される。高津川の東側、中須～大塚には標高5～15mの縦列砂丘が海岸線と平行に1～2列連なる。高津川の西側、浜や浜寄付近では砂浜・浜堤の背後にある標高30m以上の丘陵地にまで砂丘地が広がっている。大塚付近の浜堤の下には、所々に基盤岩の岩礁が存在しており（服部、2000）、当初はそのような浅い部分に沿って砂嘴が形成され、やがて内湾を閉塞するような砂州に成長したと考えられる。

平野の主体をなすのは三角州で、重要な人間生活の場となっている。三角州は河川の河口部に、海と河川の両方の影響を受けて形成されるものであるが、現在の三角州は、後世の氾濫堆積物で覆われていることが多く、表面の地形は純粋な三角州面とはいえない。しかし、地形の平坦さや平野地下の海成層の有無などを勘案し、かつて海の影響を受けた地域を三角州として識別した。三角州は標高や滞水状況などから三角州Ⅰ面と三角州Ⅱ面に分類される。三角州Ⅰ面は標高3～10mの平坦な地形で、国道9号と国道191号の線より内陸側に分布する。三角州Ⅱ面は砂州の背後から三角州Ⅰ面の前面に広がっており、全体としては標高2m前後の非常に低平な面である。三角州Ⅱ面上には近世の河道変遷の影響が顕著に残っており、旧河道や自然堤防が数多く認められる。氾濫時には三角州Ⅱ面一帯は水面と化し、地盤も軟弱である。三角州Ⅱ面に比べると三角州Ⅰ面の方がわずかに勾配が大きい。

旧河道は高津川と益田川に挟まれた地帯、中島・中吉田付近にみられる。旧河道の多くは第2次

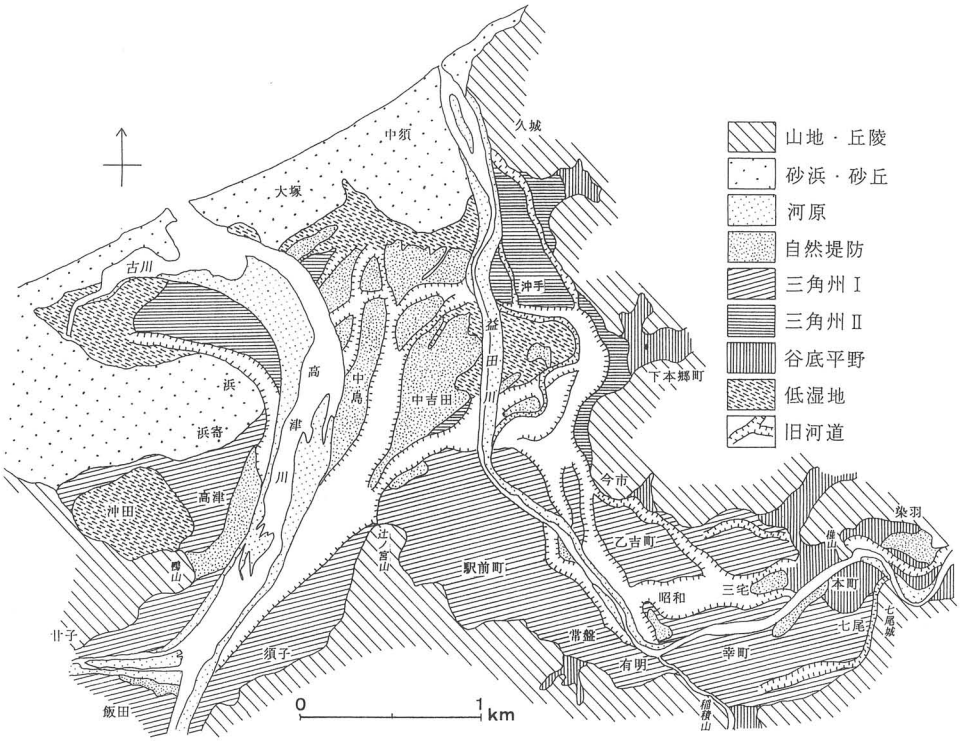


図1　益田平野の地形分類図
林（2000）より

大戦後の埋立て等によってその痕跡が不明瞭となっているが、昭和22年（1947）に米軍によって撮影された空中写真を判読すると、かなりはっきりと識別することができる。顕著な旧河道として次の３つを挙げることができる。第一番目は、七尾城山麓の堀川橋から益田市水源地・益田高校へと続くもので、平野面より2～3m低い溝状の地形となっている。二番目として高津川の右岸側、須子から北東へ伸び、現益田川を切って今市川に沿って下本郷の丘陵まで達し、そこから西へ屈曲する流路跡がある。須子から今市川までは幅が広く浅い河道跡となっており、江戸時代には「前川」と呼ばれていた（矢富、1963）。三番目としては、高津川の右岸側、須子から北北東、中島と中吉田の間へと伸びるもので、河道跡の両岸には自然堤防状の微高地が広がる。旧河道は微高地を0.5～１m切り込む形をなしている。江戸時代には「後川」と呼ばれていた（矢富、1963）。「後川」の河道は中須～大塚の砂州・砂丘地へと続くが、砂丘地の南に広がる低湿地では、「後川」の河床の切り込みは見られず、そこへ注ぎ込んでいるようにみえる。この辺りに存在する入り組んだ河道跡は、江戸時代に行なわれた人為的な河道変更によるものが含まれている。

低湿地はこの他に、益田川右岸と今市川下流に囲まれる地域や高津の古川周辺にも広く分布している。また、図には明示していないが、旧河道内にも小規模な沼地や低湿地が点在している。なお、高津の沖田付近に広がる低湿地は高津川の氾濫土砂の堆積や堤防構築によって排水不良と化したもので比較的新しいと考えられる。

谷底平野は益田川や支流の谷に沿って、平野の出口付近にまで分布する。益田川では上流から染羽・七尾付近まで、高津川では三角州が図1の範囲を超えて南方まで広がるため、図には現れていない。なお、河原は現在の高津川・益田川の河川敷など「堤外地」にあたる。

３．益田平野の成り立ち

平野の微地形や構成物の分析、古地図の考察などによって、益田平野の成り立ちを述べたい。平野の成り立ちについては、すでに林（2000）が最終氷期以降の古地理の変遷をまとめている。また、服部（2000）は江戸時代における益田平野の河口の変遷について考察している。ここでは、最終氷期から室町時代までの平野の形成過程や古地理は林（2000）の報告に基づいて、また、近世初頭以降の平野の地形環境については、林（2000）、服部（2000）に加えて、「国絵図」についての新たな知見を基に再検討してみる。

（１）最終氷期から室町時代までの益田平野

ここでは最終氷期から室町時代までの平野の古地理を林（2000）の報告に基づき、次のようにまとめられる。

①最終氷期：

この時期は世界的な海面低下の時代で益田一帯はすべて陸地であった。当時の高津川や益田川はこの付近では現在より20～30m低い位置を流れており、高津川と益田川は中島付近で合流し、日本海沖へ向かって流れていた。

②縄文前期（約6000年前）：

この時期は後氷期の海面上昇期いわゆる縄文海進期に相当し、現在の益田平野は海に覆われていた。当時の海は益田川筋では七尾から三宅一帯まで、高津川筋では少なくとも飯田付近までは浸入し、「益田湾」の様相を呈していた。しかし、中須から大塚には高海水準に対応した砂嘴が形成され始める。砂嘴は中須から大塚方面へと成長していったようで、やがては湾を閉塞するような砂州となったため、中島から吉田一帯は潟湖の状態となった。このような潟湖が「古益田湖」と呼ばれた。

③縄文後期～弥生時代（3000～2000年前）：

縄文の海面高頂期以降、海面は徐々に下降し、縄文後期～弥生時代には、現在より低海水準の時代、いわゆる弥生の小海退期があった。益田平野では海面は現在と同レベルあるいはやや低い位置にあったと考えられる。海水準の低下に伴い、高津川や益田川の三角州が前進し、「古益田湖」を埋積していった。三角州Ⅰ面に相当する地域がこの時期に陸地と化した。すなわち、国道9号と国道191号の線より南側が陸地となったが、現在の中島や中吉田地域には砂州と三角州の間には依然として「古益田湖」が広がっていた。

④鎌倉～室町時代：

この時期には三角州Ⅰ面は完全に陸地化し、三角州Ⅱ面の陸地化も進んでいく。染羽から南に屈曲して七尾城山麓、古川町、益田市水源地、現益田高校付近に続く旧河道は、この時代の益田川の流路で、多田川と合流した後、北西へと流れを転じ、今市の北西部付近で「古益田湖」に注いでいた。高津川は辻ノ宮山の北東にまで三角州を前進させ、現在の吉田橋付近で「古益田湖」に注いでいたと考えられる。この時代には益田氏による河道の付け替えや水路の建設など人為的な改変が行

なわれた。すなわち、13世紀末期には椎山の南に伸びる尾根が掘削され、益田川は椎山の南の地点から西方、三宅方面へと流れるようになり、元の流路はせき止められて七尾城の内掘として利用されるようになる。また、14世紀に設立された三宅御土居にはそれを取り囲む水濠が存在することが発掘調査によって明らかにされている。

この時期までの水田整備や開発は主として三角州Ⅰ面上で展開した。今市＝辻ノ宮山＝鴨山を結ぶ線が当時の開拓の前線地帯にあたる。

室町から江戸時代までの平野の姿は資料やデータが乏しいため、復元することは困難である。しかし、室町時代の平野は江戸時代初頭のものとそれほど大きな違いはないと考えられる。そこで、最初に近世初頭の平野を復元し、その後に室町～近世初頭の平野の姿を検討してみたい。

（２）近世初頭以降の益田平野

表１に示したのは、近世以降の「石見国絵図」など、古地図や絵図から得た平野の状況である。資料としては、服部（2000）の図版と歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会・島根県立博物館編（2004）『絵図でみる島根の歴史』および島根県立図書館の『島根県立図書館デジタルライブラリー』に掲載された絵図を用いた。

これらの絵図類から判読できる事柄を挙げると次のようになる。

① 大別すると二つの異なるタイプの平野の姿が描かれている。

タイプＡ「河口部に中州や島が二つ存在するもの」。

高津川筋は須子から高津＝中島間＝日本海へ流れる主流と須子から吉田＝中島間を抜けて益田川と合流する分流が存在する。また、中須の背後には高津川主流と益田川を結ぶ流路が存在する。島状となっているのは中須と中島地区である。

『元和年間石見国絵図』や『寛永石見国絵図』、『正保石見国絵図』、『正保石見国絵図（津和野藩領分）』、『元禄図［天保石見国絵図懸紙改切絵図（懸紙下）］』と島根県立図書館の『12 石見国図』がこれに該当する。

ただし、『石見国絵図（正保図：津和野藩領分）』には二つの島状土地の他に西側の高津地区に高津川のもう一つの分流が描かれている。

タイプＢ「河口部に中州や分流は存在せず、高津川と益田川が独立して海に注ぐもの」。

『天保石見国絵図懸紙改切絵図（懸紙上）』や『天保石見国絵図』、島根県立図書館の『11 石見国絵図（石州古図）』、『13 石見国全図（明治時代）』が該当する。

ただし、『11　石見国絵図（石州古図）』では高津川が大塚と中島の間を流れている（あるいは大塚が高津地区に飛び地を持っていた）。

② タイプＡの方が古く、タイプＢが新しい時期を示す。

元和や寛永、正保など元禄以前の絵図はタイプＡ、天保以降の絵図はタイプＢを示す。すなわち、江戸時代の前期には高津川の分流が描かれ、江戸時代後期以降には高津川と益田川が独立して海に注ぐように描かれている。このことは、河口の状況から絵図の年代を類推することが可能になることを示唆している。

③ 人為的な河川が描かれている可能性がある。

『石見国絵図（正保図：津和野藩領分）』や『11 石見国絵図（石州古図）』の流路は人為的な河川（分流）が描かれている可能性がある。

表１　絵図からみた近世以降の益田平野の状況

絵図名：所蔵場所	年　代	河口部・平野の状況	出典
元和年間石見国絵図：浜田市教育委員会蔵	元和３～５年（1617～1619）	中須が島状に、中島が中州状に描かれている。	①③
寛永石見国絵図：島根県古代文化センター蔵	寛永10年（1633）頃	中須と中島の二つの中州状土地が描かれている。	③
12石見国図：島根県立図書館蔵	［年代不詳］寛永～元禄？	中須と中島の二つの中州状土地。内田=虫追の堀切（寛永年間竣工）が描写。	②
正保石見国絵図（津和野藩領分）：津和野町教育委員会蔵	正保期	中須と中島の二つの島状土地．西側高津地区に高津川の新たな分流が存在。	①
正保石見国絵図：津和野町教育委員会蔵	正保２年（1645）	中須と中島の二つの中州状土地が描かれている。	①③
元禄図［天保石見国絵図懸紙改切絵図（懸紙下）］：浜田市教育委員会蔵	元禄期	中須が島状に描かれている。	①
天保石見国絵図懸紙改切絵図（懸紙上）：浜田市教育委員会蔵	天保期	中州や分流がなく、高津川と益田川が独立して海に注ぐ。	①
天保石見国絵図：国立古文書館（内閣文庫）所蔵	天保９年（1838）	中州や分流がなく、高津川と益田川が独立して海に注ぐ。	③
11 石見国絵図（石州古図）：島根県立図書館蔵	［年代不詳］	高津川と益田川が独立して海に注ぐ。ただし高津川左岸に「大塚」の地名あり。	②
13 石見国全図：島根県立図書館蔵	明治９年（1876）	中州や分流がなく、高津川と益田川が独立して海に注ぐ。	②

出典　①：服部（2000）
②：島根県立図書館（2002）
③：歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会・島根県立博物館編（2004）

以上のことから、江戸時代の平野の姿を類推すると次のようになる。

高津川には古くは二つの流路があった。右岸側のものは「前川」に相当する。自然状態では、扇状地に複数の分流が存在することが知られるが、三角州の場合には同時に二つの流れが存在していた可能性は低い。高津川の場合、ある時期には右、ある年には左を主流とし、洪水のたびに主流路を変えていたと考えられる。しかし、住民には川跡も「川」として認識されていたため、水の乏しい河道跡も河川として描かれたと考えられる。この時までには、中須=大塚の砂州も若干は拡大していたはずで、「古益田湖」はかなり縮小していたに違いないが、中須の背後に高津川と益田川を結ぶ水路が存在するという事実は、「古益田湖」の名残りが江戸時代の初めまでは存在していたことを示している。江戸時代中期以降は、益田川と高津川が独自の河口を持つ河川となり、「古益田湖」はほぼ消滅してしまう。しかし、現在と同様、洪水時には湖面となるような低湿な状態であった。

４．沖手遺跡付近の地形環境

沖手遺跡は西と北側に益田川、南は今市川、東は久城の丘陵地に接する地域で、標高は２ｍ以下、一部に畑がみられる他は一面の水田地帯である。地形的には三角州Ⅱ面にあたり、弥生時代以降に形成された三角州で、古墳時代～江戸時代の或る時期に陸地化したと考えられる。三角州Ⅱ面や低湿地・旧河道などは、洪水時には冠水しやすい場所である。図２に示したのは昭和58年水害時の被害状況である。この水害では高津川の堤防の決壊はなかったので、高津川左岸側での被害はほとんどなかったが、益田川の堤防は十数地点で決壊したたため、益田川沿いの旧益田市街や乙吉～中吉田にかけては浸水によって大きな被害を受けた。中須背後の低湿地から沖手にかけては、一面に水面が広がり「湖」のようになったといわれる。このように、沖手付近は人々の居住地としての立地条件はあまり良好とはいえない。実際に現時点でも住宅などの建造物は全く造られていない。

もう少し沖手付近の地形を詳しくみると、沖手付近の三角州Ⅱ面上には南北に伸びる二つの流路跡（旧河道）が認められる。西側のものは切り込みが浅く、流路の掘り込みの深さは50ｃｍにも達していない。東側のものは平野と丘陵の境界となっており、かなり明瞭に判読できる。流路跡は耕地化されておらず、ほとんどは葦などが繁った湿地や沼田となっている。

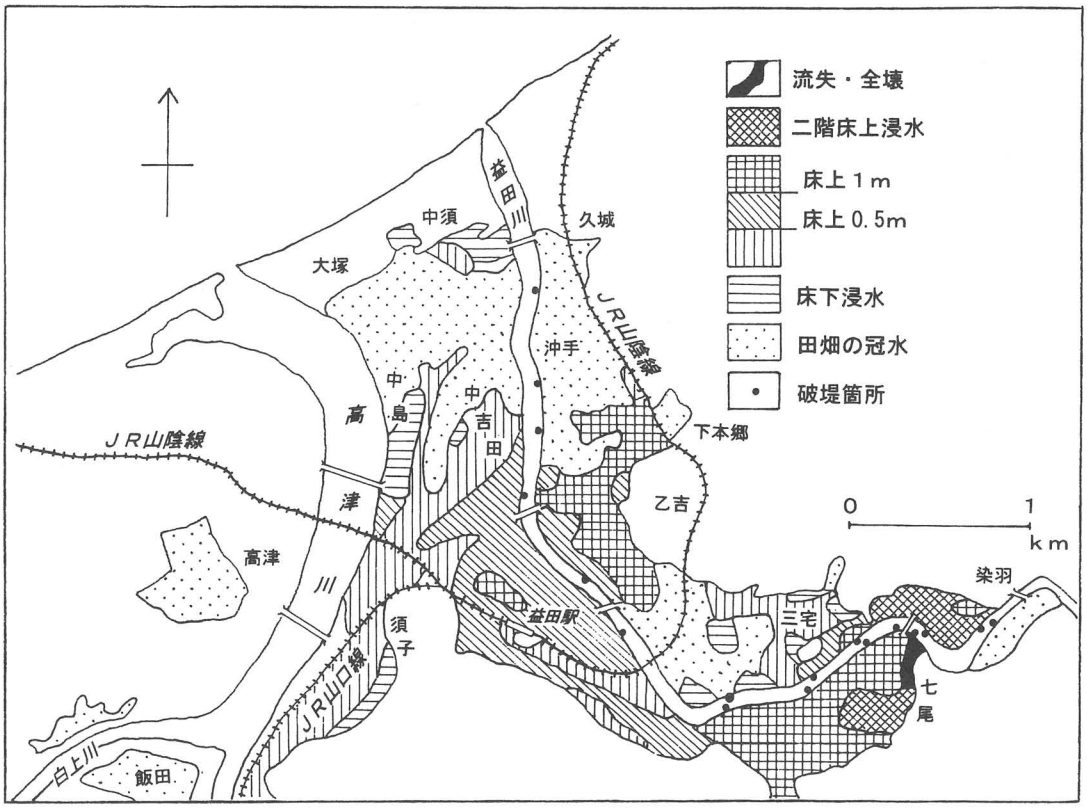


図２　益田平野における昭和58年７月水害の被害状況
島田（1995）より

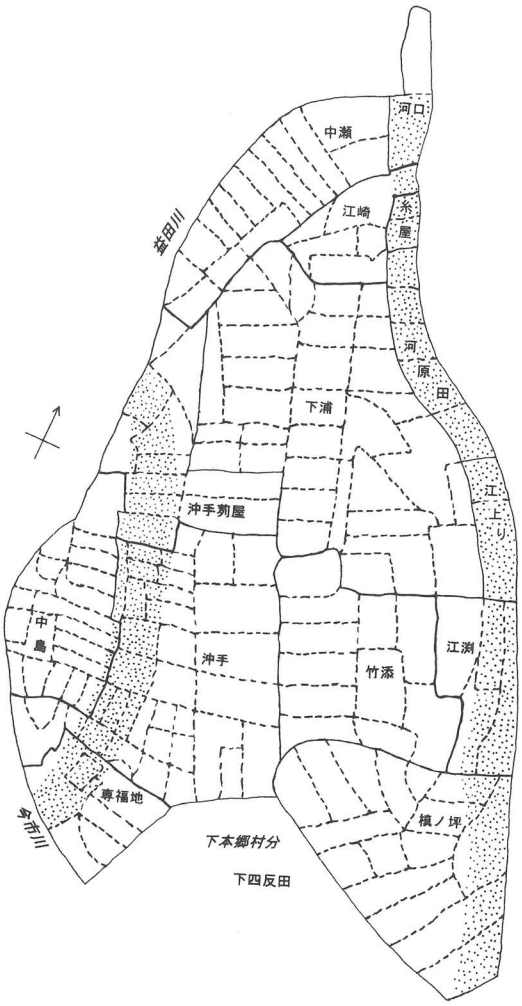


図３　沖手周辺の字名と地割
（原図は久城村第壱号：広島大学附属図書館所蔵『中国五県土地・租税帳文庫』より）
実践は字の境界、点線は地番の境界、ハッチの部分は旧河道

図３に示したのは明治期の沖手遺跡周辺の字名と地割である。図１で示した旧河道の地形は字や地割の境界にもかなりはっきり反映されていることがわかる。中島と専福地・沖手の間から沖手苅屋を経て益田川筋へ続く西側の流路跡と槙ノ坪から江渕、江上り、河原田、糸屋を経て河口へと続く東側の流路跡は地割の境界とかなりよく合致している。またこの付近に見られる字名のほとんどが、次に示すように土地の状態を表わす自然的地名である。

湿地や葦原を連想させる字：河原田、江渕、沖手苅屋（苅は「葦の穂」の意）

川や中州を連想させる字：中島、中瀬、江渕、河口

海や海岸を連想させる字：江崎、江上り、下浦、沖手、河口

非自然的な地名は専福地、槙ノ坪、竹添、糸屋の４つにすぎない。遺跡周辺の字名からは湿地や葦原の広がる海岸（湖岸）地帯の土地という環境が想起される。なお、下四反田の南側、今市川の

左岸には「平田」という字が広範囲に広がる。図３は明治時代のものであるが、これらの字名や地割は江戸時代からそれほど改変を受けていないはずである。

沖手遺跡の地下の構造をみて見よう。遺構は比較的浅い位置にあり、水田土壌の下、地表下30～50ｃｍに中世の柱穴跡などの遺構面が見つかっている。遺構を載せる地層は厚さ50ｃｍ前後の砂質土で、その下には砂質土／粘質土の互層をはさんで、縄文後期～弥生時代の遺物を包含層がある。植物片を含む砂層を主体とし、部分的に人頭～こぶし大の礫を含む砂礫層となっている。これはかつての河床であったことを示唆している。これらの砂礫の上面は標高0.5～0mの位置にある。

沖手遺跡の直接の土台を構成している、こうした砂礫層を運んできたのは高津川か益田川かを特定するため、礫の岩種を分析してみた。手がかりになるのは、地元で「津和野石」と呼ばれる石英安山岩（デイサイト）の存在である。「津和野石」は青野山火山群起源のもので、津和野川流域にしか存在していない。高津川では、津和野川と合流する日原より下流の河床で、かなりの頻度で出現する。高津川河口の海岸部でもこぶし大の「津和野石」が点在している。沖手遺跡の10箇所余りの地点で、遺構面の下の砂礫層から小指大～こぶし大の礫を数十個ずつ採取し、水洗した後、ルーペで岩種を調べてみた。その結果、「津和野石」は一つも確認できず、三郡変成岩に属する結晶片岩（黒色片岩・砂質片岩）や第三紀の泥岩・火成岩の礫しか見つからなかった。この事実は、この辺りの三角州の土台は益田川によって形成されたことを示している。現在でも吉田橋付近にまでは益田川の河道内に礫が点在しており、かつての益田川は沖手一帯にも礫を堆積させていたであろう。

地層からみると、沖手付近では縄文後期～弥生時代の砂礫層堆積後は地表が削られるような大きな洪水流や厚い土砂の埋積が行なわれた痕跡は認められない。比較的静かな氾濫や溢流の繰り返しによって、少しずつ平野が広がり、地盤も高くなっていったといえる。中世の遺構面より上の層も同じような状況で、遺構面が激流でえぐり取られたり、急激な埋積を受けた痕跡は認められない。

５．室町時代から近世初頭までの沖手付近の古地理

沖手遺跡からは12～17世紀の遺物や遺構が見つかっている。特に15～16世紀の遺物が集中しており、この頃にかなりの規模の集落（建物群）が成立していたと考えられている。そこで、室町時代から近世初頭の沖手付近の古地理を考察してみたい。室町時代から近世初頭の益田平野の姿を図４に示す。これは近世前期の絵図や平野の微地形、河道跡などに基づいて作成したものである。もちろん湖岸線や川幅にはかなりの推測が加わっている。

海岸部には中須の砂州が島状に伸び、その背後には縄文時代からの「古益田湖」の名残が存在した。高津川は２つの流路に分かれて「古益田湖」に流れ込んでいた。中島は近世初頭から浜田藩領であったことから、国境となっていた西側の流路が主流であったと思われる。東側の流路に水流が常に存在していたかどうかは明らかではない。出水の度に増水し、本流より流量が増したりしていた可能性もある。椎山の南に伸びる尾根が掘削された13世紀末期（矢富、1963））以降、益田川は椎山の南の地点から西方、三宅方面へと流れるようになり、今市の西方で「古益田湖」に注いでいた。「古益田湖」は前代より縮小したことは間違いないが、沖手の南、平田付近は「古益田湖」の一部であったと考えられる。湖深は3～5mと推定した。中須の砂州は東西の陸地から隔絶して描いてあるが、沿岸流や波浪によって砂が漂流するため、常に島状になっていたわけではなく、東側の久城の台地とはしばしば繋がったと考えられる。沖手遺跡は「古益田湖」の東側の湖岸に位置し、

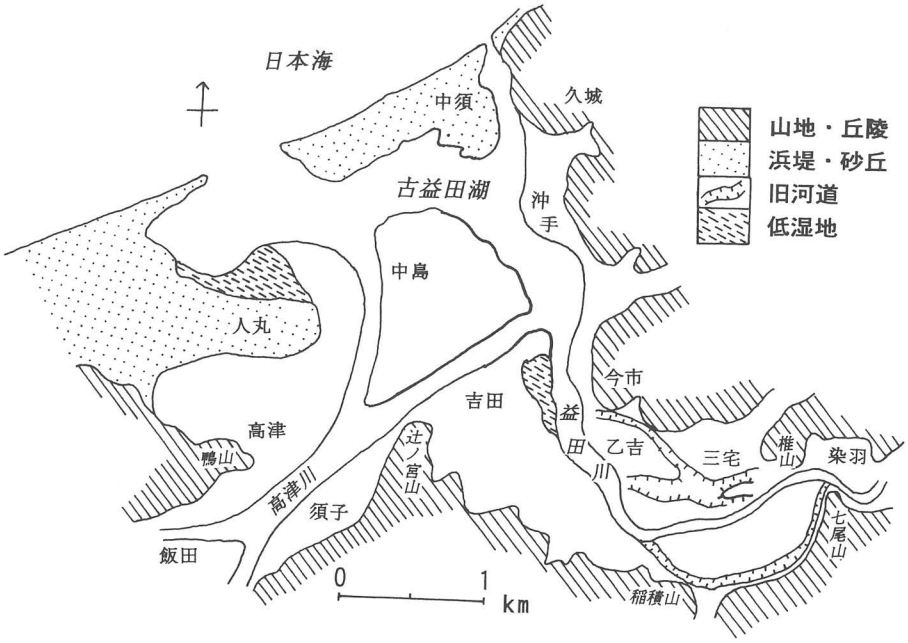


図４　室町～江戸時代初頭の益田平野の古地理
林（2000）を一部修正

対岸は益田川や高津川分流の河口に近い。

６．まとめ

沖手遺跡に大きな集落（建物群）が成立していた頃の地形環境や立地条件をまとめると次のようになる。

①沖手遺跡は「古益田湖」に面した新しい三角州Ⅱ面上に立地しており、土地条件はあまり良いとは言えない。洪水時には冠水するような低平な土地であった。ただし、氾濫時にも浸水状の被害を受ける程度で、洪水による激しい侵食や埋積を蒙ってはいない。

②沖手遺跡の地下には益田川によって運ばれた砂や礫が浅い位置にあり、集落は比較的安定した地盤に成立している。

③土地条件が良くない沖手に集落が成立したのは、「古益田湖」に面し、益田川や高津川の河口にも近いという位置的な要因が考えられる。歴史的な史料は見つかっていないが、例えば、水運・海運業あるいは鍛冶などの製造・加工業などが集落成立の背景となっている可能性がある。

④沖手の集落が消滅した原因として、突発的な洪水などは想定できない。政治的・経済的な理由が影響している可能性が高い。

文　献

島田謙一（1995）『島根県西部における平野の微地形と河川災害』島根大学教育学部卒論（未印刷）29 ps。

島根県立図書館（2002）『島根県立図書館デジタルライブラリー：古絵図・古地図・屋敷図』、＜http//ltis.pref.shimane.jp/index.htm＞（閲覧日：2005.12.26）

服部英雄（2000）今市船着場跡の歴史的な役割．益田市教育委員会編『中世今市船着場跡文化財調査報告書』、益田市教育委員会、pp.61～78。

林　正久（2000）益田平野の古地理の変遷．益田市教育委員会編『中世今市船着場跡文化財調査報告書』、益田市教育委員会、pp.44～60。

益田市教育委員会編（1998）『七尾城跡・三宅御土居跡一益田氏関連遺跡群発掘調査報告書－』　益田市、100ps。

益田市教育委員会編（2002）『沖田七尾線街路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査：三宅御土居跡』　益田市教育委員会、144ps。

益田市教育委員会編（2003）『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』益田市教育委員会、90ps。

歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会・島根県立博物館編（2004）『絵図でたどる島根の歴史』島根県立博物館、　57 ps。

矢富熊一郎（1963）『益田市史』　益田郷土史矢富会、840 ps。

益田市沖手遺跡出土の中世人骨

松　下　孝　幸※

【キーワード】：島根県、中世人骨、保存不良

はじめに

島根県益田市久城(くしろ)町に所在する沖手遺跡は益田道路建設に伴って、発掘調査がおこなわれた遺跡である。この遺跡の島根県埋蔵文化財調査センターが2004年（平成16年）度におこなった地区から人骨と歯が検出された。沖手遺跡は2005年（平成17年）度も発掘調査が継続されており、多数の人骨が出土している。

島根県の中世人骨で、筆者が調査に関わったものは、津和野町の高田遺跡と喜時雨遺跡（松下、2000ｂ）しかなく、本県での中世人骨の特徴に言及できない状況が続いている。

今回出土したのはわずか４体の人骨と歯であったが、人骨の観察と歯種の同定などをおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料および所見

表１に示すとおり、今回人骨や歯が検出されたのは４基の埋葬遺構からで、合計４体の人骨が検出された。被葬者のうち成人は２体で、残りの２体は幼小児であった。また、成人２体のうち１体は女性骨と思われるが、残りの１体は性別不明である。年齢を推定することができたものはなかったが、参考までに年齢区分を表２に掲げた。

この人骨群は、考古学的所見より、16世紀（中世末）に属すると推測されている。

表１　出土人骨(歯)一覧（Table 1.List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考(年齢など)
ＳＫ３８	不明	小児	７歳前後、歯のみ
ＳＫ３９	不明	不明	成人、歯のみ、桶棺
ＳＫ７５	女性	不明	成人、箱棺
ＳＫ７７	不明	幼児	４歳前後、歯のみ

ＳＫ３８（小児）

永久歯の歯冠破片が残存していたが、同定できたのは下顎左側犬歯のみである。咬耗はみられない。年齢は永久歯冠の形成程度から７歳前後の小児と推定した。

※ Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

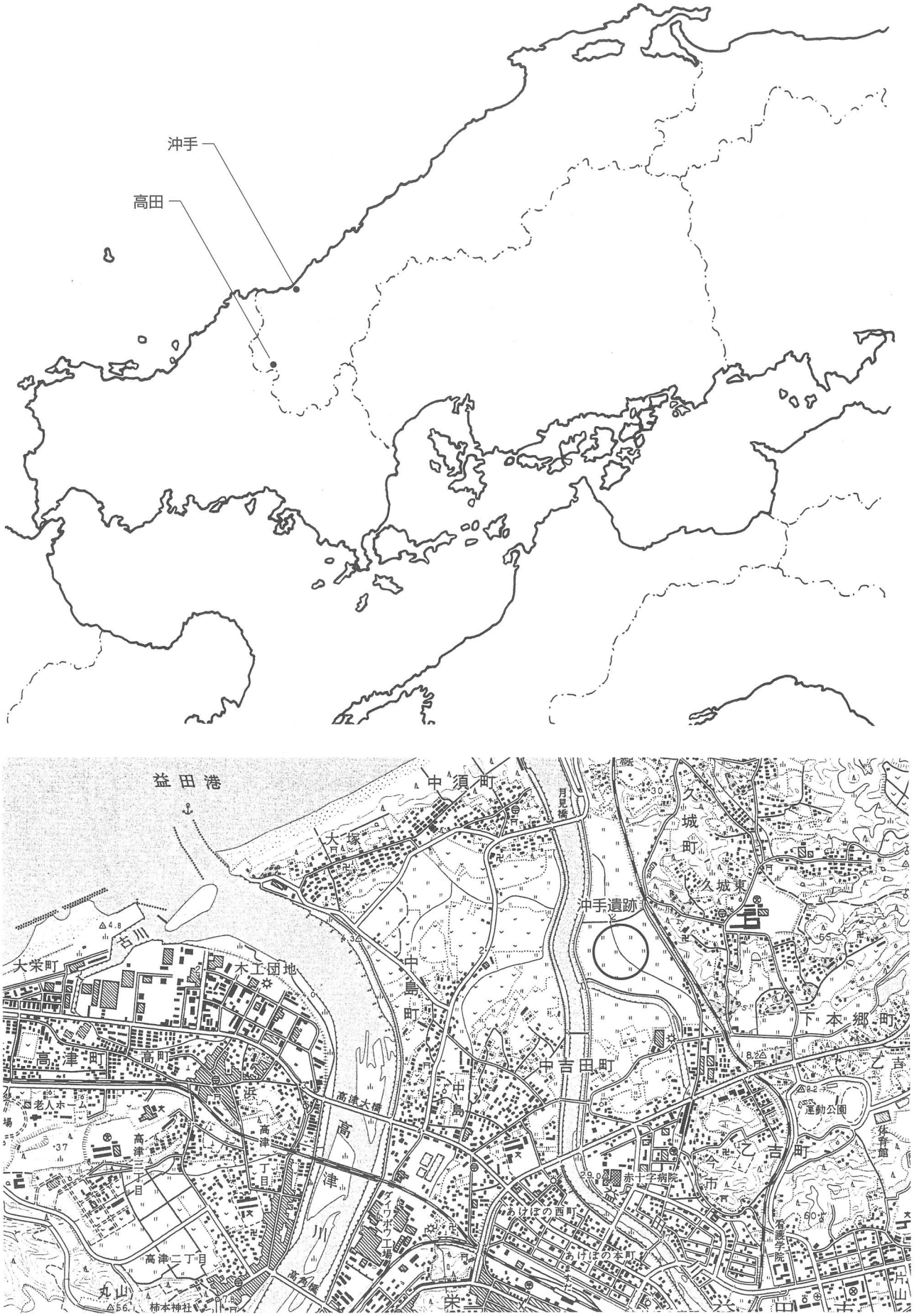


図１　遺跡の位置(1/25000)(Fig.1 Location of the Okite site Masuda City, Kumamoto Prefecture)

表２　年齢区分（Table 2. Division of age）

	年齢区分	年　　齢
未成人	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成　人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照された

ＳＫ３９（性別・年齢不明）

埋葬遺構は桶棺である。

永久歯の歯冠破片が残存していた。同定できたのは以下のとおりである。

／／／／／／２／	１２／／／／／／
／／／／／／／／	／／／／／／／／

〔●:歯槽閉鎖　○:歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔１:中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの１度(咬耗がエナメル質のみ)である。

永久歯冠には咬耗が認められるので、被葬者は成人ではあるが、年齢・性別は不明である。

ＳＫ７５（女性・年齢不明）

埋葬遺構は箱棺である。

頭蓋片、遊離歯冠、四肢骨片が残存していた。頭蓋は、頭頂骨の一部と思われる。骨壁はあまり厚くない。以下に歯式で示す永久歯の歯冠が残存していた。

／／／５／／／／	１／／４５６／／
／／６／／／／／	／／／／／６７／

咬耗度はBrocaの１度(咬耗がエナメル質のみ)である。

頭蓋片の他に左右不明の大腿骨頭片と左右の距骨、右側の踵骨片が残存していた。

性別は、大腿骨頭と距骨の径がやや小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

ＳＫ７７（幼児）

永久歯の歯冠破片が残存していた。同定できたのは以下のとおりである。

／／６５４／／／	／／／４５６／／
／／／５／／／／	／／／４５６／／

永久歯冠には咬耗はみられない。年齢は、歯冠の形成状態から４歳前後の幼児と推定した。

要　約

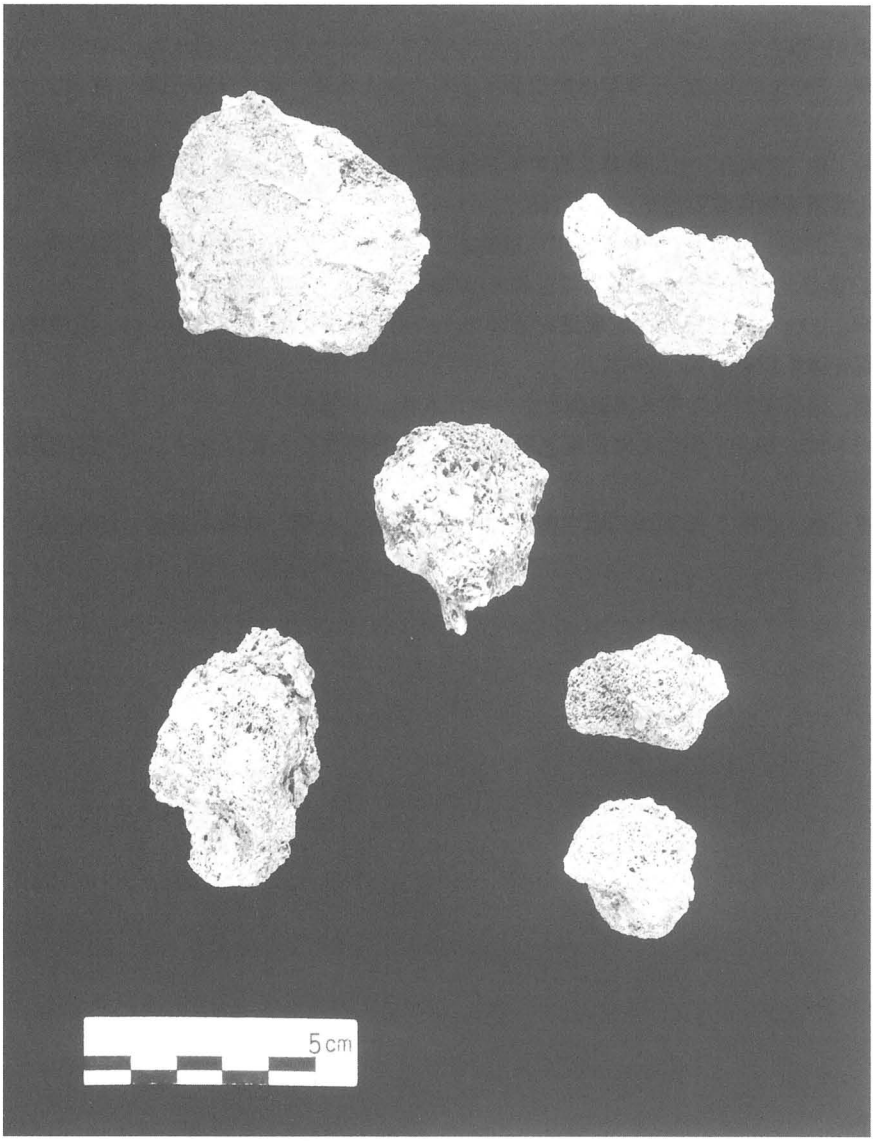
沖手遺跡は島根県益田市久城(くしろ)町に所在する遺跡である。この遺跡の島根県埋蔵文化財調査センターが2004年(平成16年)におこなった発掘調査区で人骨と歯が出土した。

1. ４基の埋葬遺構から４体の人骨(歯)が出土した。４体のうち２体は成人で、残りの２体は幼小児である。２体の成人のうち１体は女性と思われるが、残り１体の性別は不明である。
2. この人骨は、考古学的所見から、16世紀(中世末)に属する人骨である。
3. ４体のうち３体は遊離歯冠のみであった。残り１体は頭蓋片、遊離歯冠、四肢骨片が残存していたが、被葬者の形質的特徴を明らかにすることはできなかった。
4. 今回出土した人骨は、保存状態も悪く、残存量も少なかったが、残存歯冠から年齢をある程度推測することができた。また、成人骨１体の性別も推測できた。しかし、中世人の特徴とされている長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎の有無とその程度など形質的特徴を明らかにすることはできなかった。2005年(平成17年)には多数の人骨が検出されているので、埋葬の姿勢や形質的特徴などが次第に明らかになるものと思われる。

≪参考文献≫

1．松下孝幸・他、1983a：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査報告概報(豊北町　埋蔵文化財調査報告2)：19-30.
2．松下孝幸・他、1983b：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第70集)：147-148.
3．松下孝幸・他、1986：山口県豊浦町汐汲遺跡出土の古墳時代・中世人骨。汐汲遺跡(豊浦町埋蔵文化財調査報告第７集)：75-102.
4．松下孝幸・他、1988a：宇部市末信遺跡出土の中世人骨。末信遺跡(宇部市文化財資料第10集)：20-25.
5．松下孝幸・他、1988b：山口市瑠璃光寺遺跡出土の中世人骨。瑠璃光寺跡遺跡－中世墳墓の調査。(山口市埋蔵文化財調査報告第28集)：397-436.
6．松下孝幸・他、1988c：東隆寺経塚出土の人骨。東隆寺一字一石経塚(伝南嶺和尚墓)(宇部市文化財資料第９集)：33-36.
7．松下孝幸・他、1992：山口県下関市市場遺跡第Ⅱ地区出土の中世人骨。市場遺跡Ⅱ・宮添遺跡(山口県埋蔵文化
財調査報告第149集)：23-25.
8．松下孝幸、1996：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世･弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集)：24-50.
9．松下孝幸、1997：山口県美東町植畠遺跡出土の中世人骨。植畠遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第183集)：38-40.
10．松下孝幸、1998：土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨。土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第14集)：付1-39.
11．松下孝幸、1999a：山口県豊浦町高野遺跡出土の中世人骨。高野遺跡(南地区)(平成7・8・9年度県営ほ場整備事業にともなう発掘調査報告書)（豊浦町の文化財第15集）：226-233.
12．松下孝幸、1999b：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世人骨。吉永遺跡(Ⅲ-西地区)(平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書)（豊浦町の文化財第16集）：21-25.
13．松下孝幸、1999c：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡(Ⅲ－東地区)(平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告)：51-54.
14．松下孝幸、2000a：山口県豊浦町川棚条里跡出土の中世人骨。川棚条里跡１(大浦・台地区)（平成11年

度経営ほ場整備事業に伴う発掘調査概報）（豊浦町の文化財第17集）：64-68.
15. 松下孝幸、2000b：島根県津和野町喜時雨遺跡出土の中世人骨。喜時雨遺跡(津和野町埋蔵文化財報告書)：46-47.
16. 松下孝幸、2001a：山口県防府市原遺跡出土の中世人骨。原遺跡(山口県埋蔵文化財調査センター調査報告第23集)：41-56.
17. 松下孝幸、2001c：山口県三隅町湯免遺跡出土の中世人歯冠。湯免遺跡(三隅町埋蔵文化財調査報告第１集)：付篇
18. 松下孝幸・他、2003b：山口県豊北町中平尾遺跡出土の中世人骨。中平尾遺跡・上今宮遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集)：160-163.
19. 松下孝幸、2003c：山口県豊北町神田口遺跡出土の中世人骨。土井遺跡群　二刀遺跡・丸山遺跡・神田口遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第24集)：85-87.
20. 松下孝幸、2004：山口県豊北町東正寺遺跡出土の中世人骨。東正寺遺跡・浴ノ迫遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第25集)：29-31.
21. 松下孝幸、島根県津和野町高田遺跡出土の中世人骨。(投稿中)
22. 牛島陽一・他、1960：山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について。人類学研究、７(３～４)：52-56.
23. 中橋孝博・他、1985：人骨(山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨)。吉母浜遺跡：154-225.



頭蓋・下肢骨（The fragments of skull and lower limb bones）
沖手SK-75（女性）
（The Okite SK-1, female）

第6章　まとめ

1．はじめに

平成16年度に実施した沖手遺跡の調査では、主に中世のものと考えられる溝状遺構・建物跡・井戸・墓などを検出し、益田川下流域に中世の集落が存在したことが明らかとなった。遺跡の総面積は約50,000㎡に及ぶと考えられており、今回調査を行った範囲はそれからみれば極めて限られた範囲を調査したに過ぎないが、現時点で得られた資料をもとに、今回確認した集落について若干の考察と課題の提示をしてまとめとしたい。

2．集落の存続期間と各時期の様相について

沖手遺跡の集落は、遺構が高い密度で存在していることや、出土遺物にかなりの時期幅が認められることから、複数の時期にわたって営まれていたと考えられるものである。しかしながら、そうした遺構・遺物のほとんどが同一の層で検出されていることに加えて、時期の断定できる遺構も少なく、時期ごとの集落の様相が理解しにくい状況にある。

したがって以下では、出土した遺物の傾向と検出した遺構の時期とを改めて検討することにより、集落の存続期間と各時期における様相の復元を試みることとしたい。

（1）出土遺物からみた集落の存続期間（形成・終息）

平成16年度の調査において確認した遺物は、須恵器・白磁・青磁・青花・染付・土師器・瓦質土器・木製品・鉄製品など多岐にわたるが、これらの遺物のうち、最も古い時期のものは古墳時代後期のものと考えられる須恵器である。この時期のものは平成11年度に実施された調査[1]でも出土しており、沖手遺跡付近が既になんらかの形で利用されていたことを窺わせている[2]。ただ、当該期の遺物の出土量は十数点ほどと極めて少なく、現時点では集落が形成されていたと積極的に判断できる状況にはない。こうした状況は続く奈良時代・平安時代についても同様である。

そのような状況が一変するのは平安時代末～鎌倉時代にかけての時期である。白磁・椀を中心にそれまでの時期とは比較にならない程の多量の遺物が出土するようになる。特に11世紀後半～12世紀にかけて流通するとされる白磁・椀（Ⅱ類・Ⅳ類）からの出土量が多い傾向にあることが窺え、そうした点から判断すると、沖手遺跡の集落は少なくともこの時期に形成され始めた可能性が高いといえよう。このように、貿易陶磁類を含めて多量の遺物が出土する状況は室町時代にも認められ、以後遺物の量は減じるものの江戸時代前期（17世紀代）まで確認できる[3]。あとで検討するが、集落の規模は別にすれば、少なくともこの時期までは集落が存続していたことを窺わせている。

しかし、遺物から集落の存在が想定できるのはこの時期までで、これを境にほとんど遺物の出土がみられなくなり集落の終焉を窺わせる状況となる。

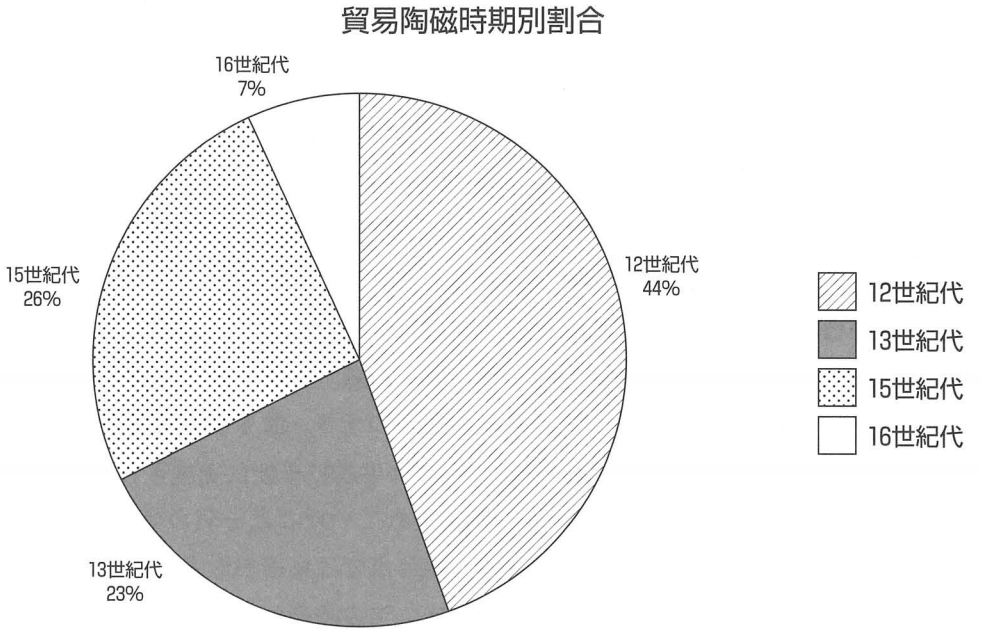
したがって、出土遺物から見た場合、集落の形成は平安時代末には始まり江戸時代前期まで継続するものの、それ以後は終息すると考えられる。

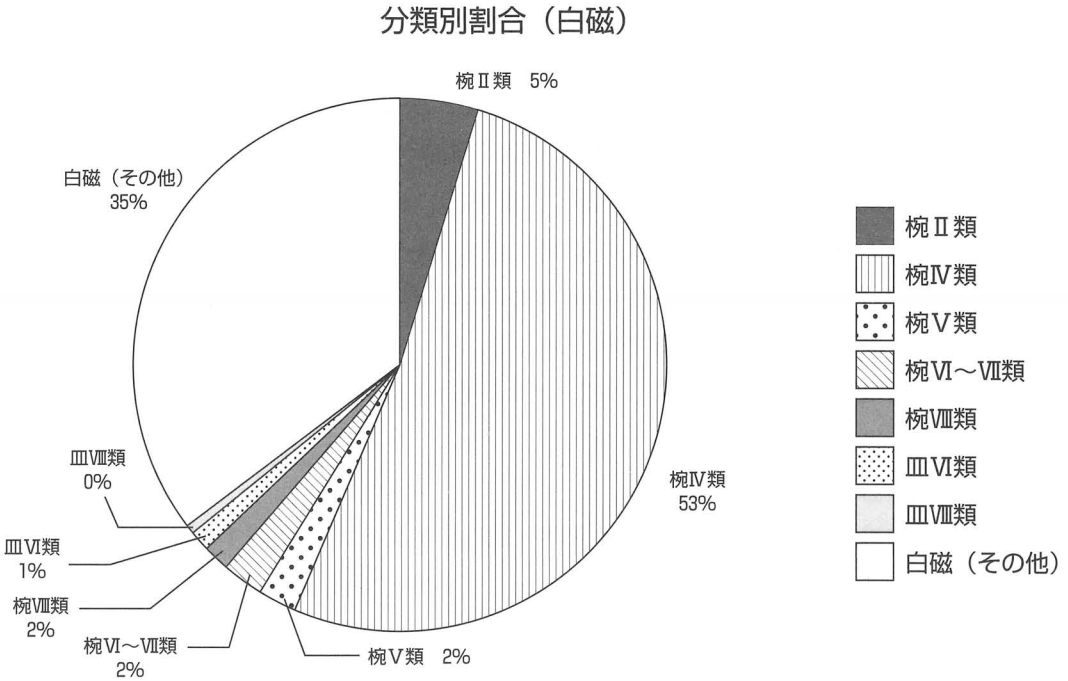
（2）出土遺物からみた集落の消長

ところで、出土遺物のうち時期判断が比較的可能な貿易陶磁類を概観すると、時期によりその出土量が変化することを窺うことができる。出土した貿易陶磁類について、およその年代ごとに分類をしたのが次のグラフである。

これを見ると、12世紀代が44％、13世紀代が23％、15世紀代が26％という数値を示し、それぞれで一定量を占めているのに対し、14世紀代ではほとんど認められず、16世紀代でもわずか７％と大きな差が存在することがわかる。この計測には含まれていないが、土師器や瓦質土器、陶器なども、その特徴などから12・13・15のいずれかの範疇に収まると考えられるものが多く、実数ではさらにその差が広がる可能性が高い。

このように沖手遺跡における集落は、12世紀代には形成され13世紀代まで継続するが14世紀代になると一旦途絶え、再び15世紀代に繁栄するものの16世紀代には再度急激に衰退するという経過を追うことができ、時期により盛衰があったことを窺わせている。





（3）検出した主な遺構の時期

ここでは、検出された主な遺構のうち、時期の推測が可能と判断されるものについてあらためて時期を検討し、集落の様相を把握する上での基礎的な資料を得ることとしたい。

なお、時期の決定方法については、明らかに伴うと判断されるものについてはその遺物の年代から検討することとするが、埋土中より出土したものはその遺構が機能した年代よりも前の時代のものが混入する可能性が十分考えられることから、それから推測する場合は、最も新しい年代観を示す遺物の時期を示し、それを一応遺構の下限として捉えることとする。

溝状遺構２

溝状遺構２から出土した遺物は第15図に掲載したものである。この中で最も新しい年代観を示すのは、16世紀代と判断される青花・椀や瓦質土器・擂鉢などであり、それよりもさらに新しい年代観を示す遺物は出土していない。

したがって、溝状遺構２が機能しなくなる時期については、16世紀代である可能性が高い。

井戸１

井戸１からは第19図に掲載した遺物が出土している。さまざまな年代のものが認められるが、基本的には12世紀～16世紀の範疇に収まると判断できるものである。これらのうち最も新しい年代観を示すのは、16世紀代と考えられる瓦質土器・擂鉢であり、これがこの井戸の廃絶時期に最も近い年代を示していると考えられる。

したがって、井戸１の廃絶時期は16世紀代である可能性が高い。

井戸４

井戸４からは第25図に掲載した擂鉢が２点出土している。これらは、井戸４を廃絶する際に投棄されたと考えられる大小の礫群の上面で同時に検出されていることに加え、ほぼ完形に復元できるものであることから、井戸の廃絶に際し意図的に廃棄された可能性が高いものである。

したがってこれら２点の遺物の時期について明らかにできれば、この井戸の廃絶時期を推測することが可能である。しかしながら、当地域においては資料の不足もあって未だに編年が確立されておらず、検討の困難な状況にあると言えるため、他の事例から時期について考えてみたい。

今回出土したものは、口径19.8㎝、器高8.4㎝を測り瓦質に近い小型のもの（25－１）と、口径26.6㎝、器高12.5㎝を測り土師質と考えられる大型のもの（25－２）とがあり、大きさ・焼成に違いを見せているが、どちらも口縁部の肥厚や折り返しが認められず、また内面にはハケメ・擂目が施されるなどの形態的な特長を持つものである。

こうした特徴を持つ擂鉢は、本地域に隣接する山口県の綾羅木本郷台地遺跡や下右田遺跡などで出土例が確認できる[4]。特に綾羅木本郷台遺跡のものは形態的な特徴に加えて、井戸跡と考えられた遺構から出土しほぼ完形に復元できるなど、沖手遺跡出土のものとの共通点が多い。これら綾羅木本郷台遺跡や下右田遺跡出土のものは、そこでの編年観によれば、いわゆる防長系瓦質土器の初現的形態に位置付けられ、年代についてはおおむね14世紀代が考えられているようである[5]。

以上から、今回出土したものの時期については、これらとほぼ同時期の14世紀代に位置付けられるものと考えられる。したがって、井戸４の廃絶時期についても14世紀代と考えられる。なお、井戸４からはこれ以降の遺物が出土しておらず、それを追認する。

建物跡１

建物跡に伴うピットのうち、Ｐ925から青磁・椀が出土している。青磁・椀は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類と判断できるもので、これからは13世紀代という年代観を与えることが可能である。

もちろん、ピットより出土した青磁１点のみで判断するのは、やや根拠が薄いと言わざるをえない。しかし、位置関係からこの建物跡に伴うと判断できる井戸４について検討した結果得た14世紀代の廃絶ということとは矛盾していないのもまた事実であり、したがって消極的な証拠ながらも一応13世紀代と捉えることが可能である。

建物跡３・４

この二棟の建物を構成すると考えられる遺構及びその周辺の遺構からは、第36・42・43図に掲載した遺物が出土している。これらは概ね15世紀代の年代観が与えられるもので占められている。

したがってこれらの建物は15世紀代のものと判断できる。なおこの場合、その位置関係からこれらの建物に伴うと考えられる井戸５についても、15世紀代の年代を与えることが可能であろう。

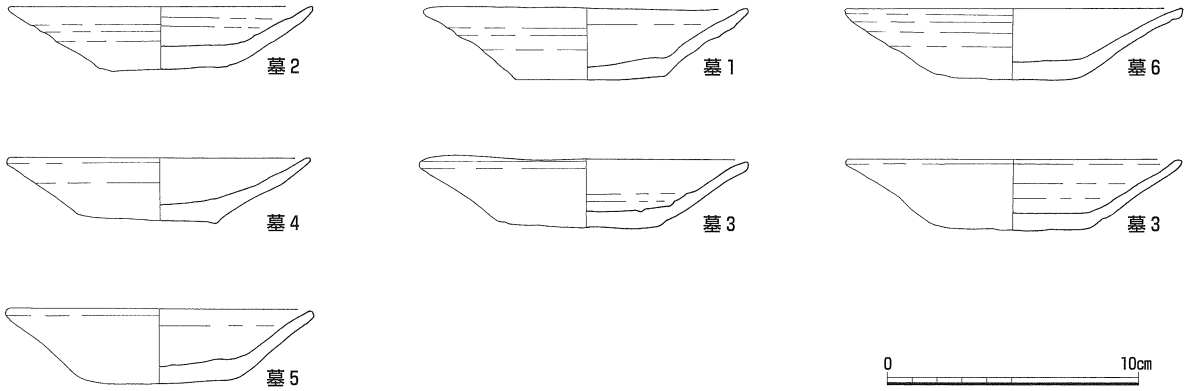
墓１・墓２・墓３・墓４・墓５・墓６

検出された墓６基は、基本的に土師器・坏を１～２枚伴うという共通性があり、また土師器・坏自体も近似した形態のものであることから、短期間の間に造墓されたと判断できるものである。

墓の時期を考える上で大きな役割を果たすのは、当然ながら墓から出土した土師器・坏である。しかしながら当地域では榊原博英氏による中世前半の土師器についての検討（榊原2001）以外、中世の土師器についてはあまり研究が進んでいないのが現状で[6]、これらの時期決定を行う上での論拠に乏しい状況にある。したがって編年研究の進んでいる他地域のものを参考に検討するしかないが、今回は特に中世後半において当地と密接な関わりを持っていたとされる山口のものを参考に検討することとしたい[7]。

山口において現在用いられている編年（主に15～16世紀にかけて）としては、大内氏館跡の調査を通じて出土する土師器をもとになされた古賀信幸氏によるものがあげられる[8]。この中で古賀氏は大内氏館跡から出土する土師器の特徴を提示してⅠ期～Ⅳ期に分類し、およその年代を比定している。

沖手遺跡における墓出土の遺物について概観すると、いずれも体部が直線的に開き、口縁端部は面取りを行うものが一部に見られること、また口径13cm前後のものと12cm前後のものとの２種類があり、器高2.5～3.0cmという値をとること、などの特徴をもっていることがわかる。



第97図　墓出土 土師器実測図（S=1/3）

これを古賀氏の大内編年のものと照らし合わせると、口径に対して器高が低く皿型になる点や口縁端部に面取りが見られる点など、大内Ⅳ期の資料に極めて類似しているといえる。このことから考えて、沖手遺跡墓出土の土師器は大内Ⅳ期（大内Ⅳa期）に平行するもの、すなわち16世紀前半代である可能性が高いと判断できる。

したがって、6基の墓の時期については、いずれも16世紀前半と捉えることができる。

（4）遺構・遺物からみた各時期の様相

以下、これまでに行った遺構・出土遺物の検討をもとに、各時代の様相について概観したい。

12～13世紀（平安時代末～鎌倉時代）

出土遺物の量からみて集落が成立、繁栄していたと判断できる。

この頃の遺構としては建物跡1が推測されるのみであるが、これ以外にも相当数の建物が存在していたと考えられる。

この時期の集落は、遺物を伴うピットの分布状況からみても、調査区の西側及び南側が居住域であったものと考えられる。調査区東側ではこの時期と判断できるものはほとんど確認されておらず、現状では空白域となっている。

なお、この時代に溝状遺構が存在していたかどうかはわからないが、同じくピットの分布状況から判断すると、調査で確認したような形態のものではないにしろ、のちの溝状遺構2につながるような東西方向を指向する軸線が存在したものと推測される。

14世紀代（南北朝時代）

出土遺物が少なく、なんらかの原因により集落が衰退したと判断できる時代である。

この頃の遺構として捉えられるものは、この時代に廃絶したと考えられる井戸4のみでそれ以外は確認されておらず、人々の活動の痕跡を積極的に窺うことはできない。

15世紀代（室町時代）

出土遺物も多くなり、再び集落が繁栄を迎えるようになると考えられる。

この頃の遺構としては、建物跡や井戸、溝状遺構など比較的多くを確認することができる。建物跡は調査区の東側で確認されており、現状ではこちら側に居住域を想定することができる。ただ、井戸1がこの時代には確実に使用されていたと判断できることから、建物が付近にも存在した可能性は高く、その場合より広い範囲に建物が存在したと考えることも可能である。溝状遺構2もこの時代には確実に伴っていると判断できるが、建物と溝状遺構とは平行または直交する位置関係にあり、規則的な配置がされている可能性が高い。

16世紀代（戦国時代）

出土遺物も前時代に比べて急激に減少し、集落の衰退をうかがわせる状況となる。

それを示すかのように、この時代には建物跡や井戸といった生活に関わるものが確認されなくなる。その代わりに調査区の東側では墓が点在する状況が認められるようになる。

17世紀代（江戸時代前期）

出土遺物は一定量認められ集落の存在が推測される時期であるが、今回の調査範囲においては明確な形での遺構は検出されていないため、実態は明らかでない。

ただ、遺跡付近（特に遺跡南側－字専福地）には江戸時代浜田藩益田組専福地浦番所が置かれていたとされ、今後それに伴うものが確認される可能性はある。

なお、これ以降は出土遺物もほとんど確認されなくなることから、現在見られるように水田へと変わっていったのであろう。現在見られる水田の地割と調査で確認した地割はほぼ一致していることがうかがえ、基本的な地割を維持しながら変化していったものと考えられる（第100図）。

3．今後の課題について

（1）集落の性格について

この遺跡の立地する地点は、益田川に面した現状で1.5mにも満たない低地であり、集落を営むには決して良い立地条件とはいえない場所である。それにも関わらず中世を通じて集落が営まれているのにはなんらかの理由があると言え、そのことがこの集落の性格を考える上でも重要な点になるものと考えられる。

ではその理由は何か。第5章において林氏は、鎌倉時代～近世初頭までの古地理を検討し、沖手遺跡の立地する場所が当時「古益田湖」に面した場所であったとの見解を示しているが、そこから窺えるのは、この集落が水運に面した位置に営まれたものであったということである。そのことは、逆説的に言えば、この集落が水運（それに関わる活動を含む）とは無関係には成立しえなかったことを示唆しているといえ、このような低地に集落が継続して営まれた第一の理由はそうした点にあるものと考えられる。

そうした立地理由と出土遺物の様相からこの集落の性格についてみた場合、考えられるのは流通に関係した集落であった可能性や、「湊」的な機能を持った集落であった可能性である。これまでの研究からは、中世益田氏が積極的に海外と交易を行っていたことが明らかにされている[9]が、その中心的な「湊」を含め交易の拠点となる集落の所在については、益田川河口付近と想定されているだけでこれまでのところ具体的な情報は明らかにはなっていない[10]。そうした点からすれば、今回確認した集落が「湊」的な性格を有した集落である可能性を指摘することもできなくはない。

ただ、現状ではそれを積極的に証明するものは確認できておらず、そうした評価を与えることは適切でないといえる。したがって、集落の性格については明らかでないといわざるを得ないが、中世前半の貿易陶磁類の出土状況からは、やはり流通に関係した集落である可能性は高く、今後の課題としてさらに検討する必要があろう。

（2）集落の衰退の原因について

沖手遺跡の集落は、先に見たように14世紀と16世紀に集落が衰退する状況にあることが窺えた。

主に集落の衰退の原因として考えられるのは、自然災害によるものと、人為的（政治的・経済的）なものとの2つがあげられるが、沖手遺跡の場合は、その状況から人為的なものによる可能性が高く、この時期になんらかの動きがあったものと理解できる。それについてはいくつかの歴史的事象を検討しなければならないであろうが、16世紀の状況については、一つの可能性として中世今市船着場跡[11]との関連を考えておきたい。

この遺跡は平成9年度～平成11年度にかけて調査が行われ、少なくとも16世紀前半に市町（いちまち）として成立していることが明らかとなった遺跡である。沖手遺跡とこの中世今市船着場跡の両遺跡は、今市川を通じて約800mという位置関係にあるが、その距離的な近さに加えて、沖手遺跡の集落の衰退と前後する時期に今市が成立するなど、その関連性を強く示唆している。

これまでに調査された三宅御土居跡、七尾城跡などの調査と、近年進められている文献の研究か

らは、益田氏が15世紀後半以降－特に16世紀前半－の周辺との緊張的な状況において、三宅御土居・七尾城の改修をはじめとして益田本郷域の再整備を行ったことが明らかとなりつつあり[12]、今市の成立もこうした大きな動きの中での事象と考えられている。

そうした状況から考えると、今市は沖手遺跡の集落などを含めた周辺集落を新たに編成しなおすことによって成立したと理解することも可能で、16世紀における沖手遺跡の衰退の要因が今市の成立と深く関わっていると見ることができる。

ただ、現段階では断定できるだけの資料もなく、今後さらに周辺の遺跡の動向も含めて検討して行く必要があるといえよう。

（３）桶棺の出現時期について

平成16年度の調査で確認された墓からは木製の棺が検出されている。残存状況のよくないものがほとんどであるが、残っているものや推定される棺の形態は、大きく分けて箱型の木棺と丸桶という二つが認められる。これらは先に検討したとおり、いずれも16世紀代のものと考えられる土師器・皿を伴っており、時期的にはほぼ同時代と判断できるものである。周辺におけるこれまでの調査・研究からは、箱型の木棺は、規模等の違いはあるものの、中世から近世を通じて採用され、丸桶は一般的に近世に入ってから普及する傾向をうかがうことができる。

したがって丸桶の採用は新しい要素であるということができるが、今回の調査で16世紀代という年代を推定できたことは、この地域における桶棺の出現時期を考える上での一つの参考資料となるといえる。

当地域における中世～近世にかけての墓は調査例も少ないため、その様相については明らかでない部分も多く、今後の調査例の増加と中世から近世にかけての墓の形態の解明が期待される。

４．おわりに

沖手遺跡は総面積が約50,000㎡にも及ぶと考えられる広大な遺跡である。今回の調査の結果明らかとなったことについて考察を行ったが、調査した面積は全体からすればわずかであり、今後の資料の蓄積によっては先の検討結果を大きく変更する必要が出てくることもあるものと考えられる。

近年益田川流域では中世の遺跡の調査が進められ、資料も蓄積されつつある。今後そうした遺跡との関連も含めて総合的に検討していく必要があると考えられる。

註

（１）益田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ－七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査』　２００３

（２）平成16年度調査では確認されなかったが、翌平成17年度調査では今回報告した中世の遺構面が存在した層よりもさらに下の層で、弥生時代のものと考えられる丸木舟や溝状遺構、また弥生土器などが確認されていることから判断すれば、この付近が生産域などとして利用されていた可能性は高い。
島根県教育委員会『埋蔵文化財調査センター年報14』　２００６

（３）江戸時代前期のものについては紙面の関係上掲載を見送っているが、肥前系の陶器（唐津）などが一定量認められる。

（４）山口県教育委員会・財団法人　山口県教育財団『綾羅木郷台遺跡』　１９８６
山口県教育委員会『下右田遺跡』　１９８０

（５）堀苑孝志「北部九州における周防型瓦質擂鉢の流通とその背景」『中近世土器の基礎的研究』ＸⅡ
日本中世土器研究会　１９９７

（６）榊原博英「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』９　２００１
なお、隣接する長門地域の編年を試みたものとしては
小南裕一「長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター　豊北町教育委員会　２００４
がある。このほかに山陰の状況を概観したものとして、以下のものがある。
広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』８　松江考古学談話会　１９９２
八峠　興「山陰における中世土器の変遷について―供膳具・煮炊具を中心として―」『中近世土器の基礎的研究ＸⅢ』日本中世土器研究会　１９９８

（７）今回の調査で土師器についで多く出土しているもののなかに瓦質土器がある。当遺跡出土の瓦質土器はその形態からいわゆる防長系瓦質土器―防長地域、すなわち現在の山口県を中心とする地域の在地系の土器―とされているものであり、これが多量に出土することはこれらの時期、当地域が山口方面と密接に係わり合いを持っていた事象と判断できる。
　また、当時この地域を領有していた益田氏は山口・大内氏との強い結びつきがあり、大内氏の強い影響をうけていたことが知られている。もちろんこれがすぐに在地土器の生産において両地域の関連性の高さを示すことにはならないが、直線距離にして約70kmという距離的な面から見ても無関係とは考えられず、これについてもある程度の影響を想定することは可能であろう。

（８）古賀信幸　編『大内氏館跡Ⅷ―大内氏関連町並遺跡Ⅰ―大内氏遺跡発掘調査報告ＸⅡ』山口県教育委員会
１９９１
また近年、同市内の瑠璃光寺跡遺跡出土土師器についても再検討を行い、それまで提示されていた編年が逆方向に進むとの見解を示した上で、大内氏館跡編年のものとの比較などから実年代を推測している。
古賀信幸「瑠璃光寺遺跡の再検討―土師器編年からのアプローチ―」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集』２００４
なお、墓出土遺物については古賀氏とともに瑠璃光寺出土のものと比較検討をおこなった。その結果底部の厚さがやや異なるものの、形態的には非常に類似していることを確認している。

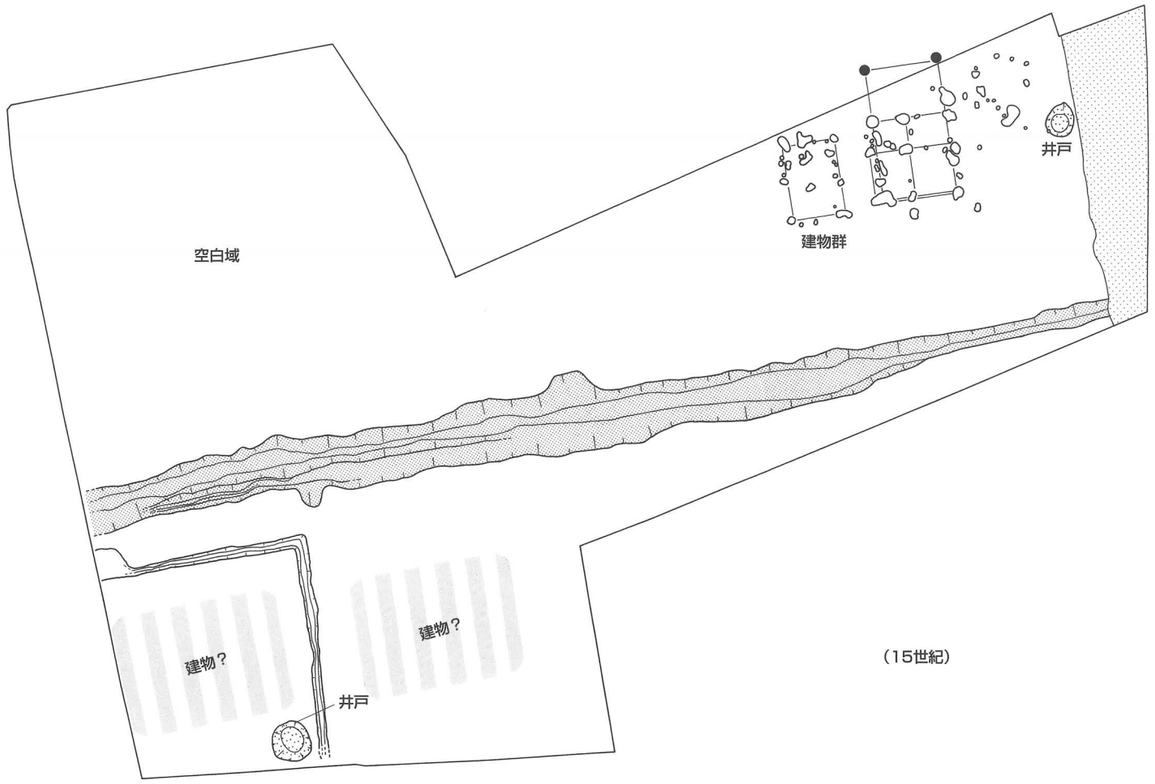
（９）岸田裕之「石見益田氏の海洋領主的性格」『芸備地方史研究』第185号

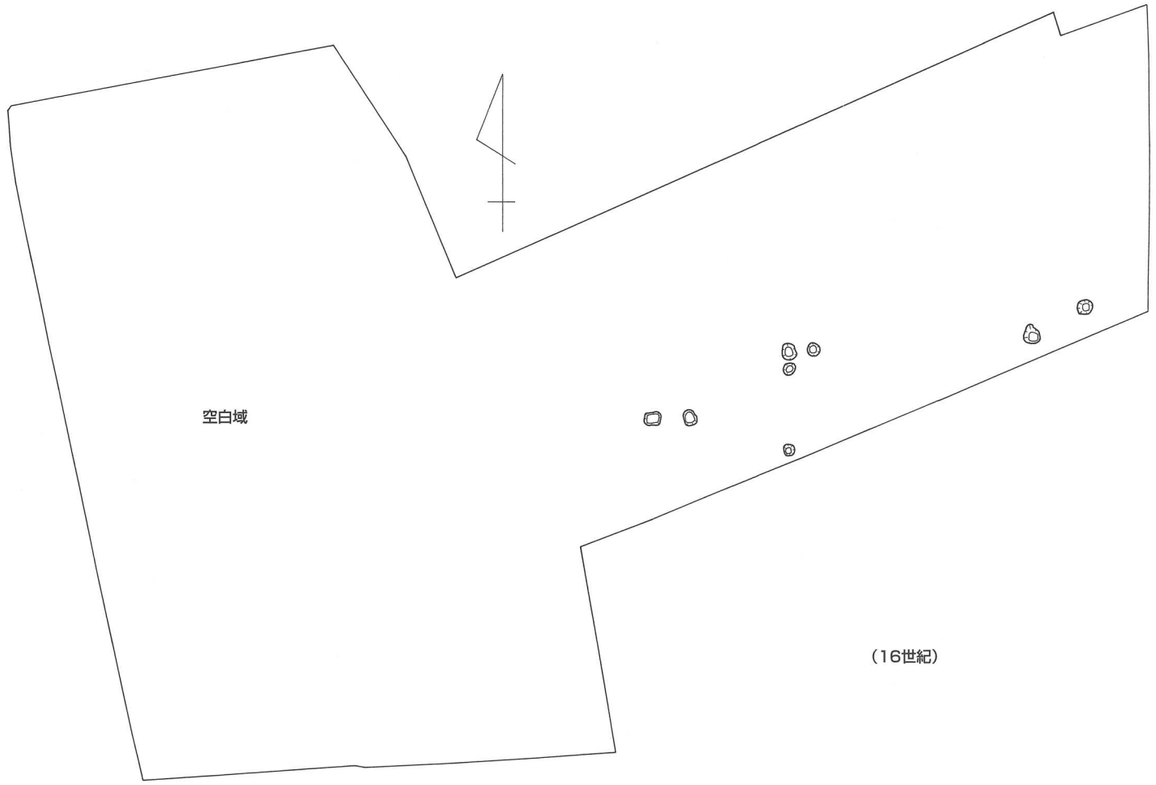
（10）益田川下流域右岸久城地区に中世の益田湊が存在したとする見解もある。
小島俊平「近世・石見の廻船研究（11）」『郷土石見』51
またこれを否定する井上氏の見解もある。
井上寛司「「今市船着場」跡の歴史的性格」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会　2000

（11）益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』２０００

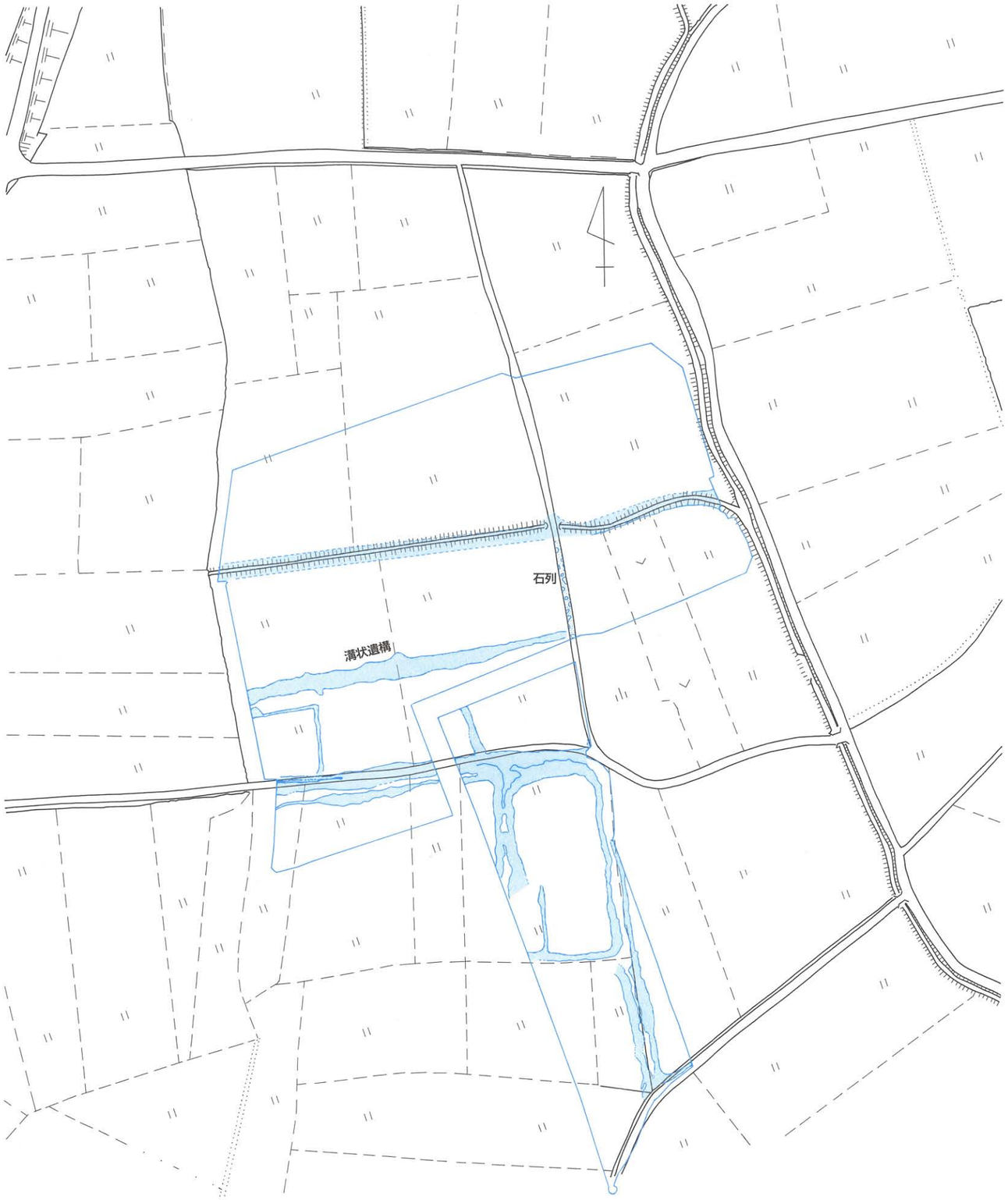
（12）井上寛司「文献から見た中世益田氏と益田氏関係遺跡」『七尾城跡・三宅御土居跡―益田氏関連遺跡群発掘調査報告書―』益田市教育委員会　１９９８

第98図　中世前半・後半の集落概略図（１）（S=1/400）





第99図　中世前半・後半の集落概略図（２）（S=1/400）

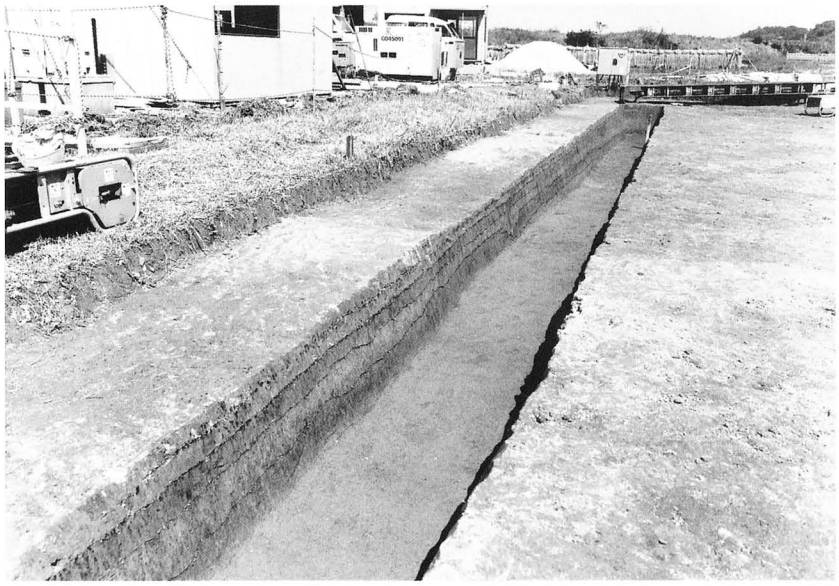


第100図　土地利用図

昭和22年米極東空軍撮影空中写真(益田川下流域)

図版2

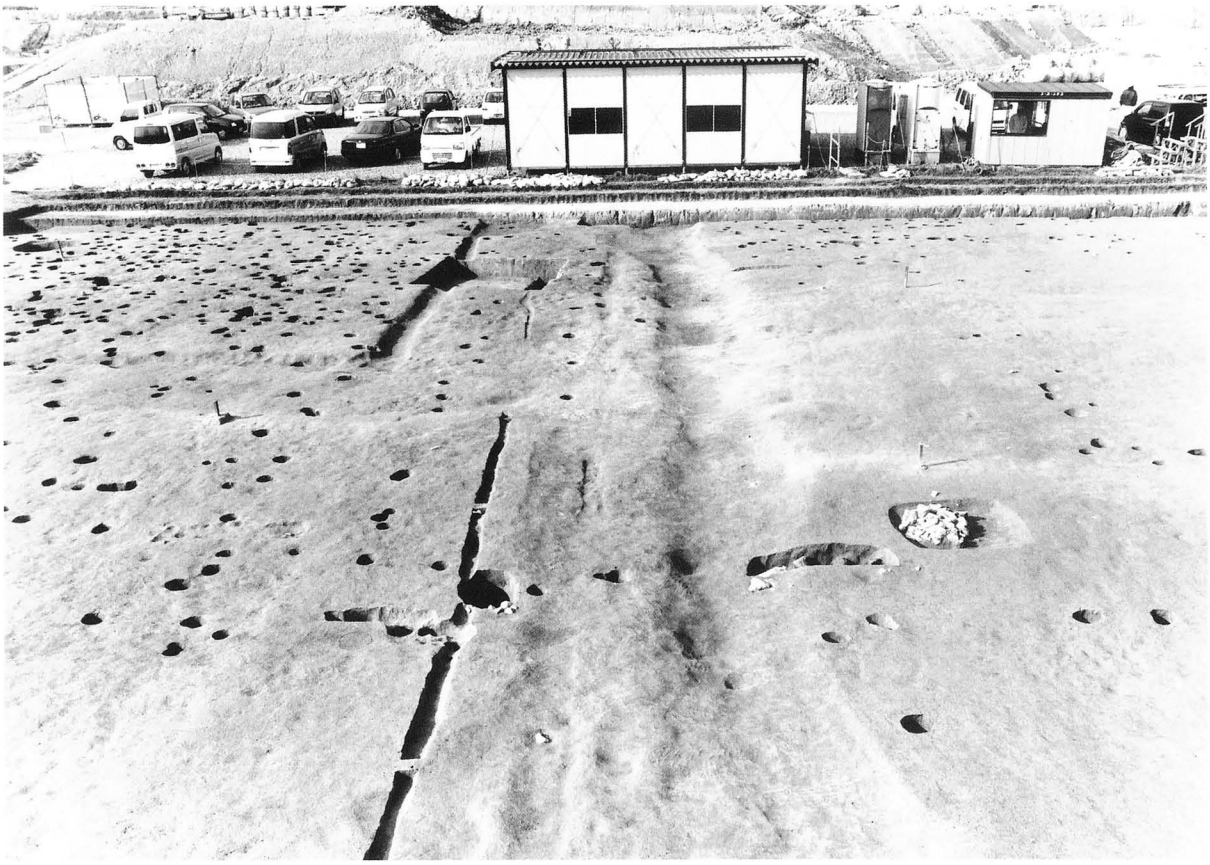
調査前の状況（東から）



土層の状況（Ｔ１）

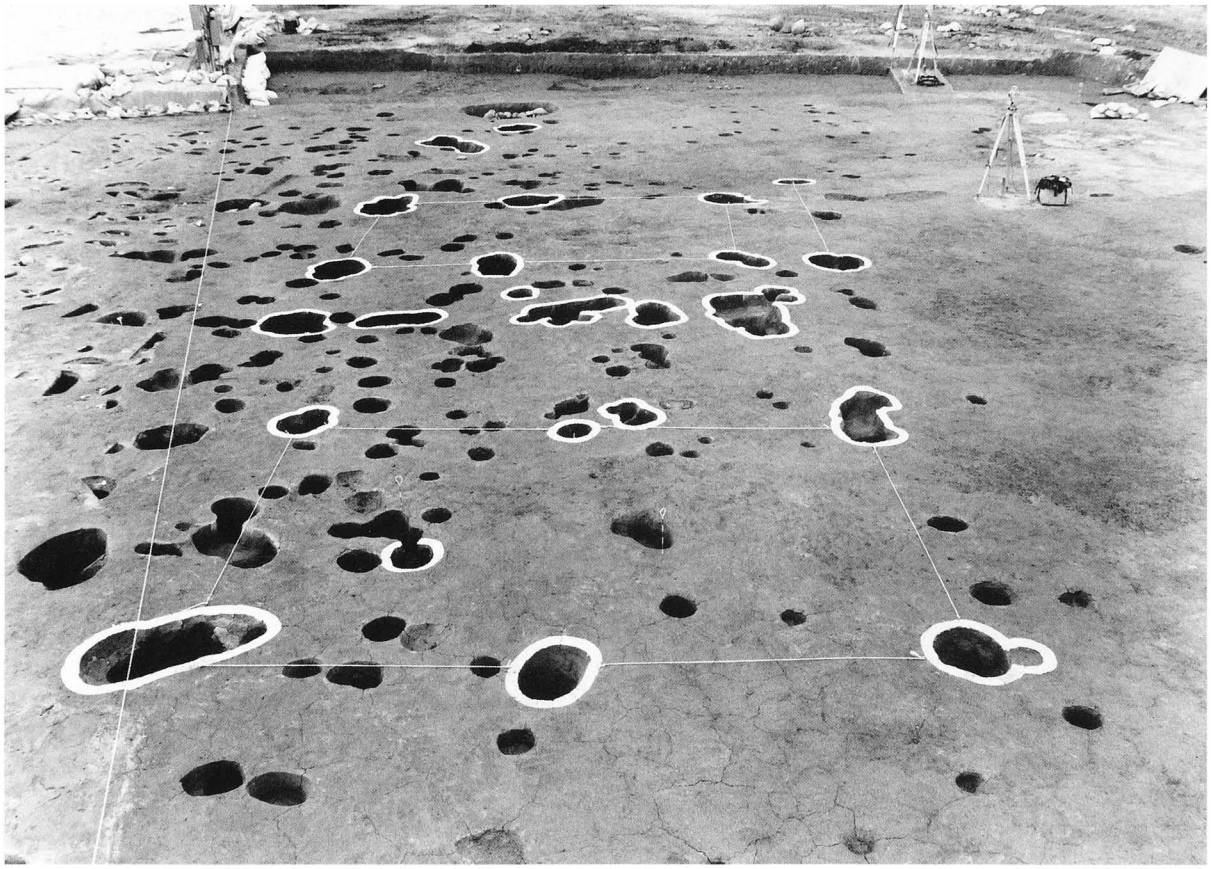
溝状遺構２　埋土堆積状況

溝状遺構２（東から）



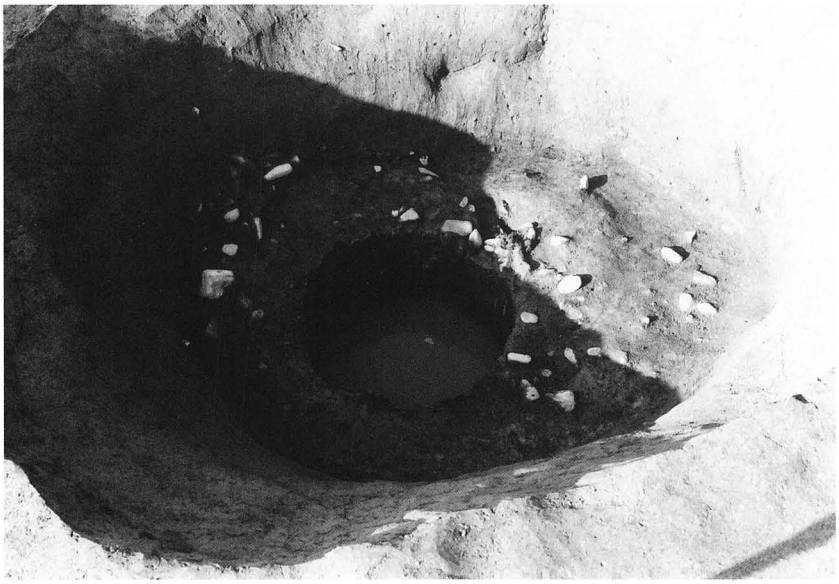
調査区西側の状況（東から）

調査区東側　建物跡３・４　周辺ピット検出状況（１）



調査区東側　建物跡３・４　周辺ピット検出状況（２）

井戸１　礫検出状況

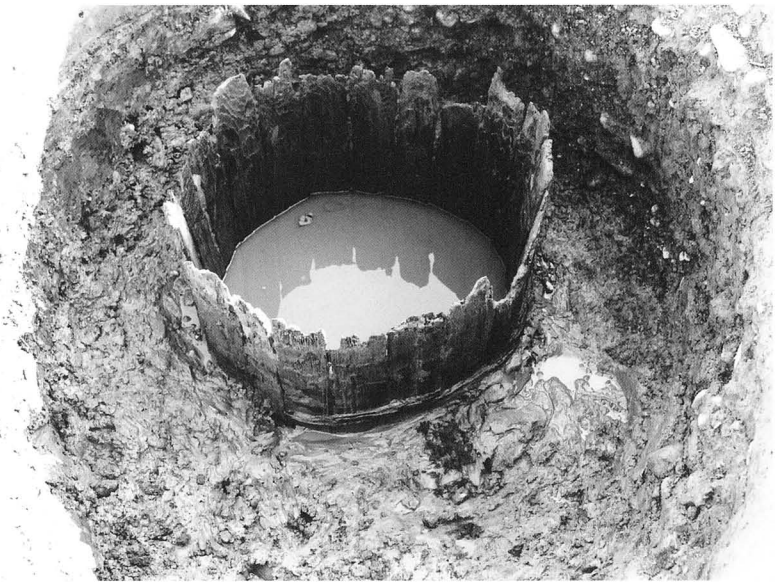


井戸１　井側検出状況（１）

井戸１　遺物出土状況

図版6

井戸1　井側検出状況（2）



井戸1　井側（組桶）

井戸1　調査後

井戸４　検出状況

井戸４　井側（組桶）検出状況

井戸４　調査後